國譯禪學大成

第二十四卷

國譯禪學大成第二十四卷凡例

一、本大成第二十四卷には、圓滿本光國師見桃錄四卷の中、卷之一より卷之三に至るまでの譯文及び原文を收載し、卷之四は頁數の都合によりて、次の第二十五卷に割愛することとせり。

一、圓滿本光國師見桃錄は、略して單に『見桃錄』とも稱し、別に『大休錄』、又は『靈雲集』とも謂ひ、足利末期に於ける禪界の明星、勅賜圓滿本光國師大休宗休和尙一代の語錄にして、關山派下、許多の語錄中、其の識見の高邁にして說示の溫雅なる、機鋒の峭峻にして文彩の典麗なる點は、本書の右に出づるものなしと稱せらる。本錄は初め國師の侍者等が輯錄して世に傳へ、所在傳寫して秘藏せられしが、德川時代享保十九年頃、師の遠孫等が相議して、諸家所藏の十數本を集めて一々校讐し、其の傳寫を質し、誤謬を改め、脫漏を補ひ、重複を删除し、以て編定して乃ち四卷となし、延享五年に妙心寺內の靈雲院に開板せしものなり。而して其の內容は、京の妙心寺、駿河の臨濟寺、尾の瑞泉寺などの住山語錄を初め、偈頌、追悼、詩、像贊、自贊、道號頌、立地、拈香、秉炬、掩壙、預請の秉炬及び附錄などより成り、何れも言々句々、臨濟•

闕山の宗旨を擧揚して遺す所なく、且つ又、書中到る所に於て、國師の眼睛と風藻とを窺ふことを得べし。今次、國譯するに際しては、專ら延享の版本に依據せり。

一、書名の見桃及び靈雲は、倶に國師燕居の院名に因み、而もそは支那唐代、靈雲山の志勤禪師が嘗て桃花を見て大悟せりといふ故事に基づくものなりと謂ふ。

昭和五年十月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十四卷

目次

國譯圓滿本光國師見桃錄

解題

足利氏の末期は、應仁の戰亂以來、國內到る所、干戈の巷となり、兵亂絶ゆる時なく、ために政治は勿論、文學・宗敎の頽廢其の極に達し、世は全く暗黑時代と化し了れり。斯の時に當りて、塵外に超然として文學・宗敎の命脈を維持したる者は、僅かに五山の僧徒のみなりき。本語錄の著者大休宗休は、實に斯る亂世に出で、主として關山派の宗旨を宣明努力したる大宗師なり。

斯の見桃錄は乃ち國師一代八十餘年間に亘る平生の擧揚、開堂、示衆、立地、偈賛、秉炬等に關する語要を蒐錄したるものにして、其の機鋒の峭峻なると文章の典雅なるとは、關山派下の語錄中、多く其の比を見ざる所なり。而して本書は凡例にも述ぶるが如く、初め國師の侍者某等が輯錄して見桃錄と題し、所在に傳寫珍藏せられしが、而も其の多寡均しからず、踳駮尤も甚だしきを以て、國師の滅後、約二百餘年を經て、國師遠孫の諸老胥議りて、諸山の藏書十數本を羅致し、交互に磨研し、魯魚の誤りを質し、缺漏を補正し、疉沓を删除し、編して以て四卷となし、無著道忠を初め、龜年門派の諸老二十名、月航門派の諸師二十九名、太原門派の諸老二十四名の助緣を得て、延享五年に開刻せしものなり。

爾來、廣く天下叢林の間に流布して今日に到れり。今其の內容の一般を觀察するに、第一卷には、永正十三年、正法山妙心寺入寺の法語を初め、再住妙心寺語錄、駿州大龍山臨濟寺語錄、尾州青龍山瑞泉寺語錄及び偈頌、追悼、詩などを收め、第二卷には、像贊、自贊、道號頌(上下)等を錄し、第三卷には、立地、拈香、秉炬、掩壙などを記し、第四卷には、預請の秉炬及び附錄を收載せり。就中、道號頌、立地、掩壙及び預請の秉炬などは、他の語錄には餘り見當らざる所にして、特に本錄の特色となすべし。

國師の傳を案ずるに、諱は宗休、號を大休と謂ひ、姓氏を詳かにせず、幼にして京の東福寺の永明庵に在つて、山中の諸老に見え、後、洛西龍安寺の特芳禪傑に參じて、親しく印記を承く。永正三年、特芳の順世するに及んで、移つて西源院に居して龍安寺を兼管し、同じく十三年、詔を奉じて妙心寺に出世す。尋いで正法山の側に靈雲院を創めて、印を解いて退休す。享祿四年、駿河の太守今川義元、同國安倍郡安東村に大龍山臨濟寺を建て、師を請じて法を開かしめ、且つ開山の儀を行はしむ。ために一時の英俊、輪下に奔集す。幾もなくして京に回り、再び妙心寺に住す。尋いで尾張丹羽郡の青龍山瑞泉寺を董す。天文十一年、後奈良天皇、師の道譽を聞し召され、宮中に召して法要を問ふ。奏對旨に稱ふ。帝、叡襟を啓いて弟子の禮を執り、屢々召して參訊す、遂に所契ありて親しく宸翰を賜はる。同じく十八年八月二十四日寂す。壽八十二、靈雲院に塔す。著書見桃錄四卷あり、嗣法、月航玄津、東庵宗暾、龜年禪愉、太原崇孚等十二人あり。翌年、後奈良天皇、特に詔して圓滿本光國師の徽號を賜ふ。

國譯見桃錄叙（イ）

（ロ）圓滿本光國師、徒を正法山に匡すの後、有馬郡主赤松氏の女、模堂夫人有り、國師の爲に、梵宮を山の（ハ）兌方に剏建して、拜請して之れに居らしむ。國師、靈雲を以て扁と爲す焉。晩に再び細川氏綱有り、一精舍を大雲山麓に營み、以て國師の禪燕に供す、復た名くるに見桃を以てするなり。皆（ニ）志勤禪師の機緣を用ふ。必ず說有らん、今に迨んで而して其の旨を測るべからず矣。因つて國師平生の擧揚、開堂、示衆、立地、偈贊、當時撮蒐する者、題して見桃錄と曰ふ。其の錄傳寫して、所在秘珍す、祇だ是れ多寡均しからず、（ホ）踳駁尤も甚だし。（ヘ）遙胄の諸老、常に以て憂と爲す焉。甲寅の歲、胥議して編定し、乃ち家々の所藏十數本を羅致し、交互摩研し、（ト）癸亥を質し、閃脫を補ひ、疊沓を（チ）鏟除し、畔散を

（イ）見桃錄。本書の總名、全四卷より成り、本光國師の語要を集めたるものにして、國師の侍者編輯せしものなり。この序は、無著道忠の文なり。而して元文二丁巳の年重刊せるものなり。見桃の名は、國師燕居の地を見桃院と言へるに依る。蓋し志勤禪師、嘗つて桃花を見て大悟せるの機緣を用ふるなり。

（ロ）宗休は大休と號し、東福永明庵に入りて剃髮進戒し、特芳和尙に龍安に參じ、密かに宗記を受く、後妙心寺に出世し、駿州大守今川義元、敦く請うて州の臨濟寺に居らしむ、再び洛の妙心に住す、參究するもの雲の如く集まる、後奈良帝深く歸依し給ふ、天文十八年示寂す。

（ハ）兌方は西方なり。

（ニ）靈雲志勤禪師なり、大潙山にありて修業す、因に桃花を見て悟道す、頌あり曰く、「三十年來劍を尋ぬるの客、幾回か

㋷倫貫して、釐して四卷と爲す。是に於て乎、守塔、衆命を銜み、來つて㋦遯窩を款いて忠に告げて曰く、「參訂既に竣る矣、請ふ事情を卷首に引せよ。」道忠伏して惟れば、國師、海宇横潰の世に處して、天源所傳の㋸宗猷を墜さず、道德厖鴻、文章㋾藻績、一代に卓絕す。聖主法を稟け、武豪化を仰ぐ。禪敎眞俗飜飛慕嚮す。委化より今に迄るまで、二百の年所に垂として、雲耳溯隨して、舊稿を點定し、之れを木に刻つて而して遺言を宣通し、以て毛滴の報答に擬す。源深く流長きに匪ざるよりは、則ち豈に能く之を致さん耶。此れ卽ち是れ家庭の盛事なり。忠㋻衰颯十拗、㋕隨喜三歎、覺えず筆硯を鳴して、塗糊紙に滿つ。敢て茂めて衆囑に帥ふ耳矣。凡そ是の錄を展讀せん者、見桃の一着を味却すべからず、苟も徒に葉を摘み枝を尋ねて、或は國師の面前に在らば、則ち必ず㋵熱棓三十を免れず矣。

元文二歲丁巳に次る壯月二十四日

遠孫穉比丘道忠謹書

葉落ち又枝を抽んづ、桃花を見しより後、直に如今に至りて更に疑はず」と、卽ち此の機緣に因るなり。

㋭色雜りて同じからざること、まだらをいふ。

㋬裔冑などに同じく、本光國師以後、同じ流れを汲む諸老をいふ。

㋣事文類聚に曰く、「亥と豕、涇と渭と分つなし、魯と魚と、淄と澠と辨ずるなし」と、文字の誤りをいふ。

㋠鐘は鉋に同じ、木の面を削る器なり。

㋷順序正しくまとむるをいふ。

㋦かくれ屋といふに同じ。

㋸宗道なり。

㋾五彩にて畫ける模樣の如く、鮮かなること。

㋻老衰などに同じ。

㋕他人の善根功德を修する行爲に對して、誠心誠意を以て贊成の意を表すること。

㋵棓は杖なり。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一

遠孫比丘衆等重編

侍者某編

正法山妙心禪寺に住する語錄

師、(イ)永正十三丙子の歳入寺す。

山門、指して云く、「大休歇の地、乾坤一人。」大衆を召して、「門外の雨滴聲を聞く麼。花は開く南浦の春。」喝一喝。

佛殿、「報化佛頭。」右足を擧げて、「誰か獨足にして立つ。」帽を卸して、(ロ)「尀耐なり汝州の風、吹き落す老僧が笠。」便ち禮拜す。

(ハ)土地、「(ニ)東坡居士、護法明王、箇の什麼をか護す。山色淸淨、溪聲廣長。」

(ホ)祖堂、「吾が這の獅子窟、(ヘ)野狐精を容れず、去れ去れ、天下太平。」

(イ)紀元二千百七拾六年後柏原天皇、將軍足利義植の時なり。

(ロ)尀は堪へるなり。

(ハ)土地堂なり、土地神及び護法神を奉祀する堂なり。

(ニ)蘇東坡は老泉の子、其の悟後の偈に曰く、「廬山烟雨浙江潮、未レ到千般恨不レ消、到得還來無二別事一、廬山烟雨浙江潮」と。これによりて其の大要を知るべし。

(ト)據室、「機關脫落、別に生涯を討ぬ。」竹篦を放つて、「拄杖不在、且坐喫茶。」

(チ)敕黃、「此れは是れ(リ)三十三天大威德天子、(ヌ)尼拘陀を折つて佛の爲に蔭涼を作す底の一枝なり。甚と爲してか山僧が手に落つる。拈じて春風に分付す、嫩桃笑つて口を開く。」

(ル)山門疏、「枯樹老僧、山門の境致、露柱古佛、今日交々參る。」疏を擧して、「是れ什麽ぞ、花は錦に似、水は藍の如し。」

(ヲ)同門疏、「太湖三萬の月に說向して、惠山第二の泉を品論す。誰か道ふ千里遠しと、元來一味の禪。」

(ワ)拈衣、「(カ)北秀の爲にする者は、右を袒げ、南能の爲にする者は、左を袒げ。」搭起して、「(ヨ)鷸蚌相持す、漁者の利なり。」

(ホ)開山堂、祖師堂のことなり。

(ヘ)野狐の精魅、化けものといふ意。

(ト)新命住職の晉山式に據室の法あり、方丈室中の正面に椅子を設け、椅前の卓に銀燭一對、香爐一口を備ふ、大衆丈室內の東西に雁立し、兩班は對立す、侍者は知事の後に一班立列し、門首は頭首の上肩に立つ、新命進んで直ちに椅に倚る、時に燒香、侍者、知事の頭邊を過ぎて卓前に進み、香を燒いて問訊す、之れを請法問訊といふ。侍者並びに歸るや、新命、法語を唱ふ、之れを以て據室の式畢る。

(チ)山堂肆考に云く「唐の太宗の時、黃麻紙を用ひて詔勅文を寫す、將相を拜敍する制書には黃麻紙を須ふ」と見えたり、綸紙を賜ふことをいふ。

(リ)忉利天のことなり、須彌山說によれば須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に八つの天あり、その中央に喜見城ありて、帝釋天これに住す、四方の三十二天を統ぶと。

(ヌ)尼拘陀、又は弱拘樓陀など書す、無節と譯す、樹幹高大にして、葉は柹の葉の如く、果は枇杷に似たりと。

(ル)住持を勸請する宣疏なり。官府の疏なきときは、山門疏に聖壽を祝せよの語を加ふ。

(ヲ)賀疏の一種、新命の住持と同門の人が、同門の故を以て其の入院を賀して呈する所の文疏なり。

(ワ)法衣を拈ずること、衣は嗣法の信として師之れを弟子に授く、弟子衣を拈じて法語を擧して披す。

(カ)黃梅の禪、南北に別る、神秀は北、慧能は南なり。

(ヨ)兩者利を爭ひて、他の者に其

（タ）登座、「高々たる峯頂、正法の船を盪す。」（レ）団「驪龍行く處浪滔天。」

祝香、「大日本國山城州平安城、正法山妙心禪寺、新住持傳法沙門（ソ）宗休、開堂令辰、虔んで寶香を爇き、端に爲に 今上皇帝聖躬萬歲々々萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、百王百代、芥城空しうして、而して壽山彌高し。乃子乃孫、（ツ）桑田變じて而も仁澤何ぞ竭きん。」

將軍、「此の香、大樹奕葉仙李盤根、爐中に爇向して、大檀越（ネ）準三宮の爲に鈞算を資倍し奉る。伏して願はくは、九州四海、遠人服し兮（ナ）戎狄和す。二京三都、大厦成つて而して燕雀賀す。（ラ）補袞の手を將つて、（ム）正法輪を轉ぜんことを。」

の利をとらるゝに喩ふ。戰國策に、「趙の燕を伐たんとするや、蘇代燕の爲に惠王に謂つて曰く、「今日臣來りて易水を過ぐ、蚌方に出でて曝す、鷸其の肉を啄む、蚌合せて其の喙を箝む、鷸曰く、今日雨降らず明日雨ふらずば、卽ち死せる蚌あらんと、蚌、鷸に謂つて曰く、今日出でず、明日出でざれば、死せる鷸あらんと。兩者相捨つることを覺せず、漁者得て而して之れを並に擒にす、今趙、燕を伐たんとす、燕趙久しく相支へ以て大衆を敝す、臣、强秦の漁夫たるを恐る」と』。

（タ）高座に登ること、說法の座席に就くこと、陞座に同じ。

（レ）舟を漕ぐ時のかけ聲、又は發語の聲なり。

（ソ）本光國師の諱名なり。

（ツ）詩に曰く、「已に見る松柏摧けて薪と爲る、更にきく桑田變じて海と成る」と、時の永久の意にとる。

（ネ）三宮は三后に同じ、三后は太皇太后宮、皇太后宮、皇后を云ふ、之れに準ずるをいふ。

（ナ）東夷、西戎、南蠻、北狄。此等の四夷卽ちえびすをいふ。

（ラ）袞は天子の法服なり、龍を繡す、依つて天子を補佐し奉る手を將つてなり。

（ム）如來の說きたまへる法門のこと、法輪は摧破の義、轉法輪ともいふ。

（ウ）名藥なり、天棘ともいふ。

（ヰ）漢書の蘇武傳に、「甘露三年、單于始めて入朝す、上股肱の美を思ひて、廼ち其の人を麒麟閣に圖畫す、其の形貌に法り、其の官爵姓名を署す、後世之れを榮とす。」

（ノ）元祐は宋の宣宗の卽位の年號なり、此の時司馬溫公、丞相

敕使、「此の香天上の㋒棘林より貴く、海外の婆律より重し。爐中に爇向して、敕使尊官左中辨の爲に祿算を資倍し奉る。伏して願はくは、宗門の功、第一、名、㋼甘露の麒麟に上る、洛社の會十三、齡㋨元祐の司馬に逮ばん、以て規し以て祝す。惟れ德惟れ馨し。」

㋔京兆、「此の香爐中に爇向して、外護の檀越源府君右京兆の爲に、祿算を資倍す。伏して以れば、韓京兆、八代の衰を起す、才名を斗北に仰ぐ。神堯帝第一門の事の爲にす。義兵を晉陽に觀し、吾れ其れ庶幾せん乎、民の歸する所なり。」

嗣香、「這の一瓣香、昔㋗大燈國師、劈いで兩片と作し、㋳二神足に付するや、正法眼を以て、第一の神足吾が㋮關山祖に付し、諸莊園を以て第二の神足他の㋘徹翁師に付す。是れ十目の視る所なり。蓋し碧落の碑に贋本無き者は、只だ㋫花園の一枝のみ、餘薰八傳して山野に至る。山野之れを祕して、三重五重複子に裹む、卽今拈出して、前住當山特芳骨查に供養す。肎て法乳に報ぜず。爾に出づる者は、爾に返る。」

垂語、「㋙世尊密語有り、迦葉覆藏せず。」禪牀を擊つて、「會す麼、㋓鷓鴣

となる、温公薨する年六十八、文正と謚す、著す所資治通鑑の外、文集八十卷、涑水紀聞等二十種あり、迂書、誠忠信實を以て顯る、德望一世に高し、之れに比するなり。

㋔京兆尹は支那の官名、三輔のうちなり、以て帝室を輔翼す、尹は地方長官、卽ち京師の守護職なり、韓京兆は文公の事をいふ。

㋗大德寺開山の宗峰妙超禪師の號。花園上皇特に勅して興禪大燈國師と賜ふ。

㋳弟子の傑出せるものなり。

㋮妙心寺開山關山慧玄禪師なり、大燈國師に參じ、關の公案を透徹し印可を蒙り、關山の號を與へらる、花園天皇の歸依特に深し。

㋘大燈國師の上足なり、寛永中徹翁の遠孫澤庵彭公、道聲世

啼く處百花香し。參。」問答錄せず。

㋢提綱、「乾坤の內宇宙の間、一物有り黑うして漆の如し。護身の靈符、顧神の妙術、之れを得る者は、㋐二三に禍胎し、四七に濫觴す。著々出身有り、門々大吉を書す。㋚林際の風顚、之れを得て金剛王と作す。正令當行、巴蜀雪消して春水來る。㋖松源の黷祖、之れを得て黑豆の法を用ふ。孤機峭峻、湘潭雲盡きて暮山出づ。恁麼不恁麼、依俙として越人の鳬と爲るに相似たり。不恁麼恁麼、彷彿として楚人の乙と爲るに同じからず。吾が皇之れを得て、西の方㋴混明を極め、東の方扶桑を略す。晝は㋱閻浮に降り、夜は㋯兜率に昇る。」拄杖を拈じて、「山僧今日之れを得て、國の爲に開堂し、此の事了畢、此の故に聖に在つては聖に同じ、巿上に堯天を戴く。凡に在つては凡に同じ、杖頭に佛日を揭ぐ。蕉芽敗種齊しく恩に霑ふ。㋛森羅萬象全く一に歸す。直に得たり、石女立つて三臺を舞ひ、木人坐して觱篥を吹くことを。這の新翻の一曲、諸人還つて委悉す麼。倘し復た未だ然らずんば、高く一律を提げ去らん。」卓一下して、「摩訶般若波羅蜜甚深般若波羅蜜。」

に鳴る、後水尾上皇、宮に召して法をきく、上皇大いに喜び將に國師の號を賜はんとす、彭辭して曰く「古來、徽號を蒙るもの皆名德の宗師なり、某甲何ぞ敢て當らん。徹翁禪師は大燈國師の上足、吾が門の宗祖なり、未だ此の號あらず、伏して願はくは重れて追諡を賜はらんことを。」上皇其の言を嘉し、天應大現國師とたまふ。

㋐花園の一枝は關山國師をいふ、花園上皇の別殿を賜ふて寺觀となし、之れを妙心寺となす、故にしか云ふ。

㋯世尊拈華、迦葉微笑するの機緣をいふ。

㋓無門關二十四に「風穴和尚因に僧問ふ、語默離微に涉る、如何か不犯を通ぜん。穴曰く、長に憶ふ、江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し」と。

自序、「宗休、出頭の㋽跛鼈、顚倒の狂猿、吁、何の幸ぞ哉。天書遠く召す滄浪の客、是れも亦時なり。春衣夜宿す杜陵の花、慚赧々々、㋪忸怩々々。」

㋲白槌の謝、「開堂の次で、㋝共しく惟れば、養源堂頭大和尙、規行矩歩、馬勝の威儀を學ぶ、放去收來、洋嶼の宗旨を滅す。千古叢林観を改む、㋜三代の禮樂重ねて新なり。玆に辱うす、尊を降つて卑に就き、槌を鳴して法を證す。下座して、必ず㋑十笏室に趨つて、一炊巾を展べん。伏して乞ふ道照。」

諸山の謝、「次に惟れば、諸位㋺東堂大和尙、㋩諸位西堂和尙、道香掩ひ難し。譬へば栴檀の葉葉風を起すが如し、禪林光有り、宛も珊瑚枝枝月を撐ふるに似たり。（撐を一に樽に作る。）

㋢提要ともいふ、宗旨の大要を提起すること。勅修清規開堂に「住持垂語、問答、提綱」とあり。

㋐禍の起る基は、六祖大鑑禪師に胎み、達磨大師に初まりたりと。

㋚林際は臨濟を云ふ、字音相通ずる故に用ふるのみ。風顚は狂氣なり。

㋖崇岳松源禪師なり、隆興二年白蓮精舍に得度し、慶元元年詔を奉じて靈隱寺に住す、大いに法幢を張る、靈石妙、大慧杲、應庵等に參じて大いに得所あり。曠は「みゝしひ」なり。

㋴漢書の西南夷傳に「昆明國に池あり、方二百里、武帝昆明を伐たんとす、池を作して之れに象り、以て水戰を習はしむ」と。

㋱閻浮提婆の略、穢州、穢樹、城勝、金州、好金土等と譯す、古代印度の世界說にて中央なる須彌山の南海中に存する三角形の島洲なりとす、もと印度大半島に名けたる名なれども、和漢の佛教徒は支那日本等も閻浮提の一部と考へ、南閻浮提大日本國などといへり。

㋯兜率は都史多、兜率陀、覩史多ともいふ、妙足、知足、止足等の譯あり、欲界六天の第四須彌山の頂上十二萬由旬の處にありと。

㋛笛の一種なり。

㋽足なへのかめなり。

㋪心に恥づる貌。

㋲白椎に同じ、白は事を告ぐる意、槌は椎にして撃つて響を爲す具、白椎は僧に謹白大衆と云はんが如し。碧巌集に「世尊一日陞座、文殊白椎して曰く、諦觀法王法、法王法

若し褒詞を罄さば、恐らくは大德を瀆さん、衆慈賢察せよ。」
總謝、「又惟れば、山門東西の兩序、諸寮㊀辨事、一會の海衆諸位禪師、逐一の謝を致すべしと雖も、此の日開堂、專ら祝聖の爲にす。敢て繁詞せず、併せて小參の次でを期す。各昭亮せよ。」

㋭拈提、「記得す、報恩の逸禪師、因に僧問ふ、『佛、一大事因緣の爲に出世し、未審し和尚の出世如何。』逸云く、『恰も好し』と。一問一答、諦當なることは甚だ諦當、那の僧の作略、奴を認めて郎と作す。報恩好佛、只だ是れ光無し。人有り若し問はん、『㋬新妙心出世如何』と、他に祗對して道はん。」拂一拂して云く、「九萬里の鵬纔かに翼を展ぶれば、一千年の鶴便ち翺翔す。」

㋣當晚小參、垂語、杖を拈じて、「虛堂の拄杖殺活我れに在り、試みに觸著して看よ、毒花、毒果、在り麼。」問答錄せず。
提綱、拂子を竪起す、「吾れに一柄の拂子あり、千聖曾て携へず、列祖も提不起、竪に起る時は、則ち竪に㋠三際を窮め、横に拈ずる時は、則ち横に十方に亘る。是れに因つて明月清風を拂ふ、未だ㋷趙州をして一生受用

如是」とあり、禪林多く事を報ずるには白椎の法に依つてする風習、文殊の白椎に始まる。

㋣共は恭に通じ、うや〳〵しくなり。

㋦夏、殷、周をいふ、禮樂の最も整へたる時代なり。

㋑十笏云々は維摩方丈の故事をいふなり。

㋺西堂の對、當時前住の人の居處をいふ、蓋し東は主位なり、當時前住の人は是れ舊主なり、故に東堂に居る、又東庵ともいふ。

㋩他山退院の人、來りて化を助くる人をいふ。

㊀山門列職雜務の人を辨理する人を云ふ、卽ち事務を辨備する雜役、又首座寮の行者なり、第三座とも云ふ、法戰式上にて開口闍梨といふものこれなり。

せしめず。霹靂天地を驚かす、直に得たり百丈三日耳聾することを。來由有り、來由無し。此れに卽して用ひ、此れに離して用ふ。甚だ希有、甚だ希有。日本國裏に禪を說く。㋦也太奇、也太奇。大唐國裡に鼓を打つ。㋸正恁麼の時。」杖を拈じて云く、「同行の木上座、忍俊不禁にして跳り出でて云く、『和尙恁麼に道ふ、早く是れ龜毛長きこと數尺』、㋾德嶠答話せず、汾陽夜參を罷む、之れを眞の家訓と謂ふのみ』と。山僧咄して云く、休みね休みね、儞が一拶、恰も兎邊に角を求むるに似て相似たり。只だ頭上に乾坤を定め、毛端に巨海を呑む底の一句子の如きんば、如何が箇の消息を通じ去らん。」卓一下して、「芍藥花開く菩薩の面、㋻棕櫚葉は散ず夜叉の頭。」

自序、「宗休、暗證の禪師、央庠の座主、忝く宸藻を拜して、叨りに名藍を汚す。額に泚すること鮮からず。」

㋕謝語、小參の次で、「共しく惟れば、南昌堂頭大和尙、西源の的流、急雪鶺鴒相並ぶ。㋵南昌の故郡、落霞孤鶩齊しく飛ぶ、吾が法兄に愧づること莫れ、豈に尊貴墮と曰はん。春寒花遲く、保愛珍重。」

㋭古則を提示して之れを拈評すること、提唱、拈古に同じ。

㋬宗休禪師をいふ。

㋣古來禪林に於ては開堂の當日は必ず昏鐘後に小參を行ずるを例とす、これを當晩小參といふ。

㋠過去、現在、未來の三世を云ふ。

㋷南泉普願の法嗣なり。

㋦「也たはなはだ奇なり」の意。

㋸「まさに斯くの如き時」といふが如し。

㋾德山宣鑑禪師小參に曰く、「老僧今夜答話せず、問話の者あらば三十棒と、時に僧あり、禮拜す、山便ち打つ、僧曰く、某甲未だ問話せざるに、什麼としてか打つ、山曰く、儞は是れ何處の人ぞ、僧曰く、新羅の人、曰く、未だ船舷を跨らず、好し三十棒を與ふるにと、僧此に於て省あり。」

次に惟れば、養源堂頭大和尙、聲價大いに振ふ、天下德爵齒の達尊を仰ぐ。典刑猶ほ存す、僧中才學識の三長を得たり。誰れか嚴瞻せざらん乎。
又惟れば、大心堂頭大和尙、大心の衲子、㋟龍泉を舌端に掉ふ。本色の㋹白拈、虎鬚を這裡に捋づ。㋞造次顚沛、宗旨を失はず、誰か敢て近傍せん乎。
更に惟れば、山門㋡兩序、東班都寺禪師、兩翼相ひ並ぶ。鴛序鵠立班を分つ、百廢具に興る。㋧鯨喑鼉寂響を革む、亦偉ならず乎。
監寺禪師、則監院、青林の禪を扣く。㋤丙丁火を求む。㋶會和尙㋰白雲祖を接す。玉人璠を治す、其れ然らず乎。
悅可禪師、其の才や寔に後佛に紀綱たり、其の機や況んや仙陀を陶鑄す。是れ華姪の提唱にあらず乎。
副寺禪師、副寺禪師、法財を護し、世財を護す。父の蠱を幹くし、母の蠱を幹くす。亦宜しからず乎。
典座禪師、直歲禪師、㋒雲母を蒸して飯と作す、㋼典座の妙手乎。虛空を束ねて棒と爲す、直歲の活機なり。

㋻梵語、勇健、暴惡と譯す、八部鬼衆の一、又捷疾鬼ともいふ、天夜叉、地夜叉、虛空夜叉の三種ありと。
㋕上堂、又は法戰の後、法要の終末に臨んで、當事者たる堂頭又は座首よりする隨喜の感謝の語。謝辭に同じ。
㋵此の二句は唐の王勃が滕王閣序に見ゆ。
㋟古の銘劍なり。
㋹白晝、人の物を巧にぬすみとるをいふ。
㋞瞬時の間を云ふ。千字文に、「仁慈隱惻造次離れず、節義廉退顚沛虧けず」と。
㋡西序、東序をいふ。
㋧鯨のほゆる、ゐもりの吠ること。
㋤丙丁は火のえ、火のとにして、童子は火の擬人稱なり、火は火の神のこと。
㋶楊岐法會禪師なり。

又惟れば、西班堂中座元禪師、佛祖の權衡、人天の眼目、徒を匡し衆を領ず、寧ろ講經の首座と曰はん乎。尊を降つて卑に就く、諸れを退位の菩薩に譬ふるのみ。蓋し瓜葛の法系を忘れざるの謂乎。

後班座元禪師、（後班を一に後版に作る。）吾が徒を輔賛して、小釋迦の懸記に合す。斯道を㋨黼黻して大禪佛の高蹤を蹈む。正に好し力を著くるに。

㋔記室禪師、翰墨の㋗膏肓未だ療せず、螢雪の苦夫旃れを勉めよ。

㋳知藏禪師、知藏禪師、白傳が詩㋮大藏經に入る、老韓傳を同じうす。碧岩集公子行を賡ぐ。涇渭流を異にす、入と不入と、公其れ㋘甄別せよ。

㋫知賓禪師、知浴禪師、㋙大應客を徑塢に接す。朝一人、暮一人、㋓太原、浴を雪峯に主る。火三昧、水三昧、古に今に、至れり矣、盡せり矣。

㋢侍香禪師、戒香定香解脱香、天生の司南を鼻孔に了す。塵說、刹說、熾然說、吾が道已に東するの證明を謝す。

侍狀禪師、侍客禪師、侍藥禪師、書を馳せて家に到らざるは侍狀なり、客を報じて帝鄉に在るとを知らざるは侍客なり、病を療するに驢駝の藥を假らざるは侍藥なり。桃紅李白薔薇紫、一以て之れを貫せり。珠簾玉案翡

㋰白雲守端禪師なり、楊岐法會の法嗣。
㋒彭祖嘗て雲母山に隱れて雲母を服す、壽八百歲と。
㋖六知事の一、衆僧の辨食を掌る役。
㋨ほふつは禮服なり、左傳桓公二年に「火龍黼黻は其の文を明かにするなり」とあり、故に斯道を昭明にするをいふ、或は文飾する意にいふ。
㋔記室は叢林に於ける書記なり。
㋗不治の病をいふ、左傳に「病肓の上、膏の下にあり、以て攻むべからず」とあり、習癖のぬけ難きをもいふ。
㋳藏主に同じ、經藏を掌る役なり。
㋮一切經のこと、釋尊所說の大小乘の三藏及び印度、支那日本の諸高僧の著書を藏めたるものなり。

翠の屏、三重も也た有り。
目子、「某座元某座元、前資辨事二員の問前、一會の㋐海衆諸位禪師、各般若叢に坐す。百千の㋚文殊左右に彌布す。再び㋖楞嚴會を開く、四教の㋴阿難、内外玲瓏、集めて大成す矣。亦盛ならず乎、各乞ふ恕宥せよ。」
拈提、「記得す、達磨大師曰く、『吾が法三千年の後に於て、未だ曾て一絲毫許りをも移易せず。』後來覃葛廬頌して曰く、『東西目を縱にすれば乾坤闊し、玉露溦秋氣宇高し、山は是れ山分水は是れ水、何ぞ曾て一絲毫を移易せん。』㋱少室の單傳、自ら㋯安期が棗有り。葛廬が一偈、㋛王母が桃を食らず、子細に點檢すれば、虛を吠え實を啀む。一犬千㋽猱、休上座野狐の見解を打破し、葛廬の㋪風騷を飜案し去らん。」拂一

㋘明かに別くるをいふ。
㋫知客に同じ、叢林における來賓の迎待應接を典る役なり。
㋙建長寺開山南浦紹明、支那に入り、虛堂愚に就いて法をうく、徑山にありて賓客を典らしむと。
㋓太原浮上座、雪峰義存禪師の法嗣なり、雪峰の室中に參じて師資の道を成ず、浴室を掌り、玄沙の打水に遇ふて、大いに相看する所あり。
㋢法式の際、住持に隨侍し、香臺を捧持する役。五侍者の一たる燒香侍者と相竝んで住持の後邊に隨ふ。
㋐叢林に衆會する一團の衆僧をいふ。一會の衆僧は大海の如し、諸河流れて一處に歸す、本名既に滅して大海の名のみ存す、故に海衆と名くと。
㋚文殊師利菩薩、普賢と相對して智慧を掌る。
㋖叢林にて衆僧の安居を祈保する爲に修する法會なり、每年五月十三日に建啓し、其の翌日より八月十貳日迄每日朝課前又は午時にこれを修し、八月十三日を以て滿散となす。
㋴佛の十大弟子の一、多聞第一なり、佛の從弟にして甘露飯王の子、世尊に隨從すること二十余年、侍者の稱、阿難にはじまる、如來嫡傳第三祖となる。
㋱少室は達磨面壁の所なり。
㋯抱朴子に「安期生棗を海濱に得る、瑯琊の人、傳へて世々之れを見る、計るに已に千年」とあり。
㋛王母は西王母なり、列仙傳に「漢の元封元年に武帝殿に降り、蟠桃七枚を帝に進め、自ら其の二を食ふ、帝核を留めんと欲す、母曰く、此の桃世間有る所に非ず、三千年に

拂して云く、「少室別傳の旨、誰か知らん來處の高きを。將に謂へり碧瞳窄しと、千里一秋毫。」

翌日（六）玉鳳院拈香、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺、凡そ新住持と爲る者、開堂の翌旦合山の淸衆を率ゐて、玉鳳塔下に就いて諷經一上す。臣僧宗休、其の例を攀ぢて、謹んで此の妙兜樓を焚いて、以て（七）花園太上法皇尊前に供じ奉るの次で、拙偈を唱へ、聊か菲薄の奠に充つと云ふ。玉鳳花を銜む東海の東、太平の門戸春風を競ふ、三皇五帝果して何物ぞ。」香を擧して云く、「一朶の香雲梵宮を擎ぐ。」

退院、「祖翁一片の舊田園、自ら鋤犂を荷ふて後昆と稱す。啼鳥落花留むれども住まらず、倒に佛殿に騎つて山門を出づ。」

一實のみと。」
（四）猱は「むくざる」なり。
（五）文藻をいふ。
（六）妙心寺境内にあり、花園帝の御廟なり。
（七）第九十五代花園天皇、伏見帝第三子、正安二年皇太子となり、是に至りて踐祚、御年十二、文保三年春二月位を皇太子に讓り、建武二年十一月薙髮し、法名遍行、正平三年十一月崩す、壽五十二、山城十樂院山上に葬る、天皇學を好み和歌をよくす、深く禪法を好み、妙超慧玄を以て師となし、花園離宮を捨てて妙心寺となし、慧玄をして此に居らしむ、一室を其の側に創め、玉鳳院と號し、之れに徙御す、遺像今尙ほ存す。

再び正法山妙心禪寺に住する語錄

侍者某編

冬節上堂祝香、「薩訶世界南瞻部州、大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺住持傳法沙門宗休、書雲令節、欽んで寶香を焚いて、端に爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、斬新の日月、㋑王事盬きこと無きの詩を歌ふ。太平の山河、聖壽賢を得るの頌を奉らん。」

垂語、兩手を開いて、「線路を放開して、一氣潛かに回る。」拂を拈じて云く、「雲物を看んと要す麼、誠に魯臺に登れ、有り麼、參。」僧有り衆を出でて云く、「冬至日永し、一絲毫の閑工夫を欠少す。㋺妙高雪漫たり、五十三の善知識に相見す。時有り節有り、古に亘り今に亘る。」師云く、「暖律灰を飛し、繡紋線を添ふ。」僧云く、「記得す、天澤老師、至日上堂、僧問ふ、『群陰消盡して㋩一陽來復す。衲僧家此に到つて如何が轉身せん。』答へて云く、

㋑盬は音こ、堅固ならざる義、王事は堅固ならざるべからず、故に王事に鞅掌して暇なきをいふ。詩經唐風に、「王事盬きことなし、黍稷藝うる能はず。」

㋺天童山妙高臺をいふ、眼藏諸法實相の卷に、「寂光室の西壁の前を過ぎて大光明藏の西階にのぼる、大光明藏は方丈なり、西の屛風の南より香台のほとりに至りて、燒香禮拜す、入室この所に雁列すべしとおもふに、一僧も見えず、妙高臺は下簾せり、ほのかに堂頭大和尚の法音聞ゆ、とき

『恰も老鼠の牛角に入るが如し、端的なりや否や』と。」師云ふ、「蝦跳れども斗を出でず。」進んで云く、「學人轉身の處、和尚如何が祇對せん。」師云く、「門前の刹竿を倒卻し着せよ。」進んで云く、「天寒人寒、兩人一椀。」師云く、「別別、珊瑚枝枝月を撑著す。」僧云く、「烏鉢は見易し」と。便ち禮拜す。師云く、「之れを見て取らざれば、千歲にも逢ひ難し。」

提綱、「佛性の義理を識らんと要せば、當に時節因緣を觀ずべし、㋥作麼生か是れ時節因緣。冬時月頭に在れば、則ち裘を賣つて牛を買ふ、木人倒に㋭葭管を吹く。㋬冬至月尾に在れば、則ち牛を賣つて裘を買ふ、牧童遙かに金鞭を指す。僧堂今朝慈明の榜を掛着す、首座昨夜、㋣洞山の禪を掇退す。塞北天寒し、十三葉の牡丹雪內に開く、江南地暖かなり、一兩枝の梅花臘前に綻ぶ、正與麼の時。」杖を拈じて、「牀角の漆道士出で來つて咄一咄して云く、『㋠適來許多の緒餘土苴。』徒に言詮を費す。巍巍乎堂堂乎、同得同證本來の因果、塵塵爾り、刹刹爾り。無縛無解應用無邊、時節に拘らず、全く變遷を絕す。別に佛性の義を識らんと欲す麼。」卓一下して云く、「大樹は大皮裹み、小樹は小皮纏ふ。」

に西川の祖坤維那來りて同じく禮拜しをはりて、妙高臺をひそかにのぞめば滿衆おちかさなれり」とあり。

㋩易の地雷復より來る語にして、陰極りて一陽來復するを云ふ、節にすれば冬至を云ふ。

㋥どうじや、どうして、どう、如何、どうしてか等の詰問詞なり。

㋭あしの笛なり。

㋬今大抵十二月二十二日なり、曆にては十一月中にあり、これを節日として賀す、殊に其の朔日にあるは朔旦冬至といひて、二十年に一度ありて、瑞祥として禁中に公事あり、即ち裘を賣りて牛を買ふ所以なり。月尾にあればこれに反す。

㋣靑原下四世雲巖曇晟の法嗣、洞山良价禪師なり。

自序、「宗休、麞頭鼠目、驢頷馬腮、江湖流離、將に謂へり木瓜呆風子と。天地の棄物、元來蓬髮の(リ)休上人、慚汗す。」

謝語、上堂の次で、「恭しく惟れば、養源東堂大和尙、(ヌ)勃窣理窟、天然の(ル)作家、手に信せて麤竹篦を拈じて、臨濟の骨髓を敲出す。病を治するに長松草を以てす、普明の宿因を感じ得たり。尊候如何、保養珍重。」

次に共しく惟れば、大心東堂大和尙、才智山長く、(才智を一に才地に作る。)行藏雪潔し。一株の蔭凉樹既に倒るゝの日に丁つて、正宗を扶起す。五濁の優曇華再び現ずるの時に遇ふて、來つて補處と稱す。百里雲を興す者は龍なり、千仭輝を覽る者は鳳なり、之れを(ヲ)瞻、之れを仰ぐ。更に惟れば、山門の兩序、滿堂の活衲、問話の禪客諸位禪師、機は東頭に居り、雲は西頭に居る。謂つ可し叢社の兄弟と。(ワ)蠻は左角に屬し、觸は右角に屬す。亂世の英雄と稱するに足れり、各乞ふ昭亮せよ。

拈提、「記得す、古德冬至上堂に云く、『恁麼も也た是、不恁麼も也た是、恁麼も也た不是、不恁麼も也た不是、恁麼不恁麼、總に是、總に不是。』何ぞ謂ふこと此の如くなる。陽氣發生して硬地無し、古德の提要、恁麼不恁麼、强ひて(カ)鴻蒙を判つ。總に是、總に不是、兩處に

(チ)先刻、先時に同じ。
(リ)宗休自ら謂ふなり。
(ヌ)勃窣は行緩の貌をいふ。
(ル)斯道に老練なる作者、又は師家をいふ。支那唐宋時代の禪者が、詩文を以て禪を宣揚したるより、詩人墨客の家の語を其のまゝ引用したるなり。
(ヲ)仰ぎのぞむなり。
(ワ)莊子に、「蝸牛の左角に蠻氏、右角に觸氏、各相戰つて死者數萬」と。これに出づ。
(カ)天地自然の元氣を云ふ、莊子に、「鴻蒙方に髀を拊ち、雀躍して遊ばん」と。蒙はまた濛に作る、元氣の未だ分れざるをいふ。淮南子に、「鴻蒙の先を開く」と。

功を失す。陽氣發生して硬地無し、窮すれば則ち變じ、變ずれば則ち通ず。山僧が見處、他と同じからず。」拂一拂して、「清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふ。」便ち下座す。

歲旦上堂祝香、「聖明を仰ぐ、日の如く月の如し。睿算を祝す、地に同じく天に同じ。」

垂語、「造化の爐を開いて、㋵鐵崑崙を鑄る、見る麼、嶄新の日月、特地の乾坤。」僧有り、衆を出でて云く、「萬歲古佛出世し、何ぞ舊歲新歲の送迎を管せん。高く祖印を仰ぐ、南極老人天より下る、寧ろ㋟無極太極の先後を分たん。仰いで皇圖を祝す、獅子の音を發して、鷄旦の賀を暢べよ。」師云く、「山門瑞氣を增し、草木光輝を發す。」僧云く、「記得す、趙王、趙州を訪ふ、州立たず、手を以て自ら膝を拍つて云く、『會す麼。』王曰く、『不會。』『不審し佛法と王法と、是れ一般、是れ兩般。」師云く、「一鎚兩當。」進んで云く、「玆に承る、今上皇、綸命を下し、吾が正法の門を建立すと、謂つ可し山中雨露新なりと。」師云く、「這裡より入れ。」進んで云く、「與麼ならば則ち上皇の上方に於ける、趙王の趙老に於ける、之れを古にし、之れを今にす。豈に優劣有らんや。」師云く、「二十年來塵面を撲つ、如今始めて碧紗籠を得たり。」進んで云く、「山花咲み野鳥語る。」師云く、「吾れ爾に隱す無し。」

㋵支那にて、上代より西方にある高山の名とし、黃河の源は此の地にありと信ぜり、近世新疆和闐の南方、西藏の北方に聳ゆる山脈を以て崑崙山とせり。月江錄に「黃河九曲、分水崑崙に出づ」と。

㋟無中に有を生ずるをいふ、唐の杜順和尚の華嚴法界觀、また宋の周惇頤の大極圖說に見ゆ。

㋹智門光祚の法嗣、諱は重顯、雪竇は其の號なり。景德傳燈錄によりて古則一百則を拔き之れが頌古を作る、後に圜悟禪師評唱して碧岩集と稱するもの卽ち是れなり、其の遺錄を集めたるものに、洞庭語

進んで云く、「百千の㋹雪竇・圓悟、合して一人と爲る。」師云く、「低聲低聲。」提綱、「年年是れ好年、春色高下無し。日々是れ好日、花枝自ら短長。水の器に隨ふが如し、圓ならず方ならず、㋞西乾に在つては新歲經と名く、釋氏に本く。㋡東震に在つては㋧先天易と曰ふ、㋤犧皇に始まる。法霈を九野に洒ぎ、壽域を八荒に開く。也太奇、也太奇。新羅國裡拄杖、舞を作す、甚希有、甚希有。古郢城邊落梅上堂、諸人還つて聞く麽、是れ何の瑞祥ぞ。」杖を卓すること一下して、「臥龍纔に奮迅すれば、丹鳳も亦翺翔す。」

自序、「宗休、㋶繫れる匏、魯叟食はず、㋰朽ちたる木、宰予彫り難し。只だ材を取る所無きことを愧づ、何ぞ敢て職を補ふに堪ふ可けん。汗顏。」

謝語、上座の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の四衆、適來の禪客、諸位禪師、東に鱗蟲有り、龍之れが長爲り、西に毛蟲有り、虎之れが長たり。南に羽蟲有り、鳳之れが長たり、北に甲蟲あり、龜之れが長たり。此れに由つて之れを觀れば、吾が佛日祖翁、巖竹篦下、四員の禪將を打發す。鳳なり龜なり、龍なり虎なり、斯れより一源を四派に分つ、允に以有る哉。抑々正法眼破沙盆を具する者、松源・破庵・曹源・萬庵、豈に中峯の道

錄、雪竇開堂錄、瀑泉集、祖英集、頌古集、拈香集、雪竇後錄等の七集あり。

㋞西乾は方角にて、印度をさす、乾はいぬゐの方にて、西北を云ふ、然れども必ずしも爾か云ふにあらず、西方といふ意なり。

㋡東震は東方なり、震は卯に當り、正東なり、支那をさす。

㋧先天とは、人の生れ來る以前をいふ。易に、「天に先だちて天に違はず」とあり、蓋し易をいふか。

㋤伏犧は三皇の首位にあり。

㋶繫匏は棚にかゝれるふくべのこと。轉じて棚にかゝれるふくべの如く爲すことなく只だ徒らに日を過すことにも用ひる。

㋰論語公冶長篇に、「宰予晝寢す、子曰く、朽木は雕るべからず、糞土の墻は杇るべから

を起さゞらん乎。猗歟、盛なる歟、各々道體萬福。」

拈提、「記得す、大川の濟禪師、歳旦上堂に曰く、『正月初一、若し佛法を說かば、三百六十日佛法に縛殺せられん、若し世法を說かば、三百六十日殺世法に使せられん』と。大川、恁麼の告報、誤つて㋒元字脚を認めて、雙眼睛を打失す。何が故ぞ、會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布、休上座、㘞。拂子頭上に光明を點出し去らん。滿堂の㋖露柱元正を賀す、千年河水の淸を待たず、佛法に非ず分世法に非ず、㋷綿蠻たる黃鳥花を出づる聲。」

歳旦上堂、「祝聖、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭々しく願はくは、君を㋔周宣漢武の上に致し、㋗賢を莘夫渭叟の間に擧げん。」

垂語、拂を竪てゝ云く、「這の正法樹、微咲の花を開く、有り麼、風流當家に屬す。」僧有り、衆を出でゝ云く、「大王萬福の趙古佛、金雞曉を報じ、玉鳳花を銜む。侍者三喚の㋳忠國師、木馬風に嘶き泥牛月に吼ゆ。頼に法席に臨む、仰いで㋮不圖を祝したまへ。」師云く、「㋘日月桼樹に垂れ、乾

ず、予に於て何んぞ誅めん」と。

㋒凡字のこと、元字脚は几即ち凡字なり、又乙字のこと、元字脚は元字の脚の意にて元字の脚は乙、乙は一に通ず、故に元字脚は一字の意、又文字の總命をいふ。

㋖むきだしの柱、目に見え居る柱、無情又は非情を表するに用ふる語なり、古佛露柱に交る等の語あり。

㋷綿蠻は、黃鳥のなく聲なり。詩經小雅に「綿蠻たる黃鳥幽谷をいでて喬木に集る」と、又歐陽修の詩に「綿蠻巧に囀ず花間の舌。」

㋔周の宣王、漢の武帝のことなり。

㋗くさむらや、濱べの人の間からも、賢者をえり上ぐるをいふ。

㋳南陽慧忠國師は、越の諸曁の

坤漢宮を繞る。」僧云く、「記得す、西巖惠禪師、歳旦上堂に云く、『磨盤舊面を呈し、水碓新年を拜す。無作にして而して作し、然らずして、而して然り』と。是れ何の條章ぞ。」師曰く、「只だ雪の消し去るを待つて、自然に春到來す。」進んで云く、「法山今朝上堂、新舊に渉らず、賀正の一句得て聞く可しや。」師云く、「普。」進んで云く、「雲は北嶺に冷じく、梅は南枝に香し。」師云く、「侍者、禪に參得し了れり。」進んで云く、「人々襟袖に香を帶びて歸る。」便ち禮拜す。

提綱、「朝來花萬福、鶯は奏す起居の聲、是れ甚の聲ぞ。」杖を拈じて云く、「木居士側に在り、吾れと同年同行。晩節を松朋竹友に論じ、歳寒を攀弟梅兄に約す。其の鬚、履を拂ひ、其の髮、纓を脱す。特地に出で來つて、㋫胡盧軒渠して曰く、『鐘魚鼓板是れ甚の聲ぞ、蝦蟆蚯蚓是れ甚の聲ぞ、長老長老、何ぞ聰明ならざる、盲者の日月に依俙として、聾者の雷霆に彷彿たり。重ねて此の義を宣べんと欲す、諦聽諦聽。』昨は舊歳を送り、今は新正を迎ふ。是の故に一氣資けて始め、品物形を流く。四時忒はず、春は鳥を以て鳴く、秦嶺霞秀で、洛山雪晴る。節を擊つて歌を唱ふ東村の王太白、詩を作つて酒に換ふ南隣の張先生。門門大吉、戸戸太平。御園の牡丹紅を着く、四海の香風此れより起る。

人、姓は丹氏、自ら心印を受けて、南陽白崖山の黨子谷に居す、四十年山門を下らず、道行帝里に聞ゆ、彼の大耳三藏を看破せしも此の時なりと、太暦十年十二月九日寂す、勅して大證國師といふ。

㋮大圖に同じ。

㋘秦樹、漢宮は只だ相對するのみ。

㋫胡盧は鈴の音、又は聲の不分明にとる、軒渠は自得の貌なり、聲を正しうして悠然として語るをいふ、又狼狽勉めて云ふ意にとる、又一說なれども前說よきに似たり。

官池の鷗波碧を蘸す、㋙五湖の煙景誰有つてか爭はん。㋓人境不奪㋢公案現成。向上の宗乘を擧揚して、釋迦を罵り彌勒を打す。年頭の佛法を商量して、明教を欺き鏡淸を瞞ず。崑崙の鼻孔を拈卻し、金剛の眼睛を突出す。然も恁麼なりと雖も、祝聖の一句、如何が施呈せん。」卓一下して、「龍、水の時を得て意氣を添へ、虎、山色に靠つて威獰を長ず。」

自序、「宗休、麞頭鼠目、鳥喙魚顋、宗門一世に衰ふ。烏虖、師の半德を減ず、千嶂の月を住持す、胡爲れぞ他の五緣を失す。慙汗。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西序、㋐單寮蒙堂前資辨事、一會の海衆、適來の禪客、諸位禪師、宗門惡毒の爪牙、賢劫第四の釋獅子を獲得す。㋚鉗鎚妙密の手段、洋嶼五百の活馬騮を捉敗す。末流を支分す、㋖四派を江河淮濟に譬ふ。常住を護惜す、一年を春夏秋冬に配す。㋙每日食輪法輪を轉ず、何の時か臺帖鈎帖を拜せん。叮嚀、德を損す、各乞ふ諒察せよ。」

拈提、「記得す、僧、雪峯に問ふ、『元正一日、四相盡く朝す、未審し王何の祗對か有る。』峯曰く、『四相、年に隨つて老ゆ、眞王春に預らず。』一人は曲を拗して直と作す、一人は假を弄じて眞に像る。擧燭の燕說を用ふる

㋙太湖の名、其の周行五百里あるを以ての故に五湖と名づく、また一說に、太湖、射貴湖、上湖、洮湖、滆湖を以て五湖となす、又鄱陽、青草、丹陽、洞庭及び太湖となすと、此の五湖は前說是なるに似たり。

㋓臨濟四料簡の第四、人は主觀にして、客觀の境の存立を放開して、一切を自由ならしむる積極的の手段なり。

㋢現成の當體卽ち公案の意、宇宙所現の萬法其のまゝが悟の現れといふこと、現成公案に同じ。

が如く、㋱斲鼻の郢斤を運すに似たり。山僧亦偈を作りて㋯嚬に效ひ去らん。三皇五帝百花の春、廚庫山門雨露新なり、陰陽造工の手を借らず、天然の㋛拄杖黑鱗皴。」

歳旦上堂 祝香して、「時昇平に屬して、扶桑樹頭鳳舞ふ。春新山に入りて、碧梧桐裡鶯啼く。一に願はくは、君を堯舜の上に致し、而して堯舜の雨露を四濱に施し、二に願はくは、我れを季孟の間に待つて、而して季孟の風俗を萬世に移さんことを。」

垂語、拂を以て左を指して、「左邊は去年の梅。」右を指して「右邊は今歳の柳。」中を指して、「若し中間底如何と問はゞ、顏色馨香舊に依る。㋾參。」僧衆を出でゝ云く、「太平象有り、綠髮の將百蠻を領ず。王事盬きこと無し、㋪緇衣の禮三代を復す。法社の盛なる、我が道光あり。」師云く、「烏藤舊に依つて㋲黑鱗皴。」進んで云く、「春風門に入つて、千花錦を生ず。」師云く、「又秋露の芙蕖に滴るに勝れり。」僧云く、「記得す、天澤祖歳旦上堂に云く、「年々是れ好年、日日是れ好日。甚としてか新舊有る。」「意旨作麼生。」師云く、「花に遇ふては花を成し、柳に遇ふては柳を成す。」進んで云く、「和尙

㋐單寮は、獨寮、又は獨房といふ、單身にして一寮を專有し、同舍のものなきをいふ、蒙堂は叢林にて勤舊退職者の安息する堂舍をいふ、蒙は靜養の義、易の蒙卦の象に「蒙は以て正を養ふ、聖の功也」とあり、故に此の蒙堂に住する退職の人を稱す、前資は叢林にて副寺以下の職を務め、三次を歷て退休したる老宿をいふ。

㋚攝化の嚴なるを、鉗又は鎚の刀を錬るに必要なるに譬ふ。

㋖妙心の四派をいふ、即ち龍泉、東海、靈雲、聖澤それなり。

㋴財施及び法施に對して云ふ。

㋱莊子に、「郢人、鼻端に堊あり、蠅の翼の如し、匠をして之れを斲らしむ、匠、斤を運らし、風をなして、その堊を斲り盡す、而して鼻傷かず」

今日上堂、新舊に渉らざる底の一句、得て聞く可し麼。」師云く、「聞く麼。」進んで云く、「上來は且く置く、住山の㋝鐺斧花を開く時如何。」師云く、「見る麼。」進んで云く、「烏鉢常々在り。」師云く、「㋜後生畏る可し。」僧便ち禮拜す。

提綱、「祖師の妙訣、誰が家か春ならざらん。㋑年の元、月の元、日の元、元來縫罅無し。天一を得、地一を得、人一を得、一氣洪鈞を轉ず、之れに因つて、野外綿蕝舊に復す。雨餘の鐘聲響新なり、玉毫光耀く紫栴檀、善住天子を拜屈す、青山涌出す黃金の宅。㋺釋提桓因を驚起す、塵塵說法、刹刹說法、處處全眞、物物全身。㋩烏張三、酒を喫すれば、黑李四、唇を濕す。放開するときは則ち夜都、地に落ち、把住すれば則ち并汾信を絕す。」杖を拈じて、「且く道へ、放開するが是か、把住するが是か、瞎漆桶痴兀兀、醉袈裟㋥笑䦨䦨。若し復た未だ會せずんば、看よ看よ、盡大地一箇の木上人。」卓一下して、「只だ補衮調羹の手を將つて、如來の正法輪を撥轉す。」

自序、「宗休、千年の常住、百日の主人、半德、師に減ず。蘇長公、庭

と、郢は楚の都なり。

㋯西施は越の美女なり、吳王夫差、大いに之れを幸す、市に入る毎に、人見んことを願ふものは、先づ金錢一文を送ると筆に巧みなり、醜女之れを擬して、却つて醜なるを知らず、拙にして却つて巧に効ふを恥づるなり。

㋛魚鱗の形したる眞黑なる拄杖をいふ。

㋓垂示法語の終りに、喝、露、咄などの文字と同じく用ふ、此の場合更に言外の玄旨に參すべきを勸戒する意なり。

㋪宗門の禮威儀をいふ。

㋲拄杖に同じ、黑き故にいふなり。永平元禪師云く「多歲住山の烏拄杖、一旦龍と化して風雲を起す。」

㋝鐺は小刀なり、斧はをの、まさかり、之れを般若の智劍にたとふ。

堅が體に效ふと爾云ふ。至尊位を列ぬ、㋭韓非子、伯陽の傳を編する者乎。汗顏。」

謝語、「養源和尙、雪髮の獅子、金翅鳥王、㋬潙嶠善く其の源を養ふ。山下の檀越、蕭然たる行李、葉波別に何の法をか傳ふ。水光林影、勃窣たる㋣伽梨、翅に三千威儀經を諳んずるのみならず、況んや復た㋠六十華嚴の易を劃するをや。道體萬福、孟春猶ほ寒し。」

大心和尙、㋷大愚は愚ならず、正法は法無し。風㋦八極に生ず、虎丘虎頭虎尾一時に收まる。雲九天に連る、龍泉龍子龍孫兩處に化す。哿なる哉、後學の甘露、僉曰ふ本色の住山と。人其れ仰がざらん乎、師の存する所なり。

山門東西序、都寺悅衆、寶公、生薑の名を改めず、華姪誰か桃花嬾しと道ふ。爾の音を玲瓏

[illegible]後生は少年なり、年富み力强し、以て學を積みて待つことあるに足る、故に其の勢畏るべし。論語子罕篇に「後生畏るべし、焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや」と。

㋑年と年、月と月、日と日とのさかひめに、少しの隙間もないといふ義なり。

㋺具には釋迦提婆因陀羅、又は釋迦提桓因陀羅、梵音、シャクラ、デーブーナーン、インドラ (Coakra-devānām-indra) 能天主と釋す、帝釋と同じ。

㋩烏張三、黑李四は權兵衛、太郎兵衛といふに同じ。

㋥和悅して靜かなる貌なり。

㋭韓の諸公子なり、刑名、法術の學を喜ぶ、韓の削弱せるを見て、數々書を以て韓王を諫む、王用ふること能はず、是に於て、孤憤、五蠹、內外諸說、說林、說難等十餘萬言を作る、二十卷五十五篇あり。

㋬潙山靈祐、百丈懷海の法嗣、仰山と共に潙仰宗の祖となす。

㋣僧伽黎衣のこと、梵語、大衣は三衣中の最も王なるものにして、僧の王宮に入る時、又は聚落に入る時の袈裟なり。

㋠東晉の佛陀跋陀羅の譯出せる六十卷より成る華嚴經をいふ。

㋷老子の「大辯は訥の如し、大工は拙の如し」などに同じ。

㋦八荒又は八方をいふ。

㋸梅怛麗耶と稱す、菩薩の名、姓は阿逸多、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして兜率天に生れ、現に兜率の內院に居て、當來には此の世に出興して、釋迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。

㋾義玄禪師、黃檗の法嗣、臨濟宗の祖。

㋻雲門文偃、雪峰義存の法嗣、

にして、吾が道を黼黻す。

前版後版、釋迦前ならず、㋸彌勒後ならず、地を易へば皆然らん。㋾臨濟は夏の如く、㋻雲門は春の如し。維れ時至れり矣。

記室知藏、一人は積翠の三關を透過し、一人は少室の大藏を打開す。爛葛藤を胸襟に掃ひ、文章の花を㋕盆盎に輝かす。

侍香侍狀侍衣侍藥、這箇は㋵香嚴の木寂を卽す、鼻孔遼天。那箇は華林の大空に跨る、威風野に遍し。彼の紅粉侍者を想ふ、此の烏鉢の道人を得たり、中に一箇の叢祉の風流有り。藥籠の人物、更に一杯の酒を盡せ。㋟三喚の聲を認むること莫れ、夫れ是れ之れを侍藥の職と謂ふ。

堂中の㋹萬緇郎、適來の十禪客、諸位禪師、㋞渥洼の奇種志を馳す。㋡騅騑騆駱驪騮騵、㋧雲臺の諸將功を論ず。㋤井鬼柳星張翼軫、箇箇轉處に立在す。人人盡く光明有り。三年關山の月、誰か是れ知音、一日長安の花、各自に眼を着けよ。至祝至祝。

拈提、記得す、西巖の惠禪師上堂、拄杖を拈じて云く、只だ㋶鷲峯老漢の如きんば、百萬の衆前に於て、一枝の花を拈ず、直に得たり金色の頭

雲門宗の祖。

㋕盎はほとぎ、かはらけ。

㋵香嚴智閑禪師、青原下四世潙山靈祐の法嗣、擊竹の音を聞いて大悟徹底す。

㋟侍者の別名なり。

㋹堂中の衆徒をいふ。

㋞厚く深きをいふ。

㋡騅はあしげ、騑はそへ馬、騆はかはらげ馬、駱はどろあしげ、驪は黑馬、騮は栗毛、騵は白腹の栗毛馬、上文を受けて點出す、而して下文の井鬼云々に應ず。

㋧後漢の明帝三年、中興の功臣二十八將を南宮の雲臺に圖畫し、天の二十八宿に配すと。

㋤井、鬼、柳、星、張、翼、軫、皆二十八宿の一星なり、何れも南方の星なり。

㋶靈山に於ける拈華微笑の機緣なり、老漢は世尊をいふ。金色の頭陀は迦葉尊者をいふ。

陀、破顔微笑することを。儞且く道へ、是れ梨花耶、李花耶、梅花耶、杏花耶。』卓一下して云く、『一時に春風に分付與す』と。子細に點檢すれば首鼠兩端、世尊手に信せて拈じ來る。春人間に至つて棄物無し、西巖模に依つて脫出す、月花影を移して欄干に上す。山僧、㋰濘。梨梅杏李一般塞し、金色の頭陀熱瞞せらる。拄杖花開く太平の日、春風力を着けて試みに吹け看ん。」

㋒結夏上堂、祝聖、「大日本國山城州平安城 正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、天地と其の德を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合せたまはんことを。」垂語、「圓覺の伽藍を開いて、安居の偈子を說く。諸人還つて聞く麼、葵花眼無く、芭蕉耳無し。參。」

提綱、「十五日以前は、㋔金烏東に轉ず、十五日以後は、玉兎西に移る。正當十五日、傍に漆道士有り、眼蒲蔔朶の如く、手に珊瑚枝を擎づ。㋒圓陀陀地、得得として出で來つて、祖師の鼻頭に築着す。松は直く棘は曲れること、古佛の心膽を吐露す。綠暗く紅稀なり、一溪の雲を拾ひて衣鉢と作し、千嶂の月を接して住持と稱す。或時は與奪縱橫、聖を轉じて凡と作す、遮那珍御の服を脫却す。或時は開遮自在、凡を轉じて聖と作す。向上の惡鉗鎚を拈起す。濡首徧吉、一鐵圍に貶向す。空裡の磨盤

㋰濘はものを指す語、又語助なり。
㋒夏安居の制をむすぶこと、結制、結染に同じ。
㋔金烏は日の異名、玉兎は月の異名なり。

八角を生ず、(オ)陝府の鐵牛兒を驚走す。與麼の時節、(ク)臘氷鵞雪、修治を假らず、甚の護生禁足とか說かん、什麼の取證剋期をか論せん。然も此の如くなりと雖も、只だ殺中に透脫し、活處に機を投せんことを要す。」卓一下して云く、「限り無き春を傷む意を知らんと欲せば、盡く鍼を停めて語らざる時に在り。」（鍼を一に針に作る。）

自序、「宗休、七十古來稀なり、(ヤ)菱花雪を照す。兩三竿も也た足れり、(マ)脩竹門を掩ふ。慙汗慙汗。」

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、鵠立東西の序、蟬連左右の侍、滿堂一會の龍象、泰山は寸壤を辭せず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を成す。顧みるに、吾が法山、高うして峯の頂無きが如く、深うして海の底無きに似たり。誰か瞻仰せざらん乎、各乞ふ諒察せよ。」

(ケ)解夏上堂、祝香して、「大日本國云々。陛下恭しく願はくは、南明公、北明公、左輔右弼の職を掌る。(フ)東王母、西王母、天長地久の篇を奉らん。」

垂語、「關山の月を飜して、(コ)夷則の律と作す。禪牀を撃つて云く、「聞く

(ノ)團陀々に同じ、圓くして美麗なるをいふ。

(オ)支那陝州城外に鐵牛の廟あり、牛頭は河南にあり、牛尾は河北に在り、禹が鑄て以て河患を鎭すとあるに出づ、不動着、又は情識を離るゝ意に用ふ。

(ク)氷雪修飾を用ひずして、自ら白きを云ふ。

(ヤ)菱花は古鏡の名、故に鏡の異名とす、楊達の明妃怨に、「匣中縦有菱花の鏡あるも、羞づ單于に向つて舊顏を照すことを」と、白髪雪の如き髪を鏡にてらすをいふ。

麼、一二三四五六七。參。」僧、衆を出でゝ云く、「大雲九丘を庇ふ、臨濟の龍、頭角を呈露す。淸風八極に生ず、慈明の虎、爪牙を活弄す。玆に㋓自恣の令辰に臨む、仰いで皇圖の萬歲を祝したまへ。」師云く、「三雨全く淸む、㋢六合の塵。」進んで云く、「蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「吾れ爾に隱す無し。」僧云く、「記得す、鹿門の燈禪師、僧問ふ、『西天解夏、臘人を以て驗と爲す、未審し鹿門、何を以てか驗と爲す。』門云く、『雨來つて山色暗く、雲出でゝ洞中明かなり』と、恁麼の酬對、端的なりや也た無や。」師云く、「公驗分明。」進んで云く、「西天鹿門、吾が法山、優劣如何。」師云く、「露柱に問取せよ。」進んで云く、「燈籠合掌、露柱證明。」師云く、「門外の金剛、甚に因つてか汗出づ。」進んで云く、「㋐溽暑猶ほ甚だし、伏して惟れば珍重。」師云く、「名下に虛士無し。」

提綱、「正人、邪法を說けば、邪法正法と成る、邪人正法を說けば、正法邪法と成る。何が故ぞ、法に定法無し、緣に逢ふて卽ち宗、薰風一聯の詩、杲木瓜㋚禪和子を賺殺す。碧岩百則の話、勤蕘苴老凍膿を惹著す。力囝希、咄咄咄。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。恁麼の時節、同行の漆道人、

㋮脩竹は長き竹を云ふ。

㋘解制、夏解に同じ。

㋫只だ南明、北明に對して語をなすのみ、實在するにあらず。

㋙十二律の內の一。月令に、「孟秋の月、律八夷則に中る」と、また史記律書に、「夷則は陰氣の萬物を賊ふをいふなり」と、その十二支に於ける申となす。

㋓梵音鉢刺婆刺拏、隨意と譯す、自恣は義譯なり、寄歸傳に、「凡そ夏罷歲終の時、此の日を隨意と名くべし、卽ち是れ見、聞、疑の中に於て意に任せて擧發して、罪を說き愆を除くに隨するの義なり。」

㋢天地四方を云ふ。

㋐酷暑に同じ。

㋚師家が學人に對して云ふ語なり。

㋖口を大にして云ふこと、又は

驀路に相逢ふ。能殺能活、能擒能縱、㋖口吧吧地にして道ふ、秋初夏末、各自に西東す。萬里無寸草、何の處にか朕蹤を留めん。」卓一下して、「巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す㋴華山の千萬重。」

自序、「宗休、無着の文殊に對するに同じと雖も、末法の比丘と稱す。㋱巖頭の㋯欽山を喚ぶに異ならず、後生の長老と作る。汗顏。」

謝語、「聖澤和尚、禪源竭くること無し、聖澤餘り有り、老松壑に臥す、萬牛動せず五丁愁ふ。㋛少林秋に向とす、衆角多しと雖も一麟足れり。至祝至祝。」

大心和尚、眞正の正傳、大心の心印、禪の炮炙、禪の本草、換骨頤神。或底は微笑、或底は拈花、直指見性、㋼歆羨歆羨。

山門兩序、一會の海衆、諸位禪師、百億の㋪彌樓山を合して、一山と爲す。高きことは則ち高し矣、吾が山門に較ぶれば、則ち只だ是れ蟻垤のみ。百億の㋲香水海を合して、一海と爲す。深きことは則ち深し矣、吾が海衆に較ぶれば、則ち只だ是れ㋝蹄涔のみ。貴ぶべき哉。

拈提、「記得す、㋜虛堂老師、解夏上堂に云く、『十五日以前は休し、十五

喧しくいふこと。

㋴華山記に「山頂、池あり、千葉蓮花を生ず、之れを服すれば羽化す」と、又播首集に、「李白華山の落雁峰に登り、曰く、此の山最も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通ぜん」とあり。

㋱巖頭全奯禪師、德山宣鑑に嗣法す。

㋯欽山文邃禪師、洞山良价禪師の法嗣、巖頭、雪峰と友たり、常に其の所解を驗すと。

㋛禪風の廢れるを云ふ、師自ら倒潰を未前に挽回するの抱負を見はすなり。

㋼欣羨などに同じ。

㋪梵音、スメールといふ、須彌山のことなり。

㋲須彌山の外に七金山あり、此の外圍に大鐵圍あり、此の中間に大海をなす、これを香水海といふと、古說須彌山說に

日以後は住す、正當十五日、休も也た休し得ず、住も也た住し得ず。』虛堂叟、人に逢ふて、且く三分の話を說く。休上座、佗のために全く一片心を拋たん。臺前花の咲を含む有らずんば、是れ東山一夏休す可し。」便ち下座す。

冬至上堂、祝香して、「大日本國云云。陛下、恭しく願はくは、春秋の筆を起して、曾て㋑一角の麟を西周に出す。㋺封禪書を上つて、必ず㋩比目の魚を東海に致さん。」

垂語、叉手して、「一冬二冬叉手當胸、會す麽。㋥闍黎飯後の鐘。參。」

自序、「宗休、少叢林の漢、大蘿蔔の禪、獅子座に登つて、野狐涎を流す。慙汗。」

謝語、「養源和尙、甘棠の故芴、苦海の慈航、願はくは法要を聽かん。度生に倦むこと莫れ。」

大心和尙、岐陽の雪に哦す、是れ十三生の㋭蘇軾にあらず乎。震旦の風を化す、謂つ可し第二位の㋬顏囘なりと。之れを瞻、之れを仰ぐ。

山門東西班、滿堂三千指、適來の禪客、諸位禪師、人人百千の日月の釋

よろこと。

㋝馬蹄の土に印したる跡に、水の溜りたるもの。

㋜四明象山の人なり、運庵巖に參じて、大いに契語する所あり。

㋑孔子春秋を著して、哀公十四年春西の狩に麟を得たりと。麟は聖人、世に出づる時に出づる祥獸なり。

㋺司馬相如が封禪のことを論じて、時の帝に上りし書なり、封は壇を築きて祭るを封といひ、地を掘りて祭るを禪といふ。管子に「封二泰山一、禪二梁父一者、七十二家」とあり、即ち天神地祇に祈り、幸福を增進するなり。

㋩西周に麟を出したるやうに、日本の國にも麟が出るであらうとなり。

㋥阿闍梨の略、阿舍利、阿祇利とも書く、軌範師、正行と譯

天を繞るが如し、箇箇萬丈の波瀾の大海に歸するに似たり。吁嗟、偉なる哉、於戲、盛んなる哉。

結座、杖を拈じて一劃して云く、「㋣劃前に易有り、熱するときは則ち熱し、寒するときは則ち寒す。㋠刪後に詩無し、山は是れ山、水は是れ水、四序循環、一氣養つて始む。茲れに係つて、梅花先づ漏泄して、達磨の眼睛を換卻す。桃李終に言はず、臨濟の骨髓を敲き出す。格外の玄談、㋷當陽の直指、何ぞ用ひん、周曆を開いて元正を賀し、魯臺に登つて雲氣を書することを。若し衲僧家に約せば、甚の弊皮履にか當らん。正與麼の時、喚んで拄杖子と作さんが便ち是か、喚んで拄杖子と作さゞらんが便ち是か、不是不是。」卓一下して「吾が道は一以て之れを貫く。曾子曰く、唯と。」

歲旦上堂、祝香して「大日本國山城州平安城西京　正法山妙心禪寺云云。　陛下、恭しく願はくは、虎拜稽首して、屠蘇白散、齡萬年を祝す。鵠立侍臣、禮葉樂花、德三代に邁えましまさんことを。」

垂語、「一枝の笛を把つて、萬年の歡を奏す、這裡還つて知音の者あり麼。陽春白雪和すること皆難し。」僧有り、出でゝ問うて云く、「太平象有り、三臺の鶴花間に舞ふ、容算窮

す。弟子の行爲を矯正する德僧の敬稱なり。

㋭蘇東坡居士なり、東林常總禪師に就いて心要を得、宋中世の文學者なり。

㋬孔子十哲の中、世實に亞聖と稱す、性行併せて孔子家語にあり。

㋣易は伏羲初めて卦畫を作るに初まる、然れども易なるの理は其の畫前に矢張り照として存在するなりと。

㋠孔子古詩三千餘篇を刪りて三百篇となす、今の詩經之れなり、刪後は孔子の刪りたる後のことなり。

㋷分明の義、左傳に「文公四年天子陽に當つて諸侯命を用ふ」とあり、之れによる。

㋦妙心寺をいふ。

無し、千歳の龜葉上に游ぶ。時其れ至れり矣、德惟れ大なる哉。賴に夏正に値ふ、願はくは周燠に沐せん。」師云く、「紅日扶桑を照す。」僧云く、「記得す、世尊花を擧す、迦葉一咲す、意花に在るか花に在らざるか。」師云く、「兩箇落草の漢。」進んで云く、「百萬一咲を買ふ、風流當家に屬す。」師云く、「誰が家か春ならざらん、祖師妙訣有り。」進んで云く、「昔正法眼を將つて、迦葉一人に付す、謂つべし靈山及第と。」師云く、「衆角多しと雖も、一麟足れり矣。」進んで云く、「今日(ヌ)花園、一枝の烏鉢を開く、誰か是れ微笑の人。」師云く、「脚下を看よ。」進んで云く、「與麼ならば則ち靈山の一會、儼然として未だ散せず。」師云く、「證明を謝す。」進んで云く、「(ル)如來禪は且く措く、如何が是れ祖師禪。」師云く、「親しきものは問はず、問ふものは親しからず。」進んで云く、「也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり。」師云く、「雪も亦梅に一段の香を輸す。」進んで云く、「宗門の遷固、謹んで答話を謝す。」師云く、「(ヲ)鶴九皐に鳴いて、其の聲天に聞ゆ。」

提綱、「妙と說き玄と談ず、太平の奸賊、拈鎚竪拂、亂世の英雄、臨濟の金剛王、天に倚り雪を照す。(ワ)德山の木上座、雨を罵り風を打す。禪河敎海を(カ)掀翻し、虎穴魔宮を(ヨ)踢倒す。爾りしより來、劍を說くものは、(タ)迂莊の(レ)圈繢に墮し、射を學ぶものは(ソ)后羿が彀中に遊ぶ。限り無き衲僧跳不出、猶ほ梅花有りて路未だ通せず。是の故に(ツ)熊峯面壁九年、胡僧眼

(ル)祖師禪に對して云ふ。圭峰宗密禪師の所判なる五種禪中の最上なるもの、最上乘禪、又は如來清淨禪ともいふ。傳燈錄仰山の章に「汝只だ如來禪を得て未だ祖師禪を得ず」と。即ち後世宗密禪師の如來禪は達磨所傳の禪を把持するものに非ずとなす、之れ祖師禪の語を生ずるに至れり。

(ヲ)詩經小雅鶴鳴に見ゆ、九皐は

喝す。㋧馬師威を振つて一喝し、㋤海兄耳聾す。桶底脫する時、事々無礙、機輪轉ずる處、法々圓融。水を水に投ずるが如く、空の空に合するに似たり。正與麼の時、南山北嶺、雲起り雨下る、千門萬戶、柳綠花紅なり。祖意明々歷々、佳氣鬱鬱㋶葱々たり。泥人宗旨を擧揚し、石女聖躬を仰贊す。畢竟何を以てか驗と爲さん。布衣の㋰稷契詩書の澤、治世の㋒巢由㋼畎畝の忠。」（忠を一に身に作る。）

自序、「宗休、尺寸の祿に奔つて、蟻の㋨羶に附くが如し、一少伎に誇つて、虎の乙を狹むに似たり。慙汗慙汗。」

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、單寮蒙堂、前資辨事、滿堂一會の海衆、適來問話の禪客、諸位禪師、東に㋔馬鳴あり、西に㋗龍猛あり、南に㋳提婆あり、北に童壽あり、號して四日となす。能く衆生の惑情を照す、邪見の山を摧き、正法の炬を然す。顧みるに、此の山吾が佛日の下、亦四日あり。曰く、龍泉、曰く、東海、曰く、靈雲、曰く、聖澤。赫々然として天地を照し、昭昭乎として古今に輝く。嗚呼、盛なる哉。」

九澤などに同じ、深山幽谷などの意にて、賢者の隱るゝと雖も、人咸これを知るにたとふ。

㋻青原下四世、龍潭崇信の法嗣。

㋕もたげひつくりかへすこと。

㋵蹴たふすなり。

㋟莊子に劍を學ぶのことあり。

㋹埒内にとか、境内などといふに同じ。

㋞孟子に、「逢蒙射を羿に學ぶ、後羿の己より勝るを以て之れを殺す」とあり。

㋡熊峰は達磨を葬りし處、故に又達磨の別稱とす。

㋧馬祖道一禪師、南岳懷讓禪師の法嗣なり。

㋤百丈懷海禪師、馬祖道一禪師の法嗣なり。

㋶怱々に同じ、のびやかなり。

㋰稷は右稷。書經舜典に、「棄、黎民飢に阻む、汝后稷時の百

拈提、「記得す、古德曰く、『佛法年年舊に依り、胡餅日日新鮮』と。古德恁麼の示衆、無義味の話、口皮邊の禪を説く、風流愛すべし、公案未だ圓かならず。超佛越祖の談は且く置く、賀正の一句、如何が敷宣せん。昨夜春風吹いて門に入る、初機の桃李新年を賀す。衲僧の活計多子無し、閒に松聲を聽いて被底に眠る。」

歳旦上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城 西京 正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、太伯の孫倭國を領し、日、若英に昇る。小月、走、汴河に都す、家、㋮葵藿を種う。」

垂語、拂を竪てて云く、「正月の㋘木犀樹、亂世の優鉢花、若し㋫仙陀の客有らば、我が馬に秣ひ、我が車に膏させ。參。」僧有り、衆を出でて坐具を擧して云く、「驪龍五色の珠を托出して、靈光照徹す盡閻浮、請ふ師春風の力を借らず、向上の鉗鎚下し得んや無や。」師曰く、「老いて筋力を將つて能と爲さず。」進んで云く、「四塞狼烟斷え、九天鳳瑞新なり。」師曰く、「時なる哉、時なる哉。」僧云く、「記得す、僧趙州に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子。』是れ什麼の陳葛藤ぞ。」師曰く、「一回拈

穀を蒔け」とあり、農事を主る官なり、契は書經に「契汝、司徒と作れ」とあり。

㋒許由、巢父なり、許由は箕山の隱士なり、堯之れに天下を讓らんとせしに、許由聞きて、耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひたりと、巢父は同じ頃の隱士なり、許由の耳を洗ひし水を汚れたりとて渡ることをもせざりしと云ふ。

㋖畎畝は農夫などの微賤なる位置にいふ。

㋷「なまぐさもの」なり。

㋔阿那菩提、如來嫡傳第十二祖なり、梵音「アシュヷグホーサ」の轉化なり。第十一祖富那夜奢尊者に依つて、心要を得、西印度の人、大乘起信論は實に尊者の造出なりと傳ふ、周の顯王四十二年甲午歳寂す。

㋗梵令那伽閦剌樹那、又龍勝と

出すれば一回新なり。」進んで云く、「此の山近ごろ柏樹を法堂前に移す、是れ乃祖の惡芽㋙孽にあらずや。」師曰く、「移して宮墻に入れば別に是れ春。」進んで云く、「趙州道ふ底は且く置く、靈雲の桃花、紅を著くるや也た未だしや。」師曰く、「柏樹子の成佛せんことを待ちて、汝に向つて道はん。」進んで云く、「猶ほ梅花のみ有りて路未だ通ぜず。」師曰く、「只だ雪の消するを待て。」僧云く、「參寥㋓覺範合して一人と爲る。」師曰く、「吾が侍者に斷づること莫れ。」

提綱、「天何をか言ふ乎、四時行はる、地何をか言ふ乎、百物生ず。鶯は南、燕は北、柳は暗く花は明かなり。玄玄玄、㋢林際の骨髓を分張し、咄咄咄、㋐楊岐の眼睛を換卻す。重きことは則ち㋚九鼎の重きより重く、輕きことは則ち一毫の輕きより輕し。也太奇、也太差。青山白雲開遮自在、不可量、不可說、淸風明月與奪縱橫。然も恁麼なりと雖も、賀正の那一句、如何が施呈し去らん。東夷降り西戎伏す、野老農夫太平を樂しむ。」

自序、「宗休、暗桃李の俗又來る、前度の劉郎、黃楊木の禪、好し去れ、閏位の王莽。」

もいふ、佛滅七百年の頃、南天竺に生る。

㋳南天竺の人、姓は毘舍羅、長者の子にして、龍樹菩薩の上足、三論宗義を確立せり。

㋮葵藿。ひまはり草なり、花の日輪に傾き向ふより、借りて君主、又は長上の德を仰ぎ慕ふ心をいふに用ひらる。

㋘香の高き花を開く。

㋫智慧群拔の者にたとふ、即ち此の語は王索仙陀婆の略、一に水、二に鹽、三に器、四に馬の四義を含む、譯語定かならず。

㋙ひこばえなり。木の切り株より生ずる芽なり。

㋓覺範慧洪禪師、泐潭の寶峰克文に侍して修行し、張無盡居士の歸依を受く。

㋢林際は臨濟に同じ。

㋐慈明楚圓の法嗣、楊岐方會禪師なり。

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西の班、丈室左右の侍、滿堂一會の龍象衆、適來問話の禪客、諸位禪師、叢林の禮樂一新、鳳、花を啣み、雞、曉を報す。華藻の文章三昧、犀、月を翫び、象、雷に驚く。嗚呼盛なる哉、各道體、起居萬福。」

拈提、「記得す、松源師祖香山に住する日、歲旦上堂に曰く、『歲去る實に去らず、歲來る實に來らず。山僧都べて會せず、露柱笑哈哈たり』と。山僧も亦偈を作つて擊節し去らん、春風露柱笑怡怡、咄。箇の㋖岳翁聾梅に似たり、木上座新長老と呼ぶ、山門八字に南に向つて開く。」

㋒除夜小參垂語、「臘月の扇子、除夜納涼、若し寒毛卓竪する底の漢有らば、此の一杯の杏薑湯を盡せ。參。」僧有り、衆を出でて云く、「春舊年に入る、德山小參答話せず、月衆水に印す、斷際の全機後蹤を繼ぐ。幸に法筵に臨む、願はくは家教を聞かん。」師云く、「今日早く暮れぬ矣。」僧云く、「記得す、㋱息耕老師、歲夜小參、僧問ふ『門前の爆竹消息を通す、何ぞ必すしも重ねて新に話頭を擧せん。』師云く、『腦を刺して膠盆に入る』と、端的なりや無や。」師云く、「冷灰豆爆。」進んで云く、「燈籠合掌すれば露柱點頭す。」師云く、「諾諾。」進んで云く、「法山今夜小參、息耕の閫績に墮せず。天は梅邊に到つて別春有り歷。」師云く、「有り。」進んで云く、「來年更に㋯新條の在る有り、伏して惟れば珍重。」師云く、

㋚夏の禹王九州より金を貢せしめて、鑄造せし鼎にして、夏殷周三代相傳へて寶とす。
㋖松源崇岳禪師なり。
㋒臘月卅日の夜をいふ、舊をおくり新を迎ふるの夜をいふ。
㋱虛堂智愚禪師なり。
㋯新枝なり。

「謂ふこと莫れ、今年學ばずして來年有りと。」僧禮拜す。

提綱、「臘雪天に連る、露地の牛を烹て消得恁麼、春風戸に逼る、村田樂を唱へて闍梨を熱殺す。闍梨即ち雲水、雲水即ち闍梨、北禪の家教を學び、㊁百丈の叢規を董す。只だ是れ尋常の茶飯、衲僧底未だ奇と爲さず、舌雷霆を走らしむ。臨濟の金剛喝、神號び鬼哭す、氣、佛祖を呑む。松源の黑豆法、斗轉じ星移る、冷冰冰地に生涯を喪盡す。去年の貧は錐有つて地無し、今年の貧は地も無く錐も無し。法山今宵分歲、何を以てか大衆の與にし來らん。龍肝鳳髓、暫く別時を待て。」杖を卓すること一下して、「嫌ふ莫れ冷淡にして滋味無きことを、一飽能く萬劫の飢を消す。」

自序、「宗休、㊂擊柝抱關、三更五更、自ら㊃黃巾の賊を禦ぐ。打齋持鉢、一箇半箇、誰か紫衣の僧を愛せん。舊に依つて可憐生、元來㊄沒巴鼻。慚愧慚愧。」

謝語、小參の次で、「共しく惟れば、山門の兩序、東顧、一夜雨滂澎、蒲萄の棚を打倒す。知事行者人力を普請して、拄ふる底は拄へ、樗ふる底は樗ふ。樗へ樗へ拄へ拄へて天明に到る。子細に看來れば、吾が山の都寺禪師、雪の商量を打して、日日㊅廬陵の米價を論ず。花の因果を了じて、夜夜石窓の㊆燈檠を分つ。」

㊁百丈禪師の述、百丈清規をいふ。

㊂擊柝は木を鳴して夜を警しむる者、抱關は關所、或は甲門等を護る人をいふ。

㊃後漢の靈帝の時、鉅鹿に張角といふものあり、妖術を以て教授し、太平道と號す、人民を四方に遣はして、人民を誑誘すること十余年、皆黃巾を着け、所在燔劫す、之れ故に

悅衆禪師、宗因喩を擧して、陳那の因明を論説す。序正流を分つて、華姪の提唱を剖判す。（悅衆を一に悅宗に作る。）

西巖、鳳林堂中座元禪師、雲門の樂を洞庭に張る、丹霄鳳舞ふ、瑞應花を濁世に現ず、㋑緇林鸞の如くに臻る。

後版禪師、小釋迦夢を說く、木枕を率陁宮中に推す。大禪佛出頭、藤杖を集雲峯下に靠く。

記室禪師、僧中の㋺謫仙、酒杯に翰林の月を酌む。林下の㋩懶衲、袈裟に煨芋の煙を裹む。

知藏禪師、佛日を揭示して、千年の象教春を囘す。儒風を振起して、四庫の目錄古を稽ふ。

更に惟れば、滿堂三千指、丈室左右の侍、問話の禪客、諸位禪師、一毛頭の獅子、百億毛頭に現ず。百億毛頭の獅子、一毛頭に現ず。若し褒贊を罄さば、恐らくは威光を滅せん。各乞ふ昭亮せよ。

拈提、「記得す、古德歲夜小參、因に僧問ふ、『一切の生死、何を以てか舟航と爲さん。』德云く、『年盡きて錢を燒かず。』㋥那の僧の問端、氷を敲いて

之れを黃巾の賊といふ。

㋲巴鼻は牛の鼻、孔を穿貫せる把り繩、把へ所の意。故に把へ所なしと云ふ意なり。

㋝支那の縣名、歐陽修、文天祥等の生地なり。

㋜燈などのせる棚、又は臺をいふ。

㋑僧家の汎稱である、鸞は鹿の類にて常に群をなすと。

㋺李太白、青蓮と號す、少くして逸才あり、志氣豪放、飄然として超世の志あり、天寶の初め長安に至り、賀知章を見る、知章歎じて曰く「子は謫仙人なり」と、唐玄宗皇帝の朝翰林に供奉せしむ。

㋩懶瓚和尙、衡山石室の中に隱居す、唐の德宗其の名を聞き、使を遣はして之れを召す、使者其の室に到りて宣言す「天子詔あり尊者當に立つて恩を謝すべし」と、瓚、方

火を求む、古德の答處、門、桃符を釘つて曾て[illegible]せざるに似たり。若し人有りて、如上の問を休上座に致さば、他に祇對して道はん、燒葉爐中に宿火無し、讀書窓中殘燈有りと。」

元宵上堂、祝聖、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。燈節令辰、虔んで寶香を爇し云云。今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭しく願はくは、惟れ天聰明、惟れ聖時憲あり。惟れ臣欽若、惟れ民風從ふ。」

垂語、「少室の一燈、龜を證して鼈と作す、試みに天外に出頭して看よ。珊瑚枝枝月を撐着す、有り麼。」

提綱、「十五日以前、金烏急に玉兎速かなり、十五日以後、泥牛吼え木馬嘶く。禪閏年に厄す、宣州の杲風子。(ホ)黄楊木に參得す、機閃電を運す。(ヘ)首山の念法華、喚んで粗竹篦と作す。胡打亂打、(ト)全提半提、張三飽まで酒を喫すれば、李四醉つて泥の如し。口吧々地、東を問へば西を答ふ。」杖を拈じて、「來也來也、杖たり兮杖たり兮、向上宗乘の事、未だ夢にだも見ざること在り。(チ)遠法師甚に因つてか虎溪を過ぎざる。呵呵呵。天は

に牛糞の火を撥いて煨芋を尋ねて食す、寒涕頤に垂る、未だ嘗て答へず、使者笑つて曰く「且く尊者にすゝむ、涕を拭へ」」。瓚曰く「我れ豈に工夫して俗人の爲に涕を拭ふことあらんや」といひて、竟に起たず、使者歸つて奏す、德宗甚だ之れを欽歎すと。

(ニ)那は彼などに同じ。

(ホ)黄楊木はつげの木なり、其の性長じ難し、年毎に長さ一寸を增す、閏にあへば即ち退くと、悟所に坐着して撥轉の手脚なきにたとふ。

(ヘ)首山省念禪師、風穴延沼の法嗣。竹篦を拈じて衆に示すの語に曰く「汝等若し喚んで竹篦と作さば即ち觸る、喚んで竹篦となさゞれば、即ち背く、諸人宜しく喚んで甚麼とかなさん」と。

(ト)全提は公案の全部を提示する

白雲と共に曉く、五更の鷄を待つこと莫れ。」

自序、「宗休、(リ)脩吭矮身、(ヌ)方朔を滑稽傳に載す。(ル)巧脣薄舌、(ヲ)子雲を太玄經に嘲る。慙愧慙愧。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、耆宿、單寮蒙堂、前資辨事、一會の海衆、諸位禪師、(ワ)多寶塔中の二如來、迹を開き本を顯す。楞嚴會上の四菩薩、尊を屈して卑に就く。感戴に堪へず、各乞ふ允容せよ。」

拈提、「記得す、臨濟松を栽うる次で、黃檗問うて曰く、『深山裡に松を栽うること許多して甚麼かせん。』濟曰く、『一には山門の爲に境致と作し、二には後人の爲に標榜と作さん』と。黃檗の問端、花を移しては蝶の到るを兼ぬ、臨濟の

もの、半提は之れに對し其の一部を提示するものを云ふ。

(チ)晉の惠遠法師、廬阜にありて世間に出づることなし、平生客を送りても虎溪を過ぐるをなし、若し虎溪を過ぐることあれば虎悲鳴せりといふ、時に陶淵明、陸靜修の二人、皆有道の士なり、或時惠遠を問ふ、その歸る時、法師之れを送りしに、三人の談論甚だ愉快なりしかば、覺えず虎溪を過ぎ、暫くして之れをさとり、相見て大いに笑ひしといふ、故に後人、虎溪三笑の圖を作る。

(リ)長頸小身の意なり。

(ヌ)方朔は東方朔なり、事文類集に曰く「伏日に詔して從官に肉を賜ふ、太官日晏くして來らず、東方朔獨り劍を拔きて肉を割く、同官に謂ひて曰く、伏日は當に蚤く歸るべし、請ふ、賜を受けんと。卽ち肉を懷にして去る、太官之れを奏す、朔入る、上之れを問ふ。朔、冠を免じ、謝して曰く、朔來りて賜を受くるに、詔を待たざるは何ぞ無禮なるや、劍を拔き肉を割くは、一に何ぞ壯なるや、之れを割く、多からざるは何ぞ廉なるや、歸りて細君に送る、何ぞ仁なるやと。上笑ひて曰く、先生をして自ら責めしめ、乃ち反りて自ら譽めしむと。又酒と肉とを給ふ」と。

(ル)巧脣薄舌は能辯をいふ。

(ヲ)子雲は楊雄の字、嘗て太玄經を作る、人の嘲るを聞き、之れが嘲解を作る。

(ワ)多寶如來の舍利塔なり。釋迦如來、靈鷲山に於て法華經を說き給ふ時、その半にして塔地下より出づ、空中に住る、塔中聲あり、釋尊の說法を證

答處、㋕石を買ふては雲を得ること饒し。人有り若し如上の問を致さば、只だ他に對して道はん、能く萬象の主と爲つて、四時を逐ふて凋まずと。」

結夏上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、飛龍天に在り、肅宗帝、位に靈武に卽く。㋵客星座を犯す、嚴先生詔に炎劉に應ず。一絲九鼎、萬春千秋。」

垂語、「禁網を劈破して、三期を守らず、敎外の旨を聞かんと要す麼。杜鵑啼いて落花の枝に在り、有り麼。」僧有り、衆を出でて云く、「兩箇の黃鸝、垂柳に啼く、㋟臨濟の賓主歷然たり。一雙の胡蝶葵花に上る、達磨の兄弟來る也。祖師禪は且く之れを置く、願はくは祝聖の一句を聽かん。」師云く、「王寶殿に上れば、野老謳歌す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「律呂調陽。」僧云く、「趙州古佛、僧に示して曰く、『鉢盂を洗ひ去れ。』其の僧便ち悟る、此の意如何。」師云く、「水を掬すれば月手に在り、花を弄ずれば香衣に滿つ。」進んで云く、「學人未だ悟らず、請ふ師慈悲。」師云く、「三十棒。」進んで云く、「㋹荊山に到らずんば、爭か璞を得て歸らん。」師云く、「侍者禪に參得し了れり。」

成し讚嘆せりと。

㋕五岳の雲、石に連りて起る時は、石は雲の根也と、賈島の詩に、「橋を過ぎて野色を分ち、石を移して雲根を動かす」と。

㋵處士嚴光、字は子陵、漢の光武の故人なり、齊國にあり、羊裘を著て澤中に釣る、徵し至る、亦屈せず、帝、光と同じく臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明日太史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急なりと。帝曰く、朕故人嚴子陵と同じく臥するのみと。

㋟臨濟爲人の施設、四料簡と共に接化の方便として用ひらる、賓中の賓、賓中の主、主中の賓、主中の主これなり。

㋹楚人卞和、玉璞を荊山に得、奉じて之れを厲王に獻す、厲王玉人に之れを相せしむ、玉人曰く、石なりと、故に王、

提綱、「十五日以前、翠巖の眉毛、一莖兩莖落つ。十五日以後、黃檗の拄杖、七尺八尺餘る。護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居。是の故に能仁、九旬を剋期す、蜂房を獅子窟と作す。濡首、三處に度夏す、龍光、斗牛の墟を射る。龍蛇凡聖、泥玉車書、崑崙の核子、機に隨つて吞吐し、虛空の布衫、手に信せて卷舒す。」杖を拈じて、「黑面翁側に在り、出で來つて軒渠して云く、『西天の勝人冰、株を守つて兎を待つ。東土の鐵彈子、木に緣つて魚を求む。』啻に佛性を瞞頂するのみならず、況んや復た眞如を㋞儱侗するをや。然も恁麼なりと雖も、這裡何を以てか親疎を分たん。」卓一下して、「陶潛㋡東林の社に入るに懶し、在在の青山廬を結ぶ可し。」

自序、「宗休、這の雛道人、贋長老と稱す。㋧北岳の移文に愧づること有り、恐らくは東坡が詩案に坐せられん。汗顏泚顙。」

謝語、上堂の次で、「共しく惟れば、養源東堂大和尚、古道の顏色、宗門の爪牙、克家の的流、禪源を末派に分つ。無邊の眞照、佛日を中天に揭ぐ。㋤泰瞻斗仰に任へず、誰か㋶涇濁渭清を辨ぜん。」

和の左足を刖ろ、武王位に卽く、又之れを獻す、同じく又右足を刖ろ、和乃ち荊山の下に璞を抱いて哭すること三日、涙盡き、之れに繼ぐに血を以てす、王之れを聞き、其の故を問はしむ、寶を以て告ぐ、王乃ち玉人に璞を理めしめしに、果して玉を得たり、彼の連城の玉之れなり。

㋞未だ器を成さゞる形。

㋡東林の社は明神宗の頃、顧憲成なるもの、清流の徒を集めて一大民黨を作り、黨勢大いに盛なりしが、宦者事を爲すに至り、遂に亂れて明滅ぶ。

㋧南北朝の時、齊の周顒、字は彥倫、鍾山に隱れ、後詔に應じて出でて海鹽縣の令と爲り、却りて此の山を過ぎんとす。會稽山陰の人、孔稚珪、鍾山の草堂を過ぎ、之れを鄙みて北山の移文を作る、顒を

次に惟れば、大心東堂大和尚、氣、諸方を呑み、脚、實地を踏む。千萬世の林際、後人標有り。七八生の雲門、知識種無し。吾れ間然すること莫し。自愛珍重。

又惟れば、山門の兩序、滿堂の四衆、諸位禪師、兩序鵠立雁行、四衆象旋獅擲、甚だ希有、甚だ希有。摩利山に登れば、片片皆栴檀。也太奇、也太奇。金剛窟に入れば、寸寸是れ藥草、集めて而して大成す。豈に小補と曰はん、各乞ふ道照せよ。

拈提、「記得す、偃溪の聞禪師、結夏上堂に曰く、『十字街頭、大圓覺海、色を逐ひ聲に隨ふ。家風落賴、甚の西天の様子をか討ねん。東倒西擂に一任す』と。偃溪の提唱、古今に絶唱す、言端語端、尋常未だ臭氣を免れず。頭正しく尾正し。只だ是れ知音に逢はず、我が窓前の月に和して、君が石上の琴を彈ず。」拂一拂して、「唵齒臨唵部臨。」下座す。

冬節上堂、祝聖して、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、道有つて(ム)四夷守り、征無くして萬邦安からんことを。」

垂語、「冬日線を添ふ、一釣竿と作す、有り麼。向上の事を知らんと要せば、子陵灘を話すること莫

して再び此の草堂を過ぎるを得ざらしむ、北山は卽ち鍾山なり。

(ナ)泰山を看、北斗星を仰ぐ意にして、唯だ瞻仰などに同じ。

(ラ)涇水は濁り、渭水は淸む、合流三百里、淸濁混ぜず、借りて以て物事の區別明かに定まるに喩ふ。蘇軾の句に「胸中涇渭分る」とあり。

(ム)左傳昭公二十三年に「古は天子守り四夷に在り、德遠くに及び、四夷代つて之れが守りを爲す所以なり。」

れ。」僧有り、衆を出でて云く、「眞照無邊、漢女宮中一線日長し。太平象有り、魯侯臺上五色雲興る。宗風を振起し、叡算を祝延したまへ。」師云く、「早朝不審、晩後珍重。」進んで云く、「枯木花を開き、虛空迸裂す。」師云く、「果然。」僧云く、「記得す、松源冬至上堂に曰く、『㋒晷運推し移り、日南長至』と、是れ恁麼の祥瑞ぞ。」師云く、「日日是れ好日。」進んで云く、「陰陽に渉らざる底の一句、得て聽く可し麼。」師、拂を以て禪牀を撃つて、「聞く麼。」進んで云く、「和尙道ふ底と松源道ふ底と、還つて親疎有り麼。」師云く、「親しき者は問はず、問ふものは親しからず。」進んで云く、「南山に鼓を打てば北山に舞ふ。」師云く、「迦葉門前風凜凜たり。」進んで云く、「諸佛の知慧、解し難く入り難し。謹んで答話を謝す。」師云く、「少年の僧に㋼孤負す。」

提綱、「㋨元亨利貞、一氣に始まり、常樂我淨、一心に本づく。一心卽一氣、一氣卽一心。是の故に暖律輕輕として灰を飛すときは、則ち雲物洶湧す。凍雨霏霏として雪と作るときは、則ち山嶽平沈す。小人道消して玄造を斡囘す、君子道長じて群陰を剝盡す。淨躶躶露堂堂、東西自在を得たり。明歷歷白的的、㋔南北商參を分つ。石女空中に手を拍し、木人石上に琴を彈ず。㋗雲韶夷韎を掩ふが如き、只だ是れ知音に逢はず。牀角の拄杖子、聞き得て忍俊不禁、長河を攪して酥酪と成し、大地を變じて黃金と作す。

㋒日影の推し移ること。
㋼そむくことなり。
㋨易に「乾は元亨利貞」とある、傳に「元亨利貞は之れを四德といふ、元は萬物の始め、亨は萬物の長、利は萬物の遂、貞は萬物の成なり、惟だ乾坤にこの四德あり、之れを春夏秋冬に配す。」
㋔商及び參に各二十八宿の一星なり、其の分位南北にあり。
㋗雲韶は虞舜の樂、夷韎は四夷の樂なり。

㋳慈明の臭老婆を罵つて、傍提横案。臨濟の㋮白拈賊に逼つて、活捉生擒。㋨叵耐なり蒙莊座主、劍を說いて周宋の㋫鐔に誇る。然も此の如くなりと雖も、一陽未だ萠さざる底の時節、諸人何の處に向つてか參尋せん。」卓一下して、「暗に玉線を穿ち、密に金針を度す。」

自序、「宗休、全俗全眞、青油幕下に坐して、謝宣の面を作す。至愚至陋、明鏡臺前に臨んで、演若が頭に迷ふ。憐察せよ。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の萬衲、問話の禪客、諸位禪師、百萬の衆を舍衛に領じて、步步獅擲象旋。七十子を㋙孔門に列ねて、箇々龍蟠鳳逸。蓋し大厦を支ふる者は一木に非ず、況んや六瑞を感じて而して四花を散ずるをや。嗚乎、盛なる哉。」

拈提、「記得す、古德冬節上堂に曰く『物有り天地に先つ、之れを仰げば彌高し。形無うして本寂寥、之れを鑽れば彌堅し。能く萬象の主と成りて、之れを瞻るに、前に在るかとすれば、四時を逐ふて凋まず、忽焉として後に在り』と。古德の拈語、佛に入る可し、魔に入るべからず。山僧也た一一他に代り去らん。物有り天地に先つ、紫金光聚、河沙を照す。形

㋳慈明楚圓禪師なり。

㋮白晝に盗賊を働くものをいふ。聯燈錄に「雪峰曰く、臨濟大いに白拈賊に似たり、雪竇曰く、夫れ善く竊むものは鬼神も不知」と。

㋨叵耐は心に煩悶すること、忍ぶべからざること。

㋫鐔は劍の「つば、」又は小劍をいふ。

㋙孔子の門下傑出せるもの七十、其の中又十哲を拔く。

㋓釋尊在世の時の居士なり、維摩詰、維摩羅詰、淨名、又は無垢と稱す、毘舍利城の長者なり。

㋢支那山西省代州五臺縣、今の西安府の東北一千六百華里の地にある五臺山をいふ、一に清涼山ともいふ。華嚴經菩薩住所品の「東北方菩薩住所あり、清涼山と名づく、過去菩薩あり、常に中に住す、彼に

無うして本寂寥、天上人間意氣多し。能く萬象の主と成りて、曾て文殊に敕して徒衆を領じて、四時を逐ふて凋まず、毘耶城裡に㋓維摩を問はしむ。」

歳旦衆に示して云く、「古に道く、『元正啓祚、萬物咸新なり』と、元正啓祚の時、諸人如何が一轉語を下さん。山僧一偈有り、大衆に供養し去らん。千仭書を銜んで玉鳳翔る、元正啓祚吾が皇を祝す。春風吹き起す關山の笛、鼓を打つて梅花上堂と叫ぶ。」

歳旦上堂、「珍重す同行の木上座、今朝例に隨つて商量を打す。新年の佛法多子無し、三尺の龜毛箇の長きを添ふ。」

噉典座夏齋を謝する上堂、「吾が肥典座、鍋兒と叫ぶ、㋢五臺の雲を蒸して飯と作す時、大地都盧無底の鉢、㋐黄梅七百の僧を盛り來る。」

現に菩薩あり、文殊師利と名づく、一萬菩薩ありて常に説法す」と。無著文喜、五臺山にありて典座となる、文殊粥鍋上に現ず、無著遂に之れを打して「直饒ひ釋迦老子來るも、我れ又打せん」といへる話柄、禪林に膾炙す。

㋐達磨嫡傳第五祖大滿弘忍禪師、支那蘄州黄梅の人なり、會衆常に七百、六祖慧能之れに法を嗣ぐ。

㋑駿州大龍山臨濟禪寺語錄

侍者　某　編

山門、指して云く、「㋺長沙の七歩を超え、臨濟の三關を透る。更に那一關の在る有り、富士の雪、鐵壁銀山。」喝一喝す。

佛殿、「殿裡底何物ぞ、飛花晩風に舞ふ。看よ看よ、天は開く二十五の圓通。」禮拜す。

土地、「張大帝鬼神の爺、四百年漢家を護す。詩を以て汝に贈る、㋩思邪無し、思邪無し。」

祖師、「三蘆東に渡る、餘波未だ收まらず、今日捉敗了也、袁達李磨賊頭。」

㋥據室、「維摩の室、月を以て明と爲す、山僧が室、雪を以て明と爲す。別別」と。打つて云く、「三尺の竹篦子、毘耶城を打破す。」

㋭府帖、帖を拈じて云く、「塞外は將軍の令、舊邦其の命新なり。補袞調

㋑靜岡縣安倍郡安東村にあり、享祿四年駿河の太守今川氏輝の開基にして義元の建立に係る、開山は圓滿本光國師、艸創開山を寶珠護國といふ、後奈良天皇の勅願所にして、伽藍の修繕等、皆勅命により國司の行ひし處、舊寺格は中本寺、境致幽邃、伽藍宏莊、大書院の一室は德川家康、嘗て今川氏に人質たりし時、居住せし處なりと。

㋺長沙景岑禪師、南泉普願の法嗣、僧をして會和尚に問はしめて曰く、未だ南泉に見えざる時如何、會、良久す、僧曰

羮の手、正法輪を撥轉す。」

㊁山門疏、「㊂𢇍々として文章波瀾濶し、陸海を呑み潘江を吸ふ。花簇々錦簇々、異代同名の夢窻。」

拈衣、「㊃黃梅夜半盧公に傳ふ、一絲九鼎、金輪峯下華䄍に付す。大法千鈞。」搭起して云く、「無縫の鐵崑崙、兩肩擔ひ起さず。」

登座、「奮迅三昧より起つて、活獅子、馬と作して騎る。燈王佛燈王佛、我れに一座の須彌を還せ。」

祝聖、「大日本國駿州路大龍山臨濟禪寺、新住持傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に、今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、國家萬國より安く、㊄玉燭四時を調ふ、多君苞桑の計、百世其れ本支。」（萬國を一に萬石に作る。）

檀那、「這の香、寶爐に爇向して源府君の爲に祿算を資倍し奉る。扶桑の弓を嚢にして、則ち東のかた齊の四履を盡す。青萍の劍を匣にして、則ち西のかた魏の三河を連ぬ。石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

嗣法、「這の香、寶爐に爇向して、虛堂十世、前住大德後住妙心特芳老漢

く、見えて後如何、曾曰く、別にあるべからず、僧廻つて沙に擧似す、沙曰く、百丈竿頭に坐する底の人、然かも得入すと雖も、未だ眞となさず、百尺竿頭須らく步を進むべし云々」と。

㊃論語に曰く、「子曰く、詩三百、一言以て之れを蔽へば、曰く、『思邪無し』」と、詩は詩經三百十一篇の詩をいふ。

㊁住持人のよるべき室、方丈室中の義なり。

㊄公文、卽ち知府より降す文なり、校定清規に新住持入院の註に云く、「先づ敕黃を讀み、省劄、或は府帖、山門の疏、諸山の疏、次第に宣讀すべし」とあり。

㊅住持を請する山門の疏は、勸請を叙し、諸山の疏は篤を促すを叙し、江湖の疏と、道舊の疏は賀を展ぶるを叙すと。

法乳の恩に酬い奉る。」

垂語、「聖諦第一義、早く是れ便宜に落つ、諸佛出身の處を知らんと要す麼。薫風南より來る。參。」僧有り、衆を出でて云く、「綿蕝茅を束ぬ、百丈の規矩曾て紫詔を拜す。布金草を挿む、三代の禮樂、今緇衣に在り。賴に佛法東漸の時に値ふ。願はくは㋦祖宗南頓の旨を示したまへ。」師云く、「三門舊に依つて南に向つて開く。」進んで云く、「允なる哉、㋸河、圖を出し、洛、書を出す。」師云く、「劃前に易有り、刪後に詩無し。」僧云く、「記得す、虛堂老祖、九九の數に丁りて徑山に再住す、敕有つて雪を祈る、謂つ可し奇外の奇なりと。」師云く、「寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「鷓鴣啼く處百花香し。」進んで云く、「老和尙、九九の數に應じて、敕許を賜つて初めて吾が山に住す、況んや雪の頌有るをや。僉曰ふ、老虛堂再び出世すと。」(出世を一に出現に作る。)師云く、「家醜を外に向つて揚ぐる莫れ。」進んで云く、「溪山異なりと雖も、雲月是れ同じ。」師云く、「別別、風に和して搭在す玉欄干。」進んで云く、「金春玉應、謹んで答話を謝す」といつて便ち禮拜す。師云く、「此れ

㋣森々は水の滿ちて廣き貌。
㋠大滿禪師、六祖慧能禪師に衣鉢を傳ふるを云ふ。
㋷四時調和するを玉燭といふのみ。
㋦弘忍禪師の禪、北神、南能の二派に分る、南能は頓禪なり、これ達磨の直傳なり。
㋸河圖洛書共に、周易と書經洪範九疇との根源をなす圖書にして、數理の祖なり、易の繫辭に「河、圖を出し、洛、書を出す、聖人之れに則る、天一地二天三地四天五地六云々」と。孔安國の註に「河圖は伏羲氏の天下に王たる、龍馬河より出づ、則ち其の文に則り、以て八卦を畫す、洛書は禹、水を治むる時、神龜文を負ひて背に列す、數あり、九に至る、禹遂に因りて之れを序し以て九類を成す」と。
㋾玉のかけたる如き帶環、君子

は是れ選佛場、心空及第して歸る。」

提綱、「乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、龍山に秘在す。府主の請に因つて而して開堂し、住山の鈯斧を提ぐ、天子の詔を拜して而して入寺し、下瀬の㋾玦環を鳴す。吾が祖昔徑山（一に雙徑を作る。）に住す、此の郎今百鑾を領す。東海の兒孫、八十一の黃塵烏帽、西湖の長老、五十三の白髮蒼顏、圓覺場中の列聖、象旋獅擲、通明殿上の侍臣、鵠立鵷班、黑漆の拄杖子魔佛を打し、寶劍の金剛王癡頑を斬る。」杖を拈じて、「正與麼の時、彌勒の下生を待たず、夜摩の瑠璃、兜率の瑪瑙、香嚴の本寂を印せず。㋻錢塘の鸚鵡、吳岫の鷓班。明月の珠光燦爛、流水の經響㋕潺湲。萬年の松、萬年の枝を抽く、以て規し以て祝す。炎天の梅、炎天の蘂を吐く、望み難し攀ぢ難し。潛珍、無盡藏を開き、良策、太平の寰を定む。」卓一下して云く、「㋵疎簾雪を見て捲き、深戶花に映じて闔す。」

自序、「宗休、九夷に居らんと欲す、魯叟瓟瓜食はれず、將に㋟三徑に歸らんとす。晉人松菊猶ほ存す。茲に英檀の命に逼られて、拒辭すれども允さず、强ひて猊座に陞つて㋹野干鳴を作す。慚汗慚汗。」

白槌の謝、開堂の次で、「共しく惟れば、龍泰堂頭大和尚、瑞龍、大智雲を興す、池中の物に非す。睡虎㋷

玦を尊ぶ故に之れを帶ぶ。

㋻浙江省杭州府にあり。

㋕水の靜かに流るる貌。

㋵白居易の詩に、「香爐峰の雪簾をかゝげて看る」と。

㋟歸去來辭に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す。」隱遁者または挂冠せし人の門庭を三徑といふ、又は自己の鄕關をもいふ。

㋹獅子吼に對し、修道未熟なる人の胡道亂說を貶下して言ふ語なり。

㋷五千餘卷の經文をいふ。

多羅藏を典る、教外の宗を立す。衆の歸する所、也た誰か仰がざらん乎。玆に尊を降りて卑に就き、槌を鳴して法を證することを辱うす。激切屏營の至りに堪ふる無し。下座して必ず十笏室に趨つて、一炷巾を展べん。」

總謝、「又た惟れば、四來の耆宿、一會の名緇、諸位禪師、獅子、狻を産す、無量の釋迦を（リ）賢劫に出す。雞卵、鳳を生ず、河沙の妙德を心源に接す。啻に四天下の獨尊を仰ぐのみならず、況んや復た（ホ）十地上の大士と稱するをや。各各道體、起居萬福。」

拈提、「記得す、僧、松源に問うて曰く、『只だ大師郡王、一毫端に於て彈指を勞せず、是の如きの清淨の寶刹を成就するが如きんば、昔の賢干と是れ同か是れ別か。』師云く、『動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず。』『此の僧の問端、水を掬すれば、月手に在り、松源の答處、花を弄ずれば、香衣に滿つ。休上座亦聵翁に代つて、聊か微を表し去らん。（ト）乳峯碧を聳し、錦鏡輝を流す。」

（リ）多數の賢人、世に出現する時期といふこと。

（ホ）菩薩より佛に至る迄、修行上の階級、即ち十住、十行、十回向を經て至る位にして、此の位を超えて等覺、沙覺と進むなり。

（ト）雪竇山の別名、山中に錦鏡池あり、流れて深谷に下る、雙澗並び落ち、恰も雙乳の流下するが如し、故に名くと。

尾州青龍山瑞泉禪寺語錄

侍者　某　編

山門、指して云く、「瑞泉の一滴、松源を激揚す。」左右を顧視して云く、「青龍を獨與する者、來つて箇の門に入れ。」喝一喝す。

據室、「扣玄室中、佛魔交接。」案を打つて云く、「草を打つて蛇を驚かし、花を移して蝶を兼ぬ。」

拈衣、「曹溪の㋑直裰に依俙として、靈山の金襴に彷彿たり。別別。」搭起して云く、「一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

祝聖、「大日本國尾州路丹羽縣青龍山瑞泉禪寺新持住傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に　今上皇帝　聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。　陛下恭しく願はくは、仁德春を回す、三王を四にし、㋺五伯を六にす。喜氣雪を消す、㋩白虎を右にし、青龍を左にす。彌樓山を仰いで壽山と爲し、㋥香水海を湛へて福海と作す。」

㋑直ちに嗣ぐの意なり。

㋺伯は諸侯の盟主の意にして、もと侯伯の伯と混ずるおそれあるより、覇の字を須ふ、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王を五伯といふ。

㋩西を白虎、東を青龍といふ、天の四方の星象によりて名く。

㋥須彌山の周圍をめぐる海なり。

㋭杜鵑なり。

㋬列子に、「渤海の東に五山あり、一を岱輿、二を員嶠、三

開山、香を拈じて、「梅花雪一枝を攀折して、住山薄福恩を報じ來る。端無く穿卻す崑崙の鼻、四海の香風是れより吹く。」

退院、「自ら乃翁に代つて住山と稱す、三年の光景鬢斑斑たり。一聲の㋭杜宇袈裟角、㋬蓬萊の左股を割取して還る。」

を方壺、四を瀛州、五を蓬萊といふ。」

㋑偈頌

佛涅槃　八首

鳥啼き花落つ涅槃臺、竺土の山河灰よりも冷じ、須彌千百億を割取して、瓣香喚び醒す臥如來。

西方に美有り花に背いて歸る、生死涅槃皆昨非、㋺無色界中多少の涙、洒いで細雨と爲つて春衣を濕す。

是れ正法耶邪法耶、㋩多羅八萬塵沙を撒す、番番の諸佛世に出づ、先づ梅花に始つて㋥楝花に終ふ。

㋭紫金光聚河沙を照す、識らず生耶是れ滅耶、東風に向つて斯の意を問はんと欲す、鶯に和して吹き折る一枝の花。

業風吹き起す二千年、大地山河佛骨薶し、今日一鎚に鎚碎し了る、鳥啼き花落ちて㋬又蒼天。

西に美人有り無賴の㋣查、袈裟一別天涯を隔つ、愁腸斷盡す崑崙の鐵、

㋑偈は梵音伽陀、頌は支那に於ける詩の六義の一、伽陀の譯語なり、偈頌は梵漢兼擧の名稱とす。

㋺三界の一、最上位にある天界、無所有所、非想非々想處是れなり、此の界はすべて形無く、たゞ識のみありて住す、故に無色界といふ、色界の衆生が色身の繫縛より離れて、進み入る境界なり。

㋩多羅は經卷のこと。

㋥あふち、高さ丈余、葉は槐に似て尖り、三四月頃花を開き、紅紫色なり。

㋭紫磨金ともいふ、紫の光澤ある黃金のことなり。轉じて又釋尊の御肉身をいふこともあ

猶ほ是れ春閨夢裡の花。

玄と說き妙と說く作麼生、一字の全く筆耕を借る無し、此の老元來太平の賊、果然として陷却す鐵圍城。

大小の瞿曇度生と叫ぶ、看來れば食を奪ひ又耕を驅る、簾前の細雨花に濺ぐ淚、五百(チ)由旬一化城。

佛生日　十首

他は是れ西方の一美人、銀盤浴し出して曉粧新なり、袈裟錯つて毒花に觸れられて、腸は斷ゆ(リ)毘藍園裡の春。

東海の鯉魚(ヌ)薄伽尊、(ル)韶陽の棒下雨盆を傾く、塵勞八萬洗へども何ぞ盡きん、滿架の薔薇露一痕。

竺土の山河襁褓の中、不祥の兒梵宮王に坐す、滿身の泥水狗も何ぞ喫せん、一棒は他の跛脚翁に還す。

咄哉(ヲ)丫角の黑崑崙、華堂を坐斷して獨尊と稱す、猶ほ寃讐を結ぶ二千歲、花を打つの風雨老雲門。

韶陽の棒下平なること能はず、(ワ)藥嶠の杓頭化生を弄す、別に吾が家の

ろなり。

(ヘ)あゝ悲しいかなといふ嘆聲なり。

(ト)査は槎、「いかだ」なり。

(チ)踰繕那、踰闍那、踰延那、由延ともいふ、門量、又は合應と譯す、印度に於ける距離を計算する名稱なり、一日の行程に名くるものにして、三十里或は四十里にして、六丁を一里としたるものなり、異說多し。

(リ)藍毘尼園のこと、降誕會に用ふる花御堂、花亭のことなり。

(ヌ)薄伽梵、世尊と釋す、佛の敬稱なり。

(ル)雲門禪師をいふ。

(ヲ)髮のむすび方の名、あげまき、小兒の結ふ髮なり。

(ワ)藥山惟儼禪師なり。

(カ)臘月八日、釋尊が明星を見て佛道を證得したまひし聖日な

蠱毒水を潑いで、全身陷卻す鐵圍城。

未だ母胎を出でざるに三十棒、西天東土禍殃生ず、薔薇誤つて微風に觸れられて、露は碎く水晶簾外の聲。

元是れ如來の淨法身、周行七步泥塵を曳く、藥山の杓柄長きこと多少ぞ、葉底の殘紅雨春を洗ふ。

露柱懷胎也太奇、果然として這の不祥兒を生ず、餘殃未だ了せず二千歲、洗出す薔薇の雨一枝。

韶老の棒頭天下の疼、等閑に敲き出す紫金容、若し耻を雪ぐ薔薇の雨無くんば、也た是れ闍梨飯後の鐘。

西天の老沙門、寃を報ずるに卻つて恩を以てす、花を獻じて春手に在り、水を洒いで月に痕無し。

佛成道　八首

昨夜南に向つて㋕北辰を見る、眼中八萬四千の塵、瞿曇老也た虛堂老、古今差を識る一人も無し。

棒頭に眼有り火星飛ぶ、活瞿曇に逼つて鐵圍に陷らしむ、坐して㋺驢年に到るも道を成せず、滿山の風雨急に歸り來れ。

六年嶺北雪の生涯、錯つて星兒を認む老釋迦、成道任他あれ空劫の外、工夫猶ほ未だ梅花に到らず。

我れに瞿曇の活眼睛を還せ、六年閒坐鈍遲の生、依然として未だ舊窠窟を出でず、西に㋩長庚有

り。

㋺十二支に驢なし、故にいつ迄たつても意に用ふ。

㋩よひの明星をいふ、詩經に、「東に啓明あり、西に長庚あり」と。

り東に啓明。

苦なる哉天竺の古先生、雪北六年功成らず、錯つて無量の秤子上に墮す、三千の佛國一毫輕し。

雪嶺聞く時九鼎重し、明星を見て後一毫輕し、今朝縱ひ是れ成道と叫ぶも、猶ほ㋪梅花の老師兄有り。(老師兄を一に老主兄に作る。)

天上一枚の星を貪り看て、錯つて多羅八萬の經と作す、今日重ねて此の義を宣べんと欲す、黄鶯谷を出でて又叮嚀。

六年雪北不毛の地、一卷の兵書妄談を打す、星營中に落ちて諸葛死す、臥龍奮迅す活瞿曇。

智門蓮華の話

㋷智門公案の中を透得して、荷花雨過ぎて一枝紅なり、大唐國裡人の會する無し、吹き起す香風日本の東。

蟄龍

泥蟠豈に久しく地中に屈せんや、㋦桃花三月の風を待たず、別に衲僧霹靂の手有り、拈じ來つて拄杖を虚空に靠く。

須彌の枕子

㋪永平正法眼藏示衆に曰く、「天上の天花、人間の天華、天雨曼陀羅華、摩訶曼陀羅花、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、及び十方無盡國土の華は皆雪裡梅花の屬なり。」梅華の恩澤をうけて花開するが故に、百億華は梅華の眷屬也と、梅花は卽ち佛祖廣大の心華にして、宇宙を一梅華と拈出するの提撕なり、以て知るべし。

㋷青原下七世智門光祚、香林澄遠の法嗣、僧との問話に曰く、「僧智門に問ふ、蓮花不出水の時如何。智門曰く、蓮華。僧曰く、出水の後如何。門曰

山形の枕子逍遙に任す、大仰機に當つて推せども搖がず、忽ち秋風に夢を吹き破らる、須彌百億小芭蕉。

仲秋、(ネ)破沙盆の話を頌す

七花八裂太虚空、正法元來汝が躬に在り、跨跳す(ナ)密庵の舊窠窟、秋天の明月一盆紅なり。

臨濟、半夏に黃檗山に上る　二首

風顚夏を破つて等閑に還る、驀地に踢飜す黃檗山、若し他の爲に一棒を行ぜずんば、尋常黑豆の老癡頑。

黃檗山頭に正宗を滅す、喝雷棒雨活機鋒、尋常尾を擺ひ頭を搖かし去る、濟水那邊に大龍と化す。

鐵狗

銅頭鐵額黑崑崙、紫金光聚の尊を活喫す、(ラ)趙州の皮袋裡に入らず、一聲月に吠ゆ落花の村。

雲門箚の一字

雪千峯を覆ふて天未だ晴れず、那僧の問處大遲生、箚の一字雷霆の舌、

く、荷葉」と。これ借事問なり、言名數句を離れて參究せんことを要す。

(ソ)傳說に曰ふ「禹門に三級の浪あり、三月に至る每に、桃花の浪漲る、魚よく水に逆ひ躍つて、浪を過ぐるものは卽ち龍と化し、風雷を起し其の尾を燒いて天に上る」と。

(ネ)破れすり鉢のこと。

(ナ)應庵曇華禪師の法嗣、密庵咸傑禪師なり。

(ラ)僧趙州に問ふ、狗子還つて佛性ありや、也た無や、州曰く、有り、僧曰く、已に有り、甚麼としてか這箇の皮袋に撞入す、州曰く、他の知つて故らに犯すが爲なり、又僧あり、問ふ、狗子還つて佛性ありや也た無や、州曰く、無、僧曰く、一切衆生皆佛性あり、狗子什麼としてか却つて又無なる、州曰く、伊に業識あるが

吹き散ず檐間積雨の聲。

　佛法は一隻の船の如し

慈明の一隻舟に駕起して、垂絲千尺凡流を截る、風を罵り雨を喝す浪花の底、金鱗を釣らずんば誓つて休せず。

　(ム)鰲山に雪に値ふ　二首

店上未眠の僧一枚、今朝成道六花堆し、當時若し是れ巖頭老ならば、鰲山に和却して踏倒し來らん。

(ウ)三人一隊の野狐精、何事ぞ連聲に老兄と叫ぶ、箇々看來れば白拈賊、鰲山成道假銀城。

　靈雲、桃花を見る

呵呵大笑す豁然の時、觸發す春風桃一枝、娘生本來の眼を打失す、靈雲も亦暗證の禪師。

　鐵拄杖

一條の拄杖虛空に靠く、鐵樹形成つて全く功を絕す、若し南泉をして正令を行せしめば、普賢妙德落花の風。

　須彌の筆

東海松蘇利に涵して傾く、須彌百億一毫輕し、分明なり紙上の燈王佛、跳つて西來五字の城に入る。

爲なりと。

(ム)雪峰義存禪師が師兄巖頭全豁の提撕を受けて、鰲山に在つて大悟成道せしを云ふ。

(ウ)巖頭、欽山文邃及び雪峰三人、友を結び遍く宗師を訪ふ。

成就四法

妙の一字佛も宣べ難し、元是れ蓮に非ず普賢に非ず、四法成るを待つ遲八刻、花は開く天地未分の先。

大江和尚、百丈に住するの日、祖塔を拜する偈有り、其の韻に依る

百丈山高し向上の禪、㊥眞丹國也た扶桑の邊、縱然ひ㋨野鴨飛び過ぎ去るも、只だ大江春水の前に在り。（扶桑を一に搏桑に作る。）

㊥支那及び日本をいふ。
㋨百丈野鴨子の公案をいふ。

追悼

不二和尚、西源翁を悼むの韻に次ぐ

翁吾れに負くか我れ翁に負くか、猶ほ寃苦を添へて蒼穹に哭す、他家親しく白雲の子を得たり、天外の青山父の風有り。

鄧林和尚を悼む

久しく龍潭と響く多少の風、平生四海の一禪翁、雷霆の意氣皿盆の口、紙燈を吹滅して霜葉紅なり。

玉衡座元を悼む

玉衡座元は、吾が衡梅祖翁の徒なり。(イ)大愚の祖塔を守つて而して晨香夕燈怠る無し焉。一日造化の兒に觸れて、(ロ)溘然として逝く矣、寔に享祿四年春二月(ハ)五蓂なり。吁、吾が門の不幸、焉れより大なるは莫し、訃を聞く者、嘆息せざる靡し。予も亦偈を作りて以て諸徒の一哀を助くと云ふ。

(ニ)璇璣は北に轉じ(ホ)玉衡は南、五十年前二十三、吾れ豈に知に酬ゆるに(ヘ)

(イ)宗築大愚と號す、智門祚に嗣法す、寛文年中、朝廷特號を諸相非相禪師と賜ふ。

(ロ)俄かに逝する貌。

(ハ)五蓂は五日に同じ。蓂は蓂莢にして、堯の時に生じたりといふ瑞草、月の一日より十五日までに日毎に一葉を生じ、

一瓣無からん、鼻端先づ晩梅に向つて參ぜよ。

（ト）景堂和尙を悼む

（チ）大心の衲子活機鋒、三尺の（リ）龍泉正宗を滅す、（ヌ）□舌猶ほ在り雷聲□、雨點□□□長松。

天龍寺眞乘院祝英座元を悼む

龍門十日折り殘す花、其の人を見ず感慨加はる、無色界中多少の涙、西山の雨と作つて袈裟に洒ぐ。

宗順杜陀を悼む

三十才名惜むべき哉、胸中の書傳寒灰と變ず、家山一片の好風月、春は梅窓に在り歸去來。

大藏西江軒雪窓首座を悼む

大藏五千の文字禪、西江の一滴錯つて流傳す、花に先つて吾が首座行脚せり、春雪吹き殘す牕の半邊。

謙仲讓首座を悼む

空しく記す同名（ル）南嶽の碑、閻浮五十七年移る、薰風は吾が徒の慍を解かず、吹き折る炎天の梅一

十六日より晦日迄には亦日毎に一葉づゝを落せりといふ。

（ニ）一種の玉、又北斗七星の第二位の星なり。

（ホ）星の名なり。

（ヘ）一瓣の香をいふ。

（ト）小城の人なり、初め景川隆に參じ、其の心印を傳ふ、後、妙心寺に出世し、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺の住持たり、天文十年十二月賊の爲に切られて寂す。

（チ）初め景川の跡を繼いで大心院に住す、故に爾かいふ。

（リ）銘劔の名。

（ヌ）缺字不明の處。

（ル）六祖慧能の法嗣、南岳懷讓禪師の讓りをとる、故に之れをいふのみ。

枝。

宗慶庵主を悼んで瑞應和尙の韻に和す

瑞應堂上老師、家兄宗慶庵主を追悼す、余高韻を攀して一哀を助く。識らず家兄何の日か來らん、疎鐘落日決然として離る、老松世を閲して雲壑に臥す、定んで葉公東に指す枝有らん。

韻を次いで譽禪尼を悼む

龍女の寶珠㊀一漚を認む、今古に踊騰して價何ぞ休せん、荷花紅碎く新地の雨、疑ふ是れ芭蕉秋に耐へざるかと。

某禪尼を悼む

返魂一炷鐵崑崙、報せんと欲するに元來是れ恩にあらず、大義渡頭千古の恨、落花流水江村を繞る。

天慶祐公禪尼を悼む

卒に一偈を賦して、玉何藏主に寄せて、天慶祐公禪尼を悼む。以て㋺朞年の齋筵に赴かざるの罪を償ふと云ふ。

去年今日風光に別る、斷盡す梅花鐵作の腸、小玉聲中人見えず、枕屏の殘夢醒めて猶ほ香し。

㊀一つのあわなり。
㋺朞は一めぐりして、又新たになるより、年の始めをいふ。

韻を次いで先天居士を悼む

橘家の跨竈又跳樓、昨日は慈恩今は讎と作る、劍樹刀山芭葉の雨、風流ならざる處也た風流。

光翁亘公大禪定門を悼む　細川六郎殿

遠き者は聲を呑み近き者は悲しむ、頭を回せば冬日影西に移る、牡丹一閏春は夢の如し、王老庭前㋕陸を召す時。

韻を次いで德勝居士を悼む

八十年の非今日知る、虛空消殞す身を轉ずる時、無去無來の處に藏れんと欲す、月に叫ぶ梅花孤雁の枝。

宗鼎宗斑二禪門を悼む

龍金㋵鼎に吟じ虎山に藏る、凡鱗を脫卻して一斑を露はす、父子不傳眞の消息、依然として花は帶ぶ舊紅顏。

天澤和尙十三回忌

恭しく以れば、吾が大法兄、前住龍峯天澤大和尙、㋟大梅の梅子にして、而して龍雲の鼻祖なり。外、朴直を示し、內、溫雅を懷く。㋹癯然として衣に勝へず、頗る古衲子の風有り焉。潛行密用、誰か其

㋕陸亘大夫、字は景、支那蘇州吳郡の人なり、唐の至德年中、御史大夫となる、夙に坐禪を好む、初め南泉に見えて卽ち問ふ、古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長大にして瓶を出すこと能はず、鵝を損することを得ず、和尙作麼生か出し得ん。泉、大夫と召す、陸應諾す、泉曰く、出せりと。陸大夫玆に於てか省悟する處ありと。此の因緣を語るものなり。

㋵鼎、斑は暗に名字を打するなり。虎山は虎丘山なり、圜悟克勤の法嗣虎丘紹隆禪師、此所に禪風を擧揚し、大慧と共に克勤下二甘露門と稱せら

の彷彿を窺はん。熱喝痛棒、誰か其の機鋒に觸れん。謂つ可し、百世の臨濟なりと。愚昔遊方に志し、一歩を發するの初め、老兄を妙法精舍に扣く。三到九登、霜辛を喫すること殆ど數歲なり、夙緣の感ずる所、恩讎酬いがたし矣。老兄一日、師命を受け、遂に瑞泉の法席を董す、緇素歡呼、遐邇欣伏す、祖道の光輝、焉れより盛なるは莫し。瘴雨の濡す攸、蠻烟の染む所、俄爾として微恙、溘然として化を戢む。一門の不幸、惜む可き哉。其の徒履を尾の犬山に遷め、像を攝の龍雲に圖す。爾來、(ソ)烏積み兎久しうし、指を僂するに、今茲に(ツ)永五戊辰、孟春二十有五蓂は、乃ち(ネ)十三白の辰なり。其の高弟妙法和尙、(ナ)齋筵を先廬に設け、齊しく(ラ)龍象の衆に供ず矣、至れり矣。愚も亦默止するを獲ず、叨りに村偈を唱へて、以て厥の丹悃を共にす。蓋し深心を將つて塵刹に奉ずるのみ。伏して乞ふ昭亮せよ。

元是れ吾が家の老大龜、先師に嗣いで先師に肎はず、金襴傳外人の會する無し、閒卻す春風花一枝。

(ム)景川和尙三十三回忌、松岳和尙香語の韻に依る

れたり。

(タ)馬祖の大梅法常、禪子に印可せし時、大梅に因みて梅子の熟するにきかしたる語なり。

(レ)瘠せたる形容。

(ソ)日月の重るをいふ。

(ツ)後柏原天皇の永正五年なり。

(ネ)十三年目の忌辰。

(ナ)亡靈供養の筵なり。

(ラ)耆宿に同じ。

(ム)諱は宗隆、伊勢の人、幼にして圓明寺に投じて剃見、後桃隱の鎚下にあること十三年、桃隱の寂後、龍安寺の雪江琛に依る、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興、伊勢の大樹寺等に歷住す、明應九年の春、大心院に寂す。

(ウ)北斗、牽牛星の繞る途をいふ。

(ヰ)無間地獄をいふ、五逆罪、謗法の罪を犯せるもの此所に生る。

塔を大龜と號す多少の年、雷遶り電繞る斗牛の㋒躔、胸中の五逆藏す
こと得ず、熱鐵花開く㋼阿鼻の烟。

㋨景堂和尚七回忌、韻に依る

德爵齒の尊以て加ふること蔑し、吾が禪鸚鵡拏茶と叫ぶ、岐山雪白し象
王の袴、銀色の普賢來つて花を獻ず。

普門寺某三回忌の香語

再び普門を現ず南海の涯、栴檀㋔沈水佛陀耶、拈じ來れば物物他物に非
ず、小鐵圍山太白華。

普門寺明巖座元三十三回忌

普門示現老師翁、曆數卅三汝が躬に在り、春王正月の朔を待たず、一
爐の沈水㋗木犀の風。

寶泰寺大器座元七年忌

吾が首座曾て行脚し來る、爐香未だ冷かならず七年移る、㋳崑崙の鼻孔無功德、炎天梅蘂の詩を聽
取せよ。

不孤軒德首座十三年忌

㋨諱は玄訥、山城の人なり、始め景川隆に參じ、其の心印を傳ふ、景川の寂後、大心院に住す、後勅を奉じて妙心に出世す、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺に住持たり。

㋔香木の名なり。

㋗木犀、香木なり、沈水に似たる香氣あり。

㋳崑崙の意、叢林種々混雜して用ふ、此所は莊子の混沌の意をいふ、卽ち「元氣未だ分れざるなり、耳目を穿ちて死す」とあるこれなり。

百億の須彌(マ)小博山、八萬の閻浮一沈水、十有三年(ケ)德孤ならず、菊に秋香を餘し梅は蘂を吐く。

以心傳公小祥忌

大永六年季春十有一日、廼ち以心傳公の小祥忌辰なり。聊か(フ)伽陀一篇を唱へて、以て菲薄の奠に充つ。

記得す去年今日の事、鳥啼き花落ちて一回新なり、當陽拈じて小香瓣と作す、喚び醒す春閨夢裡の人。

大玄宗濟上座三七日忌　勢州の人

臨濟の三關打破了、吹毛磨し盡して急に提撕す、滿林霜隕ちて秋光冷じ、一曲の(コ)伊州殘月の西。

汝雲妙慶(エ)大姉五七の忌

梅湖藏主、祖妣汝雲妙慶大姉五七忌の爲に、預め齋を設く。手から(テ)六喩經を謄寫し、貫華一章を唱へて、以て撫育の厚恩に酬ゆ。愚、聊か其の韻を攀づ。

生死海中一漚無し、涅槃岸畔同流を絶す、半離の殘月眞の沈水、手に信せて拈じ來る專ら爲にする秋。

(マ)博山は香爐なり、海中の博山に形どる、下盤に湯を貯へ、雲氣香を蒸す、海水の四方に環るに象ると。

(ケ)論語の里仁に「德孤ならず、必ず隣あり」と。

(フ)偈頌のことなり、德を頌する所の詩の體にして韻文なり、宗門古來の禪詩、禪偈、頌、頌古と稱するものは、押韻平仄必ず詩の體に倣つて作る、現今用ふる法語、香語等に至る迄、其の作法專ら詩の體による、又經とも伽陀とも稱することあり。

(コ)伊勢の人、故に點出するな

淵了正源信士㋐卒哭忌に薦す

丹州の人事、一色幕下の忠臣、遠山氏淵了正源公、今茲に永正丁卯夏五下八の日に丁りて、命を輕んじ義を重んじ、陣前に戰死す矣。所謂重賞の下に必す勇夫有る者か。蓋し忠臣は孝門に出づる者なり、傍に觀るだも忍びがたし、況んや復た父母兄弟の情をや。遂に野偈一章を作りて、以て百日の奠に當つと云ふ。

㋚都盧大地法身の香、心源に薫徹して十方に透る、一色明邊君自ら看よ、秋天舊に依つて遠山長し。

遠山氏某七年忌

七年一枕㋖黑甜の餘、父の風を慕ひ兮父の書を讀む、烏鉢遠山限り無く好し、先廬の脩竹影蕭踈。

月溪常圓三十三年忌

刹那三十有三秋、劍樹刀山解脫樓、信せずんば囘光返照して看よ、一天の明月江に入つて流る。

聖泉居士三十三囘忌

り。

㋓善女人、善信女をいふ、今は大居士、居士の對稱として、大姉の號を戒名に付す、如來在世中、既に大姉の語を用ひ給ふこと、太子瑞應經、行事鈔等に見ゆ。

㋢金剛經應化非身分三十二に、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と、此の偈中夢、幻、泡、影、露、電を稱して六喩といふ。

㋐一百日の忌辰をいふ。

㋚すべてといふ意なり、碧巖第三十四則の評に「寒すれども寒を聞かず、熱すれども熱を聞かず、都盧是れ箇の解脫門」と。

㋖支那南方の俗語、午睡を黑甜といふ。

霄漢に透り也た黃泉に徹す、這箇の一香三十年、自家門外の雪を掃はず、只だ看る春の早梅の邊に在ることを。

㊁先考十七年忌

佛恩に酬ゆるか祖恩に報ゆるか、㊂露の一字老雲門、劈開す十七年前の面、屋後の靑山笑つて言はず。

柴屋居士十七年忌

先に東關に入るは山を看んが爲なり、主人去つて十七年間、松門一㊃柴屋依然として在り、只だ恨む名を聞いて顏に對せざることを。

某三十三回忌

武閥曾て此の郞を失してより、幾乎三十有三霜、端無く拈出して恩に酬い去る、秋後滿山楓葉香し。

先妣三十三年忌

眞箇娘生の舊面皮、元來子母相知らず、一恩三十三年の後、雪は重し梅花臘月の枝。

宗歡宗喜父子五七日忌

君臣父子㊄三綱を整ふ、命を戰場に殞して忠孝彰る、劍樹刀山百雜碎、當陽拈じて本來の香と作

㊁先父をいふ、父死する之れを考といひ、母死する之れを妣といふ。
㊂雲門云く、「露、露堂々、古佛露柱、體露金風。」皆露現、不覆藏の意を表す。
㊃居士號を打す。
㊄君臣、父子、夫婦の道、之れを三綱といふ。

す。

宗室禪門十七年忌

熱喝嗔拳五逆の兒、阿鼻の火坑を掀翻し來る、恩に報ゆるが是か也た讎に酬ゆるが是か、雪を吹く炎天の梅一枝。

古月妙圓禪定尼七周忌

一千の佛母老㊄摩耶、百萬の人師老釋迦、今日恩に酬いて消する底の物、臘天の風雪七梅花。

華屋宗榮百年忌

曾て華屋より泉臺に落つ、㊅荏苒たる光陰一百回、我れに江南の寶薫の在る有り、秋風吹いて月中の梅に入る。

駿陽の僧の爲に、其の慈母追室妙清禪定尼を薦す

恩を報ずる一瓣の㊆鷓鴣斑、深きことは海の深きに似たり高きことは山に似たり、山は是れ士峯天下の白、相逢ふて識らず慈顏に對することを。

旭芳宗泉禪定門三十三回忌

蝸牛角上一英雄、功名を留取す㊇麟閣の中、碧眼黄頭夢を說くことを休めよ、天堂地獄大槐宮。

㊄釋尊の母君なり。
㊅長びく意。
㊆形鶉に似て稍大なり、背部は灰蒼にして、柿色の斑點ありと、又香の異名なるか。
㊇麒麟閣をいふ、漢朝、功臣の像を畫きて後世に殘せしもの、以て麟閣に畫くとは功名を止むることなり。唐劉廷芝の詩に「將軍樓閣神仙を畫く、一朝病に臥し相識無し」と、即ち是れなり。

玉叟玄繼居士一周忌

忠臣元孝門の中より出づ、近代麒麟第一の功、五月牡丹花夢の如し、午簾雨過ぎて微風を起す。

宗琳居士七年忌

今日相逢うて一笑新なり、分明に記し得たり七年の春、鶯頭滴滴薔薇の雨、洗ひ出す阿爺の淨法身。

春陽宗照信女十三回忌

春陽秋露十三回、杜宇聲中喚べども來らず、別に㋦聖胎長養の處有り、一枝身を結ぶ綠苔梅。

瑞雲開基玉峯大姉十三回忌

秋風葉落つ十三年、老淚衣を濕す何の夙緣ぞ、崑崙を劈破して香片と作す、瑞雲吹き起す玉峰の前。

明叟宗鑑禪定門七周忌

天文八祀八月二十九日、乃ち明叟宗鑑禪定門七周忌の辰なり。孝子預め仲春二十九蓂に於て、供佛齋僧の次で、㋑苾蒭衆に命じて、㋺一乘妙典を頓寫す。仍つて小比丘宗休が手を倩ふて、這の松子膜を焚いて、以て罔極の恩に酬ゆと云ふ。其の偈に曰く、

㋦聖胎は佛の種子を受胎する此の肉身、長養は增長養生の意。

㋑比丘に同じ、乞士、除饉、勤息、勤事男ともいふ、又破惡、怖魔の義あり、男子の出家をいふ。

㋺法華經をいふ。

這の香佛祖不傳の傳、懷中に秘在すること已に七年、今日看來れば松子膜、(ヘ)碧落を衝開し黃泉に徹す、

春溪智雲大姉七周忌

今茲に文丑(ニ)孟春二十六蓂、廼ち宜春軒主翁の萱堂、春溪智雲大姉の七回忌なり。(ホ)休也、七年の前、夜雨燒香し、七年の後、春風燒香す、蓋し夙緣の感ずる所か。偈を作つて以て孝子の一哀を助く。

七年の春夢老婆婆、爲に勸む一杯紅杏の霞、誰ぞや前身戒和尙、香烟散じて百東坡と作る。

(ヘ)青天をいふ。
(ニ)孟春は一月を云ふ。
(ホ)宗休自ら云ふなり。

詩

(イ)大雲山龍安寺歲旦　四首

龍安龍峯の一龍孫、當處に豁開す甘露門、春風多少の力を借らず、大雲吹き起す盡乾坤。　龍寶國師の上堂を擧す。

大雲山裡孟春寒し、敢て諸方の熱瞞を受けず、臘雪吹き添ふ新白髮、花に逢ふて猶ほ舊時の看を作す。

佛法年頭無卻つて有、祖師の鼻孔舊か新か、(ロ)乾元の一氣(ハ)隗より始む、花も亦黃金臺上の春。

大王萬福春來也、花は滿つ扶桑六十州、若し眉毛長きこと幾尺と問はゞ、報じて言へ西嶺雪千秋と。

德林和尙歲旦の韻に次ぐ

新年舊歲事如何、昨日今朝也た任他あれ、翁は德春に輝き我れは鬢雪、(ニ)菱花半掩ふて獨り高歌す。

(イ)京都府御室の東にあり。常村は初め衣笠左大臣實能の別業にして、傍に一宇の佛殿を營みて、德大寺と號せり、其の後同公有の世にいたり、細川勝元請ふて自家別莊とす、文明五年勝元の歿するや、遺囑によりて龍安寺と名け、妙心寺の僧義天を聘して開祖たらしむ。

(ロ)易の元亨利貞の元にして、春の氣をいふ。

(ハ)士の優れたるを招かんとするには、先づ劣者を用ふべしと、の故事。戰國策に、燕の昭王、位に卽き、身を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く、郭

歳旦

年年何ぞ用ひん新舊を問ふことを、佛法南方古今を絶す、屋後の梅花無盡藏、門前の柳色萬黃金。

尾州青龍山瑞泉寺歳旦　二首

托出す㋭青龍頷下の珠、春光爛熳として天衢に接す、滿堂花に醉ふ三千指、佛法新年一點無し。

鴻鈞一氣天關を轉ず、楊柳眉を舒べ花顏を解く、萬古瑞泉流盡きす、七珍八寶湧いて山の如し。

河州東吳庵の歳旦　三首

新年の佛法有か無か、拄杖慇懃に來つて吾れに問ふ、纜を解く春風舟一隻、千秋の雪を載せて㋬東吳に到る。

新年の拄杖舊同參、今日相逢ふて俗談無し、法幢を建て兮宗旨を立す、一莖の春草活伽藍。

地軸斡囘し天輪を轉ず、造化功成りて一氣新なり、侍者報じて言ふ花萬福と、太平の春は太平の人に屬す。

隗先生曰く、（中略）今王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら且つ事へらる、況んや隗より賢なるものをや云々」と、隗の意氣たるや、實に陽春の氣なり、自ら隗に比するか。

㊁古の名鏡、鬢雪なるが故に鏡を掩ふなり。

㋭莊子に「千金之珠は必す九重の淵にあり、而して驪龍頷下にあり」と。又止觀に「明月の神珠、九重の淵内驪龍頷下にあり」と。

㋬杜工部の絶句に「窓に含む西嶺千秋の雪、門に泊す東吳萬里の船。」蓋し之れを翻し來るものか。

㋣はなだ色の書衣。唐の太宗の詩に「縹編斷復續、縹帙舒還卷」と。緗は萠黃色なり。

㋠易經、書經、詩經、禮記、春秋、樂記。樂記亡びて周禮を以て

儒士某少年の試毫を和す

結髮師に從ふ伊洛の涯、(ト)縹囊緗帙色交加す、天工春風の手を試みんと欲して、先づ開く(チ)六經三史の花。(開を一に發に作る。)

童子試毫の韻を和す　五首

硯池波暖にして梅を浴する辰、月は是れ(リ)毛錐字字新なり、復た長繩の鶯日を繫ぐ無し、讀書終日餘春を惜む。

梅花の標格雪の精神、一歲新なる時詩も亦新なり、持して渠儂に贈る(ヌ)寸陰の璧、今より惜むべし少年の春。

春風筆を呼んで新正を賀す、竹は平安を報じ花は太平、誰か(ル)蒙求中の一句を把つて、雛鶯に敎へて詩を學ぶ聲を得ん。

廿四番の風此れより吹く、(ヲ)鯉庭の桃李競うて開く時、小童若し是れ(ワ)鄒人の子ならば、禮を學んで如何ぞ詩を學ばざらん。

內苑花開く胡蝶の風、新詩樣に入つて墨痕濃なり、讀書道ふこと莫れ來年在りと、春再び回らず顏紅ならず。

希周(カ)髫年の試毫を和す

之れに易ふ。三史は史記、前漢書、後漢書をいふ。

(リ)毛錐は筆なり。

(ヌ)大禹、尺璧を惜まずして寸陰を惜むと。

(ル)唐の李瀚の選する書、經史中より事實の相類するものをとりて、兩々相對せしめ、記誦に便ならしむ。

(ヲ)孔子の子を伯魚といふ、其の生るゝに及び、魯の昭公二鯉を賜ふ、因つて名となすと、其の詩は「以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべく、之れを近くしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、又多く禽獸草木の名を知る」と、論語に見ゆ。

(ワ)孔子のことをいふ、鄒は孔子の生地なれば、孔子の徒ならばの意なり。

(カ)髫髮を垂るゝ位の少年。

仁氣一たび陶して花木濃なり、春城處として恩風ならざる無し、奇才何事ぞ朱崖の外、玉堂雲霧の中に在るべきに。

高野山に題す

高野山高うして點塵を絶す、松杉路を夾んで古碑泯す、花は熏ず雲霧烟霞の底、自ら是れ ㊂龍華三會の春。

藤代に題す

山水尤も奇なるは天下に多し、花香月影看よ如何、㊃瀟湘の八景又二を添ふ、吹上の沙和歌の浦波。

鵶山に題す

北苑の風烟君須つ可し、呉僧茗を煮て鵶山を說く、鵶山好しと雖も誰か商略せん、我が前丁後蔡の間に待つ。

富士山に題す

何の年か ㊄鼇背山を負ひ來る、百億の須彌點埃を絶す、四十由旬士峯の雪、眼高うして看て ㊅天台に到らず。

人の士峯に題する韻に依る

㊂龍華は樹なり、華龍の如しと、當來の彌勒、此の樹下に於いて釋迦の未だ度せざるものを度し、次に其の餘を度す、凡そ六十八億人、之れを第一會と云ふ、次に六十六億、次に六十四億と、故に龍華三會と云ふ。

㊃瀟湘は支那湖南省にある瀟水、湘水の二河の名、永州に合して瀟湘といふ。此所山水明眉、景色佳絶なり、瀟湘の夜雨、洞庭の秋月、遠寺の晩鐘、遠浦の歸帆、山市の晴嵐、漁村の夕照、江天の暮雪、平沙の落雁、これをいふ。

㊄海中のおほきなすつぽん。

㊅支那浙江省台州府天台縣の北にあり、智者大師の開く處。臨海記に曰く「天台山は超然として秀出す、山八重あり、之れを見るに一の如し、高さ一萬八千丈、周圍八百里」と

(の)坡仙聞く昔斯間に到ることを、獨り愛す全身雲水の間、乾坤を白盡す士峯の雪、眼高うして宋地山無きに似たり。

松風石

出し盡す(ね)扶餘萬里程、松陰六月風を以て鳴る、老來殘暑を推すに力無し、⊕石に漱ぎ流に枕して此の聲を聽く。(扶餘を一に夫餘に作る。)

繼鹿尾に花を見る　尾州

鹿野の春を移して斯地に看る、千年の象敎一枝殘る、幽人指點す花か雪か、片片風に和して玉欄に上る。

茅野に花を看る

雲山櫻を擁す千萬里、多年天外に金峯を望む、花を出でて還つて又花に入り去る、春夜朦朧たり古寺の鐘。(千萬里を一に千萬重に作る。)

小僧に贈る

古寺歸り來つて閑に曾を記す、十年の前事谷陵と成る、山禽語らず人の問ふ無し、一榻の秋風白髮の僧。

播陽の太守赤松兵部大夫に寄す

あり。

(の)東坡居士をいふ。

(ね)今の盛京省奉天府開原縣治なり。

⊕隱遁して山中にあるをいふ。晋書に「孫楚、字は子荊、操卓絕爽邁、不群陵傲する所多し、鄕曲の譽をかく、年四十、始めて鎭東軍事に參じ、馮翊の大守に終りぬ、初め少時、隱遁せんとして、王濟に謂つて「枕ㇾ石漱ㇾ流」と云ふべきを誤りて「漱ㇾ石枕ㇾ流」といふ、王濟曰く、流は枕すべきに非ず、石は漱すべきにあらずと。楚曰く、枕流は其の耳を洗はんとす、漱石は齒を厲かんと欲するなりと。」

風流の太守久しく名を聞く、水遠く山長し情更に情、手を拍して呵呵相見し了る、老僧門外に松聲を送る。

㋾韻を洞下の僧に次ぐ

鯨波萬里の長きを遠しとせず、袈裟角草鞋を裹んで香し、靑鷹室に入る果して何の徵ぞ、記すや否や㋰浮山殘夢の牀。

韻を次いで夢庵老人に寄す

湘山は黛の如く洞庭は鬚、月色朦朧として雨氣濡ふ、中に畫師寫し難き處有り、詩僧閑に石屛に倚つて孤なり。

宗藝喝食落髪　丹州の人俗姓井上

丹山此の鳳凰兒を產す、六藝文章㋻羽儀好し、井上の碧梧風動せず、巢に栖んで高く聳ゆ萬年の枝。

㋭歐陽修が秋聲賦を讀む　二首

㋷醉翁亭の畔響㋔颼飀、聲は西南に在り定めて秋なる可し、今夜暗中に摸索して識る、梧桐一葉亦曹劉。

聲は西南に在りて醉翁を迷はす、暗に識る秋意の梧桐に屬するを、宋下四百年の天下、吹醒す山川

㋾次韻は詩の韻を前後易ふることなく其の儘用ふるをいふ。
㋰浮山法遠禪師、葉縣歸省禪師の法嗣、歐陽文忠公、師に參じて大いに省ありといふ。
㋻易の漸卦に「鴻陸に漸む、其の羽を用ひて儀とすべし、吉」とあり、儀法をいふ。又、韓退之燕喜亭に「知以て之れを謀り、仁以て之れに居る、吾之れを去つて天朝に羽儀する、遠からざるを知る。」また義表の意あるなり。
㋭收めて文章軌範、古文眞寶にあり。
㋷歐陽公が廬陵の太守たりし時、營みしもの、醉翁亭の記あり。
㋔風の聲にいふ、張正元の賦に、「颼飀として淒し」と。

黃落の風。

盆石に題す　京南宗珠の請

奇石持し來つて天より翁に與ふ、(ク)九華何ぞ必ずしも壺中に在らん、青螺涌くが如し平沙の上、復た江山の日東に出づる無し。

某が來韻を和す

月には秋を話り分花には春を話る、天に問ふ何の幸ぞ吟身に伴ふ、詩歌自ら風流の種有り、白髮三千雪巾に滿つ。

松岳和尙茶話の韻に和す

瀉嶠の夢を原ねんと欲す、侍者茶を點じ來れ、茶罷み夢醒めて後、鐘聲月に催さる。

松岳和尙茶話の詩に云く、「茶は禪味を兼ねて可なり、能く俗塵を避け來る、且く車を停めて話らんと欲す、楓林暮色催す。」

(ヤ)策彥西堂の大明國に赴くを送る

此の老禪機衆流を截る、南遊何の日か(マ)大刀頭、海門風定つて鯨波穩かなり、一葉舟中四百州。

(ク)茶の異名なり。

(ヤ)名は周良、謙齋と號す、洛北鹿苑寺に入り、心翁安に法を嗣ぐ。天文六年防州の太守大内義興、築前博多の新篁寺碩鼎に命ずるに入明の使節を以てし、師に屬するに其の副使を以てす、天文八年再び遣明正使として入明し、世宗皇帝に謁し、大いに優遇せらる、

策彦西堂、再び大明に赴くを送る

千里鶯啼いて遠く人を送る、白頭何の日か又春に逢はん、歸舟早く西湖の月を載せて、我れに梅花面目の眞を呈せよ。

仁澤老禪、㋘岐陽に歸るを送る

詩家第一の碧瞳胡、歸り去つて黃花有れども無きが若し、九月岐陽定んで微雪、㋫關山の梅樹㋙啙盧都。

津首座、東關に歸るに餞す

㋓榔標擔ひ來る士峯の雪、袈裟帶び去る御園の花、㋢寃家何事ぞ寃苦を添ふ、杜宇一聲天の一涯。

㋐希庵老禪の越に赴くを送る

誤つて杜鵑と作す君聞く莫れ、淵明去つて後晉に文無し、花に先つ歸雁知んぬ何事ぞ、飛んで越山深處の雲に入る。

梅江藏主、關西に歸るを送る

山雲海月の情を話らんと欲すれば、春風使を奉じて京城を出づ、君聽け三疊㋚陽關の曲、鶯は花邊に向つて聲を惜まず。

又武田信玄の請に應じて、甲斐の惠林寺、長興寺等の諸刹に止ること數年、歸つて天龍寺塔頭の妙智院に靖居す、天正七年六月一日寂す。

㋮故鄕に歸る隱語、刀の頭に環あり、環還音相通ず、古詩に「何の日か大刀頭」と。

㋘岐陽は岐阜を云ふ。

㋫故鄕の義なり、又支那遲化縣西北三十里にあり、山邊關に近し、故に名く。又樂府に、關山月の曲あり、離別に多く關山を用ひて遠別の限阻と爲すと。

㋙無言の貌。

㋓杖に作る木なり、杖を云ふ。

㋢仇敵をいふ、忘れられぬ意に用ふ。

㋐諱は玄密、山城の人なり、始め建仁寺の月谷岫を拜して剃具し、雲嶺瑾に依ること久し、去つて美濃愚溪寺に往き

三省先生を送る

卜は龜に匪ず兮筮は蓍に匪ず、斯心㋖四聖未だ曾て知らず、機前に劃破して君に與へて看せしむ、六月梅花㋙太極の枝。

明山藏主、東に歸るを送る

再會期し難し老顏を奈せん、東遊萬里白河の關、殘紅新綠滿山の雨、㋚杜宇等閑に呼び得て還る。

哲上人、肥陽の古寺に歸るを送る

渠儂何事ぞ高城を憶ふ、話り盡す三年海月の情、西陽關を出でては能く記取せよ、落花啼いて送る杜鵑の聲。

天得首座、岐陽に歸るに餞す

海東得得來和尙、祖師の心を傳へて宗大いに興る、萬里の鄕關猶ほ未だ忘れず、雲を逐ふて飛び去る老㋯烏藤。

僧の九州に歸るを送る

㋛甘棠の茇舍先宗を慕ふ、秋客衣に入つて歸意濃なり、再會期し難し吾れ老いんたり矣、海西月落つ五更の鐘。

て、明叔淺に參じ、遂に言外に徹す、永祿の始め、勅を奉じて妙心に住し、其の名聲下に高し、武田信玄の三請に應じて惠林寺に入り、久しからずして美濃大圓寺に還る、文龜元年賊の爲に傷を得て寂す。

㋚送別の時、唱ふる詩をいふ。唐の王維か元二の安西に使するを送る詩に、「渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青青柳色新なり、君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西陽關を出づれば故人無からん」と、後人之れを陽關の曲となし、三疊して之れを唱ふ、蘇軾の詩に、「陽關三疊君須らく秘すべし、膠西を除却して歌を解せず」と、三疊は三重に同じ。

㋖聲聞、緣覺、菩薩、佛の四をいふ。

㋙天地陰陽未だ分れざる以前を

功岳座元の駿陽に歸るを送る

(エ)松三保に連る衣を掛くる藤、天女花を獻じ龍燈を點ず、來るも亦無心歸るも亦好し、(ヒ)孤雲倦鳥一閑僧。

(モ)重陽の前日十洲の郷に歸るを送る

茅鞋襏笠草袈裟、曉に長安殘月の家を出づ、怪しむ可し斯の行節に先つて去ることを、(セ)淵明終に黄花に負かず。

眞安藏主、藝陽に歸るを送る

誤つて他郷を認めて故郷と作す、巾瓶相侍す五年强、衣を拂つて好し去る家山の路、(ス)秋海棠の西夕陽ならんと欲す。

宗擴藏局の舊梓に歸つて母を(イ)省するを送る

那處の春山か故郷ならざる、(ロ)孃生の面目露堂堂、歸り來つて老僧に呈示して看せしめよ、秋は信州の紅海棠に在り。

楓林殘照　高雄山に遊んで作る　二首

楓橋何事ぞ等閒に過ぐ、山は晩秋に到つて勝槩多し、一麾を把つて落日を回さんと欲す、烏藤亦是れ魯陽が戈。

いふ。

(メ)不如歸の意を等閑に呼んで顧みぬとなり。

(ミ)拄杖をいふ。

(シ)史記の燕世家に、「召公の西方を治むるや、甚だ兆民の和を得たり、召公鄕邑を巡行し棠樹あり、獄政事を其の下に決す、諸人皆其の所を得、職を失ふものなし、召公卒して棠樹を懷ひ、敢て伐らず、之れを歌詠し甘棠の詩を作る。」即ち詩の召南に、「蔽芾たる甘棠、剪る勿れ伐る勿れ、召伯の茇りし所」と、先宗の德を比するなり。

(エ)彼の遍昭が「天津風雲のかよひぢ吹きとぢよ、乙女の姿しばしとゞめん」の意を出したるなり。

(ヒ)淵明が歸去來の辭に曰く、「雲無心にして岫を出で、鳥飛びに倦んで還るを知る」と。

秋花に在るか春楓に在るか、夕陽斜に挂く滿林の紅、紅圍み綠擁す寒山の路、吟じて㋩牧之が詩句の中に入る。、

杜鵑を待つ

彷彿として去年杜鵑を聽く、暮雲深く擁す蜀山の邊、一聲定めて曉天の雨なる可し、窓は長松に掩ふて獨り眠らす。

藤繞庵

地を江南に卜す南更に南、藤蘿深き處鬖𩯭、花を垂れ蔓を挂く三千尺、春風を縛住して一庵と作す。

花を待つ

最も怪しむ㊁東君の馬前まざることを、詩を爲つて誰か㋭祖生が鞭を著けん、三千一念花を待つ意、白髮の閑僧柱に倚つて眠る。(「爲る」を一に「作る」に作る。)

葉底の殘紅

細雨香を浥して新綠深し、墻を過ぐる黃蝶枝を繞つて尋ぬ、滿城の春色㋬永嘉の末、一片の殘紅正始の音。

㊂九月九日、菊の節句なり。
㊆歸去來の辭に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す」と。
㊈群芳譜に、「秋海棠、一名八月春。」また花疏に「秋海棠は嬌好、宜しく幽砌、北窗の下に之れを種うべし」と、時節を云ふものか。
㋑見舞ふことなり。父母及び其の親戚等に用ふ。
㋺母のことなり。
㋩杜牧之が山行の詩に、「遠く寒山に上れば石徑斜なり、白雲生ずる處人家あり、車を停めて坐ろに愛す楓林の晚、霜葉二月の花よりも紅なり。」
㊁東君は太陽をいふ。史記封禪書に、「五帝東君は雲中司命の屬」と、註に「東君は日なり」と、然れども後世多く春神の稱とす。
㋭先鞭のことなり、晉書劉琨傳に、「琨、祖逖と友たり、親故

春池の梅影

池亭只だ(ト)橫斜を愛するが爲に、曾て難波より此の花を移す、道者の家風若し相似たらば、晴瀾月を吹いて袈裟に上らん。

蟄鶯

嫩鶯蟄戸未だ曾て開かず、幽谷寒深うして雷を待つに似たり、溫顧若し氷雪の底に通せば、春風先づ起せ臥龍梅。

五月の菊

夏に在る黄花秋に在るに似たり、山房五月(チ)小笆の秋、一枝雨に臥す(リ)羲皇の上、元嘉以後の秋を待たず。

秋後山を觀る

斜風黄落す雨斑斑、一鳥啼かず秋後閒なり、司馬灰寒し數峯の色、元嘉の時節獨り山を觀る。

紅雨

朝に遊履を埋めて跡雪を凝す、暮に疎籬に洒いで影花かと訝る、是れ(ヌ)巫山神女の夢なる可し、紅と爲り雨と爲りて君が家に到る。

に與ふる書に曰く、「我れ戈たを枕にして旦を待つ、志逆虜を梟せんとす、常に祖生の吾れに先んじて鞭を著けんことを恐る」と。

(ヘ)永嘉玄覺禪師、六祖大師の法嗣。初め六祖に參じ、錫を振ひ祖を廻ること三匝して、三千の威儀八萬の細行を論じ、衆を驚し、無生の意を得て激賞せられ、留まること一宿して、心印を付せられ、一宿覺と異稱す。乃つて花の殘るを意味するものか。

(ト)梅をいふ。林和靖の詩に、「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黄昏」と。

(チ)竹の籬なり。

(リ)人品の高きことをいふ、太古の伏犧時代より以上の人といふ意。書言故事に、「晉の淵明、夏日北窓の下に高臥す、風あり颯然として至る、自ら

涼螢竹を度る　三首

㋸秦皇竹帛積んで堆を成す、螢火稍消して灰よりも冷じ、小碧窓前無月の夜、涼に乘じて空しく寂寥を照し來る。

腐草螢と化す涼意微なり、雨の時影を添へて月の時希なり、光を分つて照さず書窓の夜、脩竹叢の西緩緩として飛ぶ。

新竹綠濃にして花も如かず、微涼暑を吹いて郊墟に入る、夜來螢も亦㋾殷人の鑑、昔時聖に非ざるの書を照すこと莫れ。

寒雁

旅雁聲寒し蘆葦の涯、江風曉に徹して吹くに堪へず、霜辛雪苦翅翎短し、歸意花を待つて花較遲し。

竹窓雪を聽く

十年塵夢の迷を喚び醒す、半窓の雪竹響高低、斯聲畫堂の上に到らず、何事ぞ荊公獨り臍を噬む。

松寺に鵑を聽く　三首

耶溪の古寺月斜明なり、箇の長松を留めて杜宇鳴く、何事ぞ君に問ふ歸意切なる、一聲卻つて千聲に彷彿たり。

謂ふ、羲皇以上の人」と。

㋦楚の襄王夢に巫山の神女と會せし故事。劉廷芝の公子行に、「雲と爲り雨となり楚の襄王」と、李白の清平調に、「雲雨巫山枉げて斷腸」と。

㋸秦の始皇、先代の經書を集めて之れを燒き、天下の人を愚にすと。

㋾殷の紂王の暴逆、遂に滅亡に歸する故、古人殷鑑遠からずといひて、無道を戒められたり。

耶溪の新綠花に勝るや不や、日暮れて杜鵑啼いて幽を出づ、雲は隔つ東關未歸の客、松聲好しと雖も卻つて愁を添ふ。

箇の長松樹新銘を換ふ、復た詩人の意を著けて聽く無し、啼落す若耶溪上の月、今より榜を挂けん杜鵑亭。

寒雲雪ならんと欲す

凍雲雪ならんと欲して層巒を擁す、半は疎簾を捲いて玉欄に倚る、陽臺に向つて暮雨と爲らず、梅花被底夢應に寒かるべし。

東川に杜鵑無し

南人の雪と北人の梅と、此の地に杜宇を尋ね來るが如し、未だ疑團を免れず無も亦好し、旅簷の殘雨客腸摧く。

水邊の梅花

梅は江南野水の涯に在り、人を驚す春色兩三枝、横斜影落つ黄昏の後、月を添ふ鷗邊也た一奇。

寺近うして鐘を聞く

殷殷たる疎鐘聞いて迷はず、海山近く接す(の)古招提、春來更に花を出づる色有り、一朶の紅雲斜月

(の)梵に拓鬪提奢、唐に四方僧物といふ、或は鬪といふ、別房施、又は對面施と譯す、後魏の大武帝始光元年伽藍を作りて、始めて招提の名を得たり、常住の僧物をいふ。

の西。

　中華の書に日本の凝露臺を言ふ、戲に題す

日出處の東漢家を移す、㋕瑤臺凝露洛陽の涯、四海蒼生の渴を蘇す合し、養ひ得たり芙蓉八月の花。

　旅宿の曉　題詠

異鄉客と爲つて先生に別る、月江村に落ちて五更ならんと欲す、白歸舟に集る士峯の雪、袈裟裏ます杜鵑の聲。

　花の錦　和歌の題

㋵遊絲を剪取して百尺長し、春風織り出す錦衣裳、花前怪しむ莫れ無家の客、一枝を帶びて故鄉に還らんと欲す。

　花前月を見る　和歌の題

淸水の巖前に白櫻を愛す、花有り月あり㋥二難幷す、玆の遊奇絕衰老を慰す、色を鬪はしめ光を爭ふ㋪不夜城。

　梅の關　和歌の題

東風を鎖斷して香を漏さず、春遊の佳客詩腸を惱ます、鷄聲啼破す

㋕月の異名、又玉の臺、淮南子に「殷の紂王璇室瑤臺を作る」と。

㋵「かげらふ」なり、沈約の詩に、「游絲空に映じて轉ず」と。

㋥賢主、嘉賓、之れを二難といふ、月と花とに比するなり。

㋪燈燭の光晝を欺くをいふ、後轉じて繁華熱鬧の地をいふ。

(ソ)函關の月、誰か識る花中に孟嘗有ることを。

扇面の八景　二首、各四景

(ツ)雁平沙に落つ月の上る時、洞庭七十二峯奇なり、瀟湘南湘北雨か雪か、水遠く山長し歸去來。

落雁、秋月、夜雨、暮雪。

帆腹風を含んで歸艇輕し、市人は利を爭うて名を爭はず、半江日落つ漁村の外、寺數峯を隔つ鐘一聲。

歸帆、晴嵐、夕照、晩鐘。

山水の圖に題す　二首

人は柴門に倚つて月を期するや不や、斜陽落ちんと欲す釣魚の舟、西湖は十景瀟湘は八、紅樹蘆花一色の秋。

青箬綠簑張志和、斜風細雨十年過ぐ、山中好しと雖も月無かる可し、江湖詩景の多きに較ぶること莫れ。

竹間雨雀の圖に題す

竹間の雨雀(ネ)呂か劉か、爲に商山の羽(ナ)翄を借らんや不や、四海の英雄鴻鵠の志、大謀豈に稻粱の秋に在らん。

扇面の圖　三首

(ソ)孟嘗君、虎狼の秦を逃るゝとき函谷關を過らんとす、客の鷄鳴を能くするものありて良くこれを脫するを得たりと。

春を破りて魁をなすをいふ。

(ツ)瀟湘の八景、指呼の裡にあり、蓋し詩の詩ならんか。

(ネ)漢の高祖は劉氏、后は呂氏、遠謀あれども、劉氏を安んぜず、呂氏を安んずるの策をとろ。

(ナ)翼の古文なり。

天に先つて物有り之れを梅と謂ふ、畫師に憑り仗つて賓つて始めて開く、橋上の杜鵑枝上の雀、一編の㋾心易百花の魁。

花は趙昌に到つて眞に逼ると雖も、華光の墨も亦精神ならず、珍禽枝上吾れに向つて語る、今古梅を知る只だ一人。

海外遠く移る安石榴、花を開き實を結ぶ夏還た秋、辛酸寒苦備に嘗め得たり、眼は神農の一舌頭に在り。

　墨芙蓉に題す

芙蓉寂莫たり水の濱、淡く㋰蛾眉を掃ふ冷㋒太眞、地に在つては枝を連ねんとは總べて虛語、秋風紅脆し㋼馬嵬の塵。

　東坡が畫竹に題す

一竿也た足れり此の風枝、翠袖の佳人瀟洒の姿、坡老胸中三斗の墨、湘江の雨と作つて吹くに禁へず。

　畫梅に題す

顏色馨香誰か眞を寫す、世に馬を相する㋨九方甄なし、詩僧若し花の來處を問はゞ、太極の光陰春を記せず。

㋾宋の邵堯夫、梅花心易を作る、後世の賣卜者等の大いによろこぶところとなる。

㋰美人の眉にたとふ。

㋒楊貴妃名は太眞、玄宗の后なり。

㋼驛名、安祿山の亂に、唐の玄宗の后楊貴妃、馬嵬驛にて殺さるとある、是れなり。

㋨藝文類集に「九方皐は良く馬を相するもの、伯樂の儔なり」と、列子に「九方皐能く馬を相す、秦の穆公之をして馬を求めしむ」と、蓋し之れならんか。

雞冠花の圖

頸は絳羅を帶び頭は冠を戴く、木雞鬪ひ倚る玉欄干、花中縱ひ孟嘗の客有るも、白雲の關を透ること千古難し。

海棠雙禽の圖

姸を鬪はしむ唐室幾千紅ぞ、寵は海棠春睡の中に在り、㋔李杜相雙ぶ二鳥の如し、君が爲に猳瞥る落花の風。

㋔李白、杜甫の詩をいふか。

黃蓮靑雀の圖

漢苑の春風王母遲し、卻つて疑ふ靑雀偶〻歸り來るかと、蟠桃未だ實らず三千歳、暫く黃花に倚つて一枝を借る。

扇面　畫かず

好箇の畫師此に到つて休す、紅粉を塗らず自ら風流、分明なり紙上の西來意、雪裡の芭蕉笑つて點頭す。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一　終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二

遠孫比丘衆等重編

像贊

出山釋迦像贊　二首

西竺の老沙門、寃に報ずるに卻つて恩を以てす。花を獻ずれば春手に在り、水を洒げば月に痕無し。

香南雪北、路頭を失卻す、相隨來也、箇の老比丘。

文殊贊

獅子窟を把つて、活伽藍と作す。多少衆と問へば、❶前三後三。

達磨贊

流蓬直指、落葉單傳、大唐國裡、將に謂へり禪無しと。徒らに柴米を費して、面壁九年。咦。吾が祖來也、月青天に在り。

問訊す梅か又杏か、九年面壁是れ拈華、一時に趕ひ出して棒を行ずべきに、魏主梁王作家に非ず。

❶又「前三三、後三三」ともいふ、前後彼此相等しきないふ、又無量、無數の意に用ふ。

兀坐九年の春、花を拈ず開達磨、昔日㊁梁王に對す、驀面に何ぞ唾せざる。六宗受降と叫ぶ、葛藤㊂椿を踏倒す。到る處人の肎ふ無し、空しく過ぐ龍慶江。足三國に跨り、眼㊀五天を貫く。東走西走、衣破れ履穿つ。

面壁九年、圈繢の裏に墮す、若し禪を會すと道はゞ、西天萬里。（この贊は足利義晴公の需により大永二年十月五日）

同　半身

眼東震を看て、意西乾に在り、失卻了也、鼻孔半邊。

百丈贊

將に謂へり奇特、㊅大雄峯に坐すと、小叢林の漢、徒を匡し衆を立す。

臨濟贊

勢は沛公が先づ關に入るに似たり、吹毛盡ぞ老凝頑を斬らざる。言ふこと莫れ佛法多子無しと、黃檗山頭に棒を喫して還る。

四睡贊

四睡一覺、人虎已に分る。無底の籃兒、峨嵋の雪を盛る。蕉尾の苕帚、五臺の雲を掃ふ。豐干饒舌、我が同群に非ず。咦。寥寥たる天地知音少なり、唯だ松風のみ有つて聞くに耐へず。

㊁梁の武帝なり、達磨との聖諦第一義に關する商量は、古來叢林の逸傳として存す。
㊂椿は馬を繋ぐ杭なり。
㊀五天竺の略稱なり。
㊅百丈山の別稱なり。

㋬布袋贊

二童笑裡に春を藏すに似たり、梅里の分身總に未だ眞ならず。布袋頭に向つて空しく打失す、長汀風月自家の珍。

神農贊

民を救ひ國を醫す世に逢ふこと難し、鹿皮衣を著けて聖容を顯す、大地都盧禪本草、舌頭に眼を具す只だ神農。

㋣鍾馗贊

終南の進士、闕北の忠臣、桂を攀ぢずと雖も、以て蘋を薦む可し。三尺の寶劍、四海の風塵、㋠李唐の主を輔けて、㋷楊太眞が爲にす。癘鬼を驅逐し、邪神を折伏す、于今于古、法を護し人を護す。花を移して蝶を兼ぬ、誰が家か春ならざらん。

㋦福祿壽を贊す　㋸雪舟の圖

曾て塵土に降る、南極の老人、北斗裡に向つて、長法身を藏す。福海底無し、壽山嶙峋、眉毛生也、珍重す萬春。　德雲比丘　㋾大休叟。

㋻靈照女

㋬明州奉化縣の人なり、自ら契比と號す、常に一布袋を荷ふ、時人、長汀子、又は布袋和尚と稱す、一文錢を乞ふ偈に「一鉢千家の飯、孤身萬里に游ぶ、靑目人を見ること稀なり、道を問ふ白雲の頭。」梁の貞明三年丙子三月寂す。

㋣唐の武德中、擧に應じて第せず、階に觸れて死す、後、明皇晝寢して夢みらく、一小鬼玉笛を盜む、上叱す、大鬼あり、破帽藍袍角帶して、小鬼を捉へ、その目を刳き擘きて之を啖ふ、上問ふ、答へて曰く、臣は終南の進士なり、擧に應じて第せず、階に觸れて死す、旨を奉じて抱帶を賜

紅粉を塗らず面花の如し、有瀰の笊籬無賴の査。龐老賺過す兒女子、啼を止むる紅葉貧家に滿つ。

（ワ）白居易を賛す

江南野梅在り、空劫以前に開く、卽心の雪を掃はず、自然に春到來す。

北野天神　二首

萬里飄然逐臣と成る、比來天地の一詩人、三千の風月吟じ盡さず、松老い梅飛ぶ北野の春。　駿州長谷川越前の守藤原輝貞の請。

（ヨ）寬延の聖代菅原に降す、宰官の身を現ず一普門、三千の好風月を吟取して、梅花枝上に乾坤を定む。

渡唐天神の像　八首

詩語禪に通じ歌は神を感ず、冠巾の和尙假か眞か、梅香直に透る（タ）龍淵の室、花は扶桑に向つて春を漏泄す。

北野の君元北闕の臣、徑雲深き處全身を現す、三千の風月一衣鉢、梅花に分付して總に眞ならず。

寬延王佐の才を棄擲して、鯨波萬里舟ならずして來る、徑山文武の大爐

ひて之れを葬る、嘗つて天下虛耗の妖孽を除かんと。畫家吳道子に命じて之れを畫かしむと。

（チ）玄宗皇帝は李姓なり、故にいふ。

（リ）楊貴妃をさす、玄宗の后、名は太眞なり。

（ヌ）さいはひと倖祿といのちながきをいふ。

（ル）諱は等楊、備溪齋、米元山主人、楊智客、雲谷軒等の號稱あり、備中の寶福寺に入りて得度し、天性畫を好み習經を事とせず、涙痕を點じて畫ける鼠の話斯界に喧傳せらる、壯年相國寺洪德禪師に侍し、又鎌倉に赴き、建長寺玉隱永璵に從ふ、明に渡り、四明山に登り、天童山の第一座となる、明主勅して本朝田子の浦の圖を畫かしむ。歸朝して、周防の雲谷寺に住す、永正三年二

鞴、身形を煉り得て早く梅に到る。

徑雲吼破す一聲の雷、禪熟し來るか詩熟し來るか、北野春寒し舊廬の雪、身を終るまで臥龍梅と作る合きに。

龍淵窟裡龍鱗を得たり、北野君の家別に春を置く、萬古乾坤開闢の後、梅花の世界一詩人。

龍淵の室を扣いて東來と叫ぶ、吹起す爐中文武の灰、徑山三月の桂を攀折して、拈じて北野一枝の梅と成す。

青衫白髮老袈裟、夢に非ず眞に作家に參見す、徑山三月の桂を攀折して、等閒に拈じて小梅花と作す。

四萬三千首の錦囊、徑雲月に敲く一禪牀、是非梅花の夢に付すべきに、虛名を惹き得て大唐に滿つ。

今宮大明神を贊す

扶桑六十六州の中、神德昭昭たり此の宮を仰ぐ、法を護し人を護す威猛の力、滿山の松竹も亦仁風。

鄧林法兄の像贊

㋹南浦の末派、西源の的傳。叢規井井、㋞瓜瓞綿綿。店上に雪に阻てらるゝは則ち吾れと素有り、

月十八日寂す。

㋾本光國師なり。

㋻龍淵居士の女なり、常に居士に隨つて竹漉籬を作り、之れを鬻いで朝夕に供す、居士將に入滅せんとす、靈照をして出でて日の早晚を見、午に及んで以て報ぜしむ、女遽かに報じて曰く、日已に中す、而も蝕ありと、居士戶を出でゝ見る次いで、靈照父の坐に登つて合掌して坐亡すと。

㋕白樂天なり。

㋵寬平延喜、宇多天皇及び醍醐天皇の年號なり。

㋟徑山方丈の額なり。

㋹諱は紹明、建長寺の大應國師なり。

㋞瓞は小瓜なり。

輦前に紫を賜ふときは則ち御に對して玄を談ず。㋨兎角日月を跳起し、龜毛乾坤を呑却す。誰か知らん正法眼藏、新寳林に住して、只だ虚堂の八十を缺く。老黄檗を掌して、臨濟百千を屑しとせず。這の㋥瞎驢邊に滅向することを。滅不滅、再び㋤鸞膠を把つて斷絃を續ぐ。寳林の諸徒、鄧林翁の遺像を繪いて予に就いて贊を需む。事拒む可きに非ず、聊か野語を贅して、寳林常住の供養に充つ。大永三年、㋶林鐘吉辰、劣弟宗休燒香拜贊。

三綱見禪師の壽像　洞家の僧

大陽の皮履を袈裟に裹む、再び異苗をして毒牙を抽んでしむ、寳鏡臺前本來の面、依俙として相似たり趙昌が花。

前住光通仙裔鶴禪師の肖像

眼中の丁謂、紙上の張公。毒氣未だ除かず、蜀川の烏頭子を師とす。文字立せず、㋰熊峰の絳衣翁を祖とす。板を鳴し床を敲いて、法道を輝光し、鎚を拈じ拂を竪てゝ、宗風を振起す。㋒癡老の全機を奪ふときは、則ち古帆挂けて、後黄河北に向ふ。羲皇の㋼艮卦を畫するときは、則ち雜華資つて始む。紅日東に昇る。咄。眞の面目を看んと要す麽。猶ほ梅花有り路

㋨兎角龜毛は、非有、假有の理を表す語、龜に毛髮なきも、垢つきて毛の如く見ゆ、兎に角なきも耳長くして角の如く見ゆ、共に似て無きものなればなり。

㋥臨濟滅時、三聖、驀然に印可して「誰か知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを」といへるに出づ。

㋤能く相續して斷絕せざる意に須ひる語。韻府に、「漢の武帝、時に西海より膠を獻ず、帝の弦時に絕ゆ、膠を以て之れを續ぐに、弦の兩頭遂に相著く、終日射れども斷えず、帝大いに喜んで續弦膠と名

未だ通せず。

竹溪筠長老、先師の像を圖して、予に就いて賛を需む。口に信せて亂道す。　天文龍集癸卯林鐘日。

前住普門泰雲安禪師の像賛

斯の老慈顔醉うて霞に似たり、蘭溪の剰馥其の芽を出す。端無く㋼三摩地に入得して、宴坐す春風小白花。　天文癸卯秋八月、靈雲庵衲宗休賛。

密傳座元賛

他は是れ有鄰の貽厥、自ら玉峯の密傳と稱す。曲彔木上を坐斷して、㋔甲子を問へば米年と答ふ。靈蹤を蟠龍窟に記し、正宗を瞎驢邊に滅す。眞個滅か不滅か、夕陽は長く我が西に在り。

小師等、持德密傳繼禪師の壽像を繪いて以て賛を需む。口に信せて亂道すと云ふ。

前住長法、春谷杲公藏主寫照の賛

天源流を分ち、太虚響を接す。洋嶼の禪蚌蛤の如し、異代同名、虎丘の機。㋗菸菟に似たり。大藏掌に在り萬岳千峯、折拄杖頭十洲三島。曲彔木上、佛法會せず、嶺南の㋳盧能、徒らに墮樵を拾ふ。俗氣未だ除かず、巖中の幼輿、空しく遺像を留む。咦。歳暮れ天寒し、松柏綠長し。　大永元

く。」鳳麟より之れを製す、故に又此の名あり。
㋶十二律の内、六月の律に當る故に六月の異名。
㋰達磨をいふ。
㋒巖頭全豁禪師なり。
㋼八卦の一なり、一陰二陽の卦なり。
㋨三昧に同じ。
㋔年齢を問ふなり、一甲子は六十なり。
㋗菸菟、虎のことなり。
㋳大鑑慧能禪師なり。

年臘月日。

播州西江開基、雪窻最公首座の像賛

龍寶處を護して、大藏の波瀾を激揚す。狐古丘に首して、少林の皮髓を分張す。三皇に彷彿として同じからず、半月に依係として相似たり。首座行道也た㋮威音の劫初、首座説法也た率陀宮裡。英氣凛凛として生けるが如し、玉音㋘琅琅として耳に在り。寶積の松何の色をか作す、㋗境を奪はず人を奪はず。雪窓の蘭其の芽を抽んづ。是の父有りて是の子有り、雙徑の雲を眇視し、西江の水を吸盡す。還つて會す麼。這箇、㋙聻、咄。衆角多しと雖も一麟足れり矣。

西江の開基雪窓最公首座、二神足有り、曰く、怡溪、曰く、溫叔。工に命じて師の像を繪いて、予に寄せて以て賛を需む。大永甲申臘月吉辰。

季友契公首座の壽像

鐘谷の遺響、百里震驚す、㋓龍津龍子、頭角㋢崢嶸。五逆の子孫、電卷き雷走る。一喝賓主、雲起り風生ず。咦。㋖黒漫漫地、慧日永く明かなり。

大藏の中興開基、華屋宗英首座大師の像賛

㋮過去莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ、故に父母未生前、天地未開以前と同じく、過去際を表す語なり。
㋘音の清み渡るを云ふ。
㋗臨濟の四料簡、人境俱不奪は其の一なり。
㋙聻はものを指す語なり。
㋓龍生龍子に同じ、この父あり此の子ありなどに同じ。
㋢高くけはしき形、金石崢嶸など熟語す、頭角の超越して居るをいふ。
㋖一面の暗黒といふが如し。

大藏の金翅、直に獰龍を取る。九萬里の風に搏つては則ち禪源の派を接す。三千刹界を動しては則ち洋嶼の宗を探る。脚力を費さず、涌玄峯に坐す。淨躶躶赤條條、寸絲挂けず、㋕尼總持の皮肉を脱す。明皎皎白的的、一法の所印、大愛道の遺蹤を踏む。鐵壁線路を通じ、須彌鍼鋒に跳る。眞相を看んと要す麼、花影月重重。

聖壽開基天慶祐大師壽像の賛

混沌眉を畫く、春山青く兮春水綠なり。燈籠合掌す、江月照し兮松風吹く。相逢ふて識らず、借問す是れ誰ぞ。人の頭を取り人の腰を取る。子湖の犬、㋖劉鐵磨を噉む、吾が皮を得たり吾が肉を得たり。少林の狐、尼總持を誑かす、生涯只だ三事衲有り、聖壽以て萬年の基を固うす。收。

天慶大師頃ろ工をして壽像を繪かしめて賛語を老拙に需む。拙辭して曰く、「汝の德は大にして而して吾が才は短し矣。何ぞ江湖の名宿に投じ、其の名を衒ひ其の德を遺さゞる乎哉。」尼曰く、「大手筆無きにあらず、蓋し直指の才、單傳の器、難い哉。請ふ一二を叙して、以て無窮に垂れば足らん矣。」一言肝に銘す、再辭するに及ばず。觚を執つて其の上に賛すと云ふ。　永正十四仲春上澣日。

明窓宗珠庵主の像

㋕達磨大師の法嗣、梁の武帝の女にして、初め始祖に事へて弟子となり、道を悟り滅を示す、卽ち達磨の肉を得たるの人なり。

㋖潙山下の老尼、鄉貫を詳にせす、得法の後、機鋒峻峭、當時の禪客と往來して、盛に宗旨を商推す。

四海九州唯だ一翁、茶經を傳ふる外新功を得たり。前丁後蔡春宵の夢、吹き醒す桃花扇底の風。

前の左㋴金吾、額田耕雲咲夫居士の像賛

紙上の張公子、袖中の㋱邵堯夫、漢室に輔弼として、洛都に優游す。蚤に左京兆に侍し、晩に左金吾に除す。袞袞たる源流、恭しく惟れば、出自を同じくす。草草たる居士、更に赤鬚胡有り。林際の寶劍を握住し、天澤の衣盂を劈破す。雛道者を笑ひ、贋㋯浮屠を罵る、綠蕪霜寒し。或時は兎を獵して一棚の㋛鶻を臂にす、㋾烏帽塵暗し。或時は狗を追ふて十影の駒に鞭つ、夕陽を送り素月を迎ふ。瓊筵を開いて花衢に坐す、孟津に次りて而して密謀す。八百人期せずして會す、淀河に臨んで而して戰死す。三千の卒前驅と爲る、惜しい哉名父子、遺恨呉を呑むことを失す。顏色猶ほ舊に依る、墨梅の圖と作す莫れ。永正十三霜季秋上澣日。

前の賀州の太守仁翁舜法禪定門畫像の賛

月を繪く者は光を繪かず、精神掬す可し。樹を種うる者は德を種うるが如し、靈壽根を深うす。㋪菟裘を江左に卜し、牡丹を洛園に賞す。喜んで兵書を讀んで、龍韜虎略の術を諳んず。勤めて王庫を知して、狗偸鼠竊の

㋴金吾は武官の名なり。

㋱邵雍、字は堯夫、宋の河南の人なり、學を爲す堅苦刻厲、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、德氣粹然、群居燕飲、笑語終日、人の善を言ふを好み、未だ嘗て人の惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中康節と諡す、即ち百源學派の祖なり。

㋯浮圖とも書く、佛陀(Buddha)の訛なり、佛、佛寺、卒都婆等を指すことあり、此の所は僧侶を意味す。

㋛はやぶさ、くまたかをいふ。

㋾黑き帽子、又我國にて烏ばうしともいふ。

㋪魯の都。左傳に「隱公曰く、菟

寃を禦ぐ。文武の道未だ墜ちず、典刑今尙ほ存す。竹椅蒲團坐禪、曾て燦可の迹を師とす。蓮漏香火念佛、晩に遠持の門を候ふ。積善の家餘慶在り、厥の子有り厥の孫あり。(鼠竊を一に鼠盜に作り、香火を一に香花に作る。)

右立入氏前の賀州太守仁翁舜法禪定門の肖像、孝子、老拙に就いて賛を求む。拒辭するに及ばず、口に信せて亂道す。　永正庚辰小春日。

德雲院前の刑部通叟宗普大居士肖像の賛

一王一姓、六十六州、高く矢田の前蹤を踊んで、新に劍履を賜ふ。故より義家の後裔と稱す、丕いに(モ)箕裘を續く。誠なる哉千兵は得易し、眷みるに夫れ一人尤を拔く。(セ)桃李園中群臣を宴して、而して月に醉ひ、梧桐名上刑官に處して、以て秋を司る。靈鷲の席を退いて釋を罵り、呼鷹臺に登つて劉に依る。玉笛高樓、如今枕上に閒夢無し。(ス)錦繡閭里、少日才華貴遊に接す。其の和也藹藹然として、春の大地に行るが如し、其の量や浩浩乎として海の細流を納るゝに似たり。活處に機を投ず、將に謂へり、(イ)丹霞居士と。別戶に相見す、元來德雲比丘、還つて參得す麼。收。

右德雲院殿前の刑部通叟宗普大居士は、乃ち遠州太守勝益の第三骨にして、而して叔父一雲叟の

裘に譬ましむ、吾將に老せんとす」とあり、よりて後人致仕して隱居する所の稱とす、蘇軾の詩に「一林叢竹菁菟裘」と。

(モ)父祖の業を云ふ、禮記の學記に曰く「良冶の子は必らず裘を作ることを學び、良弓の子は必らず箕を爲ることを學ぶ」と。

(セ)李太白桃李園に宴する序に曰く「瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛して月に醉ふ」と。

(ス)錦繡閭里。錦を着て故鄕に歸るなり。

(イ)丹霞、居士。丹霞子淳と龐居士となり。

猶子なり。壯歲藝に遊び仁に據る。謂つ可し亂代の英雄なりと。春秋三十八上、不幸にして逝す矣。山崩梁壞の歎無き克はず、仍つて孝子國慶、工に命じて像を圖し贊を需む。贊して以て遠大を祝すと云ふ。大永第四三月二十有六日、前正法山大休叟龍安の室に書す。

牡丹花夢庵居士の像（肖栢の法號）

洛社の耆英、恭しく惟れば、本姓は久我に出づ。天曆の貴種、矧んや亦中院の先君たるを乎。㊀五濁、烏曇鉢を現ず、三昧、贋浮圖を笑ふ。或時は藥草を採つて、仙窟を窺ひ、或時は芝詔を拜して帝都に朝す。㊁古今一千首を諷して、而して周詩に擬す。律、雅頌に合す、㊂源氏六十卷を講じて、而して台敎に配す。味醍醐に同じ、餘情を花鳥に託し、歸興を蓴鱸に催す。和歌、連歌、神を感じ鬼を感ず。內典外典、佛を學び儒を學ぶ。手裡の團扇千億の放翁、飄飄たる風襟月朧、頭上の長帽七世の坡老、蕭蕭たり雪鬢霜鬚、行李俗ならず、梧に隱つて吾れを忘る。偉なる哉、香孩兒の猪に屬するが如し。其の群を出で其の萃を拔く。栩然たり㊃漆園叟の蝶と化するに似たり。在るときは則ち人、忘ずれば則ち書、淸也淸也、還つて眞の形模を看んと要す麼。夢、庵に非ず、庵、夢に非ず、牡丹花春一株。咄。

㊀五濁。一には劫濁とて、天災、疫病など絶えず起りて時節の惡しくなれるを、二には見濁とて衆生惡見を逞しうして是を非とし、非を是とする等、顚倒の見解盛なること、三には煩惱濁とて、衆生が貪欲、瞋恚、愚痴等の三毒煩惱の興盛となること、四には衆生濁とて、衆生果報漸く衰へ、身體矮弱、精神痴鈍となれること、五には命濁とて、衆生の命根順次に短夭となれることと、かゝる世を又五濁惡世といふ。

花園の主大休叟、香を燒いて賛して、以て等淸禪者の需を梗ぐ。大永(ヘ)龍集戊子孟夏四蓂。

一元院殿先天宗普居士の像賛

(ト)溫公は宋地の大醫王、仁德民を育し國を治す。(チ)眞卿は唐朝の一元老、才名古に輝き今に騰る。將に謂へり、靈桃俗李と。由來甘草人參、父子家を興す、攝の刺史を領ず。既に累代に及ぶ、君臣義を重んず、源京兆に奉じて、屢寸陰を惜む。衆星の韓斗、久旱の傅霖、薛嵩が業を繼いで、而して蹴鞠場を擅にす。半梅半泥半雪、雅經の流を學んで而して和歌の道に通ず。一觴一詠一吟、其の詞語を華にすと雖も、胸襟に芥とせず。平蕪霜寒し、鷹を呼んで臺に登る、雁影陣陣たり。長楸日落つ、犬を追ふて鏑を鳴す、馬蹄駸駸たり。(リ)政を禹謨舜典に考へ、武を齊鍔周鐔に試む。(ヌ)黄石が一卷の書を傳へて、冠を以て履に苴く。碧巖百則の話に參じて、鐵を點じて金と成す。瞿曇を活喫して、(ル)鱸の鱠炙の如し。彌勒を生吞して、鵝の(ヲ)湯燖に似たり。言言也た褒也た貶、著著縱有り擒有り。機に當つては(ワ)毘耶居士の牀を倒す。(カ)默處雷走る、手に信せて(ヨ)鹽官國師の(タ)

(ハ)古今云々。古今集は延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人勅を奉じて撰したる和歌集なり。

(ニ)源氏六十卷は、紫式部の作にかゝる源氏物語をいふ。

(ホ)漆園の叟。莊周、周の蒙の人、嘗て漆園の吏となる、故に謂ふ、其の著莊子蝴蝶篇に曰く「昔莊周夢に蝴蝶となる、栩々然として蝴蝶なり、愉びて意に適ふ、周たるを知らざるなり、俄然として覺むれば則ち蘧々然として周なり云云」とあり。夢庵の夢字を點出するなり。

(ヘ)龍集。龍は星の名、此の星年に一次周行す、集は次なり、歲次などに同じく年號の下に記する語なり。

(ト)司馬光。司馬君實、宋の仁宗に仕へ、諫院に知たり、後累官して宰相に至る、太師溫國

扇を拈ず、意氣風凛たり。乾坤の内獨歩と稱す、宇宙の間知音を絶す。笑ふに堪へたり化鵬の(レ)豪莊、扶搖萬里垂天の翼を折く。臥龍の諸葛と成る合きに、遺恨千載呑呉の心を失す。流水東に去り、殘月西に沈む。咦。(ソ)將相王侯豈に種無からん。枝枝葉葉皆檀林。

藥師寺國長公、先考一元院殿先天宗普居士の像を畫いて贊を需む。筆に任せて厥の大略を記すと云ふ。　享祿初元戊子菊月日、

正法山主大休叟。

越州の太守藤原朝臣松井雲江守慶居士の壽像贊　　此の像贊、丹波桑田郡

金剛山龍潭寺に在り。

(ツ)木公冬に榮ゆ、斯の郎能く晩節を持す。藤氏日に譬ふ、其の祖嘗て朝權を執る。名四海に

公を贈り、文正と諡す、著す所資治通鑑の外、文集八十卷等あり。

(チ)眞卿。顏眞卿、師古五世の從孫、杲卿の從弟なり、少にして博學辭章に工なり、官太子の太師に至り、魯郡公に封ぜらる、書道を以て普く知らる。

(リ)政を云々。禹謨、舜典は書經の内容を分ちたるものなり。

(ヌ)黃石。張良少時下邳圯上に游び、一老翁に逢ひ、一卷の書を受く、曰く、之れを讀まば帝者の師たるべしと、異日、濟北穀城山下の黃石に見えしに、先の老翁は即ち吾れなりと、具に其の書を見るに、乃ち太公の兵法なりと。

(ル)隋唐佳話に、「松江の鱸、所謂東南の佳味」と。

(ヲ)湯焯、湯にて煮るなり、其の美味を食ふが如きをいふ。

(ワ)馬耶居士。維摩居士なり。

(カ)默處雷走。即ち維摩の一默雷の如しとあるより出づ。

(ヨ)鹽官國師。鹽官は地によつて得たる名、齊安禪師なり、馬祖道一禪師の法嗣。

(タ)扇を拈す。齊安と侍者との問答商量なり。鹽官一日侍者を喚んで我がために扇を過し來れ、者曰く、扇子破れぬ、官曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ、者對ふるなし、資福一圓相を畫いて中に一の牛字を書すと。扇子は圓形にして展疊自在法界一圓の樣子、鹽官手許にある一物を借りて、侍者の伎倆を驗す、犀中の扇子を持ち來れの語に對して、侍者は破れぬといふ、甚だ力量あるが如し、次ぎに犀牛兒を還し來れに於いて一語の對ふる能はず、傍觀せる資福如實、空即

喧しく、徳㋧八埏に溢る。右㋣典厩源家に奉じては、則ち幕下の諸將を指麾す。前太守越國に任じては、則ち旁く野外の㋶遺賢を求む。進退禮を以てし、忠孝兼ね全し。世の騷亂に罹つて、而して蹤淡路に迷ふ。時の嘉運に遇ふて、而して生きて太田に還る。錦繍閭里を照し、旌旗山川を領ず。加之、洋嶼の風を慕ひ、衣盂三拜し、龍潭の室に入りて、紙燈再び然す。㋪百八の摩尼、佛祖を轉回し、一條の白棒、乾坤を打定す。杜暹飄然たる孤僧、早く塵事を謝す。李源元來信士、未だ俗縁を盡さず。葛洪井畔秋老い、丹陽廓裡雲連る。咦。箕裘の業を續いで、子孫萬年。

旹享祿三祀龍集庚寅夏五吉辰、　前妙心現居龍潭大休叟賛。

平氏松田古巖宗松居士の像賛

㋡葛原の王子王孫、枝を引き蔓を牽く。松田の㋭難兄難弟、蒂を並べ根を同じうす。文武の道を傳へ、忠孝の門に出づ。㋷五員を鴟皮に褁み、浙潮八月怒を發す。㋔靈均を魚腹に投じ、湘水五日魂を招く。腰間の劍霜雪を照し、手裡の扇乾坤を握る。噫。　享祿辛卯臘月日。

雲岫昌慶禪定門肖像の賛

是色、色即是空の當體を現す。即ち此の消息を語るもの也。

㋪蒙莊。莊周を云ふ、蒙縣の人なる故にいふ、著書莊子逍遙游に「鳥あり、其の名を鵬となす、背は泰山の若く翼は垂天の雲の若し、扶搖して搏ち羊角して上るもの九萬里、雲氣を絶ち、青天を負ひ、然して後に南を圖る、且に南冥に適かんとするなり」と。

㋨將相云々。史記の陳渉世家に「壯士死せざれば即ち已まん、死せば即ち大名を擧げんのみ、王侯將相寧ぞ種有らんや」と之れを反語せしなり。

㋡松なり、晩節を持するに對す。

㋧八埏は地の極まる所、淮南子に「九州の外に八埏あり」と。又八殥に作る。

㋣典厩。馬寮の頭の唐名なり。

㋶賢者の用ひられずして林澤に

前の河州大守庄所重信公は、平氏芥河の華族、累代の武閥なり。去歳辛卯五月二十一日、造化の小兒に觸れて而して逝す矣。春秋四十七、齡未だ知命に及ばず、烏摩、惜しむべき哉。公存する日、洞家の僧之れに諱して昌慶と曰ふ、沒後余之れに字して雲岫と曰ふ焉。今茲に家嗣厥の像を繪いて、贊辭を圖上に需む。峻拒する克はず、卒に村偈一章を賦して以て其の請を塞ぐ。寔に享祿五祀壬辰夏五初吉なり。

葛原の奕葉正盛の孫、曾て玉門を出でゝ武門に列る、積善の餘慶猶ほ盡きず、一張の弓は挂く搏桑の暾。

石雲庵主太玄宗白居士壽像の贊

後生揚子雲有り、玄尙ほ白しと嘲らる。本姓は藤原氏たり、紫の朱を奪ふを惡む。雪を烹氷を敲く、茶烟牛榻。花に酌み月に醉ふ、松醪一壺、(ウ)蓮社の十八賢を追慕して、大念佛小念佛、蒲團六七箇を坐破す。死工夫活工夫、其の右也日本の扇を拈じ、其の左也水晶の珠を轉ず。俗にして而して髮無し、僧にして而して鬚有り、僧に非ず俗に非ず、是れ甚の形模ぞ。吾が道一以て之れを貫く。參乎參乎。

あるをいふ。

(ム)百八の摩尼、摩尼寶珠の略、無垢、離垢、如意珠などと譯す、寶珠の名、龍王の腦中より出で、衣服、財寶、飲食等を生出するが故に如意珠といふ。或は帝釋の持てる金剛にして阿修羅と戰ふ時、碎けて閻浮提に落ち、變じて珠となれるものといひ、或は又過去久遠佛の舍利にして、其の佛の法既に盡きぬれば、變じて此の珠になるといへり。而して此處にては百八より成れる珠數のことをいふ。

(ウ)葛原、平氏は桓武天皇の皇子葛原親王の裔なり故にいふ。

(ヰ)難兄難弟。兄たり難く弟たり難きをいふ。

(ノ)五員。五子胥、父兄楚の平王に殺さる、員吳に奔り、吳を導き楚を伐つ、遂に平王の尸を出して之れを鞭つ、後吳王

嗣子石黒詮尙、老父の壽像を繪いて贊を需む。厥の孝志を感じて拒むこと克はず。書して以て行實と爲す。

越州の太守源朝臣額田西河宗昭居士の像贊

額田某、其の父宗昭の壽像を圖して、贊詞を予に需む。曰く、「某が祖父、世世越の中に家す、國の（ヤ）騷屑に暨んで洛に入る。幾も無く屋を鳩嶺の麓に僦す、而して居ること年有り矣。（マ）丙丁の灾に罹つて、家譜燒失す矣。再び洛に入り、右京兆勝元公に侍す。公の藥師寺元長に命じて、攝州の刺史を領ずるに及んで、父宗昭をして之れを輔佐せしむ。爾より以來、堅を蒙り銳を執り、百戰百勝、其の功亦大なり」と。予も亦宗昭と（ケ）方外の交有り、聊か小偈を摘つて其の請を塞ぐと云ふ。

合に麒麟殿閣の中に在るべきに、賢太守を佐けて忠功を立つ。化身千百億の春色、何事ぞ梅花放翁を畫く。

土岐樛月道珊居士壽像の贊

文王は是れ仁義の釋迦、岐下鳳を栖ましむ。儒童は彼の菩薩の孔子、（フ）

夫差を諫めて從はれず、大宰嚭之れを讒す、王乃ち屬鏤の劍を賜ふ、盛るに鴟夷の皮を以てし、之れを江中に浮ぶと。

（ホ）靈均、屈原の字なり、離騷經に曰く「余に賜ふに嘉命を以てす、余に名づけて正則といひ、余に字して靈均といふ」と。魚腹に投ずは沙を懷いて湘水に沈むをいふ、即ち五月五日なり、楚人之れを哀みて此に日に至ることに、竹筒に米を入れ、水に投じて之れを祭るといふ。

（ノ）蓮社十八賢。慧遠法師は支那東晉の人、道安に師事し、二十四歲より講說に從事し、五十一歲、關中の亂を避けて、襄陽より廬山に入り、池を穿ちて白蓮を植ゑ、同信の僧俗とともに、專心念佛を修し、社中百二三十

周末麟を獲たり。將に謂へり第一聖諦と、直に得たり百億化身。洞山五位の旗を竪つるときは、則ち氣魔壘を劖る、般陀八正の彗を拋つときは、則ち胸俗塵を拂ふ。藝文武を兼ね、道君臣に合す。繍戸花に映ず。或時は㋙魯論を講じて名郷黨に光れり。珠簾雪に捲く。或時は和歌を詠じて德鬼神を感ず。唐書東夷の國を載せ、建茶北焙の春を試む。㋓夷吾を方袍に被らしむ、錯を將つて錯に就く。放翁を團扇に畫く、眞に逼つて眞ならず。水尾濫觴、源流袞袞として竭くる無し。圯上に履を進む、家聲日日維れ新なり。之れを㋢留侯の菊に譬ふ、祝するに蒙莊が椿を以てす。咦。補袞調羹の手、正法輪を撥轉す。

右常陽信太莊江戸崎の城主、姓は源、世稱土岐治頼、字は樗月、諱は道珊庵主、自ら壽像を繪いて遠く寄せて贊を予に需む。予耄せり矣、固辭すれども允さず、仍つて俚語を摛つて以て公の實錄と爲す。

三友院殿前の右京兆松岳桓公大居士の贊（三友院殿は細川高國なり政元の養嗣子年四十八自刃）

川黨の領袖、源家の棟梁、文武の才を具して、多田滿仲に㋐藍氷たり。騎射の妙を傳へて、八幡太郎に權輿す。東西馬を馳せ鏑を鳴し、左右に犬

人、何れも當代の名士名僧たり。就中慧遠、慧永、慧持、道生、曇順、僧叡、曇恒、道昺、曇詵、道敬、覺明、劉程之、張野、周續之、張詮、宗炳、謝靈運、雷次宗等は十八賢と稱せられたり。

㋳騷屑。風の音なり、劉向の賦に「風騷屑以て木を搖す」と、國の騷動をいふ。

㋮丙丁の灾。火災をいふ。

㋘方外。道の外、孔子曰く「莊子は方外に游ぶものなり」と。

㋫周末云々。孔子春秋を著し、「哀公十四年春、西の狩に麟を獲」といふ句にて筆をとゞめられたり。

㋙魯論。論語のことなり。

㋓夷吾。管仲なり、齊の桓公を佐く。

㋢留侯。張良なり。

㋐藍氷。藍より出でて藍より青

を追ふて墻に逼らしむ。宰相古再び溫公を得たり、雲山觀を改む。京兆今十韓愈を合す、星斗光を增す。或時は耆英を洛社に會し、或時は義兵を晉陽に起す。本朝の風を移すときは、則ち歌を詠じて難波の什を學ぶ。上(廿)巳の景を餘すときは、則ち詩を賦して曲水の觴を飛す。名四海に喧しく、威十方に振ふ。窓を照す螢嚢、精を研き思を覃ぼして、藝術の圃を窺ふ。空に翔る鳧舃、鞠を蹴り腿を練つて、遊戲の場を擅にす。松を以てし、竹を以てし、梅を以てす。之れを三友院と牓す。蘭有り蓮有り菊あり、之れを四愛堂に擬す。加之、聖に在りては聖に同じ、凡に在りては凡に同ず。脚下一條の紅線、佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。掌內三尺の金剛、燕寢水枕戟森たり。龍安の夜話牀を連ぬ。人品高い哉、光風霽月、意氣凛乎たり、烈日秋霜。咦。花を繪く者は其の香を繪かず。

・天文龍集癸卯林鐘八蓂、前妙心大休叟宗休書。(大休叟宗休書を一に大休叟宗休焚香賛に作る。)

西月慶照信女の壽像

紫羅帳裡に衣珠を繫く、百陋恰も(廿一)一姝に逢ふが如し、濃抹淡粧限り無き意、丹靑只だ合に西湖を畫くべし。

坂井備前守香林宗遠の像

く、水よりいでて水より冷かなること。

(廿)上巳の景。王羲之、會稽山陰に蘭亭を作る、三月上巳之れに會して、曲水の宴を催し、序を作る、人口に膾炙す。

(廿一)一姝。一人の美人なり。

此の郎の勳閥敢て誰か論ぜん、古より忠臣孝門に出づ、只だ㊂劉を安んずる一周勃のみ有りて、㊃秋霜三尺乾坤を定む。

是雲宗拂の像

高屋氏諱は宗拂、字は是雲、世〻積德の門たり。形俗に處すと雖も、頗る塵表の物なり。天文庚子夏五初一日、造化の小兒に觸れて、溘然として逝く矣。孝子追悼に堪へず、畫師に命じて寫照す、滿面の霜凜凜として生けるが如し。一日、一僧に紹介して肖像に贊せんことを求む。吁、予の感ずる所の者は孝なり、其の志擲つ可けんや、叨に一偈を題すと云ふ。

名は高し屋裡の主人公、五十一年春一夢、鼓を打つて看來れば都べて不會、雲雷吼裂す太虛空。

蘭庭常秀の像

山田氏蘭庭常秀道人は、予が入室の參徒なり。蓋し天衣の下に秀鐵面有るが如きなり。不幸にして逝す矣。嗣子彌太郎、工に命じて其の像を圖す、一日持ち來りて贊語を予に需む。之れを展ぶれば、凜乎として餘勇生けるが如し、感無きこと克はず。仍ち偈を作り請を塞ぐと云ふ。

㊂劉云々。漢の高祖は劉氏、后は呂氏なり。周勃、高祖に事へ、戰功多し、高祖崩じて呂氏の蔓るを憂へ、呂后崩ずるに及び陳平と計り、諸呂を誅して代王を迎へて位に即かしむ、是れを文帝とす。

㊃秋霜三尺。劍なり、漢の高祖、三尺の劍を提げて天下を平定すとあるより出づ。

弓は強を挽き兮矢は長を用ふ、吾が法社を護して金湯と作す、曹溪鏡裡本來の面、花に淸香有り月に光有り。

天文十三甲辰八月日。

自贊

百億の須彌條拄杖、三千刹界小袈裟、無法を將つて大龜氏に付す、梅里の下生春花に在り。

　山偈を賦して愉龜年に付す。大永癸未林鐘初吉、正法當住大休叟。

這の無明禿、㋑憨顒皤腹、㋺脩吭矮身。達磨の華を拈じて、錯を將つて錯に就く。靈山の月を畫いて、眞に逼つて眞に非ず。昔帝自家の雪を掃ひ、袈裟御園の春を滯ぶ。瞎漆桶、笑㋩誾誾たり。誰か道ふ蓋苴の勤巴子と、從來蓬髮の休上人。咄。

　享祿庚寅林鐘吉辰、元從座元の爲に、花園宗休贊す。

蛇を畫いて足を添ふ竹篦子、電を種ゑて根を尋ぬ木面翁。若し是れ機に當つて正令を行ぜば、韶陽臨濟落花の風。　右韶首座の請。

我れに定相無し、惡を逐ひ邪に隨ふ。㋥金伽梨を著けて、佛界に入り魔界に入る。黑豆の法を用ひて、主家と作り賓家と作る。人天の眼を瞎して、暗に塵沙を撒す。自ら威獰を逞しうす。門に當る一

㋑憨顒皤腹。愚顔便々たる腹をいふ。皤は腹の大なるありさま、又腹下の白き所をいふ。

㋺脩吭。吭はのど、又はのどぶえにて、頸の長きをいふ。

㋩和き敬む貌、中正の貌、論語に「上大夫と言へば誾々如たり」と。

㋥金伽梨。僧伽黎衣なり、三品九種の袈裟の總稱なり。

雙の艾虎、誰か毒氣に觸る。室に據る三尺の錫蛇、西源の派脈を續ぎ、東海の津涯を窮む。咦。臨濟の樹を扶起して、春風又花を發く。

天文八稔龍集己亥三月初吉、松源十三世花園大休叟宗休、玄津首座の請に應じ、靈雲丈室に書す。

三十年胡亂、元來掠虛頭、喚んで馬と作すときは則ち馬、喚んで牛と作すときは則ち牛。錯錯、靈雲を見んと要す麼、桃花水を逐ふて流る。

太原座元、予が㋭幻質を繪いて贊を求む、筆に任せて其の上に贊す。

天文龍集乙巳夏五、花園に住する大休叟書す。

吾が扶桑國、佛日再び㋬暾す。白拈の臨濟を捉敗し、㋣黒頭の松源を罵倒す。咦。唯だ一喝を餘して、五逆雷奔す。

暾首座の請に因る、大休叟自贊、天文乙巳夏五㋠念八。

此の像贊は參州渥美郡長松山太平寺に在り。

龍にして而して頭上に角無く、蛇にして而して眼裡に筋有り。朝に西源の水を吸盡し、暮に南浦の雲を吐出す。其の名を聞かんより見んには如かず、其の面を見んより聞かんには如かず。一髮より重く、千斤より輕し。囫。拈じ來つて天下、人に與へて看せしむ。拄杖花を開いて春十分。

㋭幻質。肖像を云ふ。
㋬暾。旭日なり、朝日の出づるが如く輝きそむるを云ふ。
㋣黒頭。俗に云ふ頭の黒き鼠と謂ふが如き意、白拈に對するなり。
㋠念八。二十八日をいふ。兼明書に曰く、「吳王の女、名二十、而して江南の人二十を呼んで念と爲す、故に北人は避けず」と。

胸中の五逆藏す能はず、我れを阿鼻熱鐵の牀に坐せしむ。臨濟の兒孫普天の下、唯だ一喝を餘して商量せんことを要す。

祖台首座、予が幻質を繪いて贊を求む。偈を作りて以て其の請を塞ぐと云ふ。　天文丙午八月初吉、前妙心大休叟宗休書す。

道號頌　上

石庵　　留首座

㋑雲根を坐斷す老衲衣、半巖の春雨禪扉を掩ふ、銀山鐵壁迸開し了る、百鳥花を銜んで別處に飛ぶ。

月航　　津首座

江水秋を涵して玉兎輝く、孤帆高く挂く截流の機、廣寒八萬四千の戶、一葉舟中に稛み載せて歸る。

東庵　　宗暾首座

吠瑠璃界一㋺封疆、孤峯を坐斷して牀を下らず、佛日再び暾す明歷歷、眼頭高く挂けて扶桑に在り。

天庵　　祖台首座

㋩月斧雲斤法梁を架す、乾坤を把つて一封疆と作す、大機大用大人の境、坐斷す普賢三昧の牀。

梅意　　宗雲

萬里西來の開達磨、門前の湖水波瀾を起す、㋥暗香疎影黃昏の後、月は天心に在り君自ら看よ。

㋑雲根。石なり。
㋺封疆。國境なり。
㋩月斧雲斤。天字によりて工夫するなり。
㋥暗香疎影。西湖處士の梅の詩に「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」と。

義岳　忠

高標卓爾として直に超宗、塊視す㋭華山の千萬重、勢層雲に薄る何の似たる所ぞ、秋天一朶㋬玉芙蓉。

友室　益

知心古より世間に無し、此の芳鄰を卜して德孤ならず、入得すれば他の梅と月とに還す、㋣鴛鴦未だ繡工夫を了せず。

蘭谷　金

㋠蕙弟罷參の地を同じうすと雖も、許さず梅兄入室の春、元是れ曹溪の那一滴、流芳千載果して何人ぞ。

月堂　清

秋風鼻を撲つて桂花香し、始めて心空及第の場に到る、光境俱に忘る底の時節、呵呵として手を拍して禪牀を下る。

花庵　春

㋷熊峰鷲嶺一枝同じ、移して此の門に入つて分外紅なり、只だ主人の意安樂なるが爲に、太平日として東風ならざる無し。

㋭華山。「李白華山の落雁峰に登り、此の山尤も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通ぜん」と、即ち之れなり、岳によりて顯出す。

㋬玉芙蓉。富嶽を形によりて又芙蓉峰といふ。

㋣鴛鴦云々。盧照鄰の長安古意に、「比目鴛鴦眞に羨むべし、雙去雙來君見えず、生憎や帳額孤鸞を繡す」と。

㋠蕙弟。蘭によりて蕙草の榮枯する處、その餘榮と地を同じうするに喩ふ。

㋷熊峰。熊耳山なり、達磨を葬りし處。

春溪

太古乾坤一氣浮ぶ、冬に非ず夏に非ず又秋に非ず、綠楊芳草東西の岸、牧し得たり潙山の老牸牛。

南芳　金

曹溪の明鏡臺を打破して、梅花の面目塵埃を絶す、㋦重離六畫分開して後、四海の薫風此れより來る。

天覺

㋸一を得て以て淸く一を得て寧し。㋾世尊錯つて是れ明星を認む、了然として動ぜず如如の體、㋻月は屋頭に在り花は瓶に在り。

太虛

竪に乾坤を蓋ひ橫に十方、法身邊の事露堂堂、誰か知らん手を長空の外に㋕撒して、塞雁影沈んで秋水茫たり。

天先　性

蒼蒼何の色ぞ坤維を蓋ふ、直に得たり㋵純淸絕點の時、㋟羲皇の春一劃を待たず、梅は開く太極已前の枝。

澤翁　濡

㋦重離六畫。易の離爲火、☲☲をいふ。

㋸一。卽ち涅槃妙心なり。

㋾世尊云々。臘月八日未明、明星を看て悟道し給ふを云ふ。

㋻月云々。李翺の藥山禪師に贈る詩に「我れ來つて道を問ふ餘說無し、雲は靑天に在り水瓶に在り」と、蓋しこれより謬出し來るものか。

㋕手を撒す。手放して步むを云ふ。

㋵純淸絕點。卽ち太極以前なり。

㋟羲皇云々。伏羲氏なり、始め

天地由來積德の門、主人大坐直に軒に當る、㋹雲夢八九胸中の芥、㋷龐老西江何ぞ吞むに足らん。

桂峯

東土の二三奕葉を聯ぬ、西天の四七芬芳を發す、孤危峭絕攀ぢ難き處、熊耳叢高うして秋色長し。

陽甫

一氣生ずる時天靄然、別春何ぞ必ずしも梅邊に在らん、金烏飛び上る扶桑の樹、達磨元來禪を會せず。

一翁

元來天地是れ同根、四海の中獨り尊と稱す、行道威音空劫の外、强ひて王老に兒孫と喚ばる。

照嶺　眞

影㋡杲杲たる時空寂寂、峭巍巍の處坦蕩蕩、三千刹界光明藏、百億の須彌日月長し。

靈源　性

て易を畫して八卦を作り、之れを重ねて六十四卦となす。

㋹雲夢。雲夢の澤を云ふ、司馬相如が子虛賦に曰く、「楚に七澤あり、名づけて雲夢と曰ふ、方九百里、其の中山あり、其の山は卽ち盤紆茀鬱、隆崇崋崒、岑崟參差として、日月蔽虧す、交錯糾紛として上靑雲を干し、罷池陂陁として下江河に屬す」とある是れなり。

㋷龐老西江。龐蘊居士、馬祖に參問して曰く、萬法と友たらざる者是れ什麼人ぞ。祖曰く、汝が一口に西江の水を吸盡するを待つて汝に向つて道はんと。居士言下に大悟す。

㋡杲々。あきらかなること、詩に「杲々として日出づ」と。

㋧禹門。鯉、禹門三級の浪を越ゆれば龍となると。

㋤嬝。少好の貌なり。

㋶三要。臨濟禪師爲人の機關、

神龍豈に是れ池中の物ならんや、凡鱗を脫卻して㋧禹門に登る、白浪滔天意氣を添ふ、由來水は崑崙より出づ。

　　榮中　恩

少林の毒種扶桑に遍し、天下一株の蔭涼、子葉孫枝繁茂の處、秋風㋤嫋桂久昌昌たり。

　　玄虛　聃

㋶三要印開す衆妙の門、依然として天地是れ同根、佛老深談の旨を知らんと欲せば、㋰黑漆の崑崙空裏に奔る。

　　玉溪　音

蒼龍窟裡夜沈沈、波浪聲收つて萬壑深し、明月淸風無價の寶、高山流水㋒沒絃琴。

　　劫外

行道威音王以前、虛空手を拍して同年と叫ぶ、少室別傳の旨を知らんと欲せば、枯木花を開く時節緣。

　　悅巖

第一要、第二要、第三要なり。

㋰黑漆の崑崙。黑漆は眞黑なるをいふ、崑崙は渾淪に同じ、物の圓渾するに名づく、黑漆は其の色を形容するなり、炭團玉の如き黑きものが夜の眞闇を走るといふことにして、有にして有ならず、無にして無ならず、有無を超越するをいひ、宇宙の妙用を表示する語なり。

㋒沒絃琴。絃のなき琴なり。

㋼空生。須菩提なり、佛十大弟子の一人、解空第一を以ての故に名く。

㋨毿々。毛の長き貌、それより轉じて長く垂るゝにも云ふ。孟浩然の詩に「綠岸毿々楊柳垂る」と、此處文意且く疑を存す。

㋔宮商。共に五音の一にして、宮は五音の中、中聲にして主

破顔の尊者同参と叫ぶ、宴坐の㋼空生講談を費す、禪味忘るる時眞の法喜、石屏の雨花響㋨毵毵たり。

見外　参

若し文字語言の中に見さば、更に那邊に向つてか我が宗を立せん、笑ふに堪へたり善財の強ひて尋覓することを、德雲は妙音峰に在らず。（見を一に形に作る。）

龜伯　哥

舞袖風に翻る老飲光、篪を吹く仲子㋔宮商を絶す、餞行の一句明朝吉なり、海上の蓬萊日月長し。

一是

萬法空に歸して點塵を絶す、非を知る㋗四十九年の春、當陽直指す卽心佛、今日看來れば日下の人。

鐵船　梵盈首座

渾鋼を打就して勢太だ頑なり、浪花雪を捲いて銀山を倒す、㋳古帆高く挂けて後の消息、海西の風月を載せ得て還る。

となるもの、商は金に屬する音なり。

㋗四十九年。莊子に「伯玉行年五十にして、四十九年の非を知る」とあるより出づ。

㋳古帆云々。大應國師、虚堂和尚に謁す、堂便ち問ふ、古帆未だ掛けざる時如何、師曰く、蝦蟆眼裏の五須彌、堂曰く、掛けて後如何、師曰く、黃河北に向つて流る、堂曰く、未在、更に道へ、師曰く、茱甲恁麼、和尚又作麼生、堂曰く、黃河北に向つて流る、師曰く、和尚人を謾ずることなくんばよし、堂曰く、參堂し去れ、命じて賓客を典せしむ。

松屋　宗林監寺

棟梁の材大にして幾か年を經たり、厨庫山門境致全し、十里の風聲聽けば愈好し、三條椽下安眠を打す。

仰岳　祖泰尼

望む可し從來攀づ可からず、一峯屹立して雲間に挿む、針峯頭上に跨跳し去つて、塊視す須彌百億の山。

春窓　祖椿尼

東皇第一の功を借らず、戶牖を豁開して百花紅なり、端無く心猿を促敗し了る、喚び醒す㋮南華化蝶の翁。

古巖　秀桂尼

阿僧祇劫の長きを歷盡して、嶮崖萬仭瞻望を絕す、空生舊時の看を作すこと莫れ、花落ちて毿毿春雨香し。

一宗　宗統尼

㋕東震二三派脈を傳ふ、㋗西乾の四七同流と叫ぶ、天龍の佛法多子無し、玄風を振起して指頭を豎つ。

㋮南華云々。莊周の別名なり、唐の玄宗の朝、莊子を封じて南華眞人となす。

㋕東震二三。六祖大鑑禪師をいふ。

㋗西乾四七。二十八祖達磨。

龍川　秀清尼

四海五湖同一如、雲を挐ひ霧を攫んで淸虛に上る、禹門激起す桃花の浪、首を回らせば諸方點額の魚。（攫を一に擭に作る。）

花屋　宗因尼

九衢の車馬芳塵を競ふ、吾れは吾が廬を愛して別に春を貯く、鳳樓修造の手を借らず、桃紅李白美なる哉輪。

月溪　妙光尼

勝遊何ぞ必ずしも南樓に在らん、綠淨く春深うして氣秋に似たり、獨り許す寒山口を開いて笑ふことを、氷輪西に落ち水東に流る。

江甫　秀清尼

流水觴を濫べて波勢增す、海東の㊀扶木日初めて昇る、門を出でゝ一咲人の會する無し、達磨元來宋の少陵。（宋を一に曾に作る。）

梅窓　理清尼

物有り天に先つ名未だ安んせず、誰か戸牖を穿つて香に瞞せらる、犧皇の一劃華嚴の易、㊁小碧紗前月に和して㊂攤す。

㊀扶木。扶桑に同じ。
㊁小碧紗。小窓に張りし碧紗なり。
㊂攤。散ずる意なり。

心溪　宗田尼

佛祖元來不傳を傳ふ、㋐琮琤として日夜響潺湲、意中の消息耳中に得たり、雨と爲る泉聲檻前に落つ。

汝舟　祖川尼

運濟す支那四百州、桅竿菅索凡流を截る、㋚殷人去つて後良弼無し、空載す蘆花明月の秋。

春庭　訓

神光雪に立つ二三尺、達磨花を拈ず八九年、別に東君の信息を傳ふる有り、黄鳥話し盡す玉階の前。

湖隱　賀

雲は南浦に歸り水は西源、朝市山林皆煩有り、高臥安眠何の處か好き、白鷗門外鶴の乾坤。

春學　篤

燕子日長し花の發く初め、少年叢中三餘を惜しむ、西祖の西來意を知らんと欲せば、先づ㋖東丘東魯の書を讀むべし。

褒英　名讃、一華の的子、雪村の孫

㋐琮琤。玉の鳴る音。

㋚殷人。殷王帝辛、妲己を寵し、稅を重くし刑を酷にし、庭池園囿を作り、長夜の飲をなす、庶兄微子、大臣箕子、比干屢々諫むれども聽かず、遂に比干を殺し、箕子を囚ふ、此くの如くにして、遂に武王に滅ぼさる。箕子、微子、比干は皆其弼の臣なり。

㋖東丘。東家の丘にして孔子を云ふ。孔子家語に「孔子の西家に愚夫あり、孔子を是れ聖人なることを知らず、乃ち曰く、彼は東家の丘なりと。孔孟子

春秋の筆力勢雄なる哉、千萬人の中俊才と稱す、將に謂へり少林消息斷ゆと、雪村深き處一華開く。

旭峯　東

金烏海を出でゝ一飛輕し、先づ高山を照して若英に昇る、德雲相見の處に拶到すれば、黑崑崙大光明を放つ。

直庵　順

乾坤を捏聚して毒拳を竪つ、㋴采椽斲らず自ら天然、德山臨濟門の入る無し、雪月風花一老禪。

梅室　春

是れ㋱西湖處士の家にあらず、老禪の方丈南涯に住す、猊牀三萬二千の月、一夜の工夫只だ花の爲にす。

菊裔　匀

花晚節を持して曾て移らず、㋯晉後の風流隱逸の姿、三玄三要の語を㋛檃栝して、小笆猶は霜に傲る枝有り。

古帆　順

は魯の公族孟孫氏の後たり、並びに東魯と云ふのみ、卽ち孔孟の書を云ふ。

㋴采椽斲らず。堯の堂の高さ三尺、土堦三段、茅茨翦らず、采椽斲らずと、采は柞の木也、また一說に山より采り來るまゝの木を云ふと、奢らざるをいふ。

㋱西湖處士。林和靖なり。

㋯晉後云々。淵明歸去來に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す。」周茂叔の愛蓮の說に、「菊は花の隱逸なるものなり」と。

㋛檃栝。ためぎ。曲れるを正す木、淮南子に、「其の曲規に中るは檃栝の力」とあり。

鐵船陸地に波を起し來る、空劫の前未だ挂けざる時、五須彌を把つて一片と成す、東西南北風の吹くに任す。

月浦　宗光

遠く㊂海嶠を離れて雲衢を出づ、氷輪を推轉して凛凛乎たり、影波心に落つ般若の體、蚌胎吐出す光明珠。

林叔　梵靖藏主、夢窓國師の雲孫

恭しく以れば逋仙自出を同じうす、靈徹に相逢ふて記何ぞ佸てせん、一衣一鉢西湖の月、梅花樹下の僧に分付す。

安芳　榴

寥寥たる心事自ら平均、珍重す歸家穩坐の人、四海の香風吹けども起たず、花を開き實を結ぶ漢園の春。

梅湖　鶴藏主

疎影暗香家に到る句、隨波逐浪截流の機、僧有りて若し花の來處を問はゞ、春は孤山雪後の枝に在り。

玉海　善琛藏主

元自ら圓成磨けども㊃磷がず、珠合浦に還つて物咸新なり、夜來樓着す珊瑚樹、月白く風淸し無

㊂海嶠。海山に同じ。
㊃磷。論語に「磨けども磷ろがず」とあり。磨滅變形せざるより、外物に汚されざるを云ふ。

價の珍。（價を一に家に作る。）

材庵　承國門下の僧、諱を輪と曰ふ

林に凡木無し一封疆、這裡容る可し獅子の牀、作家宗匠の手を借らず、百千の日月雕梁に挂く。

春芳

温然一氣東より來る、花は開く破顏微笑の時、諸佛番番世に出づ、梅蘭蓮菊時を同じうせず。

怡庵

花門闌に滿ちて喜色加はる、夜垣何ぞ㋲馬箕が家に比せん、主人安樂活三昧、暮山の雲を拾ふて閑に茶を煮る。

喜春

㋝歡悰に堪へず積善の家、㋜韶光九十日に相加はる、一枝の佛法多子無し、先づ破顏微笑の花に付す。

芳園　菊

小牡丹花以て加ふる蔑し、㋑東籬の秋色君が家に屬す、少年叢裡首を回して看れば、晉後の風流猶ほ花に在り。

柏庵　元梁

㋲馬箕。馬祖道一禪師の家は簸箕を作るを業とす、故に綽名して、馬簸箕といふ、馬箕はその略なるべし。
㋝歡悰。よろこびたのしむ。
㋜韶光。美しく輝くこと、是れ春光九十日をいふか。
㋑東籬の秋色。菊花をいふ。

指示す庭前那一株、九年面壁㋺碧瞳胡、若し趙老の雙華甲を論ぜば、太古の㋩莊椿半途に在り。

　　玉英　　宗哲

晩成の大器天球を琢す、千萬人中獨り尤を拔く、色自ら粹溫何の似たる所ぞ、黃花愛し看る晉の風流。

　　喜雲　　宗慶尼

曾て十地を經たり眞の菩薩、終始㋥無心岫を出で來る、持して以て君に贈る怡悅すや否や、風一朶を吹いて天邊に落つ。

　　菊溪　　宗芳

金莖一滴壽無疆、籬落水邊猶ほ霜に傲る、四海香風吹けども起たず、花に逢ふて問取す幾㋭重陽。

　　月岑　　宗珠

指し來る不是話し來る非、鷲嶺曹溪共に機を顯す、今夜天外に出頭して看よ、山河大地光輝を發す。

　　器伯

玉に似たるを珪と名く磨すれども磷かず、㋬六瑚八簋其の人を得たり、神を祭ること在ますが如し

㋺碧瞳胡。達磨なり、面貌によりて之れをいふのみ。
㋩莊子逍遙遊篇に「上古大椿といふ者あり、八千歲を以て春となす、八千歲を以て秋となす」と。
㋥無心云々。淵明歸去來の辭に「雲無心にして岫を出づ」と、雲字を打するなり。
㋭重陽。九九の節句なり。
㋬宗廟に用ふる黍稷を盛る祭祀の器なり、簋は一斗二升を入るべしと。

廟堂の上、北野の梅花南澗の蘋。(澗を一に磵に作る。)

　柏翁　宗郝

庭前雪に立つ歳寒の姿、古佛趙州酬い得て奇なり、天地同根同甲子、蒼髯の叟も亦萬年の枝。

　春庵　正意上座

屋を環る皆山醉翁と稱す、蒲團紙帳春風に坐す、袈裟撩亂たり三杯の酒、興は簷花細雨の中に在り。

　西伯　壽兌

竺土の大仙傳ふるに心を以てす、龜毛の葉を抽んでゝ翠森森たり、端無く轉じて東來意と作す、吾が祖の㋣甘棠一樹の陰。

　檀溪　宗香首座

摩利山中雜樹無し、枝枝葉葉香風を起す、海外に流傳す眞の消息、此れより曹源一滴通ず。

　桃谷　周仁尼首座

洞中の春色人間に異なる、路は㋠武陵溪上より還る、秦皇の爲に塵垢を洗はず、飛花水を逐ふて日に潺湲。

　覺林　妙等尼

㋣甘棠。召公奭の茇りし所、後人其の德を頌して甘棠勿翦の詩を作る。

㋠武陵。昔武陵の人、魚を捕るに溪に緣つて行き路の遠近を忘る、忽ち桃花林に逢ふ、漁人之れを異とす、深く入れば小口あり、開けて土地平廣、良田美地あり、村人來り、皆問ふ、自ら云ふ、先世秦の亂を避けて此所に來ると。

佛の一字八口を汚す、只塵に嗽ぎ來る薝蔔の風。公案現成猶ほ未だ了ぜず、二株の嫩桂綠叢叢。

鈍翁　宗銳

文武爐中百錬し來る、看よ他の鐵漢鑄成す時、(リ)太阿の寶劍未だ利しと爲さず、龐老の機關猶ほ是れ癡。

稻屋　祖收

鐵牛耕破す一心田、秋水門に連る八九椽、(ヌ)捃拾の法華穗を遺し去る、民村戶戶豐年を樂む。

香室　嚴

五葉芳を聯ねて春滿堂、龜を證して鼈と作す一燈光、毿毿として花落つ半巖の雨、撼動す(ル)毘耶の三萬牀。

澄江　清

今(ヲ)千年黃河を待たず、(ワ)涇渭流を異にす看よ若何、元暉が那一句を檃括して、風素練を翻して清波を漪す。

蘭庭　秀

十薫多しと雖も一花に輸く、幽芳砌を繞る小籬(カ)笆、風流千古豈に秫無

(リ)太阿。楚王、風湖子を召して吳越にゆき、歐冶子干將に見えしめ、之れに鐵劍三枚を作らしむ、一を龍泉、二を太阿、三を上市といふ、共に名劍なり。

(ヌ)捃拾。ひろひとるなり。

(ル)維摩居士の疾を問ふ菩薩の數の多きも、之れを撼動せしむる概ありとなり。

(ヲ)千年云々。黃河は水常に濁り、千歲に一度清むと傳ふ、之れを待つは殆んど望みなきの謂なり、周詩に「黃河の清むを俟つも、人壽幾何ぞ」と。

(ワ)涇渭。涇水は濁り渭水は清む、合流三百里、淸濁混ぜずと。

からん、子葉孫枝謝家に滿つ。

　玉淵　琳

衣裡の寶珠大千に輝く、波に入つて驚起す臥龍の眠、好し龐老が西江水に和して、吸盡し來つて看る明月の泉。

　大用　宗碩

劫外の靈機忽ち現前、威風凛々として坤乾を動す、言ふ莫れ佛法多子無しと、㋵裴休を賺過す黃檗の禪。

　希道　宗弘

㋟羊を亡ふ臧穀多端有り、㋹首鼠瞿聃兩端無し、識らず人々の脚跟下、一條の活路長安に透ることを。

　松屋　名は紹長、遠州の人

根を深うし蔕を固うして萬年榮ゆ、一木支へ來つて大厦成る、只だ寒山のみ有りて此子に較れり、近く聽けば愈好し遠江の聲。

　芳心　宗妙

一字元來佛宣べず、㋞龍兒八歳華鮮と稱す、月宮豈に三星の繞るを待た

㋕笆。竹の一種、又は竹垣なり。

㋵裴休。黃檗禪師に參じて得法す、字は公美、河東聞喜の人なり。圭峰、宗密と法に於て昆仲、義に於ては交友、恩に於ては善知識、敎に於ては內外護たりといふ。

㋟亡羊。莊子に臧と穀の二人、相與に羊を牧して俱に其の羊を亡ふ、臧に奚事をせしかと問へば、則ち曰く、筴を挾みて書を讀めりと、穀に奚事をせしかと問へば、則ち博塞して以て遊べりと、二人の者その事業同じからざるも其の亡羊に於て等しと。

㋹首鼠兩端。鼠の性疑多きを以て穴を出でゝ觀望し、一前一却進退決せず、故に兩端を持するものに喩ふ。

㋞龍兒。法華提婆品に出づ、娑竭羅龍王の女、年甫めて八歲、智慧人にすぐれ、文殊菩薩の

ん、維れ德維れ馨し當體の蓮。

古峯　名は勝雲

高うして塵劫より躋攀を絶す、塊視す須彌百億の山、是れ今時の那一色にあらず、秋天舊に依る碧潺顏。

龜溪　慧兆藏主

空谷を出でゝ也た禪河に入る、正眼流通す迦葉波、㋨雞足山中六を藏して後、一枝の佛法多きを須ひず。(波を一に婆に作る。)

明室　珍

玉兎金鳥照臨せず、靈光古に輝き又今に騰る、門より入る者は他物に非ず、僧寶元來滄海の㋤琛。

鳳嶺　榮儀首座、軒を安巢と扁す

㋣岐山鳥有り同曹を絶す、處を得巢を安んじて羽毛を嘲ふ、是れ丹楓碧梧の上にあらず、孤嵐百尺一峯高し。

一麟　瑞祥

衆角多しと雖も獨り群を出づ、㋶四靈瑞を呈して氣雲の如し、㋰漢王の殿閣遺像を留む、㋺魯叟の

化導に依り、諸法實相の理を悟り、釋迦佛の前に來りて、變じて男子となり、直ちに南方無垢世界に成佛すとあり。

㋨鷄足山。狼足山、又は尊足山ともいふ。印度摩伽陀國伽耶の東南七哩にあり、迦葉入寂の地、六は頭尾四肢にて、藏は體を埋めること。

㋤琛。寶なり。

㋣岐山。支那鳳翔府岐山縣にあり、后稷の十三世の孫、古公亶父始めて此に居る。

㋶四靈。麟鳳龜龍の四なり。

㋰漢王の殿閣。麒麟閣に功臣の像を畫き留めしを云ふ。

㋺魯叟。孔子を指す、春秋の獲麟に筆を止むるを云ふ。

春秋闕文を修す。

聞庵　興健首座

香嚴竹を擊つて拳を豎つる機、鐵壁重重路の窺ふ無し、(ホ)補陀巖畔の月に和却して、偃溪の流水門に入り來る。

雲如　宗慧

風に隨つて到る處蔕無しと雖も、石に觸れて生ずる時根有るに似たり、臨濟の大龍纔かに奮迅す、忽ち(ノ)法霈と爲つて乾坤に洒ぐ。

玉岫　珍

(オ)形山に秘在す無價の珍、金に非ず石に非ず(ク)緇磷を絕す、東峯西嶺雲の閒なる處、托出す天邊の月一輪。

覺林

草木山河淨法身、頭頭物物全身を現ず、心花開發する底の時節、冷笑す(ヤ)華嚴會上の春。

瑞嶽

試みに龜哥に問へば吉兆多し、頹波砥柱禪河に立す、千年の烏跋何の色をか現す、其の面花の如し

(ホ)補陀。補陀樂山なり、觀世音菩薩の居所、南海中にあり。
(ノ)法霈。法雨に同じ、霈然として來る、故にしかいふ。
(オ)形山。雲門一寶の公案に委しく見ゆ、又楚人卞和、璞を得たる所、後此の玉秦王十五城に代ふ、卽ち趙氏連城璧の由來、天下傳ふとある是なり。
(ク)緇磷。緇は黑色をいふ、磷は光る石なり、緇磷を絕すは、玉石を絕する程の意なり。
(ヤ)華嚴會。華嚴經を讀誦して、國家の安康皇祚長久を祝禱する法會。

娑竭羅。

希渓　善灌尼

少林の㋮尼總持を慕はず、庶幾す當日の老閑師、端無く衆流を截斷し去つて、劈箭猶ほ遲し閃電の機。

繼芳　性胤

㋕甘蔗華を拈じて春手を授け、黄梅月に和して曉に衣を傳ふ、門門是れより香風起る、露浥して路紅吹けども飛ばず。

無參　宗參

善財此れより遊方を絶す、初發心正覺の場に登る、西天と東土とに往かず、㋙玄沙元是れ謝三郎。

希雲

石に觸れて根無し岫を出でゝ飛ぶ、空に浮んで滯有らず風を逐ふて歸る、線路を放開して他に與へて看せしむ、輕うして道人身上の衣に似たり。

逸峯

五嶽高しと雖も吾れ攀づ可し、飛來一朶雲間より出づ、軒に當つて獨坐する底の時節、塊視す須彌

㋮尼總持。達磨の法嗣、梁の武帝の女、老閑師は達磨を指すなり。

㋕甘蔗。釋尊の姓の一なり、拈華微笑の因縁をいふ。

㋙玄沙。師備禪師、雪峰義存の法嗣、姓は謝氏、幼より好んで南台江に釣し、漁者に狎る、人よんで謝三郎といふ。

百億の山。

悅林

破顏微笑の老頭陀、拈華の宗旨多きことを須ひず、㊀給孤園裡好春色、留めて千年の烏鉢羅と作す。

覺翁

高く心空を叫んで江を吸盡す、角巾毳衲鬢雙雙たり、大疑團破るる底の時節、手を拍して呵呵として老龐を咲ふ。

月巣　初首座、丹州の人

丹山鳳有り僧中に現ず、碧梧に接らず秋風を識る、㊁桂花の枝第一を占得して、霄を搏つて高く㊂廣寒宮に入る。

南陽　長成律師、南山の律宗を傳ふ、泉涌門下の碩德と稱すと云ふ。

道宣の宗を傳へて律藏開く、戈を把つて佛日再び麾いで回す、嶺頭の春色梅に屬して後、四海の薰風此れより來る。

雪庭　宗可

㊀給孤園。具には祇樹給孤獨園といふ、中印度舍衞城の南、凡そ一里の處にあり、もと祇陀太子所有の園林なりしが、須達（給孤獨）長者其の地を購ひて釋尊に獻じ、太子また其の林樹を佛に捧ぐ、かくて二人にて寄進したるが故に、是れを祇樹給孤獨園と名づけ給へり。

㊁桂花云々。月中桂樹あり、故に月宇を拈弄するなり。

㊂廣寒宮。又廣寒府ともいふ、龍城錄に「上皇、申天師、道士鴻都客と八月望日の夜、天師の作術に因り、三人同じく月中に遊び、一大宮府を見る、榜して廣寒清虛の府といふ。」

吾が這裡心の安んず可き無し、黑漫漫地白漫漫、神光縱ひ少林の髓を得るも、梅花徹骨の寒に輸卻す。

安岳　隆泰

一を得て淸く兮一を得て寧し、⑦嵩呼萬歲兩三聲、而今天下泰山の上、干戈を動せずして太平を致す。

密傳　宗巖

祖師の心印付し將ち來る、何ぞ南天鐵塔の開くを待たん、眞言成佛の旨を會得して、眼頭高うして黃梅に到らず。

玉岫　宗琳

塵勞を磨し盡して光自ら生ず、人人具足本圓成、形山の一寶價無かるべし、秦王の十五城に換ふること莫れ。

雲屋　宗澤

鄧林の一木君を得て支ふ、將に謂へり衛樓跨竈の兒と、瑞を爲し祥を爲して天下に雨ふる、須臾に蓋覆す四坤維。

瑞巖　宗祥

また天寶遺事に、「唐の明皇、月宮に遊び、天府を見る、榜して廣寒淸虛の府といふ、素娥十餘人、皓衣にして白鸞に乘り、桂樹の下に舞ふ」と。

⑦嵩呼。山呼に同じ、臣民君主の萬歲を呼ぶこと、漢書に、「武帝事を華山に用ふ、中嶽に至り、親しく嵩高に登り、御史乘屬廟旁にあり、吏卒みな萬歲を呼ぶ」と。

瑞雲乍ち起つて乾坤を覆ふ、輕うして天衣の石根を拂ふに似たり、空華を亂墜して我れを試むるを休めよ、銀山鐵壁入るに門無し。（乍を一に忽に作る。）

華仲　淨金

趙州の甲子未だ多しと爲さず、路を問ふ㋚臺山勘破の婆、鳥㋖塤篪を奏す百花の裡、木人咲つて唱ふ大平の歌。

以淸　維泉

大地元來淨法身、知らず何の處にか纖塵を立せん、曇華瑞を現ずる底の時節、河水千年一度新なり。

寳岳　法珍

衣珠一顆磨さずして圓なり、形山に秘在して幾年をか歷たり、端的雲外に出頭して看よ、夜光明月靑天を照す。

大川　宗三

㋓曹源那一滴を激起して、玄玄玄の處宗猷を立す、銀河倒に蘸す須彌の筆、白浪滔天字を學んで流る。

高節　壽筠

㋚臺山勘婆。趙州因みに僧、婆子に臺山の道、甚の處に向つてか去ると問ふ、婆云く、驀直去と、僧纔かに行くこと三五步、婆云く、好箇の師僧、又恁麼に去る、後僧あつて州に擧似す。州曰く、待て我れ去つて儞が與めに這の婆子を勘過せん、明日便ち去つて、亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸つて衆に謂ひて曰く、臺山の婆子、我れ儞が與めに勘破し了れりと。

㋖塤篪。塤は土を燒きて作れる樂器、篪は竹にて作れる八孔の樂器、塤唱へて篪和するが如く、兄弟の親しきに喩へて

多福の一叢歲寒を凌ぐ、霜前雪後平安を報ず、衝天の意氣層雲の上、㊅渭子湘孫千萬竿。

虎林　正隆

藏を典る雲窓夢閣の間、風八極に生じて南山を出づ、爪牙備り羽翼成る矣、臨濟の兒孫一斑を露す。

補拙　勤

垢面蓬頭㊂老懶の禪、鳴鳩呼醒す一春眠、頤に垂るゝ寒涕拭ふに心無し、手は熟す山中煨芋の烟。

悅叟　玄怡

天壽域を開いて八荒安んじ、卻つて算ふ㊁堦蓂幾干ぞ、試みに聽け西風一横笛、新翻唱へ起す萬年の歡。

永年　玄甫

黃竹墟の西㊀青雀囘る、龜臺の金母瑤池に宴す、春風坐了す九千歲、海上の蟠桃實を結ぶこと遲し。

柏心　梵茂

いふ、塤、箎共に音けん、同字なり。

㊄曹源。曹溪の源、六祖慧能禪師の流をいふ。

㊅渭子湘孫云々。節字を拈弄するなり。

㊂老懶の禪。懶瓚禪師、寒涕を拭はざること前に見ゆ。

㊁堦蓂。堯の土堦三段、草を生す、十五日以前は一葉を增す、十五日以後は一葉を落す、名づけて蓂莢といふと、これなり。

㊀青雀。西王母の使なり。西王母再來を約して遂に來らずと。漢武故事に七月七日、乾承殿に齋居す、忽ち青雀あり、西より來つて殿前に集る、上東方朔に問ふ、朔曰く、是れ西王母來らんとするなりと、頃ありて王母至る、去るに至つて、帝に許すに三年の後、復た來るを以てす、後、竟に

看よ他の華甲趙州翁、錯つて認む西來の雙碧瞳、龜蛇と其の齒を鬪はしむることを休めよ、(ヒ)三星夜夜(モ)蟾宮を繞る。

聖倫　慧昂

彼の眞丹を化す上大人、儒童菩薩是れ前身、仁里に居らず名を得るや否や、(セ)衆角多しと雖も唯だ一麟。

壽岳　宗仙

龜齡鶴算白頭翁、三呼萬歲の嵩きを屑しとせず、遠く看近く聽けば聲愈好し、長松脩竹無窮を祝す。

月桂　宗光

雲斤玉を削つて氷輪輾る、美譽芳聲載せ得て新なり、廣寒の枝第一を折り取つて、詩を作り遠く寄せて(ス)佳人に與ふ。

大宗　昌乘藏主、龍淵派

龍淵深き處老龍蟠る、日本支那多少の孫、一口に平呑して還つて吐出す、烏頭の毒氣乾坤に溢る。

松庵　宗藤藏主

來らずと、之れを飜案するなり、蟠桃は王母の漢皇に獻ぜし桃、三千年に一實すと。
(ヒ)三星。二十八宿中の心宿の星なり。
(モ)蟾宮は月なり。
(セ)衆角。聖字に就いて點出す。
(ス)佳人。よき人といふ程の意。

山門の境地人の標榜、棟梁の材を得て宗再び興る、近く聽けば微風聲愈好し、三間の茅屋半間の僧。

橘洲　宗金藏主

千江月に印す光明藏、古佛心を傳へて一箇も無し、塔樣機前若し相問はば、南村は梅白く北村は蘆。（蘆を一に盧に作る。）

續芳　宗繼

誰か㋑鸞膠を把つて斷絃を理む、九年の弓少林より傳ふ、寒梅甲を破る六花の陣、箭を看よ威音空劫の前。

維馨　宗葩

東君の春信君が家に到る、是れより群芳次第に加はる、㋺逋仙香影の句を傳へ得て、暗中に摸索して梅花を識る。

有節　理忠尼、醫王門下

摠持尼少林の顰に效ふ、九年の皮髓を分ち得て親し、若し宗門の功第一を論せば、㋩峻標淸節麒麟に上せん。

壽峯　宗丘

㋑鸞膠。一に續絃膠とも云ふ、前に見ゆ、纘字を打するなり。
㋺逋仙。林逋、字は君復、宋の錢塘の人、和靖先生なり。
㋩峻標。龜鑑とか、よきけだかき手本などと云ふ意なり。

巍然として突出す衆山の中、老彭に比するに依俙として同じからず、鶴算龜齡を闘はしむるを休めよ、常春藤萬年の松に挂る。

傅巖　永霖

義層雲に薄る大丈夫、聖朝(ニ)雨落ちて物皆濡ふ、今に至るまで天下磐石を安んじ、野に在る遺賢畫圖に入る。

春芳　名は桂、建仁寺の沙彌

花は發く東皇の第一機、(ホ)根は蟾窟より遠く移し來る、少年能く(ヘ)狀元の日を記して、凌霄三月の枝を探り取る。

雪庭　名は瑞、建仁寺の沙彌

普通年後宋の丁卯、(ト)巽二先驅して滕六多し、松柏歳寒うして猶ほ忍ぶべし、梅花太だ瘦す又如何。

鐵牛

二輪園を鎔して一頭を鑄る、胡僧の心印誰れ有つてか酬いん、機に當つて(チ)拗折す黄金の角、少室山前高く(リ)牟と叫ぶ。

松雲　長

(ニ)雨落ちて。霖字を打するなり。
(ホ)根云々。桂字を打し來るなり。
(ヘ)狀元。進士の試驗に及第して一番となりたるものをいふ、宋史に「三場に狀元たり」と。
(ト)巽二。風の神、滕六は雪の神をいふ。
(チ)拗折。へし折ること。
(リ)牟。牛の鳴く聲。

帶を固うし根を深うす億萬年、春空靉靆として翠天に連る、風に隨つて若し夜來の雨と作らば、箇の一枝を留めて杜鵑を啼かしめん。

月岑　　宗圓、淨土宗

昨夜秋風廣寒を動す、桂花影映じて數峯殘る、(ヌ)雲斤郢人の手を借らず、削り出す青山の玉一團。

清芳　　淨土宗

帶水拕泥(ル)遠社の蓮、崑崙の鼻孔半邊穿つ、歸り來つて寥寥地を認むること莫れ、風幽香を送る落日の前。

蘭畹　　四十字藪殿、名は宗芳

蕙草多しと雖も以て加ふる蔑し、根を林藪に托す楚人の家、從來朝廷の上に在るべきに、香春畦に滿つ只だ一枝。

壽岳　　宗延、明石の則兼公

尼丘を以て老彭に比すること莫れ、(ヲ)金華の仙子長生を授く、嵩呼三十六峯の外、四海波平かなり萬歲の聲。

龍雲　　堀豐後守、名は宗興

(ヌ)雲斤云々。莊子に「郢人堊にて其の鼻端を漫ろ、蠅翼の如し、匠石をして切らしむ、匠石、斤を運らし、風を成し、聽いて之れを斵る、堊を盡して鼻傷らず」とあり。

(ル)遠社の蓮。蓮社十八賢、前に見ゆ。

(ヲ)金華の仙子。黃老即ち老子をいふ。

神物蜿蜒として石根より出づ、今に至るまで韓孟約猶ほ存す、一飛風雷の力を借らず、浪桃花を激して禹門に登る。

悦叟　鶴原氏宗怡求む

春門闌に滿ちて喜色多し、老年の花も亦溫和を帶ぶ、君が家自ら長生の訣有り、鶴算龜齡他に讓らず。

大業　宗繼

三千世界眼中に穿つ、㋺百二の山河掌內に收む、若し此の老の功第一を論ぜば、武門閥閱箕裘を續ぐ。

大成　宗功、備の甲族、廣澤

家業興る時日に轉た新なり、㋕美なる哉奐や美なる哉輪、籬邊の燕雀相賀するを休めよ、三百の周詩碩人を賦す。

義江　光忠禪門

足を濯ふ機前便宜に落つ、急流勇退運闍黎、丈夫の意氣層雲の上、渡頭の風月を閒卻し來る。

松翁

㋺百二山河。史記に、「秦は形勝の國、河山の險を帶び、懸隔萬里、持戟百萬、秦百二を得たり」と、古人倍を云ふて二と、蓋し百倍の意なり、地の利一人以て百に當るべき所をいふ。

㋕美云々。輪奐の美なるを云ふ、屋宇の高くして華なるをいふ。

根に㋵茯苓有り幾春をか經たる、㋟和扁の術を傳へて自ら神を願ふ、蒼髯豈に敢て秦垢に染まんや、萬岳千峯一老身。

松屋

蒼髯叟棟梁の姿有り、一木今大厦を支へ來る、十里の風聲聽けば愈好し、儒門の知識戒禪師。

榮仲　泉隆

士林古より英豪を出す、雲㋹新豐を擁して樹影高し、三尺の吹毛元動かず、太平の天下卯金刀。

太陽　宗旭、信州知久氏

足を衞る葵花日に向つて傾く、君を堯舜に致して丹誠を抱く、鵝湖山下神在すが如し、陰德今に至るまで人名を誦す。

春芳

造化私無し德隣有り、東君の雨露百花勻し、春は梅に於てすると秋菊に於てすると、敢て保す㋞張良が婦人に似たることを。

芳室　宗葩尼

紅釋迦春雨の過ぐるに隨ふ、紫彌勒曉風の吹くを待つ、天花亂墜す珠簾

㋵茯苓。寓生の植物、黑松の舊根株の邊の土中に自生し、塊を成すこと拳の如く、肉に紅白の別あり、藥用とす。淮南子に「千年の松下に茯苓あり」と。

㋟和扁。扁鵲等の醫術をいふ。

㋹新豐。白氏文集、新豐折臂翁、邊功を戒むる詩に、「幾くも無くして天寶大いに兵を徵す、戸に三丁あれば一丁を點ず、點じ得て驅け將ゐて何處か去る、五月萬里雲南行、聞道らく雲南瀘水あり、椒花落つる時瘴烟起る、大軍徒渉水湯の如し、未だ過ぎず十人二三は

の外、獅床三萬を撼動し來る。

喜雲　明怡大姉

十地の初め兮十地の終り、無心岫を出でて又風に隨ふ、君に一朶を贈る須らく怡悅すべし、春色光明兜率宮。

希周　宗鼎

㋸螽斯の詩一篇を留め得て、文有り郁郁として曾て遷らず、家を齊へ國を治む任似に似たり、能く蒼姫を保つ八百年。

花屋　周林信女

輪奐美なる哉桃李の中、珠簾甲帳春風に坐す、家家富を爭ふ瞿曇老、多卻す一枝微笑の紅。

繼芳　祖胤大姉

鷲嶺の一枝別春を傳ふ、燈花焔を續いで瑞光新なり、二三四七相承の後、更に芳を尋ね臭を逐ふ人有り。

梅隱　祐芳信女

一枝の春色人間を謝す、羸ち得たり水邊林下の間、試みに看よ娘生眞の面目、月花影を移す小

死す」と、即ち却つて新豐の雲氣、靜かなるをいひしものなり。

㋷張良。狀貌婦人の如しと、而して良計を帷幄の内に運らして、勝を千里に收むと、此の春芳、又婦人に類するか。

㋸螽斯の詩。螽斯は蝗の屬、一回に九十九子を生む、詩の周南に、「螽斯の羽詵々なり、宜なり爾の子孫振々たる」とあり、良く夫婦和合して子孫の多きをいふ。

孤山。

桂室　宗昌信女

根は是れ西天の胡種族、少林門下二株抽んづ、香を輸す白を遜る梅と月と、清きことは(ネ)姮娥宮裡の秋に似たり。

見室　妙心信女

佛眼も窺ひ難し一丈方、機を藏して密密露堂堂、桃花亂れ落つ(ナ)曼陀の雨、毘耶三萬の牀を撼動す。

月岫　慈園信女

宮裡の姮娥獨り欄に倚る、春花の影を移して人に與へて看せしむ、千山萬嶽雲收つて後、中峯を光照す玉一團。

慧雲　宗智信女

頓に十地を超ゆ未だ奇と爲さず、佛日の禪に參ず無著尼、(ラ)徑山三月の桂を攀折して、拈じて黑漆の竹篦と成し來る。

渭川　宗清信女

脩竹林深し千畝の秋、清流何ぞ敢て涇に混じて流れん、釣竿風穩かなり禁池の影、魚龍顏を畏れて

(ネ)姮娥。月の異名。

(ナ)曼陀羅華。適意華、天妙華、白花と譯す、花の名なり。光潔にして異香あり、見る者の意を喜ばしむと、桃花の雨に比するか。

(ラ)徑山。大慧宗杲禪師の住山、無著は師に就いて法を受く、鐵磨、總持等尼僧の傑出したるものとして稱せらる。

鈎に上らす。

天外　超

別傳向上の禪、坐斷す盡乾坤、天外に出頭して看よ、㋣毘盧脚下の邊。

花溪

微笑の尊者、廣長の能仁、水有れば月を含む、誰が家か春ならざる。

燈溪

四七燄を續ぎ、二三流を同じうす、龜を證して鼈と作す、須彌㋠點頭。

玉岫　梵圭

㋷溫潤縝密、山色連城、㋦藍田日暖かに、㋸崑崗烟生ず。

潤屋　宗璣信女（信女を一に信男に作る。）

恩光雨露新に、晩節其の身を保つ、無盡藏開くや、楊州家裡の珍。

睡足　相國寺雲澤の仁恕の請

㋾胸中の物八九の雲夢、眼底の書三萬の祿渠、雨過ぎて海棠春院靜かなり、清風一枕㋻黑甜の餘。

話月齋

㋣毘盧。毘盧遮那佛の略、光明遍照と譯す、佛の身光、智光が遍く理事無礙の法界を照して、圓明なるの義なり、宗教にては大日如來と稱するは、即ち是れなり。

㋠點頭。うなづいて頭を動すを云ふ。

㋷溫、潤、縝、密は玉の四德といひ、君子の德に喩ふ。

㋦藍田。搜神記に「玉を藍田に種ゑて美婦を得たり」と。

㋸崑崗。千字文に「玉は崑崗より出づ」と。

㋾胸中八九の雲夢。胸中の極めて大なるを形容して云ふ、前漢書司馬相如傳に「雲夢の如き者八九を呑む、曾て蔕芥せ

暮山の雲を拾ふて束ねて薪と作す、茶を煮て榻に對す主と賓と、曹溪は月を話り千峯は雪、一語應に俗塵に落つる無かるべし。

萬休齋

白鷗我れに似て未だ吾れを忘れず、迷悟聖凡二途無し、瓦解氷消甚の時節ぞ、心閒なれば㋮朝市も亦江湖。

半梅齋

梅は色を分つに因つて三白を遜る、雪は香あらざるが爲に一籌を輸く、㋘劉項元來天下半なり、枝南枝北鴻溝を割く。

大笑齋　五峯の請

籬邊の斥鷃鵬程を小なりとす、口を開いて呵呵天地驚く、此に到つて寒山手を拱して立つ、柴門月色大江横ふ。

松鷗齋　江心

多とす汝が書齋實に名に合へり、青松社裡白鷗と盟ふ、近く聽けば愈好し遠く聽けば好し、十里の清風撲鹿の聲。

愈好齋

す」と、雲夢は前に見ゆ、楚の七澤の一なり。

㋳黑甜。支那南方の俗語にて午睡をいふ。

㋮朝市。紫華雜沓の巷、江湖は人寰を離れし閑寂の處をいふ、即ち坐禪せば、四條五條の橋の上のゆきゝの人を、深山木に見ての心なり。

㋘劉項。劉邦、及び項羽を云ふ、史記に「項王乃ち漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西を割き漢となし、鴻溝而東の者を楚となす」と。

齋主老蒼顏、松を栽ゑて境の閒なるを愛す、微風聽き得て好し、天地一寒山。

㋑道號　下

希雲號

定光精舍は尾の古刹なり、迺ち㋺大覺門下の一派なり。其の徒宗端藏局、予が室を扣いて、朝參暮究、孜孜として倦まず、志勤めたり矣。一日來つて告げて云く、「某諱は端、請ふ和尚之れに字せよ、以て華袞と爲さん」と。仍つて命ずるに希雲を以てす焉。蓋し古㋩顏を希ふものは顏が徒なり、今日白雲を希ふものは白雲が孫なり、予が取る所茲に在るのみ。一偈を厥の上に係けて、遠大を祝すと云ふ。

顏に非ず驥に非ず是れ龍に非ず、棒雨喝雷風も亦從ふ、金圏栗蓬㋥鐵酸餡、甘棠故笏先宗を慕ふ。

明屋號

神高山龍寶禪寺は、和の望刹なり、其の主宗朝典藏、吾が門に入つて錫を挂くること年有り、晨參暮請怠らず、其の志嘉尚す可し。一

㋑道號。所得の道を表す語なり、又表德の號とも云ふ、佛道に歸入すれば、受業師、本師等法諱を授く、爾後參禪修道の結果を見て、知識、名匠、特に其の號を送る、故に道號といふ。

㋺大覺門下。日本禪二十四流の一、建長寺開山の大覺禪師蘭溪道隆和尚を以て派祖となす。

㋩顏を希ふ。孔子十哲の一、亞聖顏淵回なり、此の人たらんことを望むものは、卽ち顏の徒なりとなり。

㋥鐵酸餡。酸餡は餕餡ならん、

日側に侍する次で、席を前めて云く、「某諱有りて字無し、請ふ和尚之れを圖れ。」仍つて明屋を以て之れを稱す、幷せて村偈一章を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。

心月孤圓大法輪、㋭揚州是れ自家の珍に非ず、此の中花竹和氣有り、風光を占斷して主人と作る。

南華號

河陽の一縣に雛僧有り、諱を榮と曰ふ、族は逆卷氏なり。㋬齠齓の歲より、宜春法兄の室に投じて、師資の禮を執る焉。染衣の後、幾ばくならずして、而して盛和墳寺の席を主る。繩墨を忽にせず、緇禮肅如たり。一日華姪の好を通じて、予に就いて字を徵す、南華を以て之れに命ず。予不敏なりと雖も、且つ之れを說かん。夫れ南方は㋣離の卦なり、離の言は麗なり、日月は天に麗き、草木は地に麗く、其の德文明にして、而して華蟲の文有るが如きなり。華也草木欣欣として榮に向はんとす、春秋腓、咸く是れ南訛長養の功なり。蓋し㋠南華眞經は、莊座主荒唐の說なり。㋷遽然として蝶と化し、㋦栩然として南華に入る。然れども而も梅に近づかず、大椿八千の春秋に誇ると雖も、朝菌一日の榮を奈ともせず、予が取らざる所なり。因つて記す曹溪の能大師、

鐵にて作りたる饅頭にて、衲僧の嘴を下し能はざる意に用ふ。

㋭揚州。支那の地名、古より繁華の地として名高し、唐詩にも「烟火三月揚州に下る」とある、之れなり。

㋬齠齓。齒の代りて新しくなる時分にて、小兒七八歲の頃をいふ。

㋣離は八卦の中位南方に當る。

㋠南華眞經は莊子の別名、卽ち莊周の述なり。

㋷遽然は、自得の貌。

㋦栩然は喜び意に適ふ貌。

唐の龍朔中に黃梅の衣を傳へて、而して法幢を南華の地に建つ。斯の時宗に南北有り、曰く、南能、曰く、北秀。彼も一時なり、此れも一時なり、王侯の仰慕する所なり。宗門の榮、焉れより大なるは莫し。加之、吾が臨濟大師も亦南華の人なり。㋸檗嶠の棒下に於て、骨髓に痒徹するものは、臨濟一人のみ。故に檗、囑して曰く、「吾が宗汝に到つて大いに興らん」と。是れに繇つて之れを觀るに、或は八十生の知識、或は百世の師なり。榮也、二師の華胄たり、南華と稱す亦宜ならずや。他日梅嶺の春を河內に回し、臨濟の凉を天下に布かんこと必せり矣。祝祝。偈に曰く、

日輪午に當る㋾妙芬陀、花果同時に看よ若何と、曹溪別傳の旨を識らんと欲せば、一枝の春色多きことを須ひず。

一庵

一僧有り、諱を虔と曰ふ、肥の前州より來る、迺ち永明門下の徒なり。昔因を忘れず、一日予が室を扣いて字を徵す。來意の感ずる所、之れに字して一庵と曰ふ、蓋し來由有るなり。昔馬師、虔上に住庵す、鬼神の爲に夜垣を築く、果して八十四人を江西の派下に出す、亦護法の力にあらず乎。虔や他時異日、金鷄一粒を銜んで、十方の僧に供養せんもの、公に非ずして誰ぞや。之れを勉めよ、書して以て遠大を祝す。其の偈に曰く、

㋸檗嶠。黃檗、德山の兩師をいふ。
㋾妙芬陀。曼陀羅華をいふ、白蓮華のこと。

九州四海獨り翁と稱す、山鬼窺ひ難し密室の中、道ふ莫れ夜垣我れを助くるに非ずと、㋻江西此れより宗風を振はん。

汝雲號

神應主盟、祖泰藏主は、迺ち龍淵の龍孫、白雲の雲仍なり。姓は新見氏、備の甲族なり。一日予が室を扣いて字を徵す焉。予告げて曰く、「白雲は汝が祖なり、泰は汝が諱なり、汝雲を以て稱と爲す可ならん乎。」大凡そ雲の言は運なり、山川の氣石に觸れて起る、之れを雲と謂ふ。舒ぶるときは則ち㋕彌綸して四海を覆ひ、卷くときは則ち消液して無形に入る。卷舒自在、變化得て測る可からざるなり。按ずるに公羊傳に曰く、「朝を㋵崇へずして而して徧く天下に雨ふるものは、泰山の雲なり。」予が取る所玆に在り焉。若し教家に據つて之れを論ぜば、吾が佛、四種の雲を說いて四比丘に喩ふ。一に曰く、雷して雨ふらず、言ふこころは其の十二部經を誦して、而も人の爲に說かざるなり。二に曰く、雨ふりて雷せず、言ふこころは其の顏貌端正、好んで善友と相隨ふなり。三に曰く、雨ふらず雷せず、言ふこころは意儀を具せず、諸善を修せざるなり。四に曰く、亦雨ふり亦雷す、言ふこころは其の學問修習、自を覺し他を覺するなり。是れに繇つて三草二木恩に沾ひ、四生九類德を感ず焉。四種の中、亦雨ふり亦雷するは、是れ龍淵の雲耶。雨

㋻江西云々。江西馬祖禪師に比するなり。
㋕彌綸。廣がること。
㋵崇。終ふるなり。朝を終へずしてに同じ。

ふり雷せず、是れ泰山の雲耶。抑〻亦菩薩の十地を法雲と名くるなり。始覺の智、本覺の理に歸入して、而して始本不二なり。是れ乃ち汝が不二門なり。智行運動するときは則ち大智雲を起し、大法雨を灑ぐ。是れ㋟甘露門にあらず乎。佛は人なり、闍梨則ち雲水、不二則ち甘露門なり。德澤をしも云はん乎哉、法霈をしも云はん乎哉、他日朝を崇へずして天下に雨ふるものは、汝雲に非ずして而して誰ぞ哉。旃れを勉めよ。偈を作りて以て遠大を祝すと云ふ。

直に龍淵より起つて㋹四坤を覆ふ、盡扶桑國是れ仍孫、忽ち霖雨と爲りて㋞枯槁を蘇す、不二廣く開く甘露門。

雲華號

巢林庵頭の祥公藏局、俗は藤氏なり、洞家の名宿、之れに字して雲華と云ふ。系くるに一偈を以てす。然れども世の騷亂に罹りて、而して飛鳥を亡じ、驚蛇を失す、以て遺憾と爲す。頃ろ㋡楮皮を老拙に寄せて、㋥伽陀一章を求む、書して以て其の請を塞ぐと云ふ。

磐石根を託して膚寸新なり、天瑞氣を呈し地春を回す、春空一朶眞の烏鉢、持し來つて道人に贈るに堪へず。

㋟甘露門。具には甘露の法門、佛の教法を稱する語。施食法の奉請、發願門、諸陀羅陀を總稱する式文の名。施餓鬼を營むこと、又神足、善知識の意。
㋹四坤。四海に同じ。
㋞枯槁。やせおとろふること。楚辭に「形容枯槁せり。」槁は木の立ちがれなり。
㋡楮皮。紙なり、楮皮を以て作る故にいふ。
㋥伽陀。偈頌をいふ。

梅江號

對陽の宗信藏主は西源翁の小子なり、余が側に侍すること殆んど一兩霜矣。然れども堂に昇りて未だ室に入らず。一日㊉舊梓に歸らんことを告ぐ、蓋し慈明母を省するの謂乎。之れに餞して梅江の二字を摘み、以て道稱と爲す。夫れ梅の梅たる、春を㋠犧易の畫先に占む、白にして而も白ならず、紅にして而も紅ならず、宗を龍朔年後に分つ。頓にして頓ならず、漸にして漸ならず、謂つべし百花の魁なりと、嗚呼、實を道ひて花を道はず、説命の闕文乎、實を道はず花を道はず、楚辭の遺恨のみ。牡丹は實無し、荔支は花に非ず、豈に同日の語ならん乎。抑又江の江たる、江西に濫觴し、湖南に瀰漫たり。月の水に在る、猶ほ春の花に在るが如し。花に淸香あり、水に伶婆あり、之れを掬すれば月、之れを弄ずれば花、春湖の白鷗、自然に宜しい哉。他時異日、西來意を漏泄し、雪月花を流傳せんもの、是れ梅江にあらざらん乎哉、仍つて小偈を作つて以て祝すと云ふ。

西天の四七水器に傳ふ、東土の二三花衣に滿つ、畢竟花に非ず又水に非ず、暗香疎影㊃野薔薇。

永正六冬節後一日。

㊉舊梓。故郷をいふ。

㋠犧易云々。伏犧の易を畫する以前、卽ち梅の萬花のいまだ開かざるに獨り混沌を破りて魁くるをいふなり。

㊃野薔薇。三柳軒雜識に「薔薇は野客なり。」又香譜に「大食國薔薇花の露、五代の時、藩使十五瓶を以て獻す。」

古(ウ)礀號

昔僧有り、大龍に問ふ、「如何が是れ堅固法身。」龍云く、「山花開いて錦に似たり、礀水湛へて藍の如し。」玆に一僧あり、諱を良堅と曰ふ、紙を寄せて號を求む、之れを雅稱して古礀と曰ふ、余が字する所、其の大龍の舊話端に在る耳。堅禪堅禪、二六時(キ)提撕して看よ、古礀寒泉他物に非ず、若し是れ(リ)瞪目せば、爭か底を見ることを得ん。偈に云く、

主人門外の舊山河、風定つて(オ)湛然自ら波たゝず、空劫以前今日の事、落花流水早く蹉過す。

文仲號

竹隱軒主虎藏局、道稱を求む、之れを稱して文仲と曰ふ、仍つて貫華一章を唱へて、以て其の義を稱すと云ふ。

大器成る時道を載せて行く、(ク)管窺錯つて認む老書生、一朝跳出す(ヤ)南山の裡、凜凜たる威風(マ)八紘を動す。

龍光號

攝の下郡に古禪刹有り、醫王と曰ふ、廼ち天龍門下の末派なり。周珍首座其の席を主る。幼より

(ウ)礀は水のある谷、澗に同じ。
(キ)提撕。二字共にひつさぐる意、師家が學人を提携誘引して、正眼を開かしむること。
(リ)瞪目、目を張りて見開くこと。
(オ)湛然。水の清みたゝへたる貌。
(ク)管窺。くだの穴からのぞくことなり。小見をいふ。
(ヤ)南山。支那の南山、周の都せし豐鎬の南にあり、詩に「南山の壽の如く、騫けず崩れず」とある之れなり、又李白の詩に「弓は摧く南山の虎」と、然れども玆は必ずしも定まれる地名とも限らず。
(マ)八紘。八荒に同じ、八方の事なり、紘は八方の綱維なり。

醫を學んで、㋘盧扁の術を得たり。換骨の方、頤神の術、謂つ可し今日の醫王善逝なりと。近頃予に就いて字を徵す、龍光を以て之れに命ず。昔宋の司馬溫公、天下の宰相なり、僧有り、相公の諱の光字を避けて瑠璃皎佛と唱ふ、古今の㋻笑具なり。仍つて偈を作り、以て左證と爲す。

扶桑樹萬八千の東、國を醫し民を養ふ唯だ一翁、淨瑠璃皎の諱に觸れず、人參甘草再溫公。(淨瑠璃皎を一に淨瑠璃光に作る。)

春韶號

伶津首座は迺水派下の僧なり、一日入室の次で、予に字を徵す。之れに字して春韶と曰ふ。仍つて俚語一篇を摛つて、以て其の請を塞ぐと云ふ。

物陽和を逐ふて資つて始めて生ず、唐虞の禮樂昇平に屬す、吾が家の一曲宮商の外、㋵聞塵を洗ひ盡す流水の聲。

藏龍號

魯史に云く、「深山大澤は龍の窟なり。」宗澤藏主、余に就いて道稱を需む、之れに字して藏龍と曰ふ。偈を作り以て證と爲すと云ふ。

多年神物泥蟠に堪へたり、豈に池中に向つて獨尊を屈せんや、若し春雷蟄戸を開くに遇はゞ、鱗蟲

㋘盧扁。古の名醫扁鵲なり、盧人なるが故にいふ。
㋻笑具。わらひ草なり。
㋵聞塵。耳なり。

三百總に兒孫。

東明號

東山下の小阿師、諱を昇如と曰ふ、予に就いて字を索む、之れを雅稱して東明と曰ふ。仍つて貫華一章を製して、以て遠大を祝す。

先づ高山を照す日近き耶、之れを仰げば仁義の老釋迦、天外に出頭して須らく看取すべし、㊂八十の華嚴春花に在り。

芳才號

禪佐藏主、芳才と號す、吾が鄧林師兄の命ずる攸なり。紙を寄せて偈を求む。

花を攢め錦を簇らす好文章、覺範參寥當るべからず、正法輪を轉ず調羹の手、僧中今視る斯郎有ることを。　大永五年孟春。

桃嶽號

智康藏主、道稱を予に求む、命ずるに桃嶽の二字を以てす。蓋し㊃丹田の神、之れを桃康に認む、義此れに取るのみ。仍つて拙偈一章を唱へて、以て左證と爲すと云ふ。

古來度朔神茶を仰ぐ、直に丹田に入つて衆邪を摧く、洞中春色の嫩を羨まず、金輪法外斯の花有

㊂八十の華嚴。即ち華嚴經なり、譯者によりて其の卷數を別にす、實叉難陀の譯、唐の證聖元年に東都の佛授記寺に於て譯したるもの唐經ともいふ、八十卷あり。佛自證の眞理を解きたる經典なり。

㊃丹田。梵音、優陀那の譯、臍下一寸五分許りの所、體氣をこゝに集むれば精神散亂せず、思惟に通ずといふ、臍下の丹田を下丹田と云ふに對して、兩眉の間を上丹田といふ。

り。　昔享祿第四辛卯夷則吉辰、妙心住山大休老衲書す。

直指號

吾が山の後版、㋐鄧林の一枝、諱を謂と曰ふ、俗は甲族仁木なり。予に就いて道稱を需む、直指を以て之れに命ず。因つて偈一章を摛つて、以て其の義を證すと云ふ。

心地平かなる時繩墨正し、法梁高く架す鄧林の材、少室單傳の器を成せんと要せば、先づ斯の門より入得し來れ。　天文龍集壬寅三月如意殊日。

蘭圃號

駿陽に沙彌あり、諱を金と曰ふ、予之れに字して蘭圃と曰ふ。禪詩一篇を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。

㋚九畹移し來つて深く芽を託す、風流種有り謝公が家、春風競秀山林の裡、十㋖蕙一枝三四花。（芽を一に才に作る。）　天文十七祀戊申夏五十又二。

桂峯號

慶昌藏主、號を需む、桂峯の二大字を書して之れに與ふ。偈に云く、

少林の惡孽、忽ち天香を發す。雲外に出頭して、三色蒼蒼たり。

㋐鄧林。宗棟、細川氏、山城州の產、特芳和尙に久侍し、得る所あり、後妙心、大德寺等に住し、後柏原帝特泥綸旨を山門に下し賜ひて曰く、「正法山妙心禪寺は大燈國師上足の草創草閑、先院御願の蘭若なり、是を以て綸命舊に復す、再興時を得」と、以て其の接化の機を推知するを得。

㋚九畹は畠なり。楚辭に「旣に蘭の九畹に滋し、又蕙を百畝に樹う」と。

㋖蕙も蘭の一種なり。離騷に「蘭芷變じて芳しからず、荃蕙化して茅と爲る、何ぞ昔日の芳草直ちに此の蕭艾と爲る」と。

覺翁號

賢等老人、楮皮を寄せて道稱を求めらる、之れに命ずるに覺翁を以てす。蓋し敎中に等妙の二覺有り、十信位より十地を歷て、而して等覺に至り、等覺一轉して而して妙覺に入る、之れを覺行圓滿と謂ふなり。佛とは覺なり、翁とは老稱なり、佛は是れ西天の老比丘なり。覺と云ひ翁と云ふ、字義炳然たり。若し吾が宗に約せば、一棒一喝の下、頓に正覺を成ずるものは誰ぞ哉、四海の一暮翁のみ。其の偈に曰く、

迷悟元來二途無し、黃塵烏帽白頭顱、眼は高し三世十方の外、老瞿曇を呼んで我が奴と作す。

業仲號

河陽に丹下氏有り、畠山源公幕下の臣なり。世〻忠功あり、而して宗因信男は厥の宗なり。永正庚辰の春、源公の爲に、命を戰場に致す、謂つ可し亂世の英雄なりと。其の徒、紙を寄せて因公の字を求む、之れを稱して業仲と曰ふ。仍つて山偈を賦して以て左證と爲す。

道君臣を合す小緣に非ず、名家の父子一時の權、能く邦國を醫して功成つて後、日は落つ葛洪が丹井の西。

雲江號

越の太守、藤氏松井宗信公は、源右典厩幕下三代の忠臣なり。所謂武門の干城、法社の牆塹な

り。先師之れに諱して守慶と曰ふ、老拙之れに字して雲江と曰ふ。仍つて伽陀一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

朝來岫を出でゝ自ら無心、白鳥明かなる邊春水深し、此に到つて老龐も口を下し難し、旱天に雨と爲り又霖と爲る。

榮中號

多多良氏奈良元吉公は、源右京兆幕下の忠臣なり。弱冠より主に奉じて晨夕を廢せず。官暇の日、雪に螢に、父の書を讀んで而して遂に射騎の妙を得たり。一弛一張、文武の道未だ地に墜ちざるもの乎。之れに加ふるに、公、昔吾が鄧林法兄の室に入りて衣を受け、㋴安名して宗繁と曰ふ、謂はゆる俗にして而して眞、眞にして俗なるものなり。今玆に大永乙酉夏、法門に㋱瓜葛たるの故を以て、予が龍安の室を扣いて㋯祝髪染衣す、其の志勤めたり矣。一日話する次で、楮皮を出して字を立せんことを需む、命拒む可からず、字して榮仲と曰ふ。因つて記す、漢の㋛朱翁子錦を衣て郷に歸る、是れ翁子一時の榮耀なり。宋の蘇内翰、燭を賜ふて院に歸る、是れ内翰一場の富貴なり。蓋し公、

㋴安名は、新戒得度の者の爲に初めて法名を安んずること、得戒受具の者は父母の作ろところの名を稱すべからず、必ず佛法によりて、法諱法名を安んずべきなり、存命中得戒、又は出家せざるものには死後、歸戒、剃度を授けて、然るのち法名を安んず。

㋱瓜葛。親類のつゞきをいふ、法門に瓜葛は法系なるをいふ。

㋯祝は斷なり、祝髮は剃髮に同じ。

㋛朱買臣、字は翁子、吳の人なり、始め貧にして妻孥に棄てらろ、後會稽の太守を拜し、大に富み故郷に歸ろ、故妻之れを羨望し、遂に自縊すと。

源君の命に榮中して、而して祿を賜ひ官に拜し、位匠作に至るなり、一門の榮、焉れより大なるは莫し。內翰の富、翁子の榮、彼れも一時なり、此れも一時なり、予、榮中と稱するも亦宜ならず乎哉。禪偈一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

富貴前に耀く春一場、錦衣蓮燭恩光を帶ぶ、若し太守朱翁子に非ずんば、
內翰昔時の蘇玉堂。（帶を一に賜に作る。）　大永五夏五吉辰。

東明號

細川右京兆の幕下に一老臣有り、秀綱と曰ふなり。姓は源なり、氏は中澤なり、世〻越州刺史に任ず。公、蚤に㋴六藝の芳潤に漱ぎ、而して以て箕裘の業を繼ぐ焉。袞袞たる源流、藉藉たる家聲、言はずして而して知る可きのみ。是れより先、公、鄧林翁の衣盂を拜し、而して自ら㋪籌室の先登と稱す、翁之れに諱して宗晃と曰ふ。而して後予之れに字して東明と曰ふなり。夫れ公の人と爲りや、仲尼の日月を扶桑に揭げ、而して厥の末光を挹す焉。天地と其の德を合せ、日月と其の明を合す矣、㋲晃晃焉として之れに就けば日の如し。蓋し明の明たる、私照無きを以て明と爲す矣。然らば則ち誰れか其の德を仰がざらん乎、誰れか其の明を仰がざらん乎。予が命ずる所、義茲に在る而已、公厥れ之れを念へ。

㋴六藝。禮樂射御書數をいふ。
㋪籌室。住持人の居室、方丈、函丈に同じ。寶林傳に曰く、「西天の第五祖優婆毱多、石室あり、縱十八肘、廣さ十二肘、受學の者、一人の得道ある時は、籌遂に室に滿つ、毱多滅度に至つて室中の籌を將つて之れを茶毘す」と。籌は化度の人數を量る具なり。
㋲晃々。日の輝く貌。

㋝青帝春を司つて㋜震方に居り、道儒星月光を爭ひ亘し、元來宇宙雙日無し、赫赫たる威名扶桑を照す。　大永乙酉夏五吉辰。

大業號

寶泉寺殿前の常州刺史全勳大居士は、源家の棟梁、細川の砥柱なり。居士曾て龍安の室を扣いて、衣盂を義天師翁に受く。翁之れに諱して全勳と曰ふ、寔に宗門の㋑金湯なり。居士已に薨じて、㋺烏積み兎久し。蓋し源深きときは流遠し、厥の子あり、其の孫有るなり、一日來つて予に告げて曰く、「吾が全勳居士は、先龍安の命ずる所なり。然り而して其の諱を記して其の字を記せず、是れ遺憾のみ、請ふ、之れが爲に焉れに字せよ。」厥の辭肝に命ず、之れを拒む克はず、稱するに大業を以てす。因つて記す、㋩昔竺乾の猛將、人天百萬の兵を發して、三百餘陣を張る、雜華を先鋒と爲し、涅槃を殿後と爲す、堅を被り鋭を執り、魔壘を攻むること殆んど㋥四十九白。玆に於て魔軍大敗し、㋭波旬瓜の如くに潰ゆ。遂に邪を捨て正に歸する者、今に二千歳、其の功も亦大ならず乎。之れを望めば雲の如し、其の業も亦盛んならず乎。之れに就けば日の如し、於戲誰れか仰がざらん哉。

㋝青帝は春の神をいふ、尙書緯に「春を東帝と爲す、又青帝と爲す」と。
㋜震方。易八卦の震を方位にあつれば東方に位す。
㋑金湯。金城湯池、城池の堅固なること。
㋺烏積み兎久し。日月の經るをいふ。
㋩昔云々。釋尊の濟度の大略を記す。
㋥四十九白は四十九年なり。
㋭波旬。魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を成就し、僧を擾し、人の慧命を斷つといふ。天魔と相對して用ふ。

夫れ居士は天竺氏の將種なり、家系を言へば則ち源あり本あり、行迹を論ずれば則ち忠あり義あり、秋天と高を爭ふなり。倘し然らば大業と稱するも亦宜なり。仍つて一祇夜を唱へて以て左證と爲す而已。

用ひ得たり竺乾猛將の謀、源流袞袞箕裘を繼ぐ、昔年馬上に天下を定む、一劍霜寒し兩鬢の秋。

桃溪號

藤氏伴野は尾州の太守、諱は永勤、予に就いて字を徵す、之れに字して桃溪と曰ふ。蓋し靈雲見桃の義に取るのみ。仍つて貫華一篇を賦して、以て左證と爲すと云ふ。

（へ）武陵一たび源頭を失してより、千古花流れて水流れず、敢て保す靈雲の（ト）擔板漢、隨波逐浪幾時か休せん。

安邦號（待曉院殿と法號す）

藥師寺國長公は、梅の宮の奕葉、橘家の棟梁なり。幼にして而して孤、敏にして而して學ぶ。精を騎射に研き、思を倭歌に（チ）覃す、幾ど父の風有り。世〻京兆の幕下に仕へて、股肱の力を竭し、忠貞の節を持す、寔に遠大の器なり。一日官の暇、予が龍安の室を扣いて打話する次で、近前して曰く、「請ふ、師安名せよ。」予咄して曰く、「歷劫名無し、甚の安名とか說かん。」然り而して堅

（へ）武陵。桃源の義を跳出し來り、靈雲禪師の見桃悟道の因に混融するなり。

（ト）擔板漢。一面を見て全體に通ぜざる癡漢をいふ。僻見に譬ふ。

（チ）覃す。深く廣くする意。

く請ふて已まず、遂に之れに名けて紹泰と曰ふ。公、信受して而して退く矣。三四旬の後、㋷呉牋を寄せて字を需む、字して安邦と曰ふ。夫れ安なる者は止なり、凡そ人の一世に處する、安處に置くときは則ち安し、是の故に人情安を欲せざる無し。吁、累卵の危に居して而して泰山の安きを圖る、是れ復た人世の常なり。邦なる者は、古に謂く、「諸侯を封ずるを邦と爲す」と。(邦を一に國に作る。)禮に曰く、「大を邦と曰ひ、小を國と曰ふ。」二義既に明かなり矣。蓋し予が所謂安邦は然らず。昔漢の時、㋦賈誼、治安の策を上る、治安なる者は何ぞや、乃ち國を治め民を安んずるの策なり。上古の聖人、以て敎を設け政を施すの大本と爲す。竊かに以れば、公の祖及び子孫、三代、津陽の刺史を領ず、爰に治安の策を用ひて、而して蒼生を起し、㋸社稷を保つ者、年有り矣。因つて記す、洛社の耆英司馬光、偶藥師瑠璃光佛と諱を同じうす、兒童走卒も之れを誦す。(誦を一に稱に作る。)元祐中に召されて相と作る。是れより先、民、王呂が新法に苦しむこと久し、光、政柄を執るに及んで、議して以て舊に復す。抑國を醫し民を活するの術は、焚溺を救ふが如く爾り。㋾

㋷呉牋。支那製の紙なるべし。

㋦賈誼。漢の文帝の時の人、年二十餘にして博士となり、一歳にして大中大夫となる、禮樂を興さんとして讒に遭ひ、長沙王の傅となる、嘗て屈原を弔ふ文を作る、後、梁の懐王の大傅となり、治安策を上る、懐王馬より墮ちて死するに及んで、自ら責の重きを思ひ、哭泣すること歳餘、遂に死すと。

㋸社稷。國家といふに同じ、社は土の神、稷は穀の神、國は土穀によりて以て民を養ふ、故に立てゝ以て之れを祀る。孝經に「其の社稷を保ち、而して其の民を和ぐ」と。

㋾程明道、程顥、字は伯淳、宋の大儒、業を周茂叔に受く、元豐八年卒す。

程明道嘗て曰く、「君實の言は人參甘草の如し。」厥の無妄の疾、藥すること勿うして喜有るの謂乎。此れに由りて之れを觀れば、昔時の溫藥師は、宋室に相として君を堯舜の上に致し、今日の藥師寺は、津陽に守として枕を泰山の安きに置く。彼れは賢宰相、此れは賢太守、㋻支桑異なりと雖も、地を易へば然らん。件件は且く措く、吾が宗、別に安心の藥あり、公、試みに嘗過して看よ、必ず大安樂の地に到らん。祝祝。

㋕劉の爲に偏に左邊の肩を袒ぐ、國昇平に屬す四百年、且喜すらくは商顏猶ほ老いず、橘中の一局漢の山川。　大永五㋵禩季夏吉辰。

㋻支桑。支那扶桑の略。
㋕劉の爲云々。君の爲に偏に丹心を盡すをいふ。
㋵禩は祀に同じ、年をいふ。
㋟搏桑は扶桑に同じ。

輝岳號

攝の入江氏、一の奇男兒あり、幼にして棟梁の材を抱く、生れて而して風流の種と爲る。萬葉千歲を詠じて、精を雪に研き、六韜三略を學んで、思を螢に覃す。箕裘の業、將に寒氷ならんとす矣。一日老拙に就いて、法諱幷に道稱を需めらる、乃ち禪杲を授けて之れが諱と爲し、輝岳を之れが字と爲す。且つ告げて曰く、「拙聞く、入江は藤氏の的裔たり、厥の家聲や古今に輝騰す。昭昭乎として之れに就けば日の如し、巍巍乎として之れを仰げば山の如し。輝と曰ひ岳と曰ふ、亦宜しからず乎哉。」偈を作りて、以て遠大を祝すと云ふ。

卓爾たる高標攀づ可からず、日輪推し出す㋟搏桑の間、三千剎界光明藏、百億の須彌福壽の山。

模堂號（淸範は靈雲院の開基）

有馬の郡主赤松氏、一賢女有り、廼ち攝の刺史・橘國長公の◎萱堂なり。諱して淸範と曰ふ、字して模堂と曰ふ。老拙之れが爲に偈を作り、以て字說に代ふと云ふ。

◎百丈の叢規今尙ほ存す、三千の禮樂一乾坤、◎魯般此に到つて繩墨を絕す、月斧雲斤痕を見す。　天文龍集癸巳仲春日、大休老衲花園の見壓軒に書す。

心源號

菅家左金吾宗徹居士、予に就いて字を徵す、固辭する克はず、心源を以て之れに命ず。蓋し聞く、居士瑞龍門下の諸老宿に參じて、烏積み兎久し矣、謂つ可し檗嶠下の裴休、藥嶠下の◎李翺なりと。人中の烏蔑、希世の才なり。仍つて祇夜一篇を搆つて、以て遠大を祝すと云ふ。

龍淵の派脈菅原に屬す、聞くならく他は東海の的孫と、謂ふ莫れ祖師意旨無しと、黃河九曲して崑崙より出づ。

秀峯號

◎萱堂。詩の衞風伯兮篇に、「焉んぞ諼草を得て、言れ之を背に樹ゑん」とあり、背は北堂なり、母の居る所、之れを萱堂といふ。諼は萱に同じ、わすれぐさ、之れを食へば憂を忘ると。

◎百丈の叢規。百丈の古淸規二卷、大智禪師の撰、叢林規矩の第一の書なり。

◎魯般。孟子離婁上篇に、「離婁の明、公輸子の功も規矩を以てせざれば方員をなすこと能はず」の註に、「公輸子名は班、魯の巧人なり」と、淮南子に「魯般木を以て鳶を爲り、而して之れを飛ばす」とあり。

◎李翺は唐朝の人、朗州刺史たりし時、初め藥山に見ゆ、山顧みず、侍者白して曰く、太

駿州刺史源府君、入室參玄の次で、法諱を求む、之れを名けて宗哲と曰ひ、之れに字して秀峯と曰ふ。按ずるに倒に上り秀づるものは峯なり、蓋し義玆に取るのみ。仍つて偈を作つて、以て遠大を祝すと云ふ。

富士蓬萊日本の東、山顏老いず壽窮無し、虚空背上に頭を擡げて看れば、百億の須彌下風に立つ。

芥舟號

尾の賢太守武衞源公の幕下に禿居士あり、宗余と曰ふ。姓は藤、氏は織田、累代武門の勳閥なり。或人其の德を表して芥舟と號す焉。近頃楮先生を介して、一偈を予に求む。予之れを聞けり、千金を芥にし、萬乘を屣にし、而して雲夢の如くなるもの八九澤、其の胸に⊕芥蔕せずと、寔に光風霽月洒落の士なり。蓋し芥舟と號する所以は何ぞや、之れを莊子の逍遙篇に取る耶、「且つ夫れ水の積るや、厚からざれば、則ち大舟を負ふに力無し、杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥之れが舟と爲り、杯を置くときは則ち膠す、水淺うして而して舟大なればなり。」郭象曰く、「夫れ質小なるものは、資る所大を待たず、則ち質大なるものは、用ふる所小を得

守庭に在りと、翱性褊急にして乃ち言つて曰く、面を見んよりは如かず名を聞かんにはと。山太守と呼ぶ、翱應諾す、山曰く、何ぞ耳を貴んで目を賤しむことを得たる、翱手を拱いて之を謝す、問うて曰く、如何なるか是れ道山、山、手を以て上下を指す、曰く、會するや、翱曰く、不會、山曰く、雲は天にあり水は瓶にあり、翱禮拜し一偈を述べて曰く、「身形を練り得て鶴形に似たり、千株の松下兩函の經、我れ來つて道を問ふ餘説なし、雲は青天にあり水瓶にあり」と、盛んに方外の遊を爲す、居士の名漸く禪界に知らる。

⊕芥蔕。芥在といふが如く、胸中蔕とならぬをいふ。

す、故に理に至分あり、物に定極あり、各事に稱ふに足りて、其の濟すこと一なり」と。是れに繇つて之れを觀れば、一塵天を翳し、一芥地を覆ふ、居士其の兩間に生れて、仰いで瞻し俯して察す、天地は杯水の芥を浮ぶるが如し、身之れが舟たるなり。然して識浪の爲に溺せられず、淺深高低、情に適して逍遙す矣、飄飄乎として一葦の如く所を縱にす、樂しみ至れり矣。厥の德天地の間に昭昭乎として、莊が日月の如し、予が言其の明を掩ふ、豈に郭が霧に異ならざらん乎。嗚呼、濟川の材、諸れを含めよ、汝を用ひて舟と作さん、旃れを勉めよ。

芥舟平地に波を起す時、空裡の遊絲之れを繫がんと欲す、一夜風吹いて何の處にか去る、蟭螟海を負ふて蚊眉に入る。

春澤號

備の後州に甲族あり、姓は藤、氏は廣澤なり、因つて食邑を安田と號す。安田光忠、予未だ其の面を見ずと雖も、遠く書信を寄せて、諱號を需む。諱して宗光と曰ひ、字して春澤と曰ふ矣。蓋し之れを㊀淵明が春水四澤に滿つるの句に取るのみ。祇夜一篇、以て遠大を祝すと云ふ。

氷解け雪消して風波たてず、雲夢八九未だ多しと爲さず、天野水を浮べて眼俱に碧なり、一箇の白

㊀淵明春水四澤の句。陶淵明の四時の詩の起句なり、「春水四澤に滿つ、夏雲奇峰多し、秋月明輝を揚げ、冬嶺孤松秀づ」と。然れども許彦詩話にいふ「四時の詩は此れ顧長康の詩なり、誤つて彭澤集中に入る」と。彭澤は淵明の令たりし處なり。

鷗黃達磨。

月虎號

尾の甲族織田又六郎信張、冷香軒主に介して、諱號を予に求む。予竊かに聞く、此の郎人と爲り、威にして猛ならず、㋑虎の乙を挾むが如し。爪牙具り兮頭角全し、狐其の威を假り、羊其の皮に象るの屬に匪ずと。之れに諱して宗乙と曰ひ、之れに字して月虎と曰ふ。可ならん乎、軒主之れを㋺頷ふ。抑虎の虎たるや、㋩大戴禮を按ずるに、云く、「西に毛蟲三百六十あり、虎之れが長たり、生れて而して三日、㋥伏肉を飡はず、牛を食ふの機あり。始めて南山に入りて霧に隱るゝこと七日、厥の文炳然たり。」蓋し虎穴に入つて虎鬚を捋で尾を履むものは、乙居士に非ずして誰ぞや。昔長沙の岑禪師、月を翫ぶ次で、仰山、月を指して云く、「人人盡く這箇あり、只だ是れ用ひ得ず。」沙云く、「恰も是れ便ち儞を倩ふて用ひん那。」仰云く、「儞試みに用ひよ看ん。」沙一蹈に蹈倒す。仰山起つて云く、「師叔一に箇の大蟲に似たり。」後來人號して岑大蟲と爲す。是れに繇りて之れを觀れば、月と曰ひ虎と曰ふ、亦宜しからずや。氣類相感ずるときは、千峯の月に吼え、萬嶽の風に嘯く、凜乎たる餘勇、今に至るまで斑斑兒孫の在るは、

㋑虎の乙。虎の脊の兩傍の皮下にありと云ふ乙字形のもの。
㋺頷す。うなづく、承諾するなり、
㋩大戴禮。漢の戴德の輯むる所のものなり、甥戴聖の傳へたる禮記を小戴禮と云ふに對して名づく。
㋥伏肉。蓋し死肉を云ふなるべし。

乙居士の謂乎。偈を作つて以て遠大を祝すと云ふ。

毛群三百六十の長、兎子懐胎大蟲を産す、南山雲霧の裏を跳出して、一聲吼破す廣寒宮。

玉雲號

宗珪信女、紙を寄せて號を求む、之れに雅して玉雲と曰ふ。因つて貫華一章を唱へて、以て其の義を證すと云ふ。

崑山片片㋔崔嵬を覆ふ、帝㋗網重重㋖殿陔を鎖す、朝に風を逐ふて㋮荊岫を出づと雖も、㋘暮に雨と爲つて陽臺に到らず。

雲外號

和の山中に甲族あり、山田氏と稱す。武門の閥閲、法社の金湯、靈山の遺囑を忘れざるものか。是の故に兒卒も之れを誦し、草木も其の名を識る矣。宋の再温公か、齊の㋫諸田氏か、嘉尚すべきなり。復た斂外の宗を慕ふて、日に碧巖集を課す。之れを手にし、之れを口にして輟めず。近頃紙を予に寄せて字を徴す、或人之れに諱して宗公と曰ふ。蓋し公の義たる、天下大小と無く之れを稱して公と曰ふ、諱に宜しからざるなり。余公を改めて輿に作るの次で、之れに字して雲外と曰ふ。

㋔崔嵬。石山の土を頂くをいふ。

㋗網一本綱に作る。

㋖殿陔は殿堦に同じ。

㋮荊岫。荊山卞和　璧を出したる所、玉によつて之れをいふ。

㋘楚の襄王の故事、雲と爲り雨となりの意により、暮に到らざる意をとるなり。

㋫諸田氏。田横は齊王田榮の弟なり。通鑑集覽に「彭城既に漢の封を受く、田横其の屬徒五百餘人と海に入り、島中に居る、漢の高祖其の亂を爲さんことを恐れて、田横の罪を

按ずるに大戴禮に云く、「東に鱗蟲三百六十あり、龍之れが長たり。」然らば則ち公も亦鱗蟲の長たり、而して雲を起し雨を降す、人中の龍に非ずして何ぞや。其の變化得て識り難し。孔と云ひ休と云ふ、亦諡ひずや。仍つて偈を作り、以て遠大を祝すと云ふ。

和國の山河瑞氣濃かなり、風塵の表に出でゝ靈蹤を露す、由來是れ池中の物にあらず、且く春雷を待つて㋙臥龍を起さん。　天文十三龍集甲辰菊月㋓上澣日。

汝宗説

大雲山中に一の侍史あり、諱を派と曰ふなり、乃ち吾が西源翁の含飴なり。一日予が室を扣いて字を求む、之れに命ずるに汝宗の二字を以てす。侍史曰く、「其の說得て聞くべしや。」予曰く、「居れ、吾れ汝に語らん。夫れ法幢を建て宗旨を立する者、四七、西乾に㋢倡へ、二三、東震に傳ふ。而して曹溪の一滴此れより分る矣。波波浪浪、江西湖南の間に淼瀰たり。或は㋐五家、或は七宗、天下滔滔たるもの皆是れなり。誰れか吾が宗に歸せざらんや。譬へば水の海に朝宗せざる無きが如きなり。然りと雖も天下本

赦して之れを召す、横謝して曰く、敢て詔を奉ぜずと、使還り報ず、帝乃ち衛尉酈商に詔して曰く、齊王田横即し至らば敢て動搖するものは、族夷と致さんと、遂に義、漢に臣たるを恥ぢて自剄す、餘五百人尙ほ海中にあり、使をして之れを召さしむ、横の死をきゝ皆自殺す。」以て其の人と爲りを知る。

㋙臥龍。龍は蟄物なり、起てば必ず爲すことあり、英雄の未だ世に出でざるに喩ふ。三國誌に、「諸葛孔明は臥龍なり」とあり。蓋し之れに比するなり。

㋓上澣。上旬に同じ。

㋢倡へ。唱へに通じ、同義なり。

㋐五家。臨濟、潙仰、曹洞、雲門、法眼、七宗は此れに楊岐、黄龍の二宗を加へたるも

色の㋚白拈と稱するものは、臨濟一人而已。因つて記す、臨濟一日、松を栽うる次で、黃檗問うて云く、『深山裡に許多を栽ゑて甚麼か作さん。』濟云く、『一には山門の與に境致と作し、一には後人の與に標榜と作さん。』道ひ了つて㋖钁頭を將つて地を打つこと三下す。檗云く、『然も是の如くなりと雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。』濟又钁頭を以て地を打つこと三下す、噓噓の聲を作す。檗云く、『吾が宗、汝に到つて大いに世に興らん』と、一問一答、師資道合す矣。」侍史今厥の孫と爲りて厥の宗を定む、夫れ予が字する所、茲に在らず乎。他日若し㋙南浦の春を花園に回し、西源の流を桑海に激せば、吾れ汝を以て臨濟の正宗と爲さん。旃れを勉めよ。

のなり。

㋚畫盜などいひて、其の術の巧妙より機鋒端倪すべからざるに喩ふ。

㋖钁頭。大鍬の頭なり。

㋙南浦。大應國師をいふ。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二 終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之三

遠孫比丘衆等重編

(イ)立地

釋迦如來文殊普賢二大士安座の(ロ)開光

「本是れ天然の老釋迦、金剛の正眼塵沙を絶す。象旋獅擲大人の境、一會の靈山春花に在り。」筆、左眼に點じて云く、「錯。」右眼に點じて云く、「錯。」頂門一隻に點じて云く、「果然果然。」

三島江眞光寺本尊彌陀如來の開光

青山綠水無量壽、玉兎金烏雙眼睛、當處に豁開す(ハ)安養界、霜に傲る黃菊一場の榮。夫れ以れば、末劫濁亂願海澄清、枳里倶の三字の義を含して、(ニ)上中下九品の名を分つ。枯木の形段淵默の雷聲は、(ホ)四倒八邪を利濟して、(ヘ)諸

(イ)立地。地に立つ、地の上に起立するの意、又立地聽法といふ如き場合、又立ちどころ其の場にてなどいふ意にて、立地成佛などいひ、忽然などに同じ、此所は此の意をとる。

(ロ)開光。開光明、開光佛事の略、開眼、點眼に同じ。

(ハ)安養界。九品安養界ともいひ、極樂世界をいふ。

(ニ)上中下九品。觀無量壽經に、極樂世界の果相を說き、上、中、下に各また上、中、下ありて、總じて九品ありとなす、これその往生の因種に區別あるを以てなり。

有を空盡す。㋣十惡五逆を捨てず、衆生を接取す。右脇は大勢至、左邊は正法明、主と作り伴と作る、弟の如く兄の如し。凡聖同居、西方を十萬億に縮め、神仙の靈境、三島を咫尺程に移す。人々如來地に入り去る、箇々毗盧頂を蹈んで行く、也た奇怪也た奇怪。白鼻の崑崙は太平を賀す。山僧別に眞光を點出せん。看よ看よ。㋠寶樹寶臺七重の影、檀門成ずる日寺門成ず。收。

觀音點眼

㋷梵釋天を照す雙眼睛、湯池と作り也た金城と作る、普門㋦八字に打開し了る、永く護す吾が山の正法明。

心安浄源居士、法華千部を誦する供養の語

㋭四倒。四顚倒の略、迷界の衆生は明智なき故、常に正理を顚倒して見解するものこれなり、凡夫世間の實相なる非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨となすをいひ、二乘及び菩薩の四顚倒は、涅槃の實相なる常を非常、樂を非樂、我を非我、淨を非淨とするなり。

㋬諸有。四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、那含天、四禪天、四無色天等を總稱していふなり。これを有と稱する所以は、これ等の諸界は、因果相續して果中未來の果を結ぶべき因を具有するが故なり。

㋣十惡五逆。十惡は十種の惡業、殺生、偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪慾、愚痴、瞋恚をいひ、五逆罪とは恩田に違逆し福田に違逆する五種の暴惡なる罪過、五無間業ともいふ、殺父母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血をいふ、又小乘及び大乘等によりて小異あり。

㋠收。攝取、をさめざるなしの意、つくせりといふが如し。

㋷梵釋天。梵天帝釋天の略なり、梵天は印度教の神名にして、彼にありては天地創造の神として諸神の主位を占む、この神は佛教保護の神として、佛教徒によりても信仰せらる、多くは帝釋天と共に佛像の左右に侍す。

㋦八字は妙法蓮華經普門品をいふ。

㋸丱歳。丱はあげまき、小兒の髮の結び方なり、七つ八つの年頃をいふ。

㋾五味。乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五つをいふ、之れを阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時に配するなり、醍醐は

薩訶世界南贍部洲、扶桑國攝津州に居住する奉三寶の弟子藤原朝臣親吉、形俗に處すと雖も、心は浮圖氏の如し。㋸卅歳より日に法華を課す。寸陰分陰、之れを手にして釋てず、之れを口にして輟めず、一部に始りて千部に終る。謂つ可し在家の菩薩と。也た其の功大なる哉、其の德至れる哉。那由他の舌を以て、說いて塵劫に到るも、豈に盡す可けんや。夫れ法華は諸佛出世の本懷、衆生成佛の直路、是の故に諸經の中に最も第一たり。五時を以て之れを配すれば、則ち日午に三更を打す、㋵五味を以て之れを分てば、則ち酥酪醍醐と變す。妙の一字、三世の佛も說き盡さず、歷代の祖も提不起、展ぶるときは則ち天を拄へ地を拄ふ。收むるときは則ち毫を絕し釐を絕す。妙の妙、玄の玄、不可說不可說、不思議不思議。蓮の華たる、內虛にして外直なり、五濁の水を出でて心華開發す。之れを淆せども濁らず、之れを澄せども淸まず。其の色や也た黃絹幼婦、其の香や也た八百の鼻功德、當體の蓮、譬喩の蓮、色卽空、空卽色。然らば則ち妙を離れて蓮無く、蓮を離れて妙無し。開權顯實の花、本迹二門一時に豁開す。伏して冀はくは、心安淨源居士、這の㋻經王讀誦の功に憑つて、㋕羊鹿牛に駕せず、頓に火宅を出でて象兎馬を叱起して、

究竟の法理法門と喩ふ。

㋻經王。法華經をいふ。

㋕羊鹿牛。法華經譬喩品に出づ、大要に曰く、「某長者邸宅に火災ありしが、小兒等は遊戲に興して出でざる故、長者はために門外に羊鹿牛の三車ありて、汝等を待てりとすかし、以て小兒等を火宅より救ひたりといふ、羊車はこれを聲聞に、鹿車は之れを緣覺に、牛車はこれを菩薩乘に喩ふ」と。

㋵華封の三祝。莊子に「華の封人、堯を祝して曰く、願はくは男子多かれ、壽多かれ、富多かれ」と。

㋟石火光中は瞬間をいふ。

直に三乘を超えん。加之、㊂華封を三祝に致し、藤氏を萬世に盛にし、梵釋龍天之れが爲に證明し、鬼主鬼官之れが爲に合掌せん。然も是の如くなりと雖も、山僧別に七軸を撥轉する底の活手段あり。居士高く看經の眼を著けよ。八邪の轍を翻轉して、一乘の大車と作す、眞の寶處に到らんと欲せば、風流當家に屬す。

石塔を建つる語

元來無縫鐵崑崙、塔樣分明なり誰れか敢て論ぜん、㊇石火光中高く眼を著けよ、風荷葉を翻して露團々。

㋑拈香

㋺鼻祖忌

禪と說き道と說く是れ爭の端、㋩肉を分ち皮を分つて猶は未だ寒からず、梁魏の山河野狐の窟、人をして多少疑團を著けしむ。

廓然の一箭已に絃を離る、面壁弓を挂く八九年、天下今落鵰の手無し、等間に飛び過ぐ竺乾の西。

野狐跳つて太平州に入り、六宗を破却し俗流を誑かす、㋥熊耳峰高し一痕の月、空しく隻履を埋めて愁を埋めず。

梁魏の小山河を眇觀して、風浪花を捲いて㋭蘆葉過ぐ、大藏五千餘卷の外、片岡別に一篇の歌有り。

梁魏の山河亂れて麻の若し、果然として賊は貧家を打せず、何の面目有つてか西に歸り去る、冷笑す江湖の鷗一沙。

神光三拜相當らず、五逆の兒孫錯つて擧揚す、若し西來意旨無しと道は

㋑拈香。香を拈じて爐に焚くこと。

㋺鼻祖忌は達磨忌をいふ。

㋩肉を別つ云々。道副、摠持、道育、慧可は達磨門下の四神足なり、道副、皮を得、摠持、肉を得、道育、骨を得、慧可獨り髓を得と、便ち道の深淺によりしをいふのみ。

㋥熊耳峰。祖庭事苑第三に曰く「熊耳嶺は卽ち達磨の塔所なり、塔の記に曰く、大師化緣已に畢る、傳法人を得、乃ち端居して逝く、大同二年十二月五日なり、熊耳山に葬り、塔を起つ」と、後魏の宋雲、

ば、直に須らく東海變じて桑と成るべし。

隻履は西に歸り隻履は東し、九年面壁楚人の弓、今朝拾ひ得て香片と爲す、落葉吹き殘す昨夜の風。

這の㋬野狐精丘に首してより、叢林千古宗猷を失す、自家頻に單傳の葉を掃つて、梁王臺上の秋を管すること莫れ。

石上の油麻惡芽を生ず、西來萬里袈裟に裹む、㋣眞丹闊しと雖も餘地無し、移して扶桑に入つて毒花を開く。

達磨大師千年忌

千年の滯貨祖師の禪、賣弄何ぞ曾て半錢に直らん、衲僧辛辣の手に觸著すれば、野狐涎も亦龍涎と作る。

妙心開山忌拈香

香を擧して云く、「關山の梅は臘天に向つて開く、雪に和して一枝拈出し來る、只だ兒孫五逆を消するが爲に、臥龍奮迅して雲雷を起す。大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺、大永元年臘月十二日、山門伏して開山師祖關山大和尚㋠瘞履の辰に値ふ。鐘を鳴し衆を率ゐて、微笑塔下に就い

使を奏じて葱嶺に於て師の手に隻履を携へて往くに逢ふと、依つて塚を發いて見れば、槨中只だ隻履の存するのみと。

㋭蘆葉過ぐ。達磨初めて梁の武帝に相見して、問答應對するに機宜投合せず、依つて遂に江を渡りて、北の方魏の國に向つて去れり。傳燈錄に其の渡江を記して、「葦一葉を折りて揚子江を渡り、梁を去る」と。

㋬野狐の精魅なり、化けものなり、他を抑下して評する語、また意に托上して用ふること少からず。

㋣眞丹。震丹、又は震旦と書す、支那をいふ。

㋠瘞履。瘞はうづむこと、履を埋むにて屍を收むることをいふ。

て、嚴に香華燈燭菲薄の禮奠を備へ、同音に大佛頂萬行首楞嚴神咒を諷演する次で、住持比丘宗休、這の崑崙耳を劄いて、聊か小香村と作し、慈蔭に上奉し、以て（り）涓埃に充つ。餘薰必ず三際に亘り、九垓に逼からん。共しく惟れば、大和尙活機電轉じ、微笑春回る、正法眼藏を淩滅し、本分の鉗鎚を賣弄す。國師に嗣いで兩朝の帝王に謁す、捲輪冠無憂履、風顛を愛して四海の英衲を罵る。單傳の器、直指の才、御爐の煙、袈裟角に裏み、方丈の雨、錦繡堆に洒ぐ。全く他力に依る。聖胎を長養す、異代名を同じうして、百千の林際を七歩に屈す。透關眼を具して、大小の雲門を半杯に空ず、坐來星彩收り、月華散す。喝下地軸折け、天柱摧く。信州の海棠花謝し、故園憶ふこと有り、吳宮の野草、綠老いたり。徑路無媒、郊麟逃れ藪鳳竄る、夜鶴怨み曉猿哀む。再來何の時ぞ、且く祖塔の紅瑪瑙と變ずるを待つ。示寂斯の日未だ吾が山の碧崔嵬を露すを見ず。蓋し左に袒ぐ者は（ぬ）呂の爲にす、風に趨る底は（る）隗よりす。讎に酬ゆるときは、則ち頭綱八餅、恩に報ずるときは、則ち熱鐵數枚、恩に報ずるが是か讎に酬ゆるが是か。更に道へ、更に道へ、快哉快哉。」香を以て爐に插んで云く、「猶は霜に傲る一莖の菜有り、牀脚下に向つて手づから栽培す。囫。」

鄧林和尙入牌祖堂　大永二年十一月二十五日

（り）涓埃に充つ。恩願の萬分の一を報ずるの意。

（ぬ）呂は漢の呂后の族をいふ。

（る）郭隗先生をいふ、燕の昭王に事へ、昭王賢者を招くに當り、曰く、王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら使へらるなり、以て隗より賢なるものをやと。

牌を拈じて云く、「列聖叢に贋本の碑無し、諸方莫教あれ海螺兒、(ヲ)鼇山一夜同參の話、雪梅花に在り誰にか說向せん。恭しく惟れば前住當山第十七世鄧林法兄大禪師、通方の作者、見處師に過ぎたり。蚤く京兆の幕府を辭し、晩に百丈の叢規を董す。塵塵刹刹、熾然說法、巍巍堂堂、肅如たる威儀、祖月禪風、達磨氏の倭歌の體を學ぶに效ふ。怪巖奇石、寒山子の梵語の詩を題するに擬す。每に百則の公案を評して、痛く八敎の闍梨を罵る。鸞鳳を雲間に望む、(ワ)泰華峯仰げば彌々高し、龍蛇を格外に辨ず、(カ)淄澠の水嘗めて之を知る。上根中根下根の群衲を接し、正法像法末法の住持と稱す、賓主互換、棒喝交馳す。御園春回る、艸色染め成して藍樣翠かなり。先廬秋晩れ、廬橘花開いて楓葉衰ふ。瞎拄杖正に好し、力を著くるに、爛枯柴檢束して知に酬ゆ。若し驢胎馬腹の内に入らずんば、何ぞ其れ鵲噪鴉鳴の時を了せん。錯錯。且く道へ、世尊金襴を傳ふる外、別に甚を將つてか大龜に付す。」顧視して云く、「侍者、平胃散一盞を點じ來れ。」

(ヨ)興宗和尚入牌祖堂　　天文四年乙未五月二十一日

這の瞎驢堆瞎漢を容る、百千の臨濟一叢林、後人の標榜山門の境、卽ち

(ヲ)鼇山。雪峰義存禪師、師兄岩頭全奯禪師と同行にて鼇山に到り、一夜岩頭の提撕により大悟成道せし故事をいふ。

(ワ)泰華は泰山及び華山をいふ。

(カ)淄澠の水。列子に淄澠の水は味を異にす、されど既に合すれば、其の味を辨知し難し、唯能く味を知る所の易牙のみは嘗めて之れを辨知したりと。以て聰明なるもの善く微妙の義理を辨知するに喩ふ。

(ヨ)興宗和尚。諱は宗松、美濃瑞龍寺の悟溪頓に參じて、遂に悟溪の印記を受けて、後妙心寺、龍安寺に住す。曾て播越す、豐後の刺史齊藤氏、大寶寺を創め師を請じて開山始祖となす、文龜四年勅命により大德寺に陞る、後、尾張の瑞泉寺に移る、大永三年六月二十一日寂す、勅して大猷慈濟禪師と諡す。

是れ吾が家の大寶の箴。共しく惟れば前住當山第二十三世興宗松公大禪師、之れを仰げば佛日彼の傳霖に逢ふ、辛苦十年、汗馬を心地に收む。震驚百里、瑞龍を㋟蹄涔に起す。吾が宗大いに興るの日に際して、由來積德の陰を感ず。上に㋹蘇有り下に苓有り、諸子密付の志を抱く。梅に始つて㋞楝に終ふ。此の翁已墜の風を回す時、烏鉢を現す。地、黃金と變ず、眞淨の宗敎大珠に類す。橫說竪說、虛堂の兒孫東海に在り。以心傳心、明月夜光、多くは劍を按ずるに逢ふ。高山、流水、只だ知音を貴ぶ。者裏還つて祖師有りや麼や、井底に林檎を栽うと道はず。㋡咦。

花園法皇二百年忌の香語

曇華再び現ず百花園、稽首す。
法皇無上尊、是れ恩に報ずる耶、是れ德に酬ゆるか、龍涎吐き出す鐵崑崙。

㋧龍泉景川和尙七年忌

扶桑國裏一禪翁、舌龍泉を振つて氣虹を吐く、滿肚の無明七年の雨、㋤三千條の罪落花の風。

㋟蹄涔。馬蹄などの跡に水の溜りたるもの。

㋹蘇。れなしかづら、苓は藥草の名。

㋞楝。あふち、高さ丈餘、葉は槐の如く尖り、三四月頃花を開く。

㋡咦。い、又いい、大呼なり、又笑ふ貌、師家が學人を接得する場合に、法語の結末、意盡き語窮つて發する語、宗門多くは香語、或は引導法語の中間に唱ふ。

㋧景川。諱は宗隆、姓は平氏、伊勢の人なり、幼にして本州の圓明寺に投じて剃具し、初め尾張の瑞泉寺の雲谷祥に參じ、又愚溪寺に義天詔に謁し、尋いで讃岐慈明庵の桃隱朔に參じ、後、龍安寺に雪江琛に依る、一日入室、問を發せんとして師の一拆に逢ひ、豁然として大悟す、大和興雲寺、

㋶特芳和尙十七年忌

恩を知つて今日恩を報ずることは易く、毒に中つて當時毒を用ふることは難し、將に謂へり先師肉猶ほ暖かなりと、疎籬の㋰殘菊霜を帶びて寒し。

特芳和尙三十三回忌の香語　天文六年

吾が正法を滅す瞎驢の漢、項上の鐵枷三百斤、一炷の爐香阿鼻の種、㋻業風吹いて北山の雲と作る。

賢甫宗喆首座七周忌の拈香　師時に河州に在り

「昔時何事ぞ㊉冤家を結ぶ、驀地に掀飜す奈落迦、我れに本來の香一瓣有り、風に和して吹き送る七梅花。今茲永正第九仲春二十日、伏して賢甫宗喆首座七周忌の辰に値ふ。厥の徒外記愉乎、山僧に告げて曰く『洛の北桂蔭の舊廬に就いて、某兄某弟、春色分に隨つて、或は花を拈じて佛に供じ、或は柳を折つて僧に齋す。嗚呼、何を以てか涓埃の報と爲さん乎。願はくは師の一偈を請ふ、往いて以て例に隨はん。』也た山野咄して曰く、『一棒一喝、是れ外記の報にあらずや、無言無說、是れ山野が偈にあらずや。無

伊勢の瑞應寺、京師大心院は、皆師の開山始祖たり、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、伊勢の大樹寺等に歷住す、文明六年詔を受けて大德寺に視篆す、明應九年三月朔寂す、本如實性禪師と諡す。

㊉三千云々、師末期の偈に云く、「元本の無明、七十六歲、末後の牢關、三千條の罪」と。

㋶特芳。諱は禪傑、尾張熱田の人、業を妙喜院の瑞石岩に受く、後雪江琛に參じて契悟す、出でて尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、攝津の海淸寺、京の妙心寺等に遷る、又丹波の龍潭寺を剏む、後大德に陞る、又細川政元聘して龍安寺を董さしむ、永正三年九月十日寂す、大寂常照禪師と諡す。

㋰殘菊。忌日は九月十日、故に景情を叙舒して併せて其の德

垢稱の曰く、汝に施す者を福田と名けず、汝を供養する者は三惡道に墮すと。外記外記、恩に報ずるや、讎に報ずるや、以て加ふること蔑し焉。』然りと雖も、乞うて輟めず、遂に香語を唱へて請に酬ゆる者なり。夫れ惟れば某名、古道の顏色、宗門の爪牙、洋嶼の黃楊の禪に參ずるときは、則ち二十年辛苦を喫す。松源の黑豆の法を用ひるときは、則ち三千里誵訛を見る。志鴻鵠を凌ぎ、眼龍蛇を定む。蓋し首座說法如何。晝は閻浮、夜は兜率、而して先師の公案未了なり。水は黃河、山は太華、餘波左右に及ぶと雖も、殘夢袈裟に裹み難し。春風樓下生前の酒を愛し、水晶簾中睡後の茶を煎ず。加之、七步の臨濟を罵倒し、一宿の(リ)永嘉を驚起す。歸去來歸去來、天は白雲と共に曉け、沒交涉沒交涉。泉は石徑を銜いて斜なり。此れは是れ賢甫首座の無盡藏陀羅尼三昧なり。別に後昆を覆蔭する底の句を要す、諸人試みに嫩桂新芽を長ずるを看よ。」香を以て眞を指して云く、「幸字脚し邏沙、石上に油麻を種う。咄咄。」　江南釋宗休和南。

前住普門月心照公座元三十三年忌の香語

「雜華を按ずるに人間に香有り、名けて象藏と曰ふ。龍の鬪に因つて生

に比するなり。

(ウ)業風。業の力に煽られて、惡處に苦を感ずるを猛風に譬へていへるなり、大乘義章には、「業力風の如く、諸の衆生を吹いて惡處に苦を受けしむ」とあり。

(キ)冤家。仇敵といふが如し、心に忘れられざるの意に用ふ。

(リ)永嘉。永嘉玄覺禪師、曹溪に參じ、一宿して大悟徹底す、時に學者輻輳し、眞覺大師と號す、先天二年十月寂す、無相大師と謚す、證道歌一篇、永嘉集十篇あり。

(オ)鶻崙。崑崙、渾淪などに同じ、崑崙山の略、又は崑崙國、又物の渾然として未だ分割せざるをいふ、又人の頭をいふ場合あり、又混沌未分時の意に用ふ。

(ク)曼陀羅華をいふ。

(ヤ)三摩地。梵音サマードヒ、等

ず、若し一丸を燒けば、卽ち大香雲を起して、王都に彌覆す。七日の中に於て、細香雨を雨ふらす。」香を擧して、「山僧亦那一香有り、生鐵鑄成す底の㋔鶻崙、之れを未兆の先に得たり、卽今鎚碎し將ち來つて兜羅綿よりも輭かなり。大慈雲を白花巖に起すときは、則ち猗蘭四十里の臭氣を退く。㋗小曼陀を金粟室に澍ぐときは、則ち蟾桂五百丈の芳鮮を奪ふ。上碧落を穿ち下黃泉に徹す。鶻崙卽ち象藏、象藏卽ち鶻崙。一回這の香氣に觸るゝ者は、㋳三摩地より㋮普門に入得す、諸人還つて入得すや麼や。別々。綠楊晝暗し鷓鴣の烟。大日本國攝州路慈雲山普門禪寺守塔比丘聖安、維時享祿三年龍庚寅に集る㋘孟陬二十七日、山門玆に前住當山月心照公座元禪師三十三白遠忌の辰を迎ふ。庚に先つこ

持と譯す、又正心行處ともいふ、實を修すれば、心一境に住して動かざる故に名づくと。

㋮普門。法華經二十八品中の第二十五品に見はれたる觀世音菩薩普門品の所說の抽象的約語なり、この品の中には兩番の問答あり、前者は觀世音を論じ、後者は普門の法を論ず、實相の法は、圓法なるが故に一切に周徧す、故に普といふ、又實相の法は、非空、非假の中道なるが故に、能く空假の二諦を雙照し、敢て塞がることなし、故に門と名づく、依つて普門の意を知るべし。

㋘孟陬。陰曆正月をいふ。

㋫函丈。方丈ともいふ、禪室のこと。

㋙如干。若干に同じ。

㋓水月懺摩。懺悔のこと、懺悔に二種あり、理の懺悔、事の懺悔、水月は理事をいふなり。

㋢水陸會。悲濟會ともいふ、施食會、施餓鬼會の別稱、普通水陸會を以て施餓鬼會の別稱とすれども、本來は水陸會と施餓鬼會とは其の所由を異にせり、委しくは釋門正統、釋氏資鑑等に見ゆ。

㋐嚫。梵語達嚫の略、具には達親拏といひ、或は馱嚫尼と書く、譯して財施、又は檀施といふ、布施物のことなり、嚫を襯、又は䞋に作る。

㋚白傘蓋無上神呪。楞嚴呪を異稱して云ふ、卽ち八句の陀羅尼なり。首楞嚴經に云く「我佛頂光明摩訶薩怛多般怛羅無上神呪を誦せよ」と、溫陵會解に曰く「摩訶薩怛多般怛羅、此に大白傘蓋といふ、卽ち藏心なり」と。

㋖六道能化。六道の迷界に沈淪する衆生を化度する菩薩のこと、六觀音、六地藏の如き是

と七日、㋻函丈に就いて諸般の善利を修し、當忌の佛の尊像を彫刻するものの一軀、經王妙典を讀書するもの㋵如干部、㋓水月懺摩を修禮する者一場、㋢水陸淨供を施設する者一會。今散筵に當つて、香花燈燭茶果珍饈の儀を營辦し、佛に供じ僧に㋻嚫す。仍つて現前の苾蒭衆を集めて、異口同音に㋚白傘蓋無上神咒を諷演するの次で、手を洛下退藏の野衲宗休に借つて、這の一瓣を焚いて本師釋迦牟尼善逝、濡首・徧吉の二菩薩、今日の教主香集世界の菊光佛、現座道場の正法明如來、㋖六道能化の舅々和尚、三世十方の諸佛薩埵乃祖大覺禪師、三國傳燈列祖師、天主・地神・水族・山靈・一切の含識等に供養し奉る。伏して冀はくは㋙覺靈、這の薰染に沐して、黨も無く偏も無く、寃親平等證行同圓ならんことを。夫れ惟れば、月心座元禪師、蚤に講肆に遊び、晩に歸田を賦す。知識は優曇華の如し、本朝始めて大覺の徽號を賜ふ。首座は僧中の月たり、季運幸に無明の正傳を得たり。其の出興也、世尊滅後、其の行道也、㋱威音已前、鬧市、喧を厭ふ、黃塵・烏帽・伽黎・勃窣・閒房に老を投ず。青山素髮孤榻蕭然、每日日に經を課して坐し、長夜夜、佛を抱いて眠る。秀鐵面を圓通に仰ぐ、戒乘倶に急なり。照

れなり、能化は所化の對語にして化主の意とす。

㋙亡者の靈をいふ。

㋱天地未生前に於て已に世のうるさいことを厭ふてなり。

㋯廣大無邊の義。洞山大師玄中銘に「觸目荒林年を論ずる放曠」と、蓋し放曠は方廣に同じ。

㋛芒鞵は芒鞋に同じ。

㋽馬鳴は如來嫡傳第十二祖、馬鳴尊者なり、梵音「アシュヷグホーサ」、阿濕縛瞿沙、阿那菩提は其の轉訛なり、大乘起信論は實に尊者の造出なりと傳ふ、周の顯王四十二年寂す。龍樹尊者は傳燈第十四祖、梵名那伽閼剌樹那、龍猛又は龍勝と譯す、宗門傳燈の祖たるのみならず、八宗の祖師と崇めらる、大智度論百卷、中論四卷、十住毘婆娑論十七卷、十二門論一卷等の著あり。

白眉を㋯方廣に推す、名實兼ね全し。或時は短裳衣を著て、早梅を前村の雪裏に探り、或時は生苕帚を拈じて落葉を夕陽溪邊に掃ふ。南方の佛法如何、桃紅李白薔薇紫、西來の祖意會すや麽や。㋛芒鞵・竹杖・布行纏・分身・散影、塵塵爾、刹刹爾。放光動地、煒煒焉たり、煌々焉たり、休休休。

㋽馬鳴龍樹千論未だ盡きず、錯錯錯。鹿野鶴林一字宣せず、初發心に正覺を成ず、眞如の性、變遷を絶す、蚯蚓東海を抹過し、蟭螟坤乾を呑却す。然も溜麽なりと雖も、向上の牙爪を見んと要せば、祇夜一篇を聽取せよ。山中無角の老㋪烏犍、高臥安眠三十年、忽ち金毛の活獅子と化す、一聲吼裂す率陀天。」喝一喝す。

大藏開基華屋宗榮尼首座三十三年忌の香語

「這の老婆我れに於て太だ賒なり、多年香瓣袈裟に裹む。」香を擧して、「如かず寶爐に揷向し去つて、㋲芙蓉八月の花に供養せんには。大日本國河州路茨田郡多福山大藏禪寺住持苾芻尼宗玖、維時享祿二載八月十蓂、伏して當寺中興華屋宗榮尼首座三十三白の遠諱の辰に値ふ。迺ち函丈に就いて梵筵を修飾し、菊光佛、彫刻する者一軀、僧叡筆授の㋝經王、印書する者若干、西湖の遵式、製する所の㋜圓通妙懺、修する者一座、㋑三摩耶形、造立する者一基、作善の件件の品目、

㋪烏犍は去勢されたる黒牛、月心禪師に比するか。
㋲芙蓉は宗榮尼に比するなり。
㋝法華經を經王といふ、一に純圓獨妙王經ともいふ。
㋜圓通妙懺は觀音懺法をいふ。
㋑諸佛菩薩の本誓を現したる形をいふ、五股杵、蓮華刀、三股戟等なり、不動明王は劍、寶生如來は寶珠、藥師如來の藥壺の如き是れなり。諸佛菩薩の出生を觀ずる時は、種字より三摩耶形を出生し、三摩耶形より尊形を顯現すとなすを以て、同一尊にても四種法によりて同じからず。

維那寫して之れを讀む、重ねて擧するに勞せず。香華燈燭茶菓珍饈の化儀を虔備し、供佛嚫僧の大會を設く。仍つて現前の淸淨衆淸淨尼を拜屈して、㋺大佛頂光聚悉怛多般怛羅無上神咒を諷演するの次で、手を花園の休上座に借つて、㋩兜樓一瓣、寶爐に爇向して、本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉の左輔右弼、當來補處の慈氏尊、西方無量壽佛、世音勢至二脇士、㋥六道能化の願王佛、當忌の至尊香集世界の能滿、㋭虛空藏菩薩、三世歷代の乃佛乃祖、或は天或は鬼、一切の含識等に供養し奉る。郁郁乎として黃泉に徹するときは、則ち沈水よりも淸し、藹藹然として碧落を穿つときは、則ち紅霞よりも濃なり。伏して願はくは覺靈斯の薰力に憑つて、五百由旬の險道を歷ずして、一乘の寶所に至り、頓に四倒八苦の火宅を出でて、㋬三種の寶車に駕せんことを。娑婆卽ち是れ華藏寂光、豈に伽耶を離れんや、則ち箇。夫れ惟れば華屋宗榮尼首座、榮、閭里に輝き、富、屋家を潤す。逆行順行、鍼鋒世界に入つて、足を翹て佛境魔境、蒲團庵内に坐して結跏す。其の德也、燕金の價あり、其の名也、趙璧瑕無し。雲は北嶺、梅は南枝、再び曹溪の宗を興して、八十生の大鑑祖を瞞す。朝に西天、暮に東土、重ねて兜率の夢を續いで、第二位の小釋迦と稱す。脚下の紅線を截斷し、項上の鐵枷を脫卻す。淸風起つて、忽

㋺首楞嚴神呪の異名。
㋩兜樓は細香と譯す、香を云ふなり。
㋥地藏菩薩をいふ、地藏を供養するものは一切の願を成就すと、故に地藏願王菩薩といふ。
㋭虛空藏菩薩、梵には阿迦捨揭婆耶といひ、虛空藏と譯す。一切の香集世界にあり、實相の智慧虛空の如く、虛空法界に於て、事として悟り得ずといふことなしと。
㋬牛羊鹿の三車をいふ、前に見ゆ。

然忽然。㋣幃に投じ葉を送る、殘暑去つて、端的端的。箔を捲いて茶を煎ず、萬機休罷、生涯を喪盡す。三十年前、凡を轉じて聖と成し、聖を轉じて凡と成す。涅槃を雙樹に證して、五蘊の漏質を示す。三十年後、教を離れて禪無く、禪を離れて教無し。大藏を少林に開いて、㋠四卷の楞伽を傳ふ。解脫の毒海を踏翻し、無明の塵沙を淘汰す。時節因緣㋷廣寒の桂、半輪は圓に、半輪は缺く。當陽直指多福の竹、一莖は曲り一莖は斜なり、黑漫漫地強ひて些些を納る。」香を以て指して云く、「㋦老牸牛汝來也、甚麼としてか巴鼻沒き、他の苗稼を犯さず、他の木叉を受けず、左旋右轉、犁を牽き把を拽く。叱。㋸今日臺山の大齋會、香嚴童子無遮と叫ぶ。」

大藏住持明室宗玖尼首座三十三忌㋾預修供養の語

「刹那三十有三霜、不動尊に始つて菊光に終ふ。老婆心切の處を識らんと欲せば、炎天の梅蘂一爐の香。薩訶世界南贍部洲、大日本國河州路茨田郡大藏禪寺住持明室宗玖尼首座、預め三十三囘忌の冥福を修す。仍つて當忌の尊虛空藏菩薩の像を彫刻するもの一軀、圓通妙懺を修禮すること一座、供佛齋僧、善を盡せり矣。天文五年丙申六月初吉、宗休小比丘に命じて、

㋣單のたれぬの、單帳をいふ。

㋠正宗記によれば、二祖慧可、得法の後、達磨は楞伽經を彼に付囑したとある、其の文にいふ、「復た慧可に謂ふて曰く、此に楞伽經四卷なるものあり、蓋し如來極めて法要を談ず、亦以て世の與に開示悟了せしむべし、今並に汝に付す」と、達磨禪なるものは全く此の經から來たものと言はれて居る程、達磨と密接の關係を有するものである。

㋷月宮殿の桂の木を云ふ、傳說によるなり。

㋦潙山下の老尼、劉鐵磨を云ふ、即ち宗榮に比するなり。

㋸鐵磨牸牛の公案に、「鐵磨、潙山に至る、山曰く、老牸牛汝

香語を唱へて供養の始終を以てす焉。其の功德不可說、三寶證明、諸天洞鑑。願はくは此の香雲に乘じて、永く本有の故鄕に歸らんことを。夫れ惟れば、某名輭頑の手段、鐵作の心腸、預め世壽の限り有ることを知り、頓に諸行の無常を了ず。菩薩、誓言を作す、我れ衆生に代つて地獄に墮せんと。諸佛妄語せず、汝㋻九族をして天堂に生ぜしむと。五濁曇華、瑞を現じ、二株の娘桂芳を聯ぬ、大愛道を靈山會中に度す。戒乘倶に急なり、㋕尼總持を少林門下に接す、皮髓分張す。八九年の面壁を打して、三百餘の會場を開く。水を借つて花を獻ず、昨日の供養今日の供養。沙を淘つて米を去る、佛法商量、世法商量。㋵無著、線路を放開し、㋟普化飯牀を踏倒す。施者受者、瞎漢免れず、齋に因つて贊揚することを。」香を挿んで云く、「㋹人は皆炎熱に苦む、吾れは夏日の長きを愛す。」

駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香の語

「無明を父と爲す大いなる哉㋛乾、檢束して恩に酬ゆ四十年、業債重重士峯の雪、拈じて沈水一爐の烟と成す。茲に駿州の僧宗孚といふ者有り、天文甲辰仲春二十四日、伏して先考庵原氏世順良朝庵主四十年の遠忌に

米や、磨曰く、米日台山に大會齋あり、和尙還つて去らんや、山身を放つて臥す、磨便ち出で去る」と。

㋾預修。當事預修の佛事流行す、德川時代には極めて稀なり、足利時代に盛に行はる、將軍義政の如きは、三年、七年、十三年、二十五年、五十年と約一年に渡りて逆修の佛事を修したるものなり。

㋻漢書の註に「高祖より、玄孫に至る親族を云ふ」と、卽ち一は高祖、二は曾祖、三は祖、四は父、五は己、六は子、七は孫、八は曾孫、九は玄孫なり」と、又一說に父族四、母族三、妻族二とあり。

㋕尼總持は達磨門下の尼僧にして、達磨の肉を得たりと、卽ち道の深淺を皮肉骨髓に譬へて之れをいふなり。

㋵無著文喜、仰山慧寂の法嗣な

値ふ。得得として西京の花園に來り、衡梅禪院に就いて齋筵を設く。蓋し㋡椿府罔極の恩に報ずとなり。仍つて㋧六和の衆を集めて、諷經一上の次で、手を休上座に借つて、這の決願香を焚いて、三世の佛、六代の祖、乃至日域大小の神祇、一切の含識等に供養し奉る。冀ふ所は頓に凡骨を脫して、特地に登仙し去らんことを。夫れ惟れば、庵主㋤闔國の好駿、㋶江湖の橫鱣、剃髮染衣、僧にして僧に非ず、俗にして俗に非ず、出群拔萃、聖は聖を續ぎ、賢は賢を續ぐ。將に謂へり、川黨輭語の魯直と。元來㋰丘徒、短命の顏淵、長歌短歌、唐詩に擬するときは、則ち㋒香象河を渡り、金翅海を劈く。㋼大篆小篆、㋨晉帖を臨するときは、則ち怒猊石を抉り渴驥泉に奔る。春樹暮雲、千里㋔繾綣、風花雪

り。

㋟盤山、寶の法嗣、鎭州普化禪師なり、嘗て暮に臨濟院に入り、生菜飯を喫す、臨濟曰く、此の漢大いに一頭の驢に似たり、師卽ち驢鳴をなすと。

㋹舊唐書柳公權傳に、「文宗夏日學士と聯句す、帝曰く、人皆炎熱に苦む、我は夏日の永きを愛すと、公權續いで曰く、薰風南より來る、殿閣微涼を生ず」と。

㋞乾は天なり、之れを父とし、坤は地なり、之を母として、衆德備はる、易に乾は元亨利貞と、元は萬物の始め、亨は萬物の長ずるなり、利は萬物の遂、貞は萬物の成なりと。德の最も大なるものなり、今無明を以て之れに比す、無明なるが故に、「眞如の實現を見る、恰も無明は眞如の父の如きものか、所謂大疑の下に大悟ありと云ふ樣の意なるべきか。

㋡父をいふ、又椿堂とも云ふ、莊子の椿樹八千歲の壽といふより、長壽の義より來る。

㋧六和の集は衆僧をいふ、僧伽は和合衆也、其の和して恭敬するに六種あり、「一に身和して同じく住す、二に口和して諍ふことなし、三に意和して違ふことなし、四に見和して同じく解す、五に戒和して同じく遵ふ、六に利和して同じく均しうす」と、又一に同戒和敬、二に同見和敬、三に同行和敬、四に身慈和敬、五に口慈和敬、六に意慈和敬をいふと、蓋し此等によるもの也。

㋤闔國は全國、國中のこらずなどと云ふ意。

㋶江湖に橫はる大魚、江湖の尤物をいふ、鱣は鱏(かぢき)に似たる大魚なり。國訓うなぎ。

月、萬古流傳。或時は客路西遊して津を問ふ、老生涯、漫种を得たり。或時は故國東に歸つて室を掩ふ、順現業、夙緣を感ず。乃翁㋗騷屑に興して、而して㋳本貫を失す、此の郎苑裘を營みて終焉を卜す。加之、淸淨法身、堅固法身、㋮螺甲崑崙の耳を割く。分段生死、變易生死、㋘龍光斗牛の躔を射る。理窟勃窣、意氣凜然、時其れ至れる哉。烏鉢曇華、偶〻一佛の出世に値ふ、道尙ほ存せり矣。燈籠露柱高く、九族生天と叫ぶ。入涅槃兮奢迦の後、成正覺兮威音の前、㋫桃李言はず、三會の春を牟陀宮裏に待つ。芭蕉耳無し、五逆の雷を濟水那邊に聞く。力囝希、咄咄咄、妙難思、玄玄玄。端的を識らんと要すや麽や。不可以言宣。」香を擧して、「看よ看よ、歸り來つて虛空に坐すれば、夕陽は我が西に在り。」

無礙妙心禪尼の香語

香を擧して、「㋙妙妙妙兮思量に非ず、心心心也た不可得、此れは是れ孃生の本來の香、十月花に勝る丹楓の色。夫れ以れば、無礙妙心禪尼、內に慈仁を懷き、外に緣飾少し、忽爾として雙趺を棺槨の側に示す。竺土の仙、日日涅槃、依然として三昧を寶鏡の前に證す、曹家の女、時時に拂拭す、

㋰孔子の徒を云ふ、弟子といふ程の意。

㋒涅槃經に「香象深河を渡る、地に付いて行く。故に徐なし、之れより徹底の語出づ」と。

㋼大篆小篆。何れも書體なり、大篆は周の宣王の時、史籀の作る處、小篆は始皇の時、李斯が作る所、小篆は大篆の文を省きて作りしものなり、新井白石の同文通考に詳說あり。

㋨晉代の王羲之、王獻之等晉代の書學の書を集めたるもの、其の書に於ける筆力の勇健なるをいふ。

㋔惰厚くしてはなれざるをいふ。

㋗騷屑は風の音、劉向の賦に「風騷屑として木を搖かす」と。

㋳本貫は本籍に同じ。

㋮螺甲は螺髻(もとどり)をいふか。

何の處か風流ならざらん。大地消息を絶す、然も恁麼なりと雖も、向上圓極の龍門に到つて、別に公案一則有り。他の兒孫に代つて恩に報い德に酬い去らん。閻浮樹下笑呵呵、舜若多神面皮黑し。」香を挿んで、「露。」

文苑理總大姉の香語

永正第四三月侍史某、老拙に啓して云く、「當三十日は祖母文苑理總大姉㋓小祥の辰なり。於戲、吾れに卓錐の地無し、何を以てか老婆心切の恩に報ぜん乎。」老拙云く、「淨名居士道はず乎、其れ汝に施す者は、福田と名けず、汝を供養する者は、三惡道に墮すと。其の義如何。汝只だ這箇を將つて如法に恩に報じ去れ。縱ひ㋢從來の習氣、五無間の業有るも、盡く解脫の大海と成らん。豈に快ならざらん哉。」侍史覺えず點頭一笑す。仍つて祇夜一篇を作つて、以て香語に代ふと云ふ。

八十の婆婆養子の緣、鶯語を聽いて啼鵑と作すこと莫れ、此の中限り無き春を傷む意、錦上に花を添ふ又一年。

松巖大姉一周忌の香語

雲山南源首座、休に告げて云く、「臘旦は吾が先妣松巖大姉小祥忌な

㋕龍光は風彩の義に用ふ、高彪傳に「彪馬融に書を遺して、風尙を承服する、從來年あり、故に介者を待たずして大君子の門に謁見し、一度龍光を見て、以て腹心の願を敍せんことを冀ふ」と。

㋟德あれば自ら隣ある、桃李言はざれども下自ら道を成すが如く、釋迦佛の後に世に降臨して衆生を濟度し給ふ彌勒菩薩の說法の會座に三ある如く、率陀宮で待つて御座ることだらうと。

㋙驀直に名字を打するなり。

㋓小祥。一週忌なり、禮記喪禮に「期にして大祥し期にして小祥す」と、皆祭の名なり、凶を去り吉に從ふの意なり。

㋢從來の習はしなり。

㋐子として子たらざるに非ず、母として母たらざるにあらずんばとの意なり。

り。然れども炷くに香無く、奠るに茶無し、何を以てか恩乳に酬いん乎。」休咄して云く、「香無く茶無し、已に酬い了れり。」首座揖して云く、「供養を謝す。」休云く、「蒼天蒼天。」若し南源㋗不子の子に非ず、松巖不母の母に非ずんば、㋚慈明の銀盆、㋖睦州の蒲鞵、當つ可からず焉。別に香語有り、一回拈出し去らん。

端的恩に酬ゆ甚の難きことか有らん、黄金の義也た鐵心肝、黒崑崙蛾眉を畫き出す、㋴雪裏の芭蕉冬牡丹。

德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門㋱盡七日の香語

香を擧して、「本來の香本來の人に屬す、鼻孔依然として上唇に挂く、七七光陰底物をか消す、薔薇露重し一枝の春。薩訶世界南贍部洲、大日本國山城州平城居住の奉三寶弟子孝男土佐法師、大永三年孟夏十有五日、家門伏して先考德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門、盡七の辰に値ふ。每忌私第に就いて道場を莊嚴し、㋯緇倫を延請す。晝に經し、夜に禪し、夕に燈し、晨に香し、諸般の白業を勤修す。白業とは何ぞや、大乘妙典、頓寫、漸寫、印寫、各若干部、㋛水陸妙供、兩會圓通、懺儀二座。夫れ法華は、當

㋚慈明楚圓禪師、母賢にして遂に汾陽善昭に法嗣す、師室中に劍を挿んで、草鞋一對水一盆を以て劍邊に置き、入室を見る每に曰く、見よ見よと、劍邊に至りて擬議するものあれば、師曰く、險、喪身失身して了れりといつて、便ち喝して出すと。

㋖睦州道蹤の蒲鞋、前に見ゆ。

㋴時十二月一日なれば時候に就いて云ふなり。

㋱七七四十九日のことをいふなり。

㋯緇倫は僧侶をいふ。

㋛水陸會なり、施餓鬼と略同じ、諸仙は食を流水にいたし、鬼は食を淨地にいたすと、これによるなり。

㋽梁の武帝嘗て一神僧を夢む、告げて曰く、六道四生苦を受くること無量、何ぞ水陸會をなな

體蓮華有り、譬喩蓮華有り、異にして不異、均にして不均。此の方に在り、則ち纔に是れ七軸。西方に在るときは、則ち布くこと一由旬。長者門外に三種の車を駕し、信樂衣裏に無價の珍を繫ぐ。寶處近に在り、維れ德隣有り。夫れ㈢水陸勝會は過去青提、岷に濫觴す。四倒八苦の業火を滅して、三有九界の沈淪を救ふ。㈣梁武金山の會を設けて、以て塗炭の民を愍む。今日の施主も亦復是の如し。上先考罔極の恩義に報じ、下群生無量の苦辛を資く。其の餘波は普天の下、率土の濱に及ぶ。夫れ圓通懺儀は、慈雲懺主の修撰する所なり。抑〻觀音大士の應化は、刹として臻らずといふこと無し。小白花、大白花、亂墜紛繽たり。㈤柳枝を借つて水を獻じ、草座を鋪いて茵と爲す。弘誓の海、好し㈥津を問ふに。特に當忌の尊醫王善逝の聖像一軀を彫刻す。夫れ藥師は乃ち是れ東方滿月世界の敎主、廣嚴城中の醫王なり。昔十二の大願を發して、不死還年の妙藥を示す。是の故に寶號一たび耳に經るるときは、則ち衆病悉く除き、身心安樂なり。作麽生か是れ安樂の處、請ふ身心を放下して看よ。佛病の蘇す可き無く、祖病の療す可き無し。更に一粒の㈦還丹を假らず、凡を轉じて聖と成し、聖を轉じて凡と成す。千年の桃核、甚の舊時の仁をか討ねん。預め今月今日に於て、散筵、

して群靈を普濟せざる、諸功德の內最も第一なりと、依つて阿難、面然鬼王に遇ひ平等斛食を建立するの意を詳かにするに及んで、儀文を製し遂に潤の金山寺に於て修設し、帝躬ら地席に臨み、祐律師に詔して文を宣せしむとあり。

㈤觀音の圖に、水瓶に楊柳の枝を挿むものを楊柳觀音といふ、これ楊柳の春風になびき應ぜざるものなきが如く、その衆生の願樂する所に應同して化益する意にとるなり。

㈥津は渡場なり。

㈦古人が妙藥と傳ふる回生起死の丹藥をいふ。

伊蒲の淨膳を營辦して、以て釆蘋に擬す。仍つて現前の苾蒭衆に命じて、同音に白傘蓋無上神呪を諷演するの次で、手を龍安の小比丘宗休に借つて、此の欄枯薪を焚いて、三世十方の薄伽世尊、當忌の醫王善逝、現座道場の無量壽佛、微塵刹土の諸の賢聖等に供養す。萃むる所の殊勳、神儀の爲に㋦報土を莊嚴し奉る。願はくは此の㋑聞薰力に憑つて、頓に解脱の毒海を出で、速に無上の法輪に乘ぜんことを。共しく惟れば、大禪定門、籌を帷幄に運し、位を縉紳に列ぬ。㋺晉帖を學んで蚰蚓を縈らし、和歌を詠じて鬼神を感す。㋩弟を封じて桐を剪る。㊁冕旒を淸和天子に拜す、姓を賜うて釆を食む。箕裘を滿仲朝臣に續ぐ、源深く流遠し、其の命維れ新なり。德雲、別峰に相見す、雜華の春を驅つて遊轡を試む。達磨此土に來らず、普通の雪に和して假銀を賣る。㋭鐵笛千古の恨み、燈花十年の親み、這の野狐精を喚醒し、楊柳綠暗し、他の村猶猍に參得して、黃梅月新なり。恁麽不恁麽、全眞全俗、不恁麽恁麽、全俗全眞、飛花二十五の圓通を開くときは、則ち直に香嚴の本寂を印す。餘薰八百の功德を證するときは、則ち忽ち金仙の前因を了す。正知見力、纔に入り細に入る、大丈夫の㋬心、緇まず磷かず、這裏に到つて、什麽の自受用。他受

㋦報地に同じ、善業を修せし因によつて生ずる果報の土地、寂光淨土のこと。

㋑香の薰ずる力にてとの意なり。

㋺書道の妙をいふ。

㋩晉世家に「成王叔虞と戲る、桐葉を削りて珪と爲し、以て叔虞に與へて曰く、之れを以て若を封ぜんと、史佚、日を擇んで之れを立てんことを請ふ、成王曰く、吾れ之れと戲るゝのみと、史佚曰く、天子に戲言なしといふ、遂に叔虞を唐に封ず」と。柳子厚の桐葉弟を封ずるの辯あり、參照すべし。同氏弟に封し封を與ふることあるを。

㊁冠の飾なり、源氏は淸和天皇

用とか說かん、什麼の理法身・智法身をか論ぜん。淨躶躶・赤洒洒地、寸土無し、淸寥寥の地、纖塵を絕す。然も與麼なりと雖も、後昆を覆蔭する底の一句、卽今如何が指陳せん。草木山河瑞氣を增す、虛空產出す。(ト)玉麒麟。」

東漸寺殿光翁亘公大禪定門七年忌拈香の語

香を擧して、「這の七梅花、太極に始つて無根を長ず、之れを心に得れば、則ち忽ち栴檀樹と作り、之れを旨に失すれば、則便ち蒺藜園と變す。前釋迦前ならず、日日成道、後彌勒後ならず、處處尊と稱す。(チ)龜毛藥を抽んでゝ三千世界に布き、兎角花を開いて二十四番に魁たり。花光老畫けども成らず、孤芳皎潔、(リ)林逋仙吟未了、暗香黃昏、昨夜三更、(ヌ)邯鄲道上の夢に和卻す。今朝九日(ル)羅浮山中の村に拾ひ得たり。一と去卻し七と拈得す、以て返魂と作す。我れ佛祖に供養せんと欲すれば、佛祖我れと生冤、若かず寶爐下に插向して、光翁大禪定門に供養せんには。且く道へ、寶爐下、是れ什麼ぞ、元來一箇の鐵崑崙。鐵崑崙䟦跳して、三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す。山僧打つこと一棒すれば、百雜碎、雨盆を傾く。薩訶世界南瞻部洲日東城州平安城居住の大功德主源朝臣虎增、明

より出づる故にしか云ふ。

(ホ)朱元晦が鐵笛亭の序に、「胡明中、嘗て武夷山の隱者劉兼道と遊ぶ、劉能く鐵笛を吹く、雲を裂き石を穿つの聲あり」と。又兀庵の拈香法語に「倒に鐵笛を拈じて逆風に吹く」の語あり、又玄樓の鐵笛倒吹序に曰く「今我れ古人の公案を庸つて鐵笛と爲す。乃至所謂倒吹とは、曲もと無韻を以てするときは、則ち弄所も亦常に異なるを表す」と。以て略其の意を知るべし。

(ヘ)論語陽貨篇に曰く、「佛肸召す、子往かんとす、子路曰く、昔は由やこれを夫子にきく、曰く、親らその身に不善を爲す者、君子入らざるなりと、佛肸中牟を以て畔く、子の往くや、之れをいかん、子曰く、然り、是の言あるや、堅しと曰はずや、磨すれども

年甲申春王正月初九、伏して先考東漸寺殿、贈從四位下前の房州太守光翁亘公大禪定門、七周忌の辰に値ふ。預め今茲大永三天臘月今日に於て、佛に供し僧に齋して菓茗を陳ね、終を愼み遠を追ふて㋾蘋蘩を羞む。庚に先つこと七日、道場を本寺に設けて、晨夕香莊嚴・華莊嚴、晝夜經三昧・禪三昧、其の志敦し矣。中に就いて當忌東方無動佛の尊像を彫刻するもの一軀、薩芸妙芬陀利頓漸印讀如干、玆に總管府君右京兆、特に丹悃を抽んでゝ、本門の壽量親書する者一品、一品の中に權大乘・實大乘を該ぬ、淺深測ること莫し。一毫端に本壽量・跡壽量を現ず。短長論じ難し、多少玄を談じ妙を説く。十分德に酬い恩に報ゆ。圓通懺儀一座、㋻水陸妙供一會、諸經の來由、諸佛の事迹、枚擧するに遑あらず。住持事繁し、今散筵に臨んで、六和の苾蒭衆を鳩めて、萬行楞嚴咒を諷演するの次で、手を龍安の休上座に借りて、這の小兜樓を焚いて三世の覺皇、十方の薩埵、西天東土の列祖師、天界地界の諸神仙、日域大小の神祇、㋕冥府十殿王等に供養し奉る。伏して冀はくは、檀越這の聞薰力に憑つて、直に毘盧頂上を踏んで、行いて他の脚跟に隨ふこと莫からんことを。共しく惟れば、大禪定門、威雄霜

磷かず、白と曰はずや、涅すれども緇まず」と。蓮の淤泥に染まぬ如きをいふなり。

㋣善業功德によりて後昆の英俊を見るをいふ、又名を麟閣に留めて譽を後昆に流へ、一段の精彩を添ふるものか。又杜甫の徐卿二子を見る歌に「並びに之れ天上の麒麟兒」と。

㋠龜毛兎角は假有、非有に比するなり。

㋷西湖の處士林和靖をいふ。

㋦盧生が邯鄲道上に生涯の經歷を夢みたること、人生夢の如きをいふ。

㋸錦字箋に「隋の趙師雄羅浮に遷る、一日天寒し、日暮松林旁舍の邊に於て美人の淡粧素服出でて迎ふるを見る、師雄共に語言す、極めて淸麗にして芳香人を襲ふ、よりて共に酒家を叩きて與に飲む、師雄醉臥し、覺むるに及び、起ち

冷じく、談笑春温なり。聖は聖を續ぎ、賢は賢を續ぐ。四位に北闕に拜す、兄は兄たり、弟は弟たり。長老を東軒に接す、梧桐名上鸞翔り鳳舞ふ。藕絲竅裏鯤化し鵬騫る。胸中數萬の甲兵、(ヨ)熙寧・元豐の餘黨を掃除し、門下三千の賓客は、文德・淸和の末孫を扶起す。蓋し王侯將相種無しと雖も、江河淮濟の源有るが如し、畫堂晝閑なり。雲を愛し僧を愛して、靑山に榻を下す、朱欄日に轉ず。花に酌み鳥に酌んで、(タ)石劫を樽と爲す。翅だ法社に金湯たるのみにあらず、矧んや復た諫垣に黼黻たるをや。其の諱に觸るる者は、(レ)王老庭前、天地同根の陸大夫、(ソ)空華何ぞ把捉に勞せん。其の機を具する者は、馬祖庵畔、萬法不侶の龐居士、江水豈に平呑するに足らんや。將に謂へり、小睡語大睡語と、已に是れ禪狀元、儒狀元、玉鐙金鞭、臨濟の大龍に跨り得ず。皮履直裰、投子の俊鷹を夢みて、以て原ぬ。君臣道合す、宇宙名喧し。或時は知見の戶牖を開いて、知見香を薫じて、同參夜雨の句を記す。或時は解脫國土に入つて、解脫服を著けて、杜多風露の飡を甘んず。進退前佛の模範を學び、殺活外道の赤幡を奪ふ。曉鶯を(ツ)武侯祠堂に聽いて、騎を漢巴に出し、長く(ネ)八陣の磧を留む。群鵝を房公の

て見れば、大梅樹下にあり、翠羽嘈啾す、相顧みれば月落ちて參橫す、惆悵してやまず」と。

(ヲ)水草にして其の淸きを神に薦むるなり。

(ワ)水陸會をいふ。

(カ)冥府十王とは秦廣王、初江王、宋帝王、五官王、琰魔王、變成王、泰山王、平等王、都市王、轉輪王これなり、而して死して冥府に赴くものは、七日毎にこれ等各王の下に至りて、其の聽斷を經となす、十王經は十王のことを說ける經なり、世俗に此の經により十王を祭供すれども、この經は先哲の判じて僞妄とするところにして、藏經中にも見えず、想ふにこれ勸善懲惡の方便に、後世の僞作に出でしものなるべし。

(ヨ)熙寧元豐は支那宋神宗の年號

池館に詠じて、君を堯舜に致して、再び大雅の轅を回す。喜氣雲消し氷解く、號令電卷き雷奔る。何物か恁麼に來る。雲は嶺頭に在つて間不徹、何物か恁麼に去る。月潭底を穿つて水に痕無し、鑊湯爐炭、一吹に吹滅し、銀山鐵壁、一踢に踢飜す。洒洒地落落地、窠臼を離れ籠樊を絕す。者箇の時節、甚の香嚴の本寂をか印せん。甚の閻羅の平反をか管せん。然も㋞與麼なりと雖も、來年更に新條の在る有り、如何が後昆を覆蔭し去らん。諸の仁者、試みに山僧が重說偈言を聽け。㋡吹毛動ぜず乾坤を定む、生氣凜然として今尙ほ存す、眞照無邊大人の相、扶桑樹上朝暾を挂く。」喝一喝す。

德雲院殿小祥忌の香語

三月正當春一回、一回花落ちて又花開く、鼻孔指南の旨を知らんと欲せば、門前の下馬臺を拈卻せよ。薩訶世界南贍部洲、豐葦原山城州平安城居住の大功德主源五郞、大永四年三月二十六日、家門伏して先考德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門、小祥忌の辰に値ふ。仍つて供佛齋僧の舊例を攀ぢ、期に先つて私第に就いて梵筵を莊嚴す。一香一燈、晨夕を廢せず。維れ誦維れ禪、晝夜を舍てず。善因を勤修し、冥福を資助するもの七日、

なり。

㋟石のくぼみなり、莊子に「盃水を坳堂に覆せば、芥之れが船となる」と。

㋹王老は南泉普願禪師をいふ、姓王氏なるが故に云ふのみ、陸大夫は陸亘大夫のこと、字は景山、唐の至德元年宣州觀察使となり、後に御史大夫となる、夙に坐禪を好み、初め南泉に謁して卽ち問ふ、古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長じて、瓶を出すこと能はず、鵝を損することを得ず、和尙作麼生か出さんと、泉、大夫と召す、陸、應諾す、泉曰く、出せりと、大夫玆に於て省あり。

㋞諸法實體の非有、似有、假有なる道理の譬、空に現ずる花翳の如しとの意。

㋡諸葛亮、字を孔明、昭烈帝に仕へ、丞相となり、武鄕侯に

特に當忌の尊、無邊光佛の慈容を彫刻するもの一軀、水陸無遮の勝會施設するもの一場。今散忌に當つて、淨饍を營辦し、緇侶を延請して、首楞嚴神呪を諷演するの次で、龍安の小比丘宗休に命じて、這の一瓣香を炷いて、本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉の二菩薩、現座道場の無量壽佛、觀音勢至の二脇士、三世十方の諸大薩埵、西來東土の諸大祖師、天仙地神日域の諸神、冥府の鬼主鬼官、三有九界の群生等に供養し奉る。伏して冀はくは、神儀這の知見力に憑つて、無數劫來生死の淪溺を脫し、(ム)四十九重摩尼殿陔に昇らんことを。桃花色の民、傅翁の慈氏と號するに同じと雖も、華嚴法界、何ぞ德雲の善財を接するに異ならん。共しく惟れば、大禪定門、(ウ)荊岫の美璞、鄧林の奇材、孝を北堂の(ナ)諼草に致し、興を東閣の官梅に動ず。(ノ)圯上に書を傳へて、黃石に一隻の履を進む。江南に策を定めて、(オ)普第に兩三杯を付す、典刑存せり矣、晩節難い哉。兵衛畫戟、(ク)燕寢淸香、朱簾暮に捲く。歌臺の(ヤ)暖響、舞殿の冷袖、急管書催す。紅顏昨日、丹心寒灰、道根を心地の初に托す。蘇端明、香山居士を慕ふ、天花を丈室の内に散ず。維摩詰、金粟如來と稱す。千載、英靈の氣を回し、四海、王佐の才を仰ぐ。

封ぜらる、忠武と謚す、即ち孔明を祠りし堂をいふ。

(ネ)孔明の作りし陣形の名、三國志蜀志諸葛亮傳に「亮思に長ず、損益連弩、木牛流馬、皆其の意に出づ、兵法を推演して八陣圖を作る、皆其の要を得」と、また水經注に「諸葛亮作る所の八陣圖、東故壘に跨り皆細石を運れて之れを作る、壘より西去る石を聚むる八行、行相去る二丈、因つて八陣といふ。」

(ナ)かくの如くと同じ。

(ラ)干戈を動かさずして天下を定むとなり。

(ム)彌勒菩薩の居所兜率天上の内院をいふ、内院には中央に彌勒菩薩の大摩尼寶殿、東西南北の四方に各十二天宮あり、合して四十九となる。

(ウ)荊山卞和の璞、所謂趙氏連城の玉なり。

日午に更を打す、增上慢人、鷲嶺に席を退く。上巳の餘景、積行の菩薩、龍門に顋を曝す。甚の已說、今說、當說をか認めん、甚の火災、水災、風災をか管せん。聖に在つては聖に同じ、凡に在つては凡に同ず。誰が家にか明月無からん。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。何の處にか塵埃有らん、休休休。乾坤窄く、星辰黑し、莫莫莫。虛空消し鐵山摧く。與廢の時節、金剛王氣凜々たり、崑崙兒笑哈哈たり。此れは是れ通叟三十八年、橫拈倒用底の閑事、山僧別に一道の咒有り、後胤を保祐し、聖胎を長養し去らん。唵蘇嚕唵蘇嚕。兎角龜毛眼裏に栽う。

珠溪宗輝禪定尼三十三年忌の香語

一片の孝心心字の香、消し來る三十有餘霜、分明に呈露す孃生の面、秋日花開く紅海棠。大日本國山城州平安城居住の奉三寶弟子孝男源の政眞、大永五年九月二十有三日、家門伏して先妣某三十三白遠忌の辰に値ふ。期に先つて第に就いて梵筵を莊嚴す。一華一香、供佛齋僧、七晝七夜、誦經習定、諸般の良因、之を修し之を勸む。仍つて工に命じて、當忌の尊虛空藏の慈容一軀を彫刻し、七軸の蓮經、頓寫漸寫印寫若干部、圓通懺儀、水陸妙供各一會。今散忌に當つて、淨飴を營辦し、緇郎を拜屈して、白傘蓋神咒を諷演するの次で、手を龍安の小比丘宗休に借つて、此の小兜樓を焚いて、本

㋼わすれ草、又宜男草ともいふ、婦人此の花を帶ぶれば男子を生むと。

㋨張良曾て圯上に履を老者に進む、よつて書一卷を授けらる、卽ち太公の兵法なり、良之れによりて遂に高祖を助けて天下を定む。

㋔普第は譜第に同じ、世統をいふ、系譜の義なり。

㋗安寢する義なり。

㋳暖響冷袖、冷暖只だ相對するのみ。

師釋迦牟尼善逝、當忌の虛空藏菩薩、當來補處慈氏尊、西方無量壽佛、濡首徧吉の二大士、觀音持地の兩薩埵、三世十方の諸の賢聖、西天東土の列祖師、天衆地神冥主冥官、一切の含識等に供養し奉る。伏して希はくは、珠淑靈、這の薰力に憑つて、速かに覺場に登らんことを。夫れ惟れば、珠溪宗輝禪定尼、雲路の翡翠、丹山の鳳凰、㋮機を斷つて曾て軻親を學ぶ。善隣維れ寶、髮を截つて、或は㋘陶母に效ふ。夙債償ひ難し、仁澤を林野に施し、生涯を洞房に寄す。遠を追ひ終を愼む、花を左にし竹を右にす。㋫昭穆廟を列ぬ、群を出で萃を拔く。東蘭西蕙、兄弟芳を聯ね、金屋粧成つて、門闌喜色、畫屏影冷じく、銀燭秋光、室に入つて衣を受く。秦國太洋嶼を慕ふ、空を關し夢を鎖す。㋙普賢女、馬郎に約す、微塵を破つて經卷を出し、四大を假つて禪定と作す。加之、其の密用を論ずるときは、則ち法身五分、竺土の仙の香の譜を說くに依俙たり。其の家系を按ずるときは、則ち正位一色、曹山祖の商量を打するに彷彿たり。精神掬す可し、文彩已に彰る。心卽ち是れ佛、佛卽ち是れ心、燒藥爐中に宿火無し。寂にして常照、照にして常寂、折枝鏡裏に新粧を憶ふ、端的恩に報じ德に

㋮孟母三遷の故事なり。

㋘晉書に「陶侃家甚だ貧なり。母湛氏、每に紡績して之れに給す、侃をして交を己より勝される者に結ばしむ、鄱陽の孝廉范逵來りて宿す、適々大いに雪ふる、湛氏自ら臥す所の新薦を撤して、以て其の馬に給し、又其の髮を截ち隣人に賣り、肴饌を買ひて以て供す、逵聞きて歎じて曰く、此の母に非ずんば、此の兒を生むこと能はずと、侃遂に功名を以て高く顯はる。

㋫宗廟の制は、中央に太祖の廟ありて、左に二代目、右に三代目、また左四代目、右に五代目と、此の如くいりちがへて左を昭といひ右を穆といふ、又祭る人の坐位にも昭穆の序ありて、此の次序に隨ひて坐するを禮とするなり。

報ず。畢竟存に非ず亡に非ず。是の故に三十三年前、逆順縱橫、天堂を變じて地獄と作すも也た得たり。三十三年後、隱顯自在地獄を變じて天堂と作すも妨げず。事事無礙、法界刹刹、本有の故鄕、金雞、鐵卵を啄破し、石虎、木羊を呑卻す。正與麽の時、淑靈、光耀土より起つて、八吉祥を現じ、甚深般若を唱へて曰く、「昔護國の珠有り、仁王と名く、是れ乃ち後昆を覆蔭する底の要訣、即今如何が承當し去らん。」大唐國裏に鼓を打てば、新羅の人舞袖長し。

見室妙性禪定尼二七日忌の拈香

「金香爐下の鐵崑崙、擊碎し將ち來つて直に恩に報ず、指點す轉身の那一路、淡烟翠竹江村を繞る。」薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州茨田郡中振鄕、今月二十有九日、伏して見室妙性禪定尼二七日忌の辰に値ふ。吾が徒園也來つて老拙に告げて云く、『見室平生博愛の仁有つて、某に於て一子の如し、某也た見室に於て阿母の如し。厥の德報じ難く、厥の恩忘れ難し。故を以て非薄の奠を設く』と。仍つて供佛齋僧の次で、手を老拙に借つて一片の妙兜樓を焚いて、以て供養を伸ぶ。伏して希はくは、禪尼、這箇の薰力

㈢稽古略に、「馬郎婦、元和年中陝右を化せんとす、美人となりて其の所に示現す、人其の姿貌風韻を見て配たらんことを欲求す、女曰く、我れ能く一夕に普門品を誦するあらんには、之れに歸がん、黎明廿輩徹誦す、女曰く、一身豈に衆に配せんや、金剛經を誦すべし、旦に至つて誦者十數人、女更に授くるに法華七卷を以てし、三日夜を約す、期に至つて馬氏の子のみ能く誦す、女、禮を具して姻を成さしむ、馬氏之れを迎ふ、女曰く、適々體中不安、少焉あつて客未だ散ぜざるに、女已に死爛して葬る、後老僧あり來つて女の所由を問ふ、馬氏相引いて葬所に至る、僧錫を以て之を撥く、尸化して唯だ黄金骨のみ存せり、僧衆に謂つて曰く、此れは聖者汝等の障重

に憑つて、頓に九十億劫の生死を超えて、速かに㋓無上正等の覺園に到らんことを。夫れ惟れば、見室妙性禪定尼、標格雪潔く、襟懷春溫なり。藉藉たる家聲、梅は是れ兄、㋢礬は是れ弟。昭昭たる淑德、蘭の子、蕙の孫。項上三百の鐵枷、人天の果福を脫卻す。脚下一條の紅線、佛祖の命根を截斷す。赤洒洒、窠臼沒し、淨躶躶、㋐籠樊を絕す。這裏に到つて、全く彌陀の念ず可き無く、更に㋚能仁の尊と稱す可き無し。然も恁麼地なりと雖も、如上許多の陳葛藤は、猶ほ是れ生死岸頭の事、別に向上圓極の法門有り、如何が後昆を覆陰し去らん。」香を挿んで、「暮樓の鐘鼓月黃昏。」喝一喝す。

清泰院殿常春宗榮大禪定尼一周忌の香語

香を擧して、「這の常春木㋖朝菌の晦朔を知らず、何ぞ㋴蓍草の陰陽に屬せん。靈鳥巖前に華さくときは、則ち邪氣妖氛、諸聖の鼻孔を穿破す。野狐窟裏に根するときは、則ち毒芽惡蘖、列祖の肝腸を爛殺す。螺甲沈水よりも薰しく、甚ぞ烏頭㋱砒霜に似かん。枝を得るものは枝を貴ぶ。多羅八萬藏、錯つて月を標す。葉を得る者は葉を貴ぶ。好堅四十圍、猶ほ霜を

を惆むが故に、方便を垂れて化するのみ、宜しく善く思を思ひ、苦海に墮するを免るべしと、語り已りて空に飛び去る、此れより陝西佛を信ずる者多しと、此の因緣によるなり。

㋓涅槃の岸にいたるなどに同じ。

㋢山礬をいふ、和名「とちしば」高さ數尺、葉密にして枝肥え、冬凋まず、花白くして香ばし、故に梅と並べ稱するなり。

㋐いづれも「かご」なり、浮世種の繫縛をいふ

㋚能仁は卽ち釋迦牟尼佛をいふ。

㋖槿花、あさがほをいふ。

㋴蓍草、蒿の一種、古は之れを以て五十本の占具を作れり。

㋱道術者の用ひる毒藥の名なり。

帶ぶ。葱葱鬱鬱、久久昌昌、手に信せて拈出して、聊か小祥に酬ゆ。看よ看よ、凝つて岐陽九月の微雪と爲り、散じて濟北一株の蔭涼と作る。咄。香嚴童子來也、淑靈に對して重ねて秘章を唱ふるを聽け。女中の堯舜、㊀萱堂を仰ぐ、寵雨恩烟解脫香、珠簾を捲起して高く眼を著けよ。青山改めず舊時の粧。大日本國云云。大功德主㊁三寶受戒の弟子源の朝臣六郎、享祿二年太歲己丑九月二十九日は、先妣清泰院殿常春宗榮大禪定尼小祥忌の辰なり。預め般舟三昧道場に就いて、十員の緇侶を集めて、諸般の白業を修するもの七晝夜、大勢至菩薩の尊像一軀を彫造し、醍醐味の經王、頓漸印讀若干部、圓通妙懺一座、水陸淨供一會、玆に一件の奇事有り。大孝男源府君、經王二十八品の內より、提婆の一品を抽んでゝ、手づから謄寫す。紅心心裏の紅心、一乘無價の珠、繫けて祕在す。好手手中の好手、五百塵點の墨、磨するも何ぞ消亡せん。妙義不可說、功德不可量、諸仁未だ信せずんば阿孃に問取せよ。自餘の善利忌佛の事迹、眞詮祕咒の功驗、縷陳するに遑あらず。他の央庠底の座主に還す。今日正當散忌、虔んで須彌の香華、海水の燈燭、鬼搗穀佛跳牆を備へて、以て廣大の供養を伸ぶ。仍つて赤鬚白足、圓頂方袍の輩を延請して、異口同音に大佛頂光聚心佛所說無上神咒を諷演するの次で、妙心の小比丘宗休に命じて、此の畢力迦を焚いて、三世歷代の乃佛乃祖、上界下地、或は天或は鬼、一切の含識等に供養し奉る。伏して願はくは、淑靈這箇の薰力

㊀堯の殿堂、土堦三段、茆茨剪らず、采椽斲らず、庭前に蓂莢を生ず、十五日以前は一日に一葉を生じ、十五日以後は日に一葉を落すと、只だ殿堂の質素なるをいふのみ。
㊁佛法僧を三寶といふ。

に憑つて、慧海の慈航を借らず、諸種の苦類を提誘して、同じく心空の場に登らんことを。恭しく惟れば、清泰院殿常春宗榮大禪定尼、㋓天曆の末裔、具平の餘芳、芳聲美譽、坤軸式て載す、淡粧濃抹、湖鏡藏さず。祠院を創めて清泰と號す。譬へば㋪韋提希の七重の寶樹を觀ずるが如し。溫泉を賜ふて膏沐と爲す、恰も太眞妃が一門の諸楊を起すに似たり。龍舒居士、樂邦文類に記す。龜臺の金母、家運の延長を祝す、山河始終、桐葉を剪つて小弟を封ず。風流蘊藉、蓮花を愛して㋲六郎と稱す。蓋し源深きときは則ち流遠し、矧んや時至つて理彰るゝをや。今碧落の天に歸つて藥を搗く、㋝嫦娥を后羿に失す。昔赤松の地に遊んで梅を詠ず、㋜婦人を張良に比す、群臣策を獻じて勝つことを千里に決し、二豎祟を作して化を他方に戢む。長夜漫漫、蕙帳の猿鶴、且つ驚き且つ怨む。涼飈颯颯、金籠の蟋蟀、悲むに堪へ傷むに堪へたり。政德國を治む、任姒に同じと雖も、壽夭天に在り、㋑彭殤を異にせず。其の來るや、線路を放開し、其の去るや、封疆を把定す。難難。佛界を出でゝ魔界に入ることは難し。㋺摩登伽の慶喜を誑かすを冷笑す。易々。女相を變じて男相と成ることは易し、妙德尊の勝光を度するを熱瞞す。盤根錯節に逢はず

㋓第六十二代村上天皇の年號、即ち村上天皇を申し奉る。

㋪韋提希、又は毘提希、吠提希とも記し、或は單に提希とも記す、思惟と譯す、摩訶陀國、頻婆娑羅王の后妃にして、阿闍世王の母なり、后妃太子の爲に牢獄に幽閉せられて、深く厭世の念を起し法を求む、釋尊乃ち靈山の會座を沒して、王宮に降臨し、韋提の爲に說法したまへり、觀無量壽經即ち之れなり、委しくは本經に出づ。

㋲舊唐書楊再思傳に、張昌宗姿貌を以て寵倖せらる、再思又之れに諛びて曰く、人は言ふ、六郎の面蓮華に似たりと、再思以爲らく、蓮華、六郎

んば、爭か鈍鐵の利鈚を辨ぜん。百億分身、菖蒲、釋師子を現ず。五逆消滅、芭蕉、香象王に觸る。箇箇圓成實性、塵塵本有の家鄉。然も此の如くなりと雖も、後昆を保祐する那一句、只麼に舉揚し去らん。臥龍纔かに奮迅すれば、丹鳳も亦翱翔す。」

逆卷前の雲州の太守春谷永源禪定門盡七日忌の香語

「吾に本來の香一瓣有り、無陰陽の地無根を長ず、烟に非ず火に非ず又木に非ず、此の深心を將つて佛恩を報ず。大日本國河内州茨田郡居住の奉三寶戒の弟子孝男源の朝臣宗綱、天文五年六月初二日、伏して先考前の雲州の太守春谷永源禪定門盡七忌の辰に値ふ。今月今日、預め盛和精舍に就いて梵筵を莊嚴し、伊蒲の淨饌を營辨して、佛に供し僧に齋す。蓋し椿府罔極の恩に酬ゆとなり。當忌醫王善逝の尊像、彫刻する者一軀、七軸の妙蓮、漸寫する者二部、孝男宗綱、自書する所の本門の㋺壽量一品、水陸妙供、施設する者一會、三摩耶形造立するもの一基、仍つて六和の苾芻衆苾芻尼を集めて、異口同音に白傘蓋神咒を諷演するの次で、靈雲の小比丘宗休に命じて、斯の小兜樓を焚いて、以て三世十方の諸佛、西天東土

に似たり、六郎、蓮華に似たるに非ずと。」

㋝淮南子に「羿不死の藥を西王母に請ふ、嫦娥竊みて月に走る」と、註に「嫦娥は羿の妻なり」とあり。

㋜張良狀貌婦人に似たりしといふ、故にしかいふか。沛公に事へて其の籌略を以て天下を定め留侯に封ぜらる、次いで世事を棄て赤松子に從ひて遊ぶと。

㋑彭は彭祖、先きに見ゆ、八百歲の壽を保つと、殤は未成人にして死するをいふ、禮記喪服傳に「年十六より十九に至る迄に死したるを長殤となし、十二より十五に至る迄に死したるを中殤となし、八歲より十一歲に至る迄死したるを下殤となし、七歲以下を無服の殤となし、生れて未だ三月ならざるは殤となさず。」

の列祖、天衆地神、冥主冥官、三有九界の苦類、依草附木の精魂等に供養し奉る。伏して願はくは、尊靈這箇の薫力に憑つて、頓に生死の大海を超え、永く自性の本源に歸せんことを。共しく惟れば、某名、威烈霜冷じく、笑談春溫なり。之れを㋥姚黄魏紫に譬ふれば、則ち且つ富み且つ貴し、之れを㋭召棠萊柏に仰げば、則ち亡するが如く存するが如し。阿育の塔を建て㋬給孤の園を開く、積善の餘慶、必ず兒孫に及ぶ。㋣名翼空に搏つ九萬里の風、北溟㋠鯤化す、夢魂曉に驚く、五十三年、南柯蟻屯す。久しく㋷青苗の新法に苦む、毎に稼穡の艱難を憂ふ。文王は仁義の釋迦、卑小丈六の相を現ず。維摩は再生の金粟、眞俗不二の門に入る。瞬息星移り斗轉ず、㋦默處電卷き雷奔る。淨躶躶、承當を絶す、佛界魔宮を合して生擒活捉す。赤洒洒、窠臼沒し、鶴樓鵡洲に和して、拳倒踢翻す。直に香嚴の本寂を印す、豈に㋸琰羅の平反を待たんや。故家の喬木後昆を覆蔭す。」香を擧して、「看よ看よ、何ぞ料らん平生鷹を臂にする手、黄金鑄出す鐵崑崙。」

芳室妙薫禪定尼七周忌の香語

「千佛の母と稱す老摩耶、未だ恩に酬ゆるに足らず前釋迦、黄泉に薫徹

㋺阿難尊者をいふ、佛成道の日に至る、故にしか名付くと。

㋩法華經中如來壽量品をいふ。

㋥幷に牡丹の異名、牡丹譜に「錢思公曰く、人牡丹を謂ふて花王となす、今の姚黄は眞に花王たり、魏紫は后の美」と。

㋭召棠は召公の甘棠、萊柏は孔明廟前の柏をいふか。

㋬祇園精舍のこと、この精舍は須達長者、祇陀太子と共に建立する所のものなり。

㋣大翼をいふ。

㋠鯤は大魚、又は小魚と。莊子に「北溟に魚あり、其の名を鯤と爲す、鯤の大なること其の幾千里なるかを知らず、化して鳥となる、其の名を鵬と爲す」と。

㋷宋の王安石の作りし新法の一なり、即ち挿苗の時期に政府より資金を百姓に貸し、秋熟に至りて資金に二割若しくは

し碧落を穿つ、一爐の沈水七梅花。大日本國河州路茨田郡高瀬村富春院守塔宗仙、天文六年龍丁酉に集る三月十二日、伏して先妣芳室妙薰禪定尼七周忌の辰に値ふ。靈雲禪院に就いて、虔んで香華燈燭茶菓珍味を備へ、伊蒲の淨饌を營辦して、以て佛に供し僧に齋するの次で、小比丘宗休に命じて、斯の爛枯柴を焚いて、三世十方の諸佛、西竺東震の列祖、鬼畜人天、一切の群迷等に供養し奉る。伏して願はくは、淑靈這箇の妙薫力に憑つて、諸趣の苦類を提誘して、倶に眞如の海涯に到らんことを。夫れ惟れば、某名、(ヲ)蟠桃實を結び、紫蘭芽を萌む。(ワ)蘇内翰の間富貴を感ずと雖も、靈照女の無賴楂を奈ともせず。群機を超越す、佛界魔界衆生界、諸子を誘引す。羊車鹿車大牛車、脚下紅線を斷じ、項上鐵枷を脫す。休休休、(カ)修多羅の教は月を標す、咄々々、金剛の眼睛は沙を撒す。薫風徐ろに來る、珠簾半は捲いて瑠璃滑なり。紅雨亂れ落つ、宮扇始めて開いて翡翠斜なり。法に二法無し、是れ正是れ邪、香嚴の本寂、誰れか誵訛を定めん。」香を挿んで、

「看よ看よ、東海の(ヨ)赤梢鯉、(タ)南山の鼈鼻蛇を呑卻す。」

壽陽宗祝信女法華千部を誦する供養拈香の語

三割の利子を添へて還納せしむる法なり。

(ヌ)維摩居士の一默雷の如しといふより來る。

(ル)閻魔王をいふ。

(ヲ)西王母が漢帝に獻ぜしといへる不老長壽の桃をいふ。

(ワ)蘇内翰は蘇老泉をいふ、内翰は翰林學士をいふ。

(カ)十二部經の一なり、又佛聖經の總稱。

(ヨ)鯉、禹門三級の浪を越ゆる時、電火の爲に尾を燒かると、遂に化して龍となると。

(タ)雪峰義存の看蛇の公案中にある語なり、南山は假定の語、鼈鼻蛇は赤小豆の如き斑點ある蛇のこと、蛇は毒熱毒氣を吐くもの故　觸るるも背くもならぬもの故、宗門にては本來の面目などに喩へていふことあり。

(レ)大通智勝佛の十六王子にし

「古來錯つて法華に轉ぜらる、轉得すれば文文句句新なり、大藏五千餘卷の外、君が爲に拈出す一枝の春。」散說錄せず。「夫れ以れば、誦經功德主壽陽宗祝信女、昔法席を退き、今願輪に乘ず。復講を㋹十六王子に聽き、化城を三百由旬に立す。當體蓮譬喩蓮、天台一夏妙を談ず。無憂樹菩提樹、瞿曇九劫倫を超ゆ。鍼鋒に向つて足を翹て、醍醐を飲んで脣を沾す。至聖の命脈、列祖の大機、之れを悟る者は解脫を得。諸佛の本懷、衆生の直道、之れに迷ふ者は沈淪を受く。㋞鶖子、靈山の記を受け、龍兒、滄海の珠を獻ず。正宗流通銀世界、普賢長男の相を示す、方便濟度金沙灘、觀音婦女の身を現ず。誦經の聲㋡洋洋乎として耳に盈つ、紺鏡の光熒熒然として顰に効ふ。門を出づる三種の寶車、㋤薏苡讒多し。空に書する七軸の文字、棘木眞ならず。或時は寶所を踢倒し、或時は要津を把定す。雪嶺草香し、生蘇味熟蘇味、兜率花發く、此岸の人彼岸の人、圓頓速疾、迹を開き本を顯す。漸次修行、果を結び因を收む。然も與麼なりと雖も、言前の的旨如何が指陳せん。」香を拈んで、「爐中に爇向す果して何物ぞ、白灰撥出す玉麒麟。」

㋞鶖子は舍利弗をいふ、梵音シヤーリプトラ、舊譯に身子、新譯に鶖子、又は鶖鷺子と譯す、佛十大弟子の一、名は優波衣沙、もと目連と共に六師外道の一人、沙然に從ひ各々一百の弟子を有せしが、釋尊成道の後、幾もならずして相共に弟子となる、智慧第一と稱せらる。

㋡流動充滿の意。

㋤後漢書馬援傳に「援交趾にあり、嘗て薏苡の實を餌し、用て能く身を輕くし、慾を省き以て瘴氣に勝つ、南土の薏苡實大なり、援、以て爲に種ゑんと欲し、軍還る時、之れを一車に載す、時人、以て南土の珍怪と爲す、權貴皆之れを望む、卒後に及び上書して譖

壽陽宗祝　信女逆修三十三白忌の香語

「咄箇の幻人幻縁を修す、初七より卅三年に到る、爐香鑄出す崑崙の鐵、散じて江南白鷗の烟と作る。薩訶世界南贍部洲、大日本國河州路茨田郡功德主、奉三寶戒の弟子宗祝、天文八祀龍己亥に集るの歲、早に當來の苦報を懼れて、逆め現在の善因を修す。初七忌に始つて三十三白忌に終る。淨財を捨て、手を靈雲の小比丘宗休に借つて、供佛齋僧の次で、小兜樓一片を拈じて、以て三世十方の諸如來諸菩薩埵、西天東土歷代の諸祖師、天衆地神、日域六十六州の大小の神祇、鬼主鬼官、(十)六趣四生一切の群類等に供養し奉る。伏して冀はくは、這の妙薰力に憑つて、上青霄に透り下黃泉に徹せん。加之、現に安寧を得て、後に(ラ)覩史天に生せん、旃を記せよ。夫れ惟れば、預修功德主壽陽宗祝信女、邪を捨て正に歸し、實を顯し權を開く。其の功名を身後に留めんよりは、如かじ冥福を生前に修せんには。百陋一姝、壽陽公主の梅花の粧を學んで、含章の面を呈す。(ム)三從五障、秦國夫人の竹篦債を償つて洋嶼の禪を慕ふ。藥爐・經卷・活計・荆釵・布裙・家傳、戒香・定香・解脫香、報土を莊嚴し、見濁・命濁・煩惱濁、心田を

する者あり、以爲らく、前に載せ還る所のもの、皆明珠文犀なりと、帝益怒る」と。

(十)六趣は六道のこと、地獄、畜生、修羅、人間、天上の六世界。四生は胎生、卵生、濕生、化生にて、こゝは生物一切をいふなり。

(ラ)兜率天に同じ。

(ム)三從は幼にして親に從ひ、長じて夫に從ひ、老いて子に從ふ、これ男子になき所、又女人は男子と異なりて、本來五種の障碍を有す、故に女子を呼びて五障の女人といふ、五障とは一に梵天王、二に帝釋天王、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身となるを得ざるをいふ、これ印度の古說によれるものなり、此の五障は何ほ月の雲を蔽ふが如きもの故、之れを五障の雲ともいふ。

(ウ)反魂香ともいふ、洪芻の香譜

汚染す。眞如・自性・清淨・本然、晝は閻浮に降り、夜は率陀に歸る。廣寒宮裏桂を攀づ、朝に伽藍に入り、暮に正覺を成ず。無垢世界、蓮に坐す、龜臺の金母を奴呼し、龍女の華鮮を婢視す。畫けども成らず、描すれども就らず、妙又妙、玄又玄。然も恁麼なりと雖も、吾が家、別に長壽の曲有り、鸞膠を把つて斷絃を續ぎ去らん。」香を以て爐に挿んで云く、「法身無相の相を見んと欲せば、門前改めず舊山川。」

義峰宗卓禪定門十三回忌の香語

「曾て華屋より泉臺に落つ、露結んで霜と爲る秋幾回ぞ、春風を回斡す天八月、⑦返魂香は一枝の梅に屬す。大日本國攝津路三島江村居住の奉三寶戒の弟子功德主大江長能、天文十二年八月十有九日、家門伏して前の左金吾義峰宗卓禪定門十三白の忌辰に値ふ。甲に先つこと三日、私第に就いて梵筵を莊嚴す。一花一燈、一香一茶、供佛齋僧、諸般の白業を修す。中に就いて、當忌の尊⑧大日覺王の像、彫刻するもの一軀、山頂經漸寫する者一部、圓通妙懺修禮するもの一座、這の外作善の品目、載せて僧官舉唱の中に在り。今散筵に臨んで伊蒲塞の淨膳を營辦し、南僧諷經の次で、靈雲の休上座に命じて、這の結願香を焚いて、當忌の尊大日覺王、三世十方の諸佛、

に「司天主簿徐肇、蘇氏の子德哥といふものに遇ふ、自ら善く返魂香を作ると、手に香爐を持ち、懷中より一貼の白檀香をとりて、爐中に撮す、煙氣裊々として直ちに上る、龍腦よりも甚だし、德哥微吟して曰く、東海の徐肇先靈を見んとす、願はくは此の香煙、用ひて引道を爲せよと、盡く其の父母曾高を見る、德哥曰く、但だ死して八十年以上を經るは、則ち返すべからず」と。

⑧大日如來は一切諸佛の王なるが故に、大日如來を稱して大日覺王如來といふ。

西天東土の列祖師、天界地界水界大小の明靈、日域大小の神祇、冥府の鬼主鬼宮、三界二十五有の苦衆生等に供養し奉る。伏して希はくは、這の開薫力に憑つて、五百由旬嶮難の惡道を超え、四十二重の摩尼殿陔に登らん。共しく惟れば、禪定門、道根熟せり矣、晩節難い哉。右京兆の尹に任ずるときは則ち百八の珠を大顛に爭ふ、露柱歌ひ燈籠舞ふ。左衞門の尉に任ずるときは則ち一條の棒を德嶠に奪ふ。虛空消し鐵山摧く、大乘の器有りと雖も直指の才に逢ふこと罕なり。淵明が風流、黃菊猶ほ存す、今故物と作る、田眞兄弟、紫荊復た茂す。昔賢材を用ふ、蝴蝶空しく殘夢を續ぎ、蟋蟀暗に餘哀を助く。十劫波の前、(ノ)智勝佛の道場に坐す。盡く是れ時の人の窠窟、一炷烟中、香嚴童の本寂を印す、寧ろ世俗の塵埃を受けんや。須彌鼻孔を穿ち去り、(オ)舜若面皮を劈き來る。(ク)社燕秋鴻雲は淡し、渭北春樹の暮、甲鷗乙鷺天は碧なり、江南野水の隈、圓通の境漸く入り、解脫の門頓に開く。千佛の廣額屠刀を抛下す、豈に涅槃の捃拾を待たん。(ヤ)五逆の達多、記莂を授與す、法華の付財を貪ること莫し。」香を擧して、「這箇磨すれども磷かず、涅にすれども緇まず、之れを潤すに雨を以てし、之れを鼓するに雷を

(ノ)大通智勝佛をいふ。釋尊はこの佛未だ出家せざる以前、有せし十六王子中の第十六番目の子なりとぞ、句解に大通智勝を譯して、佛の神通は横に十方に遍し、竪に三際を窮めて、悉く知り悉く見て、通徹せざることなし、ゆゑに大通といふ、この佛の智、究竟覺了にして、三惑淨盡し、二死倶に亡し、彼の三乘に勝れたり、故に智勝といへり、此の佛十劫間、道場に坐して佛道を成じ、法華經を講じ、十六王子に聽かしめ、のち入定すること八萬四千劫に及ぶ、この間彼の十六王子、各法華經を復講したりといふ。

(オ)舜若、梵音「シユーヌヤ、」空と譯す、空たること。

(ク)格物論に「燕は春社に來り、秋社に去る、故に之れを社燕

以てす。全く他力に依る、長く聖胎を養ふ。看よ看よ、摩訶般若波羅蜜、兎角龜毛眼裏に栽う。」咄。

心源宗清禪定門二十五年忌の香語

「地獄天堂夢蝶の牀、覺め來る二十五の年光、香消して(マ)金鴨何ぞ飛び去らん、鐵崑崙の鼻梁を(ケ)扭住す。大日本國山城州洛陽の居住、功德主孝女妙泉、天文甲辰二月十有五日、伏して先考心源宗清禪定門二十五遠忌の辰に値ふ。靈雲精舍に就いて法筵を賁嚴し、香華燈燭、茶菓珍饈を備へて以て供養を伸ぶ。大乘妙典頓寫一部、圓通懺摩一座、水陸供一會、仍つて苾蒭衆を集めて首楞嚴神咒を諷誦するの次で、休上座に命じて、這の妙兜棲を焚いて、當忌の尊虛空藏菩薩、三世十方の諸佛、西天東土の諸祖、日域大小の諸神、六趣四生一切の群類等に供養し奉る。仰ぎ冀はくは、者箇の薰力に憑つて、速に解脫の航に乘ぜんことを。夫れ惟れば、禪定門は器之(フ)瑚璉、材也櫲樟、南陽の廬より起つものは、孔明臥龍奮迅、吸ふに西江の水を以てする底は、龎老丹鳳翶翔、翅だ(ヨ)出師の表を進むるのみにあらず、直に選佛場に登ることを得たり。高義、層雲に薄る、松下に(エ)陶

といふ、秋鴻は、鴻雁秋に鳴いて南地に歸る故に云ふ。」

(ヤ)提婆達多、斛飯王の子、釋尊の從兄弟、或は善覺長者の子なりともいふ、釋尊成道の後、出家して弟子となる、然れども佛の勢威を嫉み、五百の衆を率ゐて別立し、阿闍世王と結びて佛を亡し、摩訶陀國の敎權を握らんと企てて成らず、阿闍世王改悔するに及び、事益々非にして遂に病死せり、佛傳によれば、その逆罪によりて生きながら墮獄せりといふ、法華經には釋尊は豫言して未來には天王如來たるべしといふ。

(マ)太陽をいふ、金烏に同じ、日月をいふなり。

(ケ)おさへとゞむること、とらまへること。

(フ)瑚璉は宗廟に黍稷を盛る器にして、飾るに玉を以てす、夏

令を見るが如し。聲價寰宇を動す、花中に㊅孟嘗有るに似たり。將に謂へり、魯に君子多しと、元來晋に文章無し。五陰の山を踢倒するときは、則ち策を涅槃の後陣に定む、三界の獄を打破するときは、則ち迹を本覺の故鄉に掃ふ。恁麼不恁麼、活鱍鱍、拘束沒し、不恁麼恁麼、淨躶躶、承當を絕す。然も是の如くなりと雖も、後昆を保祐する一句、若何が商量せん。」

香を擧して、「海國乾坤濶く、蓬萊日月長し。」

月江宗光 禪定 門小祥忌の香語

香を擧して、「晩梅二月折り殘す枝、手に信せて今朝拈出し來る、風笛一聲花落ち盡す、三千世界暗香吹く。扶桑國山城州洛陽居住の功德主宗淸信女、天文甲辰初秋十三日、伏して月江宗光 禪定 門小祥忌の辰に値ふ。預め今月今日に於て、梵筵を飾つて淸衆を集め、白傘蓋を諷演するの次で、手を休上座に借つて、這の小柴片を焚いて、諸佛諸祖諸の衆生等に供養し奉る。希ふ所は、頓に苦海を超えて、速に彼岸に到らんことを。夫れ惟れば、某名、一棚の㊆俊鶻、千里の㊇烏騅、宋先生曾て日本の歌を作る、今尚ほ存せり。融の大臣始めて源氏の姓を賜ふ、民と具に之れを瞻る。翅だ

に璉といひ、殷に瑚といふ、器の貴くして美なるものなり、以て人の才器のすぐれたるに比す、論語に「子貢問ふて曰く、賜は如何、子曰く、女は器なり、曰く、何の器ぞ、曰く、瑚璉なり」と。

㊃孔明、諸葛武侯が蜀の相たりし時、誠心を開き公道を布き、衆思を集め、忠誠を盡して以て政を爲せり、其の師を出して魏を伐つとき、表を後主に上る、中に言あり、曰く、「臣鞠躬して力を盡し、死して而して後已まん、成敗利鈍にいたりては臣の逆め覩る所に非ず」と。

㊄陶淵明、彭澤の令となる、故にその故鄉に歸るに及び、歸去來の辭を賦して其の志を表す。

㊅孟嘗、字は伯周、會稽上虞の人、嘗て合浦の太守となりて

(キ)斥鹵桑田變ずるのみにあらず、剡んや復た夕陽花塢遲きをや。生死の魔を降すときは則ち竺乾の猛將を指麾し、煩惱の賊を殺すときは則ち棘門の戲兒を鼻笑す。家業、書を學び劍を學ぶ、虛名、斗の如く箕の如し。槁木死灰、或時は莊座主を呵して羅漢と稱す、桂を聞いて悟道し、或時は(コ)黃詩祖に逼つて泥犂に陷る。吾れ汝に隱すこと無し、君誰れにか說向せん。南海の沈檀、一爐に爇卻す、其の功德不可說不可說。西方の法華頓寫七軸、其の妙理、也太奇也太奇。山此の郎の面目を露し、天阿母の慈悲を感ず。若し聲色を認めば、甚の了期か有らん。這裏面目無く、又慈悲無し。」香を擧して、「看よ看よ、金烏飛んで(メ)暘谷を出づ、鐵馬跳つて須彌に上る。」

宗璘禪定門一周忌の香語

(ミ)落葉兩三片、拈じて本來の香と作す、八百の鼻功德、遍界曾て藏さず。

臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三囘忌陞座　駿州大龍山臨濟寺に於て之れを修す

「大龍再現す大人の身。」香を擧して、「這の香雲に乘じて忽ち脫鱗、呑卻す十三の華藏海、吐いて臨濟

德政を布く、民之れを神明と仰ぐ、徵し還さるゝや、吏民車を攀ぢ、之れを請ふ、乃ち夜逃れ還り、隱所して自ら耕すと。

(ヲ)はやぶさのすぐれたるもの。

(サ)項羽垓下に破るる時、歌つて曰く、「力山を拔き氣世を蓋ふ、時利あらず騅行かず、騅の行かざるは奈何ともすべし、虞や虞や汝を奈何せん」と、騅は項羽の乘りし千里の馬。

(キ)鹽濱をいふ、然れども只だ海と見てよし、桑田變じて海となり、海變じて桑田となるといふ意なり。

(コ)黃庭堅、山谷と號す、詩に於て一派を成す、歐陽修の友。

(メ)東方、日の出づる方をいふ。

(ミ)時の風物を叙するなり。

百花の春と成す。」

垂語、「祖師甚に因つてか西來、蕉葉雷を聽いて展ぶ、佛法甚に因つてか東漸、葵花日に向つて傾く。小玉小玉、只だ要す檀郎が聲を認得せんことを。參。」僧有り（梅室座元）、衆を出でて問うて云く、「正法輪轉ず、芳草に隨ひ落花を逐ふ、大施門開く。檀林に入り荊棘を出づ、更に密旨を示して、願はくは來機に應ぜよ。」師云く、「㊀天鑑私無し。」進んで云く、「洛陽の牡丹、新に蘂を吐く。」師云く、「大いに春意に似たり。」進んで云く、「大功德主源府君、今月十七日、伏して臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三回の忌景に値ふ。大和尙を拜屈して、陞座說法、未審し什麼の法をか說く。」師云く、「今日好晴。」僧云く、「記得す、鎭州の府主王常侍、臨濟慧照禪師を請じて、陞座して卽ち云く、『此の日常侍の堅請を以て、那ぞ綱宗を隱さん』と。如何なるか是れ隱さざる底の綱宗。」師云く、「吾が宗に語句無く、又一法の人に與ふる無し。」進んで云く、「大和尙、今日吾が源府君の請を受けて、臨濟寺殿の爲に陞座す、之れを㊁賓主互換と謂はん乎。」師云く、「戲海の猛龍、摩霄の俊鶻。」進んで云く、「與麼ならば則ち彼の久遠を觀ると猶ほ今日の如し。」師云く、「日月秦樹に垂れ、乾坤漢宮を繞る。」進んで云く、「㊂三尺の吹毛、寰宇を定む。」師云く、「阿剌剌。」進んで云く、「四叢圍繞、間世の優曇、謹んで答話を謝す。」師云く、「月は雪後より皆奇夜、天は梅邊に到

㊀天道といふが如し。
㊁主人主位に執せず、來賓々位を守らず、主賓となり、賓主となりて、回互宛轉するの靈機をいふ。
㊂漢の高祖、能く三尺の劍を以つて天下を定むと、これに比するものか。

つて別春有り。」

提綱、「㋲元亨利貞は一氣に始り、常樂我淨は一心に本づく。心法無形、蕩蕩平として宇宙に充塞す。面前物有り、昭昭爾として古今に輝騰す。乾馬坤牛猶ほ覆載せず。坎烏離兎、何ぞ敢て照臨せん。是れに係つて㋝毘盧、天に先ち、善財、天に後る、空裏に紐を結ぶ。靈山に月を指し、曹溪に月を話る、海底に鍼を摸る。六白冷坐佇思に勞す、百城の煙水參尋を費す。爾より來㋜少林の顰に効ふて、石女無孔笛を吹く。㋑靖節の趣を識つて木人沒絃琴を奏す。露柱歌ひ燈籠舞ふ、山花笑み野鳥吟ず。未だ妙旨に逢はず、全く知音を絶す。正與麼の時。」杖を拈じて、「牀角に拄杖子有り、他の保社に入らず。忍俊不禁、驀路に出で來つて、吧吧地に道ふ、能殺能活能縱能擒と。㋺遠法師、甚に因つてか虎溪を過ぎざる、山僧に撥著せられて、目㋩瞠し口瘖す、雨池蓮を打つ。十緇八素、無繩自縛、風岸柳を吹く。六凡四生、鐵に點じて金と成す。畢竟空に非ず色に非ず、元來陽無く陰無し。正に好し、葛藤窟を打破して、荊棘林を㋥剗除するに。」卓一下して、「若し樓に登つて望まずんば、爭か滄海の深きことを知らん。」

㋲易に乾は元亨利貞とある、傳に、元亨利貞は之れを四德といふ、元とは萬物の始め、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成なり、惟だ乾坤に此の四德あり、元は春に屬し仁と爲す、亨は夏に屬し禮となし、利は秋に屬し義となす、貞は冬に屬し智となす。

㋝如來をいふ、毘盧遮那佛、又は毘盧遮那、盧遮那、遮那ともいふ、光明遍照と譯す、善財天は善財童子をいふ。

㋜西施の顰にならふより、達磨の坐禪を下手に眞似するをいふ。

㋑靖節は陶淵明をいふ、沒絃琴は絃のなき琴をいふ。

㋺惠遠法師、蓮社十八賢の一、虎溪三笑の事、前に見ゆ。

㋩瞠着など熟字して驚きみつむ

散說、「大日本國駿州路居住、大功德主源の朝臣義元、天文十七年三月十七日、伏して先君臨濟寺殿用山玄公大禪定門、十三白の遠忌の辰に値ふ。本寺に就いて道場を莊嚴し、甲に先つこと七日、十員の緇侶に命じて、晨香夕燈、晝經夜禪、諸般の白業を修して、以て供養を伸ぶ。當忌の尊大日如來の像彫刻する者一軀、圓通懺摩修禮する者一座、水陸妙供施設する者一會、法華經王頓漸書寫する者如干、大功德主本門の壽量自ら書する者一品。今散筵に當つて伊蒲塞の淨膳を營辨して、謹んで淸淨衆を集め、白傘蓋無上神咒を諷演するの次で、雲居天上の三秀堂頭和尙を拜請して、鷓斑を燒き鯨吼を發す。野桃花下の靈雲比丘宗休に副命して、麈拂を秉り驢嘶を作す、檀命に因つてなり。恭しく以れば、大禪定門、人中の㋭杞梓、名上の梧桐、水尾の流、源姓を賜ふて、多田滿仲に承く。淺間の雪、和歌を詠じて普廣相公に獻ず。此の郞、武門の閥閱、其の先、亂世の英雄、仁義の裳を褰げて、吾が堂に升り、吾が室に入る。箕裘の業を續いで、父書を讀んで父の風有り。駿州の太守を領取して、㋬鴻溝以東を割據す。魯直㋣齴齲碧瞳、烏跋千年の瑞を現ず。㋠馬溫瑠璃皎佛、牡丹一日の紅に比

る様子をいふ。

㋥かりけづろをいふ。

㋭二木とも良材、資治通鑑に「杞梓連抱にして、而も數尺の朽有るも、良工は棄てず」と。

㋬鴻は大なり、大なる溝なり、史記項羽記に「項王乃ち漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西のものを割きて漢となし、鴻溝以東を楚となす」と、これより轉じて分界を畫することを鴻溝を畫すといふ。

㋣笑ひて齒の現はるゝを齴といひ、虫ばむを齲といふ。

㋠司馬溫公、自ら瑠璃光佛と號す。

㋷汴は州の名、一、二、三、四に深き意なし、近きより遠きを示すものか。

㋦古の弓の達人なり。

㋸唐の高祖の子元嬰、洪州を都督するとき閣を營む、之れを滕王閣となす。

す。膝を王侯貴介に屈し、名を走卒兒童に誦す。貧しうして諂はず、富んで奢らず。一揚二益、三京㋷四汴、近き者は來り遠き者は服す。南蠻北狄、東夷西戎、宣が幕下に坐し、㋦羿が彀中に遊ぶ。㋸滕王の蛺蝶花を穿つ、依俙として相似たり。㋾張顛が驚蛇草に入る、彷彿として同じからず。㋻心正しきときは則ち筆正し、畫工なる者は詩工なり。春陰十萬營、細柳の圈を透る。雲夢八九澤、栗棘蓬を呑む。胸襟洒洒落落、佳氣鬱鬱葱葱たり。加之、連聲兄と叫ぶ。鼇山昔時成道、他方に化を戢む、雄峯同日終を示す、隻履地に瘞め、雙劍空に飛ぶ。活鱍鱍拘束沒し、淨躶躶羅籠を絶す。此れは是れ大禪定門、從前の閒絡索、玆に四事の筆供養有り、一一擧揚し去らん。其の第一に云く、『卽身大日法中の王、朝に扶桑を照し暮に落棠、信ぜずんば天外に出頭して看よ。人人脚下の一靈光、是れを㋕阿字の筆供養と謂はん乎。』其の第二に云く、『過去の如來正法明、耳根清淨眼根清し。楊枝洒水兩三點、饒舌の黃鶯懺悔の聲、是れを音聲の筆供養と謂はん乎。』其の第三に云く、『大地廣く開く甘露門、風に和して供上に黃旛を插む。冤親平等曲終つて後、十恒河を倒して一口に呑む。是れを大盆小盆の筆供養と謂はん乎。』其の第四に云く、『虛空は是れ紙月は㋵毛錐、無字の經王錯つて寫し來る。笑ふ可し㋟秀能の頓漸を分つことを。南枝は春早く北枝は遲し、是れを頓書漸書の筆供養と謂はん乎。』更に那一事の筆供

㋾唐の書聖張旭をいふ、飲中八仙歌に見ゆ。
㋻柳公權、書道を説いて曰く、「心正しからざれば字正しからず」と。
㋕梵語の母字なり、此の所只だ文字といふ意に見るべし。
㋵毛錐は筆なり。
㋟神秀、慧能を云ふ、兩師によりて南頓、北漸の別を生ず。

養有り、三世の佛に供養するに、三世の佛敢て受けず。六代の祖に供養するに、六代の祖敢て受けず。三十三天の衆仙に供養するに、衆仙亦受けず。六十六州の諸神に供養するに、諸神亦受けず。未審し大禪定門、卻つて受けんや。別別金剛の眼睛、源公の筆頭上に在り。」拂を收めて叉手して、「謹んで供養を謝す。」

自序、「宗休 ㋪樗櫟の遺韻、蒲柳の衰容、笑を傍人に取る。千里を凌いで蠅驥に附す。位を流輩に越え、㋨三級に登つて魚龍と化す。豈に大士講經の內證に合せんや。叨りに世尊陞座の前蹤を挙づ、枉げて恕宥を賜へ、㋨愚惷を罪すること莫れ。忸怩忸怩。」

檀謝、「陞座の次で、共しく惟れば、大功德主、海壇の馬子、砥柱の鳳雛、薔薇の古洞春を留む。蚤に㋧謝傅を慕ひ、梅花の門戶雪に掩ふ。晚に林逋を訪ふ、彼の蒼生黔首を奈せん、他の白足赤鬚を拜す。一卷の兵書、善を盡し矣、美を盡せり矣。半部の論語、⊕御を執らんか、射を執らんか、必ず八州の都督と稱せん。況んや三世の相樞を秉るをや。法門の英檀、匿王の佛敕を受くるが如し。在家の菩薩、大帝の吾が徒を護するに似たり。願はくは華甲を保ちて、仰いで羅圖を祝せよ。」

㋪自己の不才を卑下していふこと、莊子に樗散の語あり。

㋨禹門三級の波をいふ、前に見ゆ。

㋨惷は愚なり。

㋧謝安、字は安石、陳國陽夏の人、年四歲、桓彝嘆じて曰く、「此の兒風神秀徹なり」と、年四十一にして始めて仕ふるの志あり、其の司馬となるや、朝士咸送る、中丞高崧之れに戲れて曰く、「卿屢日朝旨に違ひ東山に高臥す、諸人每に相與にいふ、安石出ずんば蒼生を如何にせん」と、安愧色ありと、忠誠を盡して匡翼し、遂に太保に進み、薨じて太傅

總謝、「又惟れば、四來の高賓、一會の海衆、諸位禪師、㋶文經武緯の諸尊官、得得來也の㋰貫休、三千指、花に醉ふ、堂堂去也の雙徑、五百衆、樹を繞る。之れを仰げば御前の山よりも高く、之れを譬ふれば僧中の月よりも清し。若し褒讃を罄さば、恐らくは尊聽を瀆さん。各乞ふ昭亮せよ。」拈提、「記得す、僧、雲門に問ふ『不起一念の時、卻つて過有りや也た否や。』門云く、『須彌山子細に點檢すれば、兩箇の胡孫水月を探る。』休上座亦管中に豹を窺つて其の一斑を得たり。百億の㋻迷盧一念の間、等間に踢倒して東關に入る。呵呵として手を拍して初めて相見すれば、富士彌〻高し吾が用山。久立珍重。」

斑秀才一周忌の香語

一庵の衆に命じて、斑秀才が爲に諷經す。山僧一香を擧して云く、「這箇は是れ人人具足本來圓成底、喚んで什麼とか作さん。」衆下語す、山僧、咄して云く、「不是。」遂に偈して小祥の供に充つと云ふ。

風前の柳は去年の恨を惹く、雨後の花は今日の腸を摧く、柳に非ず花に非ず果して何の恨ぞ、本來の鼻孔本來の香。

を贈らる、文靖と諡す。

㋤論語に「達巷黨人曰く、大なる哉孔子、博學にして名を成す所なしと。子之れを聞いて門弟子に謂ひて曰く、吾れ何を執らん、御を執らんか、射を執らんか、吾れ御を執らんと。」蓋し人の己を譽むるをきいて之れをうくるに謙を以てするなり。

㋶文をたてとし、武を横とするをいふ、文武のことをいふ。

㋰五代の僧、畫を良くす、禪月大師と號す、詩名高節宇内咸知ると。

㋻須彌山なり、蘇迷盧、須彌樓ともいふ。

㋑秉炬

月巢初公座元の下火

「龜哥報じて道ふ八月吉なりと、吾が首座行脚了畢す、惜む可し一朶の玉芙蓉、秋風吹いて紅爐の雪と作る。夫れ惟れば、㋺新圓寂月巢座元、㋩籌室の先登、風塵の表物、臂を折つて醫を學ぶ、頤神術を得たり。二株の嬾桂、地をトするときは、則ち後昆を覆蔭す。一杯の紅杏、春に酌むときは、則ち前㋥喆を追慕す。翅だ德香を發し道香を發するのみに弗ず、矧んや復た初節を保ち晩節を保つをや。或時は眞珠を衣裏に繫ぐ、凡に在つては凡に同じ、或時は寶劍を眉間に按ず、佛に逢ふては佛を殺す。㋭顢頇儱侗、

㋑下火に同じ、炬火を秉つて荼毘する意、葬式の際、眞の炬火を以てするを本意とすれども、早く燒盡するを慮り、木炬に朱をぬり、又は赤紙を以て火の狀に擬したるものを代用す、秉炬の佛事は奠湯、奠茶の二佛事訖りたる時、喪司進んで主喪の前に到り、展具三拜して佛事を請す、主喪立ちて中央に到るを見て、直歲炬火を進む、主喪之れを受けて拈じ、法語了つて放下し、燒香歸位するなり、主喪炬を秉つて拈ずるが故に、之れを秉炬師と稱す。

㋺新に死亡したるとの意である。

㋩住持人の居室、方丈に同じ。

㋥喆は哲に同じ、賢哲の人などと熟字して、すぐれて才德のある人をいふ。

㋭顢頇は大面の貌、儱侗は無知の貌、即ち尊大無知の貌をいふ。

㋬支那の俗語、烏は黑のこと、律々は詩經小雅に「南山律々」とありて、高大の貌なり、烏律とは黑くして高大なるをいふ、寶林傳に「眼睛烏律々」とあり、開善錄には拄杖を形容して烏律々といふ。今律と

眼睛。(ヘ)烏律。加之、鉢囊を挂け拄杖を拗す。之れを鑽れば彌〻堅く、之れを仰げば彌〻高し、金圈を透り栗蓬を呑む。涅を不生と言ひ、槃を不滅と言ふ。咄咄咄、馬面夜叉を籠絡す、玄玄玄、牛頭獄卒を鞭笞す、畢竟如何。萬法一に歸す、一も亦守ること莫し。首座還つて委悉すや麼や。」火把を拋つて、「摩訶般若波羅蜜、甚深般若波羅蜜。」喝一喝す。

季友契公首座の下火　二月六日

「涅槃の活路瞎驢邊、老瞿曇に先ちて一鞭を著く、七十六年牽陀の夢、春禽聲裏夕陽遷る。夫れ惟れば、某名、胸に(ト)雲澤を呑み、姓は芥川に出づ、全機覆藏せず。或時は(チ)石頭の參同契を飜案す、内外瑕翳無し。或時は圓鑑の九帶禪を(リ)覷破す。這箇の消息那裏よりか傳ふ。加之、聖に在つては聖に同じ、凡に在りては凡に同ず。秋菊春蘭、寧ろ其れ地を易へんや。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。清風明月、元是れ天を同じうす。歩歩蹈斷す毘盧頂、明明に透脫す威音の前。色卽ち是れ空、什麼の鑊湯爐炭とか說かん。空卽ち是れ色、甚麼の淸淨本然をか論ぜん。契首座契首座、行脚の事は且く置く、如何なるか是れ汝が生緣。倘し復た

いふは律々を約するのみ。

(ト)雲夢の澤をいふ、其の廣大をいふ。

(チ)石頭希遷禪師、青原行思禪師の法嗣、端州高要の人、俗姓は陳、識見夙に人に秀づ、後曹溪に至つて薙髮し、未具戒にして六祖の示寂に會ふ、其の遺命を受けて、青原山の行思禪師に謁して嗣法す、唐の天寶の始め衡山の南寺に往く、寺の東の石臺上に結庵す、時人稱して石頭和尚と號す、江西の馬祖と相對して宗風甚だ盛なり、著す所參同契、草庵歌あり、參同契は五言十四句二百二十二言より成る長篇の古詩なり、初心晩學共に參禪の龜鑑とす。

(リ)覷破。うかゞひやぶるなり。

(ヌ)梵音シユーヌヤター、空性と譯す、空無の性をいふ、碧岩集第六則の頌に「空性岩畔花

未だ會せずんば、試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を抛つて、「(ヌ)舜若多神希有と叫ぶ、火蛇吐出す盡三千。」

玉照寶公首座の下火

「形山の一寶鐵團圝、驀直に回光返照して看よ、千秋西嶺の雪を鍊出して、丙丁童子面門寒し。夫れ惟れば、某名、林間の(ル)薝蔔、夜裏の栴檀、文武の爐を開いて、徑山一粒の烏喙を爆す。生死の窟を破つて、佛日三尺の黑蚖を拈ず。禪板を過與し(ヲ)刹竿を倒卻す。淨躶躶承當を絕す、破戒の比丘地獄に墮せず。赤洒洒拘束沒し、淸淨の行者涅槃に入らず。向上に轉じ去れ、多端に渉ること莫れ。會す麼。」火把を抛つて、「妙處言はんと欲するに言ひ及ばず、月花影を移して欄干に上る。」喝一喝す。

濳龍看公首座の下火

昨夜濳龍窟を起つて蟠る、靑天霹靂波瀾惡し、端無く乾坤を呑卻し去つて、吐いて十三紅の牡丹と作す。

慧曇都寺の下火

雙林樹下の老瞿曇、生死根無し胡亂に談ず、(ワ)八十餘年春一夢、巖花地に落ちて雨(カ)毿毿。

猥精、彈指悲しむに堪へたり舜若多」とあり。

(ル)薝蔔は花の名。

(ヲ)刹竿。或は寺塔の居所を標示する爲に樹つる柱のこと、無門關第二十二に迦葉刹竿の公案あり、「迦葉因に阿難問ふ、世尊金襴の袈裟を傳ふるの外、別に何物をか傳ふ、葉喚んで、阿難と、難應諾す、葉云く、門前の刹竿を倒却し著せよと。」

(ワ)釋迦一代即ち三十成道、四十九年說法、聖壽實に八十歲、周の敬王三十四年乙卯年、我が懿德天皇二十五年二月十五日夜半、拘尸那揭羅城外に入涅槃し給ふ。

(カ)散き連る貌。

松壽茂公藏主の秉炬

「吾が臨濟の正宗を扶起す、清陰繁茂す一株の松、夜來風雷の力を借らず、乾坤を呑却して火龍と化す。夫れ惟れば、某名、輭頑の手段、廓落の心胸、急管晝催す。花を(ヨ)宜春苑下に賞す、珠簾暮に捲く、月を大雲山中に翫ぶ。一生何物をか消す、自由渠儂に任す。加之四十一年、溫にして厲し、恭にして安し。鍵鑰大藏小藏を掌る、三祇百劫、呼べども回らず、留むれども住らず。(タ)榔標千峯萬峯に入る。且く道へ、藏主畢竟何の處にか落在する。」火把を抛つて、「生死涅槃猶ほ昨夢の如し、城樓の殘角寺樓の鐘。」

娛岳歡公藏主の下火

「歡喜地を蹈飜し、涅槃城を打破す、轉身の那一句、月白く又風清し。夫れ惟れば、某名、峻機電卷き、淵默雷轟く。知見卽無明、安楞嚴の句讀を看過す。世間相常住、言法華の虛名を惹き得たり。流水廣長舌、大地活眼睛。父母未生已前、只だ恁麼、落花三片五片、百年壽盡きて已後、只だ恁麼、脩竹一莖兩莖、藏主藏主、會せば便ち會せよ、多程に涉るこ

(ヨ)荊楚歲時記に、「立春に宜春の二字を帖す」と。

(タ)杖の材にする一種の木なり。

(レ)淨行、淨裔と譯す、印度四姓の最高位に位する種族、又僧侶の階級、又波羅門教の略、又外道の總稱、佛敎中、僧侶の淨梵行を修する人の意。傳燈錄に「嵩山の少林寺に寓止して面壁して坐す、終日默然たり、人之れを測ることなし、之れを壁觀婆羅門といへり」とあり。

(ソ)猶ほ傳舍の如し、莊子に「仁義は先王の蘧廬なり、止だ以て一宿すべくして、久しく居るべからず」と、天地は萬物の逆旅など云ふに等しく、やどやと見てよし。

(ツ)法社の棟梁にて佛敎界の中堅なるをいふ。

(ネ)蔜冬はふき。又款冬とも書く、

と莫れ。然も是の如くなりと雖も、別に向上の關棙子有り。且く山僧が施呈し去るを待て。」火把を拋つて、「勝熱(レ)婆羅門手を拍して、驚倒す烏有の老先生。」

雲峯宗潘藏主の秉炬

古今天地一(ソ)遽廬、生死涅槃總に是れ虛、華山千萬朶を劈破して、任他あれ潘閬が倒に驢に騎ることを。藏主藏主、歸らめ歟、歸らめ歟。若し未だ眞の歸處を知らずんば、枯腸底を盡して渠に說向し去らん。殘鶯を認めて杜宇と成すこと莫れ、江城五月月の昇る初め。

不昧宗光藏主の下火　　少林派

「萬里雲無きも三十棒、千江に月を印す一靈光、少林別に春の消息有り、火裏の梅花遍界香し。夫れ惟れば、不昧宗光藏主、釋門の釋種、(ツ)法社の法梁、四十七年前、僧房に在つて、(ネ)款冬花の發くに逢著す。四十七年後、禪林に入つて、蔭涼樹の偃るるを扶起す。或時は(ナ)伽耶寂光穩坐地、或時は兜率閻浮遊戲場。之れを鑽れば堅く之れを仰げば高し。金剛の眼睛烏律律。描すれども成らず畫けども就らず。本來の面目露堂堂。生死海を

嚴冬に凍氷を款(たゝ)いて生ずる故に云ふ。

(ナ)伽耶山をいふ、中印度摩掲陀國伽耶市の西南一哩、鷲峰山の北二三哩の地にある山の名、昔如來此に於て寶雲等の經を演說すと。只だその境をいふのみ。

(ラ)演若達多、延若達多、耶若達多に作る、譯して祠授といふ、天に祭祀して授りたる子の意。首楞嚴經卷の四に「室羅城中の演若達多、晨朝に於て鏡を以て面を照して、鏡中の頭の眉目見るべきを愛し、己が頭の面目を見ざるを瞋り責め、以て魑魅と爲し無狀に狂走す」とあり、疎忽輕卒にして、自らの有するものを他に向つて求むる例に用ふ。

(ム)此の一段名字を打するなり、而して剛の柔に勝つは表面にして、その究竟する所柔、剛に、

踢飜し、菩提坊を打破す。然も恁麼なりと雖も、這裏停住の處に非ず。且く那邊に向つてか商量せん。」火把を抛つて、「㋒演若何ぞ曾て影を認めん、善財南方に行かず。」喝一喝す。

宗柔上座の下火　大永壬午仲冬十四日

「㋰剛柔に勝ち分柔剛に勝つ、剛柔總べて陰陽に屬せず、一場の富貴一場の夢、覺めて後牡丹冬日香し。宗柔宗柔、一切善惡都べて思量すること莫れ。汝若し思量に涉らば、天堂有り地獄有り。非思量の處地獄無く天堂無し。何物か恁麼に來り、何物か恁麼に去る。畢竟是れ存に非ず畢竟是れ亡に非ず。木馬雪に嘶いて、華鯨霜に吼ゆ。還つて會す麼。」炬を擲つて、「㋗安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し。」喝一喝す。

無性能聖淨人の下火

「夫れ以れば、眞如法界無性を性と爲す、實際理地不來にして而も來る。是の故に三世了達の㋔能仁、鶴樹に滅を示す、㋨七地積行の菩薩、龍門に顋を曝す。或時は鐘樓上に念讃し、或時は僧堂前に牌を挂く。一夢一場、電轉じ星飛んで、己事を究明す。六十六年、霜辛雪苦、聖胎を長養す。蕭寺の秋風、弊皮履を曳いて月に歩し、林丘の斜日、塗毒鼓を擊つて雷を轟す。火首金剛怒發すれば、瞎燈

勝つといふなり。

㋗此の偈快川紹喜禪師が信長に惠林寺を燒かるゝ時、山門火中に坐して唱へしものなり。

㋔釋尊の涅槃を示し給ふをいふ。

㋨佛教修行者の五十二の階級のうち、第四十七番目の階級に當るものなり。

籠笑哈哈たり。正與麼の時、能聖淨人燒いて一堆の灰と作す。灰身滅し已つて何の處にか安排す。倘し復た未だ委悉せずんば、山僧渠が爲に擧哀せん。」火把を拋つて、「廓然無聖の位を捩轉して、山河大地纖埃を絕す、卽今若し冷相看を要せば、曹溪の明鏡臺を打破せよ。」喝一喝す。

能久淨人の下火　永明院

「久遠劫來只だ這れ是れ、金烏玉兎曾て移らず、如今枕上に間夢無し、大小の梅花吹くに一任す。夫れ以れば、某名、常住を護惜して、天鑑私無し。密付傳衣、嶺南の村獦獠を瞞卻す。禮拜卷席、百丈の野鴨兒を曳回す。機輪轉ずる處、魔外も窺ひ難し。風流ならざる處也た風流、銀山鐵壁百雜碎、意氣有る時意氣を添ふ。鑊湯爐炭清涼池、臘月三十日、眼光落地の時、還つて會すや麼や。什麼の會不會とか說かん、還つて知るや麼や。什麼の知不知をか論ぜん。然も恁麼なりと雖も、更に行に餞する一句有り、如何が指麾せん。」炬を拋つて、「永明門前湖水漫たり、慧日峯頭夕陽遲し。」咄咄。

月窻玄清庵主の秉炬

「清寥寥地纖塵を絕す、活路通ずる時急に身を轉ず、七十餘年吟未了、風花雪月本來の人。夫れ惟れば、月窻玄清庵主、幻生幻滅、全假全眞。歌を山邊赤人に續ぐときは、則ち風流種有り。姓を水尾の天子に賜ふときは、則ち意氣倫を絕す。有時は松下に喝道を麾き、有時は梅邊に別春を置く。加之、㋔庵主の

㋔無門關第十一、州勘庵主の公案に曰く「趙州一庵主の處に至る、問ふ、有り麼有り麼、主拳頭を竪起す、州云く、水

毒拳、趙州强ひて深淺を辨ず。宗師の玄妙、(ク)洞山誤つて君臣を分つ。窮して堅し老いて壯なり。涅にすれども緇まず、磨すれども磷かず。與麼の時節、諸人試みに看よ。月窻庵主、火焰裏に向つて大法輪を轉ずることを。」火把を擲つて、「白灰撥ひ出す紅麒麟。」喝一喝す。

觀禪人の下火

夢幻空華如是觀、身を活路に轉ず太だ端無し、山僧別に送行の句有り、(ヤ)十日の黃花折り殘さず。

道空禪人の下火

(マ)筋斗を倒飜す太虛空、生死涅槃路通せず、別に送行の一句有り、梅花舊に依つて春風に笑む。

大藏寺主宗玖尼首座の下火

「大藏五千餘卷の經、涅槃生死說くこと叮嚀、南方の佛法多子無し、火は自ら紅 分柴は自ら靑し。夫れ惟れば、大藏寺主宗玖尼、竹晩節を持ち、菊頹齡を制す。雙放雙收、劉鐵磨の手段を具し、(ケ)三歸三聚、大愛道の典刑を存す。法身を咄し、正覺を喝す。雨師を罵り、雷霆を叱す。蝶は

淺く舡を泊むる處あらずと云ふて行く、又一庵主の所に到つて云ふ、有り麼有り麼、主も亦拳頭を竪起す、州云く、能縱能奪、能殺能活と云ひて、便ち作禮す」と、その無門の章に曰く「眼は流星、機掣電、殺人刀、活人劍」と。

(ク)洞山の君臣五位頌あり、これをいふものならん。

(ヤ)鄭谷の十菊の詩に「節去り蜂愁ふれども蝶知らず、曉庭還つて繞る折殘の枝、自ら今日人心の別なるによる、未だ必ずしも秋香一夜に衰へず」と、今觀禪人の行く、坐に寂莫を感ずるものならん、觀禪者は人中の菊なりしか。

(マ)倒にもんどりをうつことなり、大智偈頌偈作に「脫殼烏飛倒に天に上る、須彌山頂筋斗を飜す」と、煩惱即菩提、生死即涅槃と轉飜する義に

舞ふ海棠の風、佛界魔宮半醉の裏、鷄聲茅店の月、地獄天堂一旅亭。了了了の時、諸聖を慕はず、玄玄玄の處、己靈を重んぜず。石女、業鏡を打破し、木人、淨瓶を踢倒す。大姉若し向上の事を知らんと要せば、耳根を截斷して、諦聽せよ諦聽せよ。」火把を拋つて、「帝釋の鼻孔を築著し去つて、輕羅の小扇流螢を撲つ。」喝一喝す。

密中祥堅禪尼の下火

「大地都盧堅密身、本然清淨緇磷を絕す、紅爐一點寒巖の雪、熱鐵花開く四月の春。夫れ惟れば、某名、袈裟勃窣、標格精神、牡丹を吉祥寺前に愛す、夢の如く相似たり。法華を兜率天上に期す、厥の命維れ新たり。生死涅槃、線路を放開す、迷悟凡聖、要津を把定す。加之、㋬婆子勘破、恁麽に便ち去る。㋙倩女離魂、那箇か是れ眞。長天兮疎雨濛濛、漆桶光歷歷。大野兮涼颸颯颯、燈籠笑誾々。快活自在、機輪を撥轉す。此れは是れ祥堅禪尼六十二年、受用不盡底の㋓間絡索なり。別に向上圓極の法門有り。山僧が指陳せんを聽け。」炬を拋つて、「㋣鴛鴦繡出して君が看るに任す、金鍼を把つて人に度與すること莫れ。」

喩ふ。

㋘三歸戒、三聚淨戒をいふ、三歸戒は、佛法僧に歸依するをいひ、三聚淨戒とは、大乘の菩薩戒をいふ、此の三聚淨戒は一切の大乘の戒を攝する大乘の戒なるが故に名く、一攝律儀戒(自行)、二攝善法戒(化他)、三攝衆生戒(自他圓滿)、故に三聚淨戒といふ。

㋬趙州勘婆の公案、前に見ゆ。

㋙無門關三十五に見ゆ、曰く、「五祖僧に問うて云く、倩女離魂那箇か是れ眞底。無門云く、若し者裏に向つて眞底を悟り得ば、便ち殼を出で殼に入ることは旅舍に宿するが如きを知らん、其れ或は未だ然らずんば、切に亂走するなかれ、驀然として地水火風一散すれば、湯に落ちる螃蟹七手八脚なるが如し、那時言ふこと莫れ、道はず」と。

妙意禪尼の下火

「都盧大地涅槃門、線路通ずる時意根を絶す、鴛鴦を繡出して君自ら看よ、元來無縫の鐵崑崙。夫れ惟れば、妙意禪尼、出生入死、子を顧み孫を思ふ。南は天台、北は五臺、㋐驀直に轉じ去れ。婆子勘破、晝は閻浮、夜は兜率、那箇か眞底。倩女離魂、彌陀佛㋚乾屎橛。正法眼破沙盆、洒洒落落地、何の處にか尊と稱せざる。」火把を拋つて喝一喝す、「諸佛出身の處を知らんと欲せば、月潭底を穿つて水に痕無し。」

古帆性順禪尼の下火

「㋖順緣と逆緣とに渉らず、春闈夢裏百年遷る、生と說き死と說く都來錯、舊に依つて斜陽我が西に在り。夫れ惟れば、古帆性順禪尼、性地平等、心月孤圓、默處に雷を藏す。毘耶口

㋓間は無用、絡索は即ち繩きれのこと、何の役にもたゝぬ繩きれのこと。

㋢列異傳に「宋の康王韓憑、婦人を埋む、宿夕文梓生ず、鴛鴦雌雄各一あり、恒に樹上に棲む、晨夕頸を交へ、音聲人を感ぜしむ。夫妻の相親しむ情の切なるに比す。」

㋐無門關三十、趙州勘婆の公案に見ゆ。

㋚雲門文偃公案、「因みに僧問ふ、如何なるか是れ佛、云く、乾屎橛」と、佛の尊貴を問ふに、雲門乾屎厥と對ふ、乾屎橛は不淨をぬぐふ箆にして、落し紙の代用をなすものをいふ、屎の乾いた橛、或は乾いた屎橛等の說をなせども乾屎橛其の物に用なし、只だ雲門の眞意を會得するにあり。

㋖緣は因緣助緣などと熟して、事物を構成し、若しくは破壞する補助的原因なり、其の構成に積極的與件となるものを順緣と名づけ、消極的與件を逆緣と名づく。

㋵多寶如來所從の智積菩薩、將に本土に歸らんことを多寶如來に申す、釋迦牟尼佛之れを留め、文殊師利菩薩ありて相見て妙法を論說して、而して後に還るべしと告げ給ふ、時に文殊師利菩薩、千葉の蓮華に坐して、大海の沙竭羅龍宮より自然に湧出し、多寶、釋迦兩如來に敬禮して智積菩薩の所に往いて坐す、智積、文殊に問ふ、汝龍宮にて敎化せし衆生幾何なりや、文殊師利曰く、沙竭羅龍王の女、年甫めて八歲なれども、智慧利根にして、能く菩薩にいたると、智積菩薩之れを信ぜず、時に龍女現前して佛を讃し、寶珠を獻じて我が成佛の速かなる

を杜ぢて、花を散ずる天女を退く。智海底無し、㋴文殊法を說いて、珠を獻ずる華鮮を度す。涅にすれども緇まず、之れを鑽れば彌〻堅し。淸淨法身、奇㋱石に漱ぎ流水に枕す。成等正覺、白雲を喝し靑天を棒す。與麽の時節、什麽の七凹八凸とか論ぜん、甚麽の五蓋十纒とか說かん。淨躶躶赤洒洒。妙又妙、玄又玄、者箇を認ること莫れ、那邊に轉過せよ。向上事有り汝が爲に敷宣し去らん。」火把を擲つて、「臨濟の命根元不斷、一條の紅線手中に牽く。」

芳心禪尼の下火

「芳心芳心〻〻、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得。祇だ箇の不可得の心、不可得の中、只麽に得たり。去れ去れ、本來東西無し、何の處にか南北有らん。若し眞の歸處を識らんと欲せば、山僧が一句を看取せよ。㋯花を移しては蝶の到るを兼ね、達磨も不識と道ふ。」咄一咄す。

了善禪尼の下火

「了善了善、㋛諸惡莫作、衆善奉行、鍼鋒頭上筋斗を飜す。衆善莫作、諸惡奉行、吹毛匣裏冷光を發す。畢竟什麽の諸惡とか說き、什麽の衆善と

こと此の珠を受け給ふよりも早からんと言ひ畢るや、忽然として男子に變成して、南方無垢世界に成佛して說法すと。

㋱晉書に「孫楚は子荊、英、卓絕爽邁、不群陵傲する所多し、鄕曲の譽なかく、年四十餘、始めて鎭東軍事に參じ、馮翊の太守に終りぬ、初め楚小時隱居せんと欲し、王濟に謂ひて、枕石漱流といふべきを誤りて、漱石枕流といふ、王濟曰く、流れは枕すべきに非ず、石は漱ぐべきに非ずと、楚曰く、枕流は其の耳を洗はんとし、漱石は齒を礪かんと欲するなり」と、故に之れを隱逃の意に用ふ。

㋯水を掬すれば月手に在り、梁の武帝三寶に供養して其の功德を問へば、達磨答へて不識と、不識の所又無量の功德あ

か論せん。正與麼の時、變じて男子と成つて、㊁即ち南方に往く、何を以てか驗と爲さん。」火把を拋つて、「火裏の蓮華遍界香し。」喝一喝す。

妙善禪尼の下火

「妙善妙善、呼喚すれども囘らず、燈籠昨夜跳つて天台に上る。快活快活、奇なる哉奇なる哉。出生入死、放去收來、月白く風淸し、鑊湯爐炭も吹いて滅せしむ。電卷き雷走る、劍樹刀山も喝して便ち摧く。大地寸土無し、何の處にか塵埃を惹かん。」火把を拋つて喝一喝す。

芳溪宗荃禪尼の下火

芳荃露に和して秋風に碎く、我れは說く因緣の諸法空なりと、從來する所無く所去する無し、天に透る活路君が爲に通ず。

石雲庵主太玄宗白居士の下火

「洞然明白の境に任せず、太虛空の外機輪を轉ず、天堂地獄鐵爐步、火裏の梅花春を陶鑄す。夫れ惟れば、石雲庵主、晉後の徵士、周餘の黎民、一杯兩杯の春風、桃暗李明の麤俗を消す。二升三升の野水、草頭木脚底の人を愛す。目を閒雲幽石に遊ばしめて、跡を紫陌紅塵に混ず。或時は龐憩の亭に登つて、㊂笊籬の價を酬い、或時は遠公の社に入つて、香火の因を修す。西方界を念じて合掌し、北斗裏に向つて身を藏す。截鐵斬釘、昔生に非ず今滅に非ず。鍊金鍛玉、涅にすれども緇まず、磨すれど

ろか、參。
㊀烏窠禪師、白樂天に答ふる佛法の眞諦なり。
㊁龍女八歲成道、前に見ゆ。
㊂靈照女の因緣。

も磷かず。玄玄玄、佛を罵り祖を呵す。咄咄咄、比を絕し倫を超ゆ。金剛王光燦爛、昆侖奴黑鱗皴然も恁麽なりと雖も、後昆を保祐する那一句、休上座儞が爲に指陳せん。」火把を抛つて、「提不起兮拈不出、㋲山風溪月自家の珍。」

玉浦宗琳居士の下火

「湘中曾て這の㋝琳琅を產す、烈焰堆頭忽ち光を現ず、今日一鎚に鎚碎して看れば、薔薇雨過ぎて微涼を送る。夫れ惟れば、玉浦宗琳居士、心金石の如く、材棟梁を得たり。全機藏し難し、三尺の劍四海を淸む、孤帆未だ挂けず、一葉の舟大唐を載す。南は其れ貧、北は其れ富。昔生ぜず、今亡ぜず。五十四年前、逆行順行、天堂を以て地獄と作す。五十四年後、左轉右轉、地獄を以て天堂と作す。加之、洋嶼祖翁の禪を扣いて、蚖蛇の毒に觸著す。維摩居士の病を示して、獅子の牀を掀倒す。默雷柱を破り、威風霜を掬す。活鱍鱍拘束無し、淨躶躶承當を絕す。此れは是れ宗琳居士、尋常受用底、別に新調有り、何ぞ㋜宮商に落ちん。」火把を擧して、「聞く麽、木人高く奏す還鄕の曲、百億の須彌舞袖長し。」喝一喝す。

前の越州の太守西河梵照居士の下火

「吹毛雪を照して勢凜然、生死元來兩邊を絕す、倒に西河の獅子に跨つて、一聲吼破す率陀天。」

㋲一錢の買ふことを用ひず。
㋝名字を打す、美玉、又玉なうつ聲。
㋜五音、宮、商、角、徵、羽の内なり。

共しく惟れば、前の越州の太守、名下の士と稱し、敎外の禪に參ず。兄弟田眞が家を興す、紫荊花發く、父子源君の府に侍す、碧梧枝連る。㋑三玄の戈甲、齊しく照用を行じ、㋺五位の槍旗、正偏を回互す。錯錯錯、猶ほ錯に就く。玄玄玄、玄と認ること莫れ。端的底、會す耶會せず耶。這箇の事傳か不傳か。向上の那一句、山僧が敷宣を聽け。」火把を拋つて、「鐵蛇鑽れども入らず、木馬走つて煙の如し。」

壽岳宗永信男の下火

「百年三萬六千日、空空に合する時空空ならず、從來する所無く所去するなし、頭を擧すれば西畔夕陽紅なり。夫れ惟れば、壽岳宗永信男、桃花を見て靈雲の勤老に參じ、蓮社に入つて廬山の遠公を慕ふ。生也、寒雲幽石を抱き、死也、明月清風を拂ふ。轉身の一路吾れ他の爲に通ぜん。」火把を拋つて、「上攀仰無く、下己躬を絶す。」

義峯宗卓禪定門の下火

「卓然たる㋬忠義層雲に薄る、魔宮百萬の軍を一掃す、從來する所無く所去する無し、頭を擧すれば西嶺又斜曛。夫れ惟れば、新物故、義峯宗卓

㋑臨濟の三玄三要をいふ。

㋺洞山良价禪師の五位頌をいふ、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到をいふ、正偏五位、外君臣五位、功勳五位、王子五位之れを合せて五種、皆學人修行の階梯を示す、五つの機關なり。

㋩名字を打す。

㋥熙寧、元豐、宋神宗の年號。

㋭匠石揮斤、斤を使ひし古の名人、莊子徐無鬼篇に見ゆ、郢人堊を其の鼻端に墁り、匠石をして之れを斲らしむるに、匠石斤を揮つて風をなし、聽して之れを斲らしむ、目を瞑にして手を恣にして、堊を盡して鼻傷はず、郢人立つて容を失はずと。

㋬楚氣は楚氛などと同じく亂るるをいふ、左傳に出づる故事

禪定門、武門の閥閲、蓋代の功勳、靑苗法新なり。(ニ)熙豐の末の爭黨を厭ふ、丹心灰冷、唐虞の上に君を致さんことを願ふ。百年の榮を蟻垤に付し、千里の材を馬群に失す。加之、意氣堂堂、佛を殺し祖を殺す。趙王劍を好む、威風凛凛、凡を轉じ聖を轉ず。(ホ)郢匠斤を運らす、啻に濟北の宗旨を滅するのみに匪ず、矧んや復た江南の(ヘ)楚氛を靜むるをや。如幻卽空、芭蕉樹堅實無し。當位卽妙、薝蔔林餘勳を絕す。龐老の江水吸盡に和御して、摩詰の雨華繽紛を顚倒す。眞俗(ト)不二、邪正分たず。然も恁麽なりと雖も、大休歇の田地に到らんと要せば、耳根を塞斷して汝試みに聞け。」火把を抛つて、「夜來何の處の火ぞ、古人の墳を燒出す。」喝一喝す。

月心安生禪定門の下火

「生死涅槃大虛空、佛界と魔宮とを踢翻す、歸らめ歟臘月三十日、火裏の蓮華雪を帶びて紅なり。」恭しく惟れば、心月安生禪定門、風流の太守、亂代の英雄、法社の金湯に因つて鷲嶺の付屬を忘れず。正傳の衣鉢を受けて、久しく(チ)龍安の祖風を慕ふ。其の父資つて始む、是の子終を愼む。自性本源、之れを淸むれども激まず、之れを溷せども濁らず。平生の事業、入つては則ち孝有り、出でては則ち忠有り。黃巢過ぎて後、還つて劍を收得す。扶桑那畔高く弓を挂く、這裏に到つて什麽の眞諦俗

なり。

(ト)維摩經、入不二法門品第九に見ゆ、「文殊師利菩薩曰く、我が意の如きは、一切の法に於て、言も無く說もなく、示もなく識もなく、諸の問答を離る、是れを不二法門に入ると爲すと、於是、維摩詰默然として言無し、文殊師利菩薩歎じく曰く、善哉々々、乃至文字言語あるなし、是れ眞に不二法門に入るなり」と。

(チ)龍安寺の開山義天和尙なり。

諦とか說かん。什麽の有功無功をか論ぜん。羅籠すれども住まらず、電光も通ずること罔し。然も與麽なりと雖も、頑石未だ點頭せざる以前の那一著有り。卽今生公に呈示し去らん。」炬を抛つて、「看よ看よ、夜來金烏海東に出づ。」

德雲院殿通叟宗普大禪定門の下火

「功名四海の一英雄、今日看來れば春夢の中、末後の牢關留むれども住まらず、馬蹄去つて落花の風を逐ふ。共しく惟れば、德雲院殿、襟胸洒落、機智玲瓏、南昌禪兄に參得して倒に無孔笛を拈ず。西の岡の凶賊を追討して、高く一張の弓を挂く、文を克し武を克す。孝有り忠有り。煩惱菩提、(り)黃庭堅が泥犂獄に墮するを笑ふ。眞如解脫、白居易が兜率宮に歸るを欺く。忽ち邪正の途轍を離れ、頓に生死の羅籠を出づ。心觀通じ鼻觀通ず。蟾桂三月の雪を吹く。佛見盡き法見盡く。牡丹閏年の紅を著く。了了了、了す可き無く、空空空、空に屬せず。然も與麽なりと雖も、向上宗乘の事、作麽生か研窮せん。」火把を抛つて、「(ヌ)崑崙夜裏に走つて、丙丁童を驚起す。」

春谷永源禪定門の秉炬　逆卷氏

「無生の一大緣を了卻して、本源自性曾て遷らず、臘人鍊出す安居の雪、熱鐵花開く火裏の蓮。夫

(り)字は魯直、山谷と號す、秦觀、張耒、晁補之と共に蘇門の四學士と稱せらる、宋の紹聖の初め、鄂州に知たり、章惇蔡京等の惡む所となり、謫せられて涪州別駕を授けられ、黔州に安置せられ、戎州に移され、尋いで坐せられて宜州に謫せらる、詩に巧にして江西派の祖と稱す。

(ヌ)莊子にいふ混沌の意なり。眞黑闇なり。

れ惟れば、某名、常光寂爾、和氣温然、文經武緯、才名を以て稱せらる。詞華言葉、和歌をして連ねしむ、綠蕪霜を吹く。或時は鷹を臂にし、犬を牽いて原野を愛す、青萍水に浮ぶ。或時は蝦を撈し、蜆を摝して深淵に臨む。世間の相を觀じて敎外の禪に參ず、生死の流を截つて寶劍匣を出づ。群魔の境を破つて聖箭、弦を離る。⑴有餘涅槃、無餘涅槃、波瀾を平地に起す。棒下の正覺、喝下の正覺、霹靂を旱天に轟かす、成佛豈に靈運が後を待たんや。行道已に威音の前に在り、呼喚すれども回らず、泥牛戰つて海に入る。羅籠すれども住らず、木馬走つて煙の如し。逆順縱横、卷舒自在、之れを仰げば彌高く、之れを鑽れば彌堅し。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の一道の神咒、丙丁童如何が敷宣し去らん。」火把を拋つて、「揭諦波羅僧揭諦、夕陽は長く海棠の西に在り。」喝一喝す。

⑴四涅槃の一、具には有餘依涅槃といふ　小乘行者、已に見思の二惑を斷盡すと雖も、尚ほ所依の肉身、殘餘して、未だ灰身滅智するに到らざるの位をいふ、無餘涅槃は之れに對して灰身滅智の極所に到達し、痕跡をとどめぬ境界をいふなり。

清源院殿了然廓公大禪定門の秉炬　大永乙酉仲冬九日

「少年四海英雄と稱す、今代麒麟第一の功、太虛空の地に落つるを待たず、倒に鐵馬に鞭つ月明の中。」共しく惟れば、新捐館清源院殿了然廓公大禪定門、疾跡未だ試みず、名猶高く冲る。其の源や水尾に濫觴し、其の府や日東を惣管す。張無盡末後の事を龍安に決す、連牀の夜話機機相合す。鄭了然本來の面を洋嶼に呈す。入室尋請毒毒以て攻む。丈夫の出處異なりと雖も、大人の境界維れ同

じ。去年梅を探つて、策を江南に定む、身黃瘴に染む。今歳㋑柳を折つて別を洛北に惜む、聲蒼穹に哭す。象に騎つて鶻崙の袴を脫し、犬を追ふて兎角の弓を抨す。煩惱菩提、花を掃つて凉に坐し、井を汲んで醉を消す。眞如實相、根を尋ねて電を種ゑ、影を求めて風を栽う。此錯彼錯、錯錯錯、是空非空、空空空。白拈の金剛王意氣冷じ、靑林の丙丁童面門紅なり。從前の間絡索は、佗の廓公に還す、卽今淸源の那一滴、如何が君が爲に通ぜん。」火把を拋つて、「色色元來只だ舊に仍る、曉霜染め出す滿山の楓。」喝一喝す。

龜策宗壽禪定門の下火

「幻生幻滅本來空、二十餘年春夢の中、鐵馬等間に鞭を著け去る、須彌百億落花の風。夫れ惟れば、龜策宗壽禪定門、摩霄の俊鶻、亂世の英雄、入江の家業を續いで細川の源公に奉ず。佛魔を殺し盡して、靑萍三尺の刄を淬ぐ。文武を學び得て、扶桑一張の弓を挂く。淨躶躶承當を絕す、玄沙阿鼻獄を破る。赤洒洒窠臼沒し、㋺白傅兜率宮に歸る。塵塵解脫、法々圓融。然も恁麽なりと雖も、向上の那一句、端的如何が通ぜん。」火把を拋つて、「尺二の眉毛燒卻了、丙丁童子面通紅。」喝一喝す。

溫室淨球禪定門の下火

「天球琢せず本來圓なり、一段の靈光大千に輝く、七十二年間受用、風

㋑柳枝を折るは別れを惜み、後會を期するなり。

㋺白傅は白樂天をいふ、白樂天開成の初め太子太傅となる、故にいふ。

㋩漢土、進士の試驗に及第して一番となりたるものをいふ、

に和して吹き落す火中の蓮。夫れ以れば、某名、功名已に遂げ、德齒兼ね全し。忠孝㋕狀元、父父たれば子子たり。騎射要術、妙の妙、玄の玄。僉曰ふ、稼穡民種と、箕裘家傳と稱するに足れり。倒に三尺の吹毛を提げて眼四海を空ず。高く㋵六字の密號を唱へて舌梵天を拄ふ。蓋し淵明、遠公の社を辭すと雖も、遂に韓愈が㋟大顚の禪に參ずることを得たり。是の故に聖に在つても增さず、小樹は小皮裹む。凡に在つても減せず、大樹は大皮纏ふ。威音の外に突出す、何ぞ法身邊に墮せん。與麼の時節、生死涅槃、芭蕉葉上に愁雨無し。菩提煩惱、夜合花前日又西。燈籠跳つて露柱に入り、虛空走つて鐵船に駕す。快活自在意氣凜然たり。這箇は是れ淨球禪門、眞履實踐の處、別に向上の一竅有り。山僧急に霹靂の鞭を著けん。」火把、地を打つて、「叱、泥牛耕破す瑠璃の地、木馬飲乾す明月の泉。」

妙法寺殿前の豐州の太守義海超公大禪定門の秉炬

「一超直入す涅槃城、鐵馬金鞭太平を致す、滴り盡す袈裟限り無き淚、花に感じ鳥に驚く兩三聲。夫れ惟れば、新捐館妙法寺殿、葛原の枝蔓、芥河の茂英、其の祖昔東關に軍す。㋹名下に虛士無し。此の郎今西塞に屯す、

宋史に三場に狀元たり。此の處秀でたるをいふなり。

㋵念佛を唱ふるをいふ、これ白蓮社の惠遠法師のはじむる所のものなり、然れども現今の他力敎の念佛と稍其の趣を異にす。

㋟靑原下二世石頭希遷禪師の法嗣、初め石頭に啓發せられて心要を得、後潮州の靈山に住す、韓退之、唐の元和十四年、潮州の刺史に貶せられ、靈山の廬に造り、問ふ、弟子軍州事繁し、省要の所師に一句を乞ふ、師良久して顧みず、時に三平侍者たり、乃ち禪牀を叩くこと三下、門風甚だ高俊なり。

㋹名士の下なり。

㋷孔明もと南陽の草廬に臥し、人之れを臥龍といふ、他日雲を得、正に昇天すべきを云ひたるなり。

胸中に甲兵有り。將に謂へり、化蝶の莊子と。何ぞ臥龍の孔明を事とし、丹心一寸の灰、葵花の影日に隨つて轉ず。吹毛三尺の劍、珊瑚の枝月に和して撐ふ。塵塵解脫、箇箇圓成、畢竟如何。空に非ず假に非ず、元來只だ寧し。滅無く生無し、青混沌鼻孔を穿つ、火金剛眼睛を怒らす。前件は是れ妙法寺殿、三十七年眞履實踐の處、枯腸、底を盡して傾け、重ねて秘密神咒を說いて、香孩兒嬰を保護せんと欲す。」火把を拋つて、「力囝希、咄咄咄　虎山色に逢ふて威獰を長ず。」

宗得禪定門の下火

「生也不可得、何物か恁麼に來る、死也不可得、何物か恁麼に去る。宗得宗得、四大分離して何の處に向つてか去る。若し復た未だ會せずんば、且く山僧が恁麼に擧するを聽け。月落ちて元來天を離れず、花外敲き殘す鐘數杵。」喝一喝す。

柏堂常盛禪定門の下火

「涅槃の明鏡臺を打破して、淸家家地纎埃を絕す、消息無き處消息有り、佛法南方一點の梅。夫れ惟れば、常盛禪定門、進退禮を以てし、短長材を掄ぶ。國家全盛の日に在つて、人間殘夢の纔なることを了る。是の故に栖雲の禪を扣いて柏堂と號す。雪消して山骨露る。惠遠師を慕ふて蓮社を修す、池成つて月自ら來る。情泯し識盡く、形枯れ心灰す。朝三千暮三千、喝轟棒打つ。春六十秋六十、葉飛び花開く。忽ち眼光落地に當つて、直に得たり意氣雷を走らしむることを。常盛常盛、恁麼に去

れ、恁麼に去れ。呼べども囘らず、呼べども囘らず。何ぞ囘らざるや。」喝。「更に山僧が舉哀を聽け。」火把を拋つて、「㋡臘月の扇子踍跳を打す、燈籠壁に沿うて天台に上る。」

德叟全勝禪定門の下火

「百勝百戰一英雄、收め得たり從前汗馬の功、汗馬功成つて追へども及ばず、涅槃城破る落花の風。夫れ以れば、全勝禪定門、胸次㋧礧隗、心内玲瓏。受衣安名、蚤に相國の王和尚に參見す。秉炬說法、晚に松源の岳職翁に逢著す。芭蕉窻外の雨を罵り、牡丹庭前の紅を指す。三世の諸佛を呑んで、龐居士が江を吸ふを屑とせず、口尚ほ乳臭。百萬の魔軍を降して、曾て㋤馬伏波が虜を破るを輕んず、代異に名同じ。地獄を怕れず、何ぞ天宮を愛せん。目を捏して花を生ず。生也錯、死也錯、錯を以て錯に就く、都來錯。吹毛雪を照し、人已に空ず、法已に空ず。空を以て空を遣る、畢竟空。燈籠跳つて露柱に入り、石女仰いで蒼穹に哭す。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句、如何が他の爲に通ぜん。」火把を拋つて、「丙丁童子來つて火を求む、夜半金烏海東より出づ。」

㋡臘扇は冬月の扇、夏月に其の使命を全うし、時のよろしきに相休歇するなり。雲門の語に「扇子踍跳して三十三天に登り、帝釋の鼻孔に築着す」とあり。

㋧大にして高きをいふ。

㋤馬援、字は文淵、後漢の茂陵の人、少くして大志あり、嘗て賓客に謂つて曰く、丈夫志を立つる、窮しては當に益々堅かるべく、老いては當に益々壯なるべしと、建武中拜して、伏波將軍となる、交趾を擊ちて還る、曰く、男子、要は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべきのみと、武陵五溪蠻反す、援、年八十餘、自ら行かんと請ひ、鞍に據り顧眄して以て用ふべきを示す、帝笑つて曰く、矍鑠たるかな、此の翁やと、進んで壺頭に營す、利を失ひて病みて

天屋淨幸禪定門の下火

「不幸の(ラ)顏淵、三十四年、轉身の一路、臘雪天に連る。夫れ以れば、某名、天下の奇士、區中の良賢、三十四年前、不生を以て生の義と爲す、寒雲幽石を抱く。三十四年後、不死を以て死の義と爲す、火裏に淸泉を汲む。快活自在、頓に塵緣を離る。鐵雞追へども及ばず、木馬奔つて煙の如し。淨幸淨幸、末後の一句、錯つて果然。」炬を拋つて、「呈露す梅花眞の面目、夜來の月は屋頭の邊に在り。」

南叟宗參禪定門の下火

「佛法元來參ず可き無し、善財何事ぞ强ひて南を尋ぬ、非を知る四十餘年の後、錦は是れ山花水は是れ藍。夫れ以れば、某名、久しく禪旨に參じ、俗談を打せず。四十餘年前、佛を罵り祖を呵す。四十餘年後、女を育し男を生ず。生死の陣を破つて、周宋が鐔を試む。雪裏の芭蕉樹に依俙として、火中の優鉢曇に彷彿たり。這裏に到つて什の無明煩惱とか說かん、什の(ム)澗の愧林の慙をか論ぜん。劍樹刀山喝して則ち碎き、鑊湯爐炭吹くに則ち堪へたり。(ウ)黑漫漫、白漫漫。前三三、後三三。更に眞の歸處有り、卽今甘はんや甘はざらんや。」炬を拋つて、「當頭霜夜の月、任運滄潭に落つ。」

卒す

(ラ)顏淵年二十九、髮盡く白し、三十二にして卒す、有德短命、顏淵に比するなり。

(ム)孔德璋が北山移文に曰く、「列嶽爭ひ譏り、攢峰竦誚す、游子の我を欺くを慨み、人の以つて赴弔する無きを悲む、故に林慙ぢて盡くるなく、澗愧ぢて歇まず云々。」之れ周彦倫なるもの、北山に隱れ、後に又詔に應じ、海鹽縣の令となり、此の山を過ぎんとするとき、孔生之れを鄙みて山靈の意を假りて之れを移したる文なり。

(ウ)黑白、明暗、智愚、迷悟などに同じ。

禪寶禪定門の下火

「這箇の一寶形山に祕す、乾坤大地載せ起さず、㋭百雜碎矣鐵團圝、火裏の牡丹新に蘂に吐く。禪寶禪門、還つて這箇の一寶を識るや麼や。吾れ爾に隱すこと無し、本來圓成、豈に直指を假らんや。是の故に凡に在つても減せず、涅槃會上の廣額兒、屠刀を拋つ。聖に在つても増さず、㋷普通年中の赤鬚胡、隻履を失ふ。大藏小藏虛空に逼塞す、有利無利行市を離れず。木人歌を唱ふれば石女耳を側つ。快哉快哉、已まなん矣已まなん矣。禪寶禪寶、生より死に到るまで只だ是是。」炬を拋つて、「不是不是、露、春風桃李、㋔一以て之れを貫せり。曾子の曰く、唯唯と。」

蘭庭常秀禪定門の下火

「苗にして秀でず一庭の蘭、初節は移り易く晩節は難し、生鐵の崑崙空裏に走る、青天白日黑漫漫。夫れ惟れば、蘭庭常秀禪定門、黃金鑛を出でて白玉盤に點ず、霹靂空に當る、兎角の弓を石輩に學ぶ。清風月を拂ひ、㋾犀牛扇を鹽官に還す。眞俗諦を超え、佛祖の瞞を絕す。覿面提持、梨花溶溶。柳絮淡淡、皆證圓覺。菱角尖尖、荷葉團團。鼇山頻に成道と叫ぶ。鶴林假に涅槃を示す。轉身の一路多端に渉ること

㋭微塵の如く粉碎して、其の數無量なること、粉碎又は饒多の意を示す、會元九、潙山の章に「玄沙曰く、大小の潙山、那裏に一問せられて、直に得たり百雜碎。」

㋷普通は梁の武帝の年號、こゝは達磨をいふ。

㋔論語里仁篇に曰く、「子曰く、參乎、吾が道一以て之れを貫く、曾子曰く、唯と、子出づ、門人問ふて曰く、何の謂ぞや、曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ」と。

㋾犀牛扇、前に見ゆ。

莫れ。」火把を抛つて、「五月紅爐落梅の雪、丙丁童子両門寒し。」喝一喝す。

金溪久玉居士の下火

黄金擊碎して玉團團、鎚未だ拈せざる先隻を著けて看よ、看よ看よ歸り來つて一事無し、遠山雨過ぎて夕陽殘る。

蘭谷宗秀禪門の下火

春蘭秋菊秀でて芳を聯ぬ、惡芽根を長ず七十霜、今日他の爲に意氣を添ふ、地獄と天堂とを㋳掀飜す。

趙干禪門の下火

大千世界壞して空と成る、此れより泥洹一路通ず、花落ち花開く是れ常の事、杜鵑誤つて恨む㋶五更の風。

月江宗光禪定門の下火

一刀兩段太虛空、閃電光の中己躬を絕す、到り得歸り來つて別事無し、荷花水を照して夕陽紅なり。

悟岳宗徹禪門の下火

本來自性本來無、大徹は他の大丈夫に還す、三尺の吹毛曾て動ぜず、月明挂けて碧珊瑚に在り。

宗祐禪門の下火

㋳掀飜はひつくりかへすことをいふ。
㋶五更は夜中を五分して最後の一分を五更と名づく、夜あけ頃なり。

潙山靈祐一頭の牛、鼻繩を脫却して高く㋕牟と叫ぶ、石火電光追へども及ばず、乾坤處として蹤由を覓むべき無し。

某甲の下火

百年壽盡くる底の時節、卽ち是れ金剛不壞の身、丙丁童子を蹈倒して看よ、野花啼鳥一般の春。

禪珍の下火　鼓を拍する藝士

須彌の槌虛空の鼓を擊つ、白日靑天吼えて雷の若し、飜して無生の那一曲と作る、木人火裏に㋻三臺を舞ふ。

高仲宗功禪門の下火

從前汗馬の功を用ひ盡して、佛界と魔宮とを平げ來る、凱歌一曲還鄕の路、雨過ぎて芙蓉朶朶紅なり。

宗玉禪定門の下火

一顆の白玉、價直三千、磨せず琢せず、元自ら天然。

古雲慈心大姉の下火

「刹那㋵三萬六千日、身心を放下して君自ら看よ、觸著すれば紅爐雪一點、丙丁童子面門寒し。夫

㋕牟は牛の聲なり。

㋻三十拍の曲の名、劉公が嘉話錄に曰く、「三臺に須を送るは蓋し北齊の文宣、銅雀臺を毀つて別に二箇の臺を築くに依り、宮人手を拍つて呼んで臺に上り、因つて須を送る」と、我が國に傳はれる樂に三臺鹽といふものあり。

㋵よし一百歲生き延びた所で、三萬六千日、一寸の間である。

れ以れば、古雲慈心大姉、不來の相にして來る、鐵壁迸開す雪片片。不見の相にして見る、黑山㋓輥出す月團團。地獄天堂間家具、生死涅槃相干らず、向上に轉じ去れ、多端に涉ること莫れ。正與麼の時、畢竟如何が平安を得去らん。」火把を抛つて、「十洲春盡きて花凋殘。」

梅屋理常大姉の下火

「堅固法身常住の相、旋嵐嶽を倒にすれども曾て遷らず、馨香遍界斯れより起る、紅白花開く火裏の蓮。夫れ惟れば、梅屋理常大姉、旨を言外に領じ、手を那邊に撒す。活捉生擒、無著、洋嶼の室を敲く。戒皮定肉、總持、少林の禪に參ず。千萬劫の羈鎖を脫し、一大事因緣を了ず。淨躶躶承當を絕す、泥牛耕破す瑠璃の地。赤洒洒拘束沒し、木馬飲乾す明月の泉。向上の一路佛祖不傳。然も恁麼なりと雖も、別に眞の歸處有り。試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を抛つて、「露堂堂活鱍鱍、鍼眼の魚跳つて天に上る。」喝。

春溪智雲大姉の下火

六十九年世紛を忘る、珠簾玉案醉つて㋢醺醺、轉身自在窠臼沒し、喝散す率陀靑色の雲。夫れ惟れば、春溪智雲大姉、始從貞節、末後慇懃、則天萬乘の尊、大雲山中眞彌勒と稱す。摩耶千佛の母、㋐毘藍園裏老迦文を產す。元來生死に干らず、歷劫何ぞ功勳を論ぜん。處處眞處處眞、前臺花發

㋓輥出はめぐりいだしなり。
㋢醉ひ心地よきこと。
㋐藍毘尼園のこと、又降誕會に用ひる花見堂のこと。

いて後臺に見る。刹刹爾り刹刹爾り。上界鐘淸うして下界に聞く。聞く麼、十方㋚薄伽梵、一路涅槃門。露。

潙山理祐大姉の下火

「百歲一場の春夢婆、聲前に薦得するも竟に如何、諸佛出身の路を豁開して、生鐵の崑崙雲外に過ぐ。夫れ以れば、某名、身を烏有と觀じ、口に㋖貝多を誦す。電光根無し、牢關の句を末後に透る。空華實を結ぶ、阿鼻の業を刹那に滅す。休休休、涅槃の鏡重ねて照さず。咄咄咄、吹毛の劍急に須らく磨す可し。正與麼の時、大姉還つて聞く麼。」炬を拋つて、「丙丁童子摩訶を念ず。露。」

雲峯宗秀禪定尼の下炬

「孤峯高く秀でゝ勢崔嵬、六月火雲雪を吹き來る、若し㋴無寒暑の處を知らんと欲せば、炎天白からず一枝の梅。夫れ惟れば、雲峯宗秀禪定尼、自性を識得して、聖胎を長養す、月白く風淸し。有佛の處留むれども住まらず、山長く水遠し。無佛の處、喚べども回らず、曹溪の鏡を打破して、大地纖埃を絕す。別に還鄕の那一曲有り。」火把を拋つて、「崑崙象に騎つて三臺を舞ふ。」咄一咄す。

㋚薄伽梵。世尊と譯す、佛の敬稱、衆德を總攝し、有を有する至尊の義なり、此の語元來多義あり、或は有德に名づけ、或は巧に諸法を分別するに名づく、或は名聲あるに名づけ、或は能く淫怒癡を破るに名づく、斯の如く多義なるが故に、古來之れを譯せずして原音の儘用ひらる、五種不翻の一なり。

㋖經をいふ、印度にて昔時貝多羅樹の葉に經文を書せり、故に之れを經に代名するなり。

㋴背觸に涉らざる中的不犯の當體、卽ち本分の安住所なり、陰陽不到の處、生死透達の境といふに同じ。

桃岳慈緣禪定尼の下火

「一夢三生石上の緣、風花二十有餘年、限り無き春を傷ましむる意を傾けんと欲すれば、小玉聲の中月西に落つ。夫れ惟れば、桃岳慈緣禪定尼、丈夫の氣を負ひ、新婦の禪を瞞ず。摩耶竺土の仙を產す。風無きに波を起す、鹽官檀林后を接す。山を隔てて煙を見る、兎子懷胎月を望み、犀牛跨跳して天に上る。生死卽涅槃、毛端巨海を呑む。涅槃卽生死、火裏に淸泉を汲む。與麼の時、龍女珠を獻ず。鄕關萬里、閻老棒を喫す。朝打三千、混沌の眉、兩丿を掃ひ、崑崙の鼻、半邊を失す。然も恁麼地なりと雖も、後昆を覆蔭する底の一句、試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を拋つて、「楊柳絲絲收不得、煙に和して染め出す㊅玉欄の前。」喝一喝す。

㊅もくれんげをいふ。
㊂洞山三滲漏ともいふ、滲漏は煩腦の換語、一には見滲漏、二には情滲漏、三には語滲漏、是なり。

月溪妙光禪定尼の下火

「靈光不昧古來今、龍女の寶珠滄海の琛、南方の無垢界を照破す、曉天の殘月西岑に落つ。夫れ惟れば、月溪妙光禪定尼、臺に當る明鏡、鑛を出づる精金、物有り天に先つ、男相に非ず女相に非ず、根を尋ねて電を種ゑ、佛心を傳へ祖心を傳ふ。當陽直指、鉢水に鍼を投す。加之、三界火宅の中を出でて、羊鹿に覊せず、㊂三種の滲漏底に徹して、何ぞ商參を隔てん。洒々地落落地、自己の胸襟を豁開す。然も恁麼なりと雖も、向上の一著、如何が參尋せん。」火把を拋つて、「石女舞成す長壽の曲、三

千里外知音を絶す。」喝一喝す。

桂巖宗林禪定尼の下火

「少林の尼總持を瞞卻して、鍼鋒頭上身を轉じ來る、紅粉を塗らず孃生の面、露は白し芙蓉八月の枝。夫れ以みれば、某名、秀でて實らず、逝く者は斯の如し。夢幻空花卅四歲、工夫綿密二六時、繡口錦心、遠錄公の九帶集を著すを嫌ふ。檀郎玉女、勤蕘苴の小豔の詩に參ずるを笑ふ。生死を截斷して寸絲を挂けず。甚だ希有甚だ希有。也太奇也太奇。自性圓成、荷葉團團鏡似も團く。全機穎脫、菱角尖尖錐如も尖きなり。恁麽に看取して、多岐に涉ること莫れ。別に向上の事を知らんと要すや、㊁火把子の重ねて之れを說くを聽け。」炬を拋つて、

「黑漆の崑崙夜裏に走る、紅爐放出す鐵烏龜。」

㊁火箸なり。

月江永秋信女の下火　懷孕して亡ず

「露柱懷胎果して何物ぞ、黃金鑄出す鐵牛の機、秋風吹いて無生國に入る、地獄天堂一葉飛ぶ。夫れ以みれば、某名、鴛鴦の社を結び翡翠の幃を擁す。晚參を許さず、老婆楊岐の笠を戴く。已に夜半を過ぐ。石女黃梅の衣を裁す、大人の相を具し、丈夫の威を逞しうす。菩提の因菩提の果、明明歷歷。法身の用法身の體、堂堂巍巍。江月照し、松風吹く。標格瀟洒暮鐘の聲、秋樹の色彷彿依俙たり。把住するときは、則ち乾坤震裂し、觸著するときは、則ち崑崙光輝く。是の故に鬼官冥主、倒退三千里。

加之、文殊普賢二鐵圍に貶向す。這裏に到つて、什麼の幻生幻滅とか說かん。什麼の眞是眞非をか論ぜん。然も恁麼地なりと雖も、高山流水知音の者稀なり。永秋信女、還つて會す麼。若し未だ會せずんば、試みに山僧が指揮を看よ。」炬を抛つて、「江上晚來畫くに堪へたる處、漁人一蓑を披し得て歸る。」咄。

榮中常盛信女の下火

「人間の盛事夢中の花、白日青天眼花すること莫れ、限り無き春風吹けども入らず、一枝の混沌未開の花。夫れ以れば、某名、心貞節を存し、富雜華を鬪はしむ。洞水の流を汲んで、黑漆桶裏に墨汁を盛る。林際の境を奪つて、瑠璃階上に赤沙を布く。無生の話を打して、靈照女を欺き、活手段を具して、慈明婆を笑ふ。奇なる哉奇なる哉。圓覺の梅一枝兩枝早し。會すや會すや。眞如の竹三莖四莖斜なり。這箇の時節、丙丁童舌を吐き、虛空神牙を咬む。若し寸歩を動せば、萬里天涯。」炬を抛つて、「看よ看よ、一把の骨頭挑げ去つて後、知らず明月誰が家にか落つ。」咄一咄す。

受溪理桌大姉の下火

一氣生ずる時稟くる所異なり、百年滅後本來空、空空に非ず也た色色に非ず、磵水藍の如くにして花自ら紅なり。

朝光妙槿信女の下火

萬事人間槿花の如し、朝榮暮辱本來空、端無く拈出す㊁還鄕の錦、七月靑楓半葉紅なり。

了一大姉の下火

一了一切了、大地黑漫漫、心頭の火を滅卻すれば、舊に依つて孟春寒し。

宗照童女の下火

「涅槃生死を離れ、煩惱菩提を絶す、頭を擧すれば殘照有り、元是れ住居の西。」咄咄。

㊁錦を着て故鄕に歸る、即ち九品の安養界に生ずるのである。

(イ)掩壙

攝州普門の住持明巖永公座元の掩土　正月四日

「花前拂袖して春風に別る、行脚今年八十翁、趙州の(ロ)關棙子を撥轉して、涅槃の路は普門より通ず。夫れ惟れば、明巖永公座元、後學の甘露、先宗の巨叢、幽谷蘭芳し、遙に金地の派下に列る。舊房松偃す、間に慈雲の山中を愛す。客作の漢を接して、主人公と稱す。一段の風光、是日と說き非日と說く。(ハ)三應の侍者、大空と喚び小空と喚ぶ。依俙として相似たり、彷彿として同じからず。加之、行も亦禪、坐も亦禪、胡孫布袋に入る。生も也た錯、死も也た錯、石馬紗籠を出づ。這裏に到つて、什麼の欲界色界をか論せん。什麼の佛宮魔宮をか管せん。天に倚る長劍、磨礱に勞せず。此れは是れ明巖座元の活機雄。」(ニ)钁子を以て地を打つこと一下して、「山僧別に龜毛の箭を架し、兎角の弓を拼し去らん。」钁子を拋つて、「钁頭邊の事直に看取せよ、正月木犀雪を吹いて濃なり。」

(イ)掩土に同じ、死體の全身を埋葬すること、土葬ともいふ、龕を窖中に投じ、石蓋を以て覆ひ、其の罅隙を紛し、土を掩ふて深く埋むるを法とす。

(ロ)關棙子、具には向上の關棙子といふ、門のこと、佛祖屋裡の要機をさす、關と同意に用ふ。

(ハ)三應、又は三喚、侍者の別稱なり。

(ニ)钁子は鍬なり。

宗泉大德の掩土

七星光冷じ一龍泉、魔壘平げ來つて凱旋と叫ぶ、末後の牢關留むれども住まらず、須彌跳り上る率陀天。夫れ惟れば、宗泉大德、常に㋭阿字を觀じて、獨り法筵に坐す。清淨の行者涅槃に入らず、翡翠蹈翻す荷葉の雨。破戒の比丘地獄に墮せず、鷺鷥衝破す竹林の煙。心を金胎界に印し、身を鑊頭邊に轉ず。如何が是れ轉身の處。生に生無く、滅に滅せず。是、是ならず、然、然ならず。眞歸の那一句有り、山僧が布宣を聽取せよ。頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。

顯德院文伯祐豐法印の掩土

「十方一路涅槃門、足を擧すれば機前忽ち踢飜す、試みに看よ龍圖龜易の外、曉來雪ならんと欲す早梅の村。夫れ以れば、顯德院文伯祐豐法印、古器壘洗、天球粹淵。禴祠㋬蒸嘗鬼神に賽す、官、㋣尸祝を設く。高曾祖禰、昭穆を排す、德兒孫に及ぶ。百王百代の廟を守り、㋠八雲の八重垣を詠す。黃石書を授く、兵を莽草の野に伏す。青海箭を傳へて弓を扶桑の暾に挂く。翅だ六藝の芳潤に漱ぐのみに弗ず、況んや復た萬物の根

㋭梵語、字母の第一字母にして、秘密佛教にては一一の梵字音につき、特殊の玄理を說き、一切萬有は本來不生のものなるが故に、また不滅のものなりといふ。「阿字本不生」の深理を顯示するは、阿字なりとす、この本不生の阿字を觀ずる觀法を阿字觀といふ、法隆寺古筴體の梵字は孔の如く記せり。

㋬蒸嘗は冬夏に天神地祇を祭ることなり。

㋣尸祝、尸は神主(かたしろ)なり、祝(はふり)は祭時に辭を讀む者をいふ、轉じて又崇拜の義ともなる。莊子に「子胡ぞ相與に之れを尸して祝し、之れを社して稷せざるか」とあり。

㋠素盞男尊の御詠歌なり、「八雲たつ出雲八重垣妻ごめ八重垣つくる此の八重垣を。」

源を窮むるをや。加之、龐老の機關を具するときは、則ち西江水、四海の禪流を合して吸盡す。思大の ⓡ圈繢を出づるときは、則ち南嶽峯、三世の諸佛に和して平呑す。來時口無し、葉落ちて根に歸す。然も恁麼なりと雖も、更に向上の一竅有り。山僧、行に贈るに言を以てせん。」鍬子を劃一劃して、「ⓝ吽吽、黃金鑄出す鐵崑崙。」

紹歡上座の掩土

「掣電一歡五十年、本來の眞相曾て遷らず、等閒に歸り去る長空の外、黃鶯を聽いて杜鵑と作すこと莫れ。夫れ以れば、某名、全機穎脫、本體如然。菩薩の初地に居らず、威音以前に超越す。恁麼不恁麼、履ぶるときは則ち ⓛ六合に充塞す。不恁麼恁麼、收むるときは則ち大千を捏聚す。生死即ち涅槃、紅蕉雨に敗る。無明即ち佛性、綠竹煙を含む。了了了、玄玄玄。試みに看よ崑崙鐵船に駕することを。」棺を打して、「水流れて元海に入り、月落ちて天を離れず。」

太年妙椿の掩土　般若房

ⓞ毘嵐昨夜 ⓦ莊椿を倒す、一夢人生七十の春、ⓚ桃李若し言はば吾れ即

ⓡ圈繢は羅紱などに同じ、生死煩惱をいふ。

ⓝ吽吽、吽コ、又はグと發音す、吽は吼に同じく怒聲、又牛の鳴聲を現すに用ふ、多くは二字續けて吽々とす、臨濟錄に「如何なるか是れ露地の白牛、杏山曰く、吽々」とあり。

ⓛ天地四方之れを六合といふ。

ⓞ又は鞞風、鞞藍婆、吠藍婆、迅猛風と譯す、速力迅急にして至るところ皆悉く壞散する風、鐵圍山外に吹き、鐵圍山之れを防ぎて須彌四洲に來らしめずといふ。

ⓦ椿、莊子にある八千歲を一春とすといふ椿樹、名字によりて打出するなり。

ⓚ菅公の詩に「桃李もの言はず昔誰か栖む」と、また康賴が父親賴が舊居を訪ふ歌に「ふるさとの花のものいふ世なりせば、いかに昔のことのとは

ち問はん、誰れか能く北斗裏に身を藏すと。

見宗上座の掩土

正宗滅して瞎驢邊に向ふ、意を得て春風に鐵鞭を著く、涅槃眞の妙相と認ること莫れ、梅梢月白し屋頭の天。

永高上座の掩土

鐵山萬仭㊀太高生、一脚機前に踢倒して行く、別に眞歸の條活路有り、綠陰月は暗し杜鵑の聲。

雪巖瑞書記の掩土

喚び起す瑞巖の公主人、杜鵑枝上數聲頻なり、分明に喚び得て那の處にか歸る、一閏花開く四月の春。

菊仙宗英藏主の掩土

宗門騰茂す富英の聲、二十四年都べて旅程、本有の家鄕好し歸り去れ、雲老樹を埋めて杜鵑鳴く。

前住繼孝高岫壽尊尼藏主の掩土

「元是れ吾が宗の妙摠持、少林の皮髓忽ち分離す、珠簾玉案綠陰の雨、杜宇一聲歸去來。夫れ惟れば、前住繼孝高岫壽尊尼、蓮華色を慕うて苾蒭尼と作る。錦繡の光閭里を照し、袈裟の影㊁禁池に映ず。未だ先宗を忘れず、丞に西源の室に入つて、受戒厪隣好を修す。晩に東海の門を扣いて機を

まし」と。

㊀甚だ高慢の意にて、高く止つて居る、高い、高いなどと云ふ意である。

㊁禁裡の池なり、御所の池なり、御殿に出入するをいふか。

投ず。大丈夫の志氣を具して、新婦子の禪師を罵る。瞿曇、般涅槃を雙林に示す、新盡きて火滅す。文殊、夏安居を三處に度る。舟行けば岸移る。莖草上に梵刹を現じ、鍼鋒頭に須彌を走らしむ。夢幻空華、雪裏の芭蕉、摩詰が畫、鑊湯爐炭、炎天の梅蘂、簡齋が詩。玄玄玄の處に住まらず、了了了の時を認むること莫れ。咄。」鍬子、地を劃して、「活埋了也、滿地の蒺藜。」

永昌開基寶聚榮珍大師の掩土

七十四年般涅槃、钁頭邊冷にして相看を打す、虛空骨碎く夜來の雪、埋沒す梅花玉一團。

春庵妙榮禪定尼の掩土

「一榮春夢老婆心、六十五年刹那に同じ、隻履前村西畔の路、等閒に雪花を蹈碎して過ぐ。夫れ惟れば、春庵妙榮禪定尼、機を斷つ孟母、(ヒ)竹に泣く湘娥、工夫密密綿綿、倒に金鍼を把つて佛を繡にす。胸襟洒洒落落、高く明鏡を挂けて魔を降す、室内に病を示す、(リ)杯中蛇に非ず。或時は大雲山に入つて大雲經を飜す、(ヌ)則天后の慈氏と稱するが如し。或時は淨土宗を慕うて淨土の敎を學ぶ、韋提希の彌陀を唱ふるに似たり。塵塵解脫國、

(ヒ)娥皇、女英、舜の九嶷に崩じ給ふを慕ひ、又湘水の邊に至りて逝くと、淚、竹に灑いで竹皆斑となると。

(リ)晉の樂廣、河南に守たりし時、客ありて共に呑む、以來久しく來らず、其の故を問へば、嘗て共に酌みし時、盃中蛇あり、心之れを惡む、遂に病むと、乃ち先に酒を飮せし所に於て、又飮ましむ、蛇ありやと、曰く、あり、卽ち角弓の蛇影なるを語れば、病立ちどころに癒ゆと。

(ヌ)則天武后、姓は武、名は曌、もと唐の太宗の才人なりしが、後高宗の后となり、政權を專にす、高宗崩じて中宗立つに及び、遂に中宗を廢して其の弟睿宗を立て、益々權を擅にし、遂に睿宗を廢し、自ら帝位に卽き、則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十

處處安樂窩。生死無根、梅瘦せて春を占むること少し。眞如不變、庭寬く月を得ること多し。明白裏に留むれども住まらず、窮玄の處也た須らく呵すべし。妙榮妙榮、钁頭邊の事は君が會するに任す、後昆家を興す端的如何。」鍬を拋つて、「喬木依然として今尙ほ在り、風石臼を吹いて摩訶を念ず。」喝一喝す。

前の武庫德叟宗澤禪定門の掩土　淡路の島田氏

「澤廣くして山を藏す也太奇、大機大用現前の時。」钁を擧して、「钁頭未だ擧せざるに活埋し了る、一片の落梧雨と爲つて吹く。夫れ以れば、某名、胸武庫を開き、策雄基を定む。業を小笠原に繼ぐときは、則ち箭新羅國を過ぐ。迹を淡山巖に託するときは、則ち弓、扶桑の枝に挂く。才名惜む可し、逝く者は斯の如し。菩提涅槃、是れ什麼の㊅繫驢橛ぞ。眞如解脫、更に亡羊の岐を認ること莫れ。石火も及ばず、閃電も猶ほ遲し。」钁子、地を打つこと一下して、「叱、倒に鐵馬に騎つて須彌に上る。」

香林紹覺禪定門の掩土

「大覺の涅槃場を掀飜して、凜凜たる威風當る可からず、太虛空に和して埋卻し了る、一犂雨過ぎて暑花香し。夫れ惟れば、香林紹覺禪定門、腳實地を蹈み、氣諸方を壓す。三十四年前勇を好むときは、則ち㊆

六年、中宗位に復し、后を廢し、尋いで卒せり。

㊅驢を繫ぐ杙なり。

㊆樊噲は沛公の臣なり、嘗て鴻門に項王沛公と會するや、沛公の事急なるを聞き、盾を擁して軍門に入り、項王をして遂に手を出すなからしめたり、世に鴻門の會とて名高し。

鴻門樊噲が盾を舐る。三十四年後病を示すときは、則ち獅窟維摩の牀に臥す。直に生死の縛を截斷して、倒に金剛王を提起す。敎を離れて禪無し、昨日法華の遺穗を拾ふ。禪を離れて敎無し、今朝嫖桂の餘芳を傳ふ。密密密、凡聖を通ぜず。玄玄玄、封疆を把定す。木人屈と叫び、石女腸を回す。這箇は且く措く、更に還鄉の那一曲有り。來れ吾れ汝が與に商量し去らん。」鑁子、地を打つこと一下して、「扶桑國に大唐の鼓を擊てば、百億の須彌舞袖長し。」咄一咄す。

二品前の亞相天覺雄公大禪定門の掩土

「高山流水沒絃琴、宮商角徵の音と作すこと莫れ、試みに聽け無生の那一曲、秋風月を拂つて松陰に落つ。共しく惟れば、二品前の亞相天覺雄公大禪定門、樂花禮葉、談藪詞林、書諫言を納る。五雲の上、堯天の日を仰ぐ。才袞職を補ふ、九野の外、傅岩の霖を洒ぐ。在家の菩薩、無相に相を現じ、儒門の知識、以心傳心、生死卽ち涅槃。長河を攪いて酥酪と成す。涅槃卽ち生死、大地を變じて黃金と作す。石虎頻に哮吼し、木馬走つて騣騣たり。會すや、喚べども回らず留むれども住まらず。萬岳千峰尋ぬるに處無し。」喝一喝す。

無住善住禪定門の掩土

「生死元來住處無し、爍迦羅眼纖埃を絕す、一犂の春雨晴を吹き過ぐ、滿地の落花綠苔を埋む。夫れ惟れば、無住善住禪定門、文武の轍を掉ひ、棟梁の材を負ふ。五十三年前、西京の ㋾牡丹、惟

れ富み惟れ貴し。五十三年後、南柯の槐樹、且つ樂み且つ哀む。假合の四大分散、涅槃の㋰四柱忽ち摧く。靈山會上に圓頓速疾の法を說き、少林門下に單傳直指の才を用ふ。牢關破るゝ時、留むれども住まらず、機輪轉ずる處、喚べども回らず。然も與麼なりと雖も、別に向上の那一竅有り。百尺竿頭に步を進め來れ。」鍬子を抛つて、「水底の木人鐵笛を吹けば、雲中の石女三臺を舞ふ。」喝一喝す。

輝岳杲公禪定門の掩土

「名は高し亂代の一英雄、匹馬單槍戰功を立つ、兜率㋤泥犂春夢の裏、等閒に吹き醒す落花の風。夫れ惟れば、輝岳杲公禪定門、精神矍鑠、機智玲瓏。病維摩、毘耶に臥す、花は室內に散ず。死せる㋖諸葛、仲達を走しむ、星營中に隕つ。骨を埋んで黃壤に朽つと雖も、胸を槌つて猶ほ蒼穹に哭す。竺乾の猛將五千の兵書を說く、佛界魔界を掃蕩す。林際の㋨厮兒三玄の戈甲を施す、人空法空に逗到す。涅槃の窠窟に墮せず、忽ち無明の羅籠を出づ。與麼の時節、江月照し江風吹く。塵塵解脫、春山は青く春水は綠なり。法法圓融、赤條條、金剛圈を透過し、浮躶躶、㋔栗棘蓬を呑卻す。此れは是れ杲公禪定門、三十三年受用底の閒事なり。後昆を保祐する那一句、卽今君が爲に通ぜん。」鍬子、地を打つて、「鍬子口吧吧地に說く、夕陽は長く我が西に在りて紅なり。」喝一喝す。

㋶牡丹は花の富貴なるものと周茂叔の蓮說に出づ、取つて言をなす。
㋰常、樂、我、淨の四德を云ふ。
㋤泥犂。地獄、奈落に同じ。
㋖諸葛亮、武侯なり。
㋨厮は、しもべ、召し使などといふ意なり、臨濟の法流を酌むものをいふ。
㋔いが栗なり。

玉室道玖禪定門の掩土

「無滅無生眞の涅槃、都盧大地黑漫漫、彌陀西方界に在らず、身心を放下して君自ら看よ。道玖道玖、恁麼に會取せよ。佗の瞞を受くること莫れ、三界火宅不樂不安。是の故に大乘の根を接して、達磨壙中に隻履を遺下す。多羅藏を飜じて、迦葉門前に刹竿を倒却す。燈籠跳つて露柱に入り、虛空裂けて磨盤を走しむ。機關脫落底の時節、㋗枯木龍吟消して未だ乾かず。錯錯。山僧別に好消息有り、萬古一江風月寒し。」

久芳宗椿禪定門の掩土

「大㋳椿一萬六千秋、都べて南華夢裏の遊に付す、野外鳥啼いて人見えず、槿花半は照して夕陽收まる。夫れ惟れば、久芳宗椿禪定門、十手の指す所、一人尤を拔く。源公の幕下、勝つことを決し籌を運す。眞門俗門、蓋し蠻觸の蝸角を爭ふが如し。佛界魔界、而も㋮漢楚の鴻溝を劃くに似たり。吹毛三尺太平州を定む。與麼の時節、旋嵐嶽を倒し、夜壑舟を藏す。生と說き死と說く、錯錯錯。玄と談じ妙と談ず、休休休。活埋了也。」钁子を抛つて、「然も是の如くなりと雖も、法身向上の事如何、他の爲に酬いん。人は㋘橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。」喝一喝す。

㋗枯木は、古、靜、正位を明し、龍吟は今、動、偏位を示す、枯木龍吟は古今裂破、動靜一如、正偏回互の當體を表す語、香嚴襲燈大師、因みに僧問ふ、如何なるか是れ道、師曰く、枯木龍吟と。

㋳椿、春秋各々八千歲合せて一萬六千歲、前に見ゆ、南華は莊子をいふ。

㋮漢楚の境界を定めしこと。

㋘傅大士の頌に「空手鋤頭をとる、步行水牛に騎る、人橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず」と、動靜の二相を超越せる上の見所なり、東山水上行、青山常運の步等の語に同じ。

基成宗立禪定門の掩土

「坐脱立亡自由を得たり、虚空迸裂して萬機休す、送行の一句吹毛の劍、朶朶の芙蓉秋を檮著す。夫れ惟れば、基成宗立禪定門、洛陽の年少、江左の風流、金粟如來毘耶城に現ず。丈室に病を示す白蓮道人、眉山の地をトして二子尤を拔く。箕裘の業を繼いで以て末命を寄す。香火の社を結んで前修に愧づること莫し。釋迦の富、彌勒の慳、花間夢を作す碧胡蝶。德山の棒、臨濟の喝、柳下に禪を談ず黄栗留、小果を方等に呵することを笑ふ。大乘を神州に接することを瞞ず。文武庫內八寶八珍、金に非ず玉に非ず、生死海中一出一入。車ならず舟ならず、已に煩惱の斷ずべき無し、寧ろ菩提の求む可き有らんや。諸方尋常活下火。這裏祇だ鈍钁頭に還す。」鍬子を擲下して、「別別、還鄉の古曲如何が唱酬せん、少林の無孔笛を吹いて、陜府の鐵牛を驚走す。」

東昇宗旭禪定門の掩土

「曉旭雲を出づ桑海の東、佳城玉を埋めて響玲瓏、轉身自在通霄の路、步步蹈飜す兜率宮。夫れ惟れば、東昇宗旭禪定門、⑦呉牛月に喘ぎ、燕馬風を追ふ。古の世音耶莘野の伊尹、僉曰ふ、耕叟と。今の韓愈也、廬陵の歐陽自ら醉翁と號す。四海賢輔を收む、九州農功を先んず。六十餘年の先、

⑦世說に「滿奮風を畏る、晉の武帝の坐にあり、北窓に瑠璃屏を作る、實は密にして疎に似たり、奮難ずる色あり、帝之れを笑ふ、奮答へて曰く、臣は猶ほ呉牛の月を見て而して喘ぐが如し」とあり、「呉牛は水牛なり、唯だ江淮の間に生ず、故に之れを呉牛といふ、南土暑多し、此の牛熱を畏る、月を見て是れ日かと疑ふ、故に月を見ても則ち喘ぐ」と、成語記に見ゆ。

浄裸裸、涅槃窠窟を離る。六十餘年の後、赤洒洒、生死の羅籠を脱す。恁麼不恁麼、靈雲老未徹在。不恁麼恁麼、龐居士心空と叫ぶ。向上還つて事有り、卽今君が爲に通ぜん。」鋤を拋つて、「一口に吸盡す西江水、洛陽の牡丹新に紅を吐く。」

桂雲昌公禪定門の掩土　三宅氏

匹馬單槍矍鑠として輕し、當陽打破す涅槃城、君が爲に指點す轉身の路、梅雨風に和して晚晴を送る。

椿翁棟久居士の掩土

「久遠劫來生滅に亘らず、五十九年只だ一橛を得たり。椿翁椿翁、得る底那箇の一橛ぞ、世々家聲を傳へ、茲に晚節を保つ。維摩居士の病を示して、牀を移して雲に臥す。㈠能因法師の風を慕うて、簾を捲き雪を哦す。花落ちて夢醒む、春鐘響絶す。只だ這の一橛に憑る、心地汗馬を收む。甚麼の功無功をか論せん。袖裏青蛇を藏す、甚麼の徹未徹をか管せん。只だ箇の一橛、向上の惡鉗鎚に觸る。鐵に點じて金と成し、金に點じて鐵と成す。百了千當、七凹八凸。這箇は且く置く、甘蔗氏、四十九年一字不說。久椿翁五十九年、只だ一橛を得たり。何か優り何か劣る。山僧今朝手に信せて拗折す、是れ同か是れ別か。」钁を拋つて、「別別、珊瑚枝枝月を撐著す。」

㈠能因は京都の歌僧、俗名を橘永愷といふ。遠江守忠望の子にして、兄、肥後守元愷に養はる、性和歌を嗜み、藤原長能に就いて歌道を學び、これに師事す、世に和歌の師あるは、蓋し師に始まるといふ。後に攝津の古曾部に居りしより、古曾部の入道の稱あり、彼の人口に膾炙する名歌「都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」は、實に師が詠にかゝる。

法雲宗護禪定門の掩土

「平生命を致して官家を護す、五十六年㊀無賴楂、色卽是空空卽色、活埋す雪內の牡丹花。夫れ以れば、某名、勇を以て撓むこと無かれ、富んで奢らず。閃電の機を具して、慈雲の大禪佛を拜す。甘露滅を消して、瑞泉の破袈裟を拂ぐ。水底の木人頻に絕叫し、溪邊の石女暗に驚嗟す。生死涅槃、鈍鳥の蘆葦に栖むが如し。鑊湯爐炭、香象の芭蕉に觸るゝに似たり。這裏に到つて甚麽の三祇百劫とか說かん、甚麽の萬別千差をか論ぜん。更に末後の好消息有り。試みに鍬子の些々を著くるを聽け。」鍬を抛つて、「萬里の長空一聲の雁、夜來月に和して平沙に落つ。」

清芳宗源禪定門の掩土

「一踢に踢飜す生死の源、一拳に拳倒す涅槃門、虛空地に落つる底の時節、西山を驚起して雲外に奔しむ。夫れ惟れば、淸芳宗源禪定門、世緣終に淺し、晚節存し難し。富貴一場、㊁聚蚊を金谷に會す。如幻三昧、胡蝶を漆園に迷はす。無位の眞人、是れ什麽の乾屎橛ぞ。正法眼藏、什麽の破沙盆にか較らん。淨祼祼、赤洒洒、明皎皎、暗昏昏。別に眞履實踐の處有り。㊂土掘子の偈言を說くを聽け。」鍬を抛つて、「扶つては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る。」喝一喝す。

㊀楂は筏に同じ、無賴楂は役にたゝぬ舟といふ意。
㊁古語に聚蚊雷を成すの言あり、群小をいふか、金谷は、李白が桃李園序に出づる「金谷の酒數によらん」とある金谷をさすか。
㊂禪師自ら云ふなり。

常智禪定門の掩土

「智劍常に磨す三尺の霜、佛魔何ぞ敢て鋒鋩を犯さん、涅槃城破れて後の消息、松竹山に滿ちて晩涼を送る。夫れ以れば、某名、臥龍の室を扣き、群馬の場に馳す。久しく㋚鹽車に服いて、羊を懸けて狗肉を賣る。親しく鐵棒を喫して、鴨を打つて鴛鴦を驚す。滅せず生ぜず、芭蕉に愁雨無し。忠有り孝有り、葵花太陽に傾く。石女俄に淚を洒ぎ、木人頻に腸を斷つ。六十六歲殘夢猶ほ香し、直に得たり萬劫の鎖を脫却し、四大の牀を掀飜することを。然も是の如くなりと雖も、這裏別に轉身の路有り、試みに鍬子の舉揚するを聽け。」地を打つこと一下して云く、「陰陽不到の處、一片の好風光。」

虛岳宗空童子の掩土

「空元色に非ず色空に非ず、㋖白玉樓成る黃壤の中、啼鳥一聲春夢斷ゆ、天堂地獄落花の風。夫れ惟れば、虛岳宗空童子、字を學んで法有り、書を讀んで功無し。命也天に匪ずや、顏子の尼父に先つに類す。苗にして秀でず、童烏の楊雄に於けるが如し。甘を分つて母を念ひ、血を吐いて翁を驚す。一十三年前、生死無き處に生死を示す。一十三年後、圓通を出でて又圓通に入る。淨倮倮拘束沒し、赤洒洒羅籠を絕す。

㋚賈誼、屈原を弔ふ文に曰く、「罷牛に騰駕し、蹇驢を驂となす、驥は兩耳を垂れて鹽車に服し、章甫履に薦き漸くして久しかるべからず」と、蓋し賢愚其の位を顚倒するを云ふなり。

㋖圓機活法に「李長吉將に卒せんとす、夢に一人の一版書を持するを見る、曰く、天上の白玉樓成る、君を召して記を爲らしむと、しばらくありて氣絕す」と。よりて文人の死をしかいへども、後世一般に此の故事を用ふることゝなれり。

宗空宗空、別に眞歸の那一句有り、作麽生か研窮し去らん。」鑊を抛つて、「昨夜金烏飛んで海に入る、曉天舊に依つて一輪紅なり。」喝一喝す。

宗珠童子の掩土

「老蚌胎中珠を產出す、鐵鎚擊碎して形模を絕す、寒衣裏まず殘宵の夢、小朶梅の西落月孤なり。宗珠童子、驀地に歸り去れ、佗途に涉ること莫れ。倘し未だ然らずんば、善財何ぞ敢て再見に勞せん。佛法南方一點も無し。」喝一喝す。

宗田禪定門の水葬

五無間を掀飜し、一心田を耕破す。泥牛走つて海に入り、木馬躍つて天に上る。正與麽の時、宗田禪定門、還つて會すや。縱然ひ㋴一夜風吹き去るも、只だ蘆花淺水の邊に在らん。

小鳥斃るゝ掩土

㋱卵生と胎生とを脫卻して、羅籠すれども住まらず飛行を得たり、間佛祖に和して活埋し了る、綠水靑山噓一聲。

㋴司馬文明が江村卽事の詩に、「釣を罷めて歸來船を繫がず、江村月落ち正に眠るに堪へたり、縱へ一夜風吹き去るも、只だ蘆花淺水の邊に在らん。」

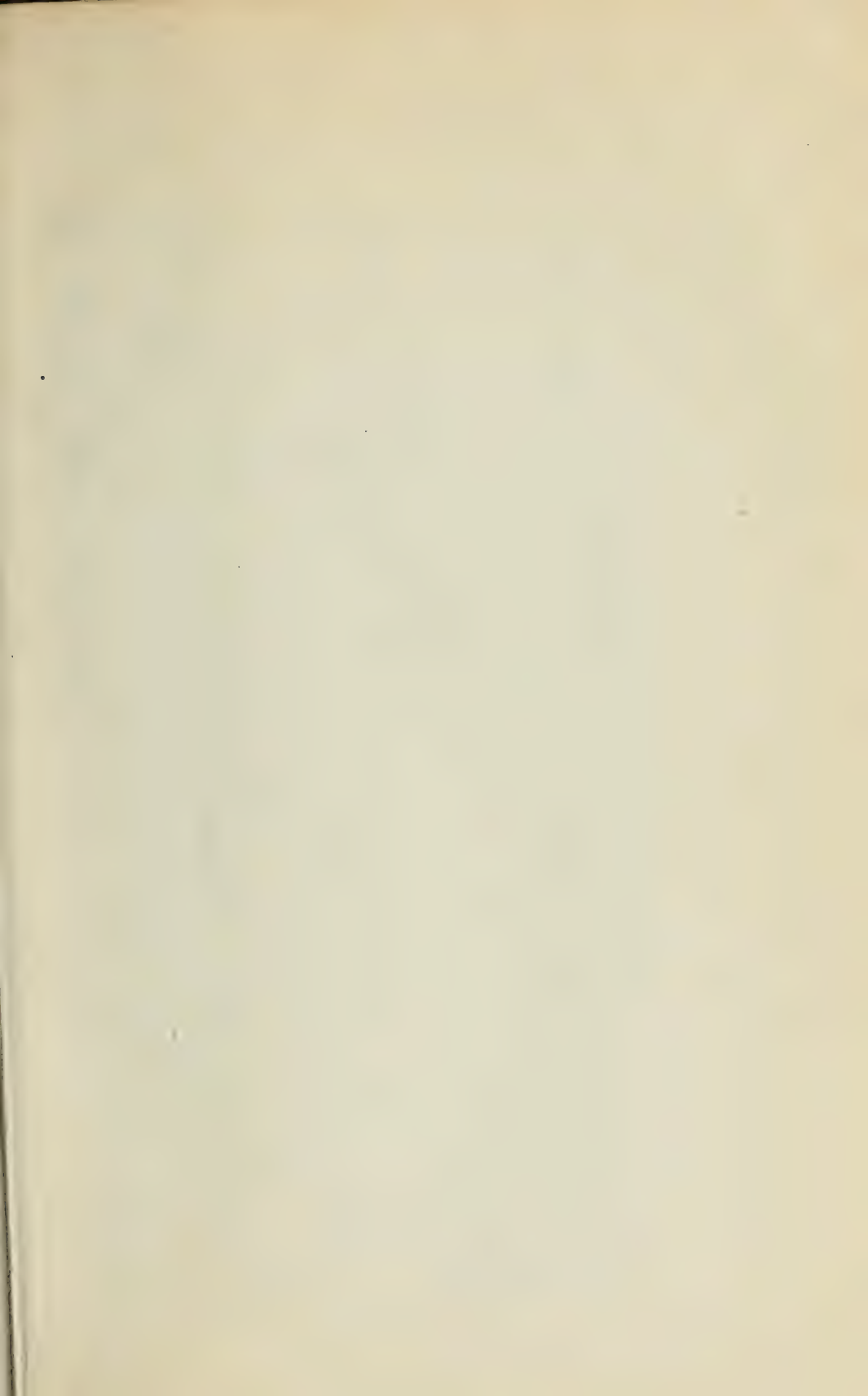
㋱卵、胎、濕、化之れを四生といふ。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之三 終

見桃錄叙

圓滿本光國師、匡徒于正法山之後、有有馬郡主赤松氏之女模堂夫人、爲國師、刱建梵宮於山之兌方、拜請居之、國師以靈雲爲扁焉、晩再有細川氏綱、營一精舍於大雲山麓、以供國師之禪燕、復名以見桃也、皆用志勤禪師機緣、必有說、迨今而不容測其旨矣、因國師平生擧揚・開堂・示衆・立地・偈賛、當時撮蒐者、題曰見桃錄、其錄傳寫、所在秘珍、祇是多寡不均、踳駁尤甚、遙冑諸老、常以爲憂焉、甲寅歲胥議編定、乃羅致家家所藏十數本、交互摩研、質魯亥、補閃脫、鏟除疊沓、倫貫畔散、釐爲四卷、於是乎守塔銜衆命、來款乎遯窩、告忠曰、參訂既竣矣、請引事情於卷首、道忠伏惟、國師處于海宇横潰之世、不墜天源所傳之宗猷、道德厖鴻、文章藻繢、卓絕一代、聖主稟法、武豪仰化、禪敎眞俗翕飛慕嚮、由委化迄于今、垂二百年所、雲耳湧隨、點定舊稿、剞之木而宣通遺言、以擬毛滴之報答、自匪源深流長、則豈能致之耶、此即是家庭盛事也、忠衰颯十拗、隨喜三歎、不覺嗚筆硯、塗糊滿紙、敢茂帥衆囑耳矣、凡展讀是錄者、不可昧卻見桃之一著、苟徒摘葉尋枝、或在國師面前、則必不免熱棓三十矣。

元文二歲次丁巳壯月二十四日

遠孫稗比丘道忠謹書

圓滿本光國師見桃錄卷之一

遠孫比丘衆等重編

住正法山妙心禪寺語錄

侍者某編

師永正十三丙子歲入寺。

山門、指云、大休歇地、乾坤一人、召大衆、聞門外雨滴聲麼、花開南浦春、喝一喝。

佛殿、報化佛頭、擧右足、誰獨足立、卸帽、耐汝州風、吹落老僧笠、便禮拜。

土地、東坡居士、護法明王、護箇什麼、山色清淨、溪聲廣長。

祖堂、吾這獅子窟、不容野狐精、去去天下太平。

據室　機關脫落、別討生涯、放竹篦、拄杖不在、且坐喫茶。

敕黃、此是三十三天大威德天子、折尼拘陀爲佛作蔭涼底一枝、爲甚落山僧手、拈分付春風、嫩桃笑開口。

山門疏、枯樹老僧、山門境致、露柱古佛、今日交參、擧疏、是什麼、花似錦、水如藍。

同門疏　說向太湖三萬月、品論惠山第二泉、誰道千里遠、元來一味禪

拈衣、爲北秀者祖右、爲南能者祖左、搭起、鷸蚌相持漁者利也。

登座、高高峯頂、盪正法船、囦驪龍行處浪滔天。

祝香、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺新住持傳法沙門宗休、開堂令辰、虔爇寶香、端爲祝延今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下、恭願百王百代、芥城空而壽山彌高、乃子乃孫、桑田變而仁澤何竭。

將軍、此香、大樹奕葉、仙李盤根、爇向爐中、奉爲大檀越准三宮、資倍鈞算、伏願九州四海、遠人服兮戎狄和、二京三都、大厦成而燕雀賀、將補袞手、轉正法輪。

敕使、此香貴於天上棘林、重於海外婆律、爇向爐中、奉爲敕使尊官左中辨、資倍祿算、伏願宗門功、第一名上甘露麒麟、洛社會十三、齡逮元祐司馬、以規以祝、維德維馨。

京兆、此香爇向爐中、爲外護檀越源府君右京兆、資倍祿算、伏以、韓京兆起八代衰、仰才名於斗北、神堯帝爲一門事、祀義兵於晉陽、吾其庶幾乎、民之所歸也、

嗣香、這一瓣香、昔大燈國師、劈作兩片、付二神足也、以正法眼、付第一神足吾關山祖、以諸莊園、付第二神足佗徹翁師、是十目所視也、蓋碧落碑無贋本者、只花園一枝而已、徐薰八傳至山野、山野祕之、三重五重裹、復子、卽今拈出、供養前住當山特芳老骨査、不肯報法乳、出乎爾者返乎爾。

垂語、世尊有密語、迦葉不覆藏、擊禪牀、會歷、鷓鴣啼處百花香、參問答不錄。

提綱、乾坤內宇宙間、有一物黑如漆、護身靈符、願神妙術、得之者禍胎乎二三、濫觴乎四七、

著著有出身、門門書大吉、林際風顛、得之作金剛王、正令當行、巴蜀雪消春水來、松源攢祖、得之用黑豆法、孤機峭峻、湘潭雲盡暮山出、恁麼不恁麼、依俙相似越人爲鳧、不恁麼恁麼、彷彿不同楚人爲乙、吾皇得之、西極混明、東略扶桑、晝降閻浮、夜昇兜率、拈拄杖、山僧今日得之爲國開堂、此事了畢、是故在聖同聖、巾上戴堯天、在凡同凡、杖頭揭佛日、焦芽敗種齊霑恩、森羅萬象全歸一、直得石女立舞三臺、木人坐吹觱篥、這新翻一曲、諸人還委悉麼、倘復未然、高提一律去、卓一下、摩訶般若波羅蜜、甚深般若波羅蜜。

自序、宗休、出頭跛鼈、顛倒狂猿、吁何幸哉、天書遠召滄浪客、是亦時也、春衣夜宿杜陵花、慚赧慚赧、忸怩忸怩。

白槌謝、　開堂之次、共惟、養源堂頭大和尚、規行矩步、學馬勝威儀、放去收來、滅洋嶼宗旨、千古叢林改觀、三代禮樂重新、玆辱降尊就卑、鳴槌證法、下座必趨十笏室、展一炷巾、伏乞道照。

諸山謝、　次惟、諸位東堂大和尚、諸位西堂和尚、道香難掩、譬如栴檀葉葉起風、禪林有光、宛似珊瑚枝枝撐月、若罄褒詞、恐瀆大德、衆慈賢察。

總謝、　又惟、山門東西兩序、諸寮辨事、一會海衆諸位禪師、雖可致逐一謝、此日開堂、專爲祝聖、不敢繁詞、併期小參之次、各各昭亮。

拈提、　記得、報恩逸禪師、因僧問、佛爲一大事因緣出世、未審和尚出世如何、逸云、恰好、一問一答、諦當甚諦當、那僧作略、認奴作郎、報恩好佛、只是無光、有人若問、新妙心出世如何、祗對他道、拂一拂云、九萬里鵬纔展翼、一千年鶴便翺翔。

當晩小參、　垂語、拈杖、虛堂拄杖殺活在我、試觸著看、毒花毒果有麼、問答不錄。

提綱、豎起拂、吾有一柄拂子、千聖不曾携、列祖提不起、豎起則豎窮三際、橫拈則橫亘十方、由是明月拂清風、未敎趙州一生受用、霹靂驚天地、直得百丈三日耳聾、有來由無來由、卽此用離此用、甚希有甚希有、日本國裏說禪、也太奇也太奇、大唐國裏打鼓、正與麼時、拈杖云、同行木上座、忍俊不禁、跳出云、和尙與麼道、早是龜毛長數尺、德嶠不答話、汾陽罷夜參、謂之眞家訓而已、山僧咄云、休休、儞一撈恰似兎邊求角相似、只如頭上定乾坤、毛端呑巨海底一句子、如何通箇消息去、卓一下、芍藥花開菩薩面、椶櫚葉散夜叉頭。

自序、宗休、暗證禪師、央庠座主、忝拜宸藻、叨汚名藍、泚顙弗鮮矣。

謝語、　小參之次、共惟、南昌堂頭大和尙、西源的流、急雪鶺鴒相迎、南昌故郡、落霞孤鶩齊飛、莫愧吾法兄、豈曰尊貴墮、春寒花遲、保愛珍重。

次惟、養源堂頭大和尙、聲價大振、天下仰德爵齒之達尊、典刑猶存、僧中獲才學識之三長、誰不嚴瞻乎。

又惟、大心堂頭大和尙、大心衲子、掉龍泉乎舌端、本色白拈、捋虎鬚乎這裏、造次顚沛、不失宗旨、誰敢近傍乎。

更惟、山門兩序、東班都寺禪師、兩翼相遷、鴛序鵠立分班、百廢具興、鯨喑鼉寂革響、不亦偉乎。

監寺禪師、則監院扣青林禪、丙丁求火、會和尙接白雲祖、玉人治璠、不其然乎。

悅可禪師、其才也寔紀綱後佛、其機也況陶鑄仙陀、不是華姪提唱乎。

副寺禪師、副寺禪師、護法財護世財、幹父蠱幹母蠱、不亦宜乎。
典座禪師、直歲禪師、蒸雲母作飯、典座妙手乎、束虛空爲棒、直歲活機也。
又惟、西班堂中座元禪師、佛祖權衡、人天眼目、匡徒領衆、寧曰講經首座乎、降尊就卑、譬諸退位菩薩耳、蓋不忘瓜葛法系之謂乎。
後班座元禪師、輔贊吾徒、合小釋迦懸記、黼黻斯道、蹈大禪佛高蹤、正好著力。
記室禪師、翰墨膏肓未瘳、螢雪工夫勉旃。
知藏禪師、知藏禪師、白傅詩入大藏經、老韓同傳碧巖集、廣公子行、涇渭異流。入與不入、公其甄別。
知賓禪師、知浴禪師、大應接客徑塢、朝一人暮一人、太原主浴雪峯、火三昧水三昧、古之今之、至矣盡矣。
侍香禪師、戒香・定香・解脫香、了天性司南於鼻孔、塵說・刹說・熾然說、謝吾道已東之證明。
侍狀禪師、侍客禪師、侍藥禪師、馳書不到家者侍狀也、報客不知在帝鄉者侍客也、瘵病不假驢駝藥者侍藥也、桃紅李白薔薇紫、一以貫之、珠簾玉案翡翠屏、三重也有。
目子、　某座元某座元、前資辨事二員問禪、一會海衆諸位禪師、各坐般若叢、百千文殊左右彌布、再開楞嚴會、四教阿難、內外玲瓏、集大成矣、不亦盛乎、各乞恕宥。
拈提、　記得、達磨大師曰、吾法於三千年後未曾移易一絲毫許、後來覃葛廬頌曰、東西縱目乾坤闊、玉露澂秋氣宇高、山是山兮水是水、何曾移易一絲毫、少室單傳自有安期棗、葛廬一

偈不貪王母桃、子細點檢吠虛唖實、一犬千猱、休上座打破野狐見解、飜案葛廬風騷去、拂一拂云、少室別傳旨、誰知來處高、將爲碧瞳窄、千里一秋毫。

翌日玉鳳院拈香、　大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺、凡爲新住持者、開堂翌旦、率合山淸衆、就于玉鳳塔下、諷經一上、臣僧宗休、攀其例、謹焚此妙兜樓、以奉供花園太上法皇尊前之次、唱拙偈聊充韮薄奠云、玉鳳銜花桑海東、太平門戸競春風、三皇五帝果何物、擧香云、一朶香雲攀梵宮。

退院、　祖翁一片舊田園、自荷鋤犂稱後昆、啼鳥落花留不住、倒騎佛殿出山門。

再住正法山妙心禪寺語錄

侍者　某　編

冬節上堂祝香、　薩訶世界南瞻部洲、大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺、住持傳法沙門宗休、書雲令節、欽焚寶香、端爲祝延今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、斬新日月、歌王事無盬之詩、太平山河、奉聖主得賢之頌、

垂語、開兩手、放開線路、一氣潛回、拈拂云、要看雲物麼、試登魯臺、有麼、參、有僧出衆云、冬至日永、欠少一絲毫開工夫、妙高雪漫、相見五十三善知識、有時有節、亘古亘今、師云、暖律飛灰、繡紋添線、僧云、記得、天澤老師、至日上堂、僧問、群陰消盡一陽來復、衲僧家到此如何轉身、答云、恰如老鼠入牛角、端的也否、師云、蝦跳不出斗、進云、學人轉身處、和尚如何祇對、師云、倒卻門前刹竿著、進云、天寒人寒、兩人一椀、師云、別別、珊瑚枝枝撐著月、僧云、烏鉢易見、便禮拜、師云、見之不取、千歲難逢、

提綱、　欲識佛性義理、當觀時節因緣、作麼生是時節因緣、冬至在月頭、則賣被買牛、木人倒吹葭管、冬至在月尾、則賣牛買被、牧童遙指金鞭、僧堂今朝挂著慈明榜、首座昨夜掇退洞山禪、塞北天寒、十三葉牡丹開雪內、江南地暖、一兩枝梅花綻臘前、正與麼時、拈杖、牀角漆道士出來咄一咄云、適來許多緒餘土苴、徒費言詮、巍巍乎堂堂乎、同得同證本來因果、塵塵爾刹

刹爾、無縛無解應用無邊、不拘時節、全絕變遷、別欲識佛性義麼、卓一下云、大樹大皮裹、小樹小皮纏。

自序、宗休、鑒頭鼠目、驢頷馬腮、江湖流離、將謂木瓜呆風子、天地棄物、元來蓬髮休上人、慙汗。

謝語、　上堂之次、共惟養源東堂大和尚、勃窣理窟、天然作家、信手拈麤竹篦、敲出臨濟骨髓、治病以長松草、感得普明夙因、尊候如何、保養珍重、

次共惟、大心東堂大和尚、才智山長、行藏雪潔、丁一株蔭涼樹既倒之日、扶起正宗、遇五濁優曇鉢再現之時、來稱補處、百里與雲者龍也、千仞覽輝者鳳兮、瞻之仰之。

更惟、山門兩序、滿堂活衲、問話禪客、諸位禪師、機居東頭、雲居西頭、可謂叢社兄弟、鑾屬左角、觸屬右角、足稱亂世英雄、各々昭亮。

拈提、　記得、古德冬至上堂云、恁麼也是、不恁麼也是、恁麼也不是、不恁麼也不是、恁麼不恁麼總是總不是、何謂如此、陽氣發生無硬地、古德提要恁麼不恁麼、强判鴻蒙、總是總不是兩處失功、陽氣發生無硬地、窮則變變則通、山僧見處與他不同、拂一拂、淸風拂明月、明月拂淸風、便下座。

歲旦上堂祝香、　仰聖明、如日如月、祝睿算、同地同天。

垂語、　開造化爐、鑄鐵崑崙、見麼、斬新日月、特地乾坤、有僧出衆云、萬歲古佛出世、何管舊歲新歲之送迎、高提祖印、南極老人下天、寧分無極太極之先後、仰祝皇圖、發獅子音暢雞旦賀、師云、山門增瑞氣、草木發光輝、僧云、記得、趙王訪趙州、州不立、以手自拍膝云、會麼、王云、不會、

不審佛法王法、是一般是兩般、師云、一鏃兩當、進云、茲承、今上皇下綸命建立吾正法門、可謂山中雨露新、師云、從這裡入、進云、與麼則上皇於上方、趙王於趙老、古之今之、豈有優劣、師云、二十年來塵撲面、如今始得碧紗籠、進云、山花笑、野鳥語、師云、吾無隱乎爾、進云、百千雪竇・圓悟、合爲一人、師云、低聲低聲。

提綱、　年年是好年、春色無高下、日日是好日、花枝自短長、如水隨器、不圓不方、在西乾名新歲經、本于釋氏、在東震曰先天易、始乎犧皇、洒法霈於九野、開壽域於八荒、也太奇也太奇、新羅國裏拄杖作舞、甚希有甚希有、古郢城邊落梅上堂、諸人還聞麼、是甚瑞祥、卓杖一下、臥龍纔奮迅、丹鳳亦翺翔。

自序、宗休、蘩匏魯叟不食、朽木宰予難彫、只愧無所取材、何敢可堪補職、汗顏。

謝語、　上堂之次、共惟、山門兩序、雲堂四衆、適來禪客、諸位禪師、東有鱗蟲、龍爲之長、西有毛蟲、虎爲之長、南有羽蟲、鳳爲之長、北有甲蟲、龜爲之長、由此觀之、吾佛日祖翁、麤竹篦下、打發四員禪將、鳳也龜也龍也虎也、從斯分一源於四派、允有以哉、抑具正法眼破沙盆者、松源・破庵・曹源・萬庵、豈不起中峯之道乎、猗歟盛哉、各各道體萬福。

拈提、　記得、大川濟禪師、歲旦上堂曰、正月初一若說佛法、三百六十日被佛法縛殺、若說世法、三百六十日被世法使殺、大川恁麼告報、誤認元字腳、打失雙眼睛、何故、會則途中受用、不會則世諦流布、休上座、聾、拂子頭上點出光明去、滿堂露柱賀元正、不待千年河水淸、非佛法兮非世法、綿蠻黃鳥出花聲。

歲旦上堂、祝聖、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云、陛下恭願、致君周宣漢武之上、擧賢莘夫渭叟之間。

垂語、豎拂云、這正法樹開微笑花、有麼、風流屬當家、有僧出衆云、大王萬福之趙古佛、金雞報曉、玉鳳銜花、侍者三喚之忠國師、木馬嘶風、泥牛吼月、賴臨法席、仰祝丕圖、師云、日月垂秦樹、乾坤繞漢宮、僧云、記得、西巖惠禪師、歲旦上堂云、磨盤呈舊面、水碓拜新年、無作而作、不然而然、是甚條章、師曰、只待雪消去、自然春到來、進云、法山今朝上堂、不涉新舊、賀正一句可得聞麼、師云、普、進云、雲北嶺冷、梅南枝香、師云、侍者參得禪了也、進云、人人襟袖帶香歸、便禮拜。

提綱、　朝來花萬福、鶯奏起居聲、是甚聲、拈杖云、木居士在側、與吾同年同行、論晩節於松朋竹友、約歲寒於磬弟梅兄、其鬚拂履、其髮脫纓、特地出來、胡盧軒渠曰、鐘魚鼓板是甚聲、蝦蟆蚯蚓是甚聲、長老長老、何不聽明、依俙盲者日月、彷彿聾者雷霆、欲重宣此義、諦聽諦聽、昨送舊歲、今迎新正、是故一氣資始、品物流形、四時不忒、春以鳥鳴、秦嶺霞秀、洛山雪晴、擊節唱歌東村王太白、作詩換酒南隣張先生、門門大吉、戶戶太平、御園牡丹著紅、四海香風從此起、官池鷗波蘸碧、五湖煙景有誰爭、人境不奪、公案現成、擧揚向上宗乘、罵釋迦打彌勒、商量年頭佛法、欺明教瞞鏡淸、拈卻崑崙鼻孔、突出金剛眼睛、雖然恁麼、祝聖一句、如何施呈、卓一下、龍得水時添意氣、虎靠山色長威獰。

自序、宗休、麞頭鼠目、鳥觜魚顋、宗門一世衰、烏虖滅師半德、住持千嶂月、胡爲失他五緣、慙汗。

總謝、　上堂之次、共惟、山門東西序、單寮蒙堂前資辨事、一會海衆、適來禪客、諸位禪師、宗門

惡毒爪牙、獲得賢劫第四釋獅子、鉗鎚妙密手段、捉敗洋嶼五百活馬騮、支分末流、譬四派乎江河淮濟、護惜常住、配一年乎春夏秋冬、每日轉食輪法輪、何時拜台帖鈞帖、叮嚀損德、各乞諒察。

拈提、　記得、僧問雪峯、元正一日、四相盡朝、未審王有何祇待、峯曰、四相隨年老、眞王不預春、一人拗曲作直、一人弄假像眞、如擧燭用燕說、似郢鼻運郢斤、山僧亦作偈效顰去、三皇五帝百花春、廚庫山門雨露新、不借陰陽造工手、天然拄杖黑鱗皴。

歲旦上堂、祝香、　時屬昇平、扶桑樹頭鳳舞、春入新正、碧梧桐裡鶯啼、一願致君堯舜上、而施堯舜雨露於四溟、二願待我季孟閒、而移季孟風俗於萬世。

垂語、以拂指左、左邊去年梅、指右、右邊今歲柳、指中、若問中間底如何、顏色馨香依舊、參、僧出衆云、太平有象、綠髮將領百蠻、王事無盬、緇衣禮復三代、法社之盛、我道有光、師云、烏藤依舊黑鱗皴、進云、春風入門千花生觜、師云、又勝秋露滴芙蕖、僧云、記得、天澤祖歲旦上堂云、年年是好年、日日是好日、爲甚有新舊意旨作麼生、師云、過花成花、過柳成柳、進云、和尙今日上堂、不涉新舊底一句、可得聞麼、師云、聞麼、進云、上來且置、住山鍬斧開花時如何、師云、見麼、進云、烏鉢常在、師云、後生可畏、僧便禮拜。

提綱、　祖師妙訣、誰家不春、年之元、月之元、日之元、元來無縫罅、天得一、地得一、人得一、一氣轉洪鈞、因之野外綿蕝復舊、雨餘鐘鼓響新、玉毫光耀紫栴檀、拜屈善住天子、青山涌出黃金宅、驚起釋提桓因、塵塵說法、刹刹說法、處處全眞、物物全眞、烏張三喫酒、黑李四濕脣、放開則

夜都落地、把住則弁汾絕津、拈杖、且道、放開是、把住是、瞎漆桶癡兀兀、醉袈裟笑閻閻、若復未會、看看、盡大地一箇木上人、卓一下、只將補袞調羹手、撥轉如來正法輪。

自序、宗休、千年常住、百日主人、半德減師、蘇長公效庭堅體云、爾、至尊列位、韓非子編伯陽傳者乎、汗顏。

謝語、　養源和尚、雪髻獅子、金翅鳥王、瀉嶠善養其源、山下檀越、蕭然行李、葉波別傳何法、水光林影勃窣伽梨、不翅譜三千威儀經、況復劃六十華嚴易、道體萬福、孟春猶寒。

大心和尚、大愚不愚、正法無法、風生八極、虎丘虎頭虎尾一時收、雲連九天、龍泉龍子龍孫兩處化、賀哉後學甘露、僉曰、本色住山、人其不仰乎、師之所存也。

山門東西序、都寺悅衆寶公、不改生薑名、華婭誰道桃花婰、玲瓏爾音、黼黻吾道。

前版後版、釋迦不前、彌勒不後、易地皆然、臨濟如夏、雲門如春、維時至矣。

記室知藏、一人透過積翠三關、一人打開少室大藏、掃爛葛藤於胸襟、耀文章花於盌盎。

侍香・侍狀・侍衣・侍藥、這箇印香嚴本寂、鼻孔遼天、那箇跨華林大空、威風遍野、想彼紅粉侍者、得此烏鉢道人、中有一箇叢社風流、藥籠人物、更盡一杯酒、莫認三喚聲、夫是之謂侍藥職。

堂中萬緇郎、適來十禪客、諸位禪師、渥洼奇種馳志、騅騑騊駱驪騮騵、雲臺諸將論功、井鬼柳星張翼軫、箇箇立在轉處、人人盡有光明、三年關山月、誰是知音、一日長安花、各自着眼、至祝至祝。

拈提、　記得、西巖惠禪師、上堂拈拄杖云、只如鷲峯老漢、於百萬衆前、拈一枝花、直得金色頭

陀、破顏微笑、爾且道、是梨花耶、李花耶、梅花耶、杏花耶、卓一下云、一時分付與春風、子細點檢、首鼠兩端、世尊信手拈來、春到人間無棄物、西巖依模脫出、月移花影上欄干、山僧聾、梨梅杏李一般寒、金色頭陀被熱瞞、拄杖花開太平日、春風著力試吹看。

結夏上堂、祝聖、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云、陛下恭願、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶。

垂語、　開圓覺伽藍、說安居偈子、諸人還聞麼、葵花無眼、芭蕉無耳、參。

提綱、　十五日以前、金烏東轉、十五日以後、玉兎西移、正當十五日、傍有漆道士、眼如蒲萄朶、手攀珊瑚枝圓陀陀地、得得出來、築著祖師鼻頭、松直棘曲、吐露古佛心膽、綠暗紅稀、拾一溪雲作衣鉢、接千嶂月稱住持、或時與奪縱橫、轉聖作凡、脫卻舍那珍御服、或時開遮自在、轉凡作聖、拈起向上惡鉗鎚、濡首偏吉、貶向二鐵圍、空裡磨盤生八角、驚走陝府鐵牛兒、與麼時節、臘氷鵝雪、不假修治、說甚麼護生禁足、論什麼取證剋期、雖然如此、只要殺中透脫、活處投機、卓一下云、欲知無限傷春意、盡在停鍼不語時。

自序、宗休、七十古來稀、菱花照雪、兩三竿也足、脩竹掩門、慙汗慙汗。

總謝、　上堂之次、恭惟、鵠立東西序、蟬連左右侍、滿堂一會龍象衆、泰山不辭寸壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、顧吾法山、高而如峯無頂、深而似海無底、誰不瞻仰乎、各請亮察。

解夏上堂、祝香、　大日本國云云、陛下恭願、南明公北明公、掌左輔右弼之職、東王母西王母、

奉天長地久之篇、

垂語、　飜嗣山月、作夾則律、擊禪牀云、閒麼、一二三四五六七、擧、僧出衆云、大雲庇九丘、臨濟之龍呈露頭角、淸風生八極、慈明之虎活弄爪牙、鼓臨自恣佺辰、仰祝皇圖萬歲、師云、三兩全淸六合塵、進云、蘋葉風涼、桂花露香、師云、吾無隱乎爾、僧云、記得、鹿門燈禪師、僧問、西天解夏、以臘人爲驗、未審、鹿門以何爲驗、門云、雨來山色暗、雲出洞中明、恁麼酬對端的也無、師云、公驗分明、進云、西天鹿門、吾法山優劣如何、師云、問取露柱、進云、燈籠合掌、露柱證明、師云、門外金剛、因甚汗出、進云、源暑猶甚、伏惟珍重、師云、名下無虛士。

提綱、　正人說邪法、邪法成正法、邪人說正法、正法成邪法、何故、法無定相、逢緣卽宗、薰風一聯之詩、賺殺果木瓜禪和子、碧岩百則之話、惹著勤蕃苴老凍膿、力冽希、咄咄咄、風從虎雲從龍、恁麼時節、同行漆道人、驀路相逢、能殺能活能擒能縱、口吧吧地道、秋初夏末、各自西東、萬里無寸草、何處留朕蹤、卓一下、巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。

自序、宗休、雖同無着對文殊、稱末法比丘、不異巖頭喚欽山、作後生長老、汗顏、

謝語、　聖澤和尙、禪源無竭、聖澤有餘、老松臥壑、萬牛不動五丁愁、少林向秋、衆角雖多一麟足、至祝至祝。

大心和尙、眞正正傳、大心心印、禪之炮炙、禪之本草、換骨顧神、或底微笑、或底拈華、直指見性、歆羨歆羨。

山門兩序、一會海衆、諸位禪師、合百億彌樓山爲一山、高則高矣、較吾山門、則只是蟻垤而已、

合百億香水海為一海、深則深矣、較吾海衆、則只是蹄涔而已、可貴哉。
拈提、　記得、虛堂老師解夏上堂云、十五日已前休、十五日已後住、正當十五日、休也休不得、住也住不得、虛堂叟逢人且說三分話、休上座爲佗全拋一片心、臺前不有花含笑、可是東山一夏休、便下座。
冬至上堂、祝香、　大日本國云云、陛下恭願、起春秋筆、會出一角之麟於西周、上封禪書、必致比目之魚於東海。
垂語、叉手、一冬二冬、叉手當胸、會麼、闍黎飯後鐘、參。
自序、宗休、少叢林漢、大蘿蔔禪、登獅子座、流野狐涎、慙汗。
謝語、　養源和尙、甘棠故芴、苦海慈航、願聽法要莫倦度生。
大心和尙、哦岐陽雪、不是十三生蘇軾乎、化震旦風可謂第二位顏回也、瞻之仰之。
山門東西班、滿堂三千指、適來禪客、諸位禪師、人人如百千日月繞釋天、箇箇似萬丈波瀾歸大海、吁嗟偉哉、於戲盛矣。
結座、拈杖一劃云、劃前有易、熱則熱、寒則寒、刪後無詩、山是山、水是水、四序循環、一氣資始、繇茲梅花先漏泄、換卻達磨眼睛、桃李終不言、敲出臨濟骨髓、格外玄談、當陽直指、何用開周曆賀元正、登魯臺書雲氣、若約衲僧家、當甚弊皮履、正與麼時、喚作拄杖子便是、喚不作拄杖子便是不是不是、卓一下、吾道一以貫之、曾子曰、唯。
歲旦上堂、祝香、大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云、陛下恭願、虎拜稽首、居

蘇白散、齡祝萬年、鵠立侍臣、禮葉樂花、德邁三代。

垂語、　把一枝笛奏萬年歡、這裏還有知音者麼、陽春白雪和皆難、有僧出問云、太平有象、三臺鶴舞花間、睿算無窮、千歲龜游葉上、時其至矣、德惟大哉、賴値夏正、願沐周煥、師云、紅日照扶桑、僧云、記得、世尊擧花、迦葉一笑、意在花不在花、師云、兩箇落草漢、進云、百萬買一笑、風流屬當家、師云、誰家不吞、祖師有妙訣、進云、昔將正法眼、付迦葉一人、可謂靈山及第、師云、衆角雖多、一麟足矣、進云、今日花園、開一枝烏鉢、誰是微笑人、師云、看腳下、進云、與麼則靈山一會、儼然未散、師云、謝證明、進云、如來禪且措、如何是祖師禪、師云、親者不問、問者不親、進云、也勝秋露滴芙蕖、師云、雪亦輸梅一段香、進云、宗門遷固、謹謝答話、師云、鶴鳴九皐、其聲聞天。

提綱、　說妙談玄、太平姧賊、拈槌竪拂、亂世英雄、臨濟金剛王、倚天照雪、德山木上座、罵雨打風、掀飜禪河教海、踢倒虎穴魔宮、爾來、說劍者墮汪莊圈繢、學射者遊后羿彀中、無限衲僧跳不出、猶有梅花路未通、是故熊峯面壁九年、胡僧眼睛、馬師振威一喝、海兄耳聾、桶底脫時、事事無礙、機輪轉處、法法圓融、如水投水、似空合空、正與麼時、南山北嶺、雲起雨下、千門萬戶、柳綠花紅、祖意明明歷歷、佳氣鬱鬱葱葱、泥人擧揚宗旨、石女仰贊聖躬、畢竟以何爲驗、布衣稷契詩書澤、治世巢由畎畝忠。

自序、宗休、奔尺寸祿、如蟻附膻、誇一小伎、似虎挾乙、慙汗慙汗。

總謝、　上堂之次、共惟、山門東西班、丈室左右侍、單寮蒙堂、前資辨事、滿堂一會海衆、適來問話禪客、諸位禪師、東有馬鳴、西有龍猛、南有提婆、北有童壽、號爲四日、能照衆生惑情、摧邪見

山、然正法炬、顧斯山吾佛日下、亦有四日、曰龍泉、曰東海、曰靈雲、曰聖澤、爀爀然照天地、昭昭乎輝古今、嗚呼盛哉。

拈提、　記得、古德云、佛法年年依舊、胡餅日日新鮮、古德恁麼示衆、無義味話、說口皮邊禪、風流可愛、公案未圓、超佛越祖談且置、賀正一句如何敷宣、昨夜春風吹入門、初機桃李賀新年、衲僧活計無多子、閒聽松聲被底眠。

歲旦上堂、祝香、　大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云、陛下恭惟、太伯孫領倭國、日昇若英、小月走都汴河、家種葵藿。

垂語、豎拂云、正月木犀樹、亂世優鉢花、若有仙陀客、秣我馬、膏我車、參、有僧出衆、擧坐具云、托出驪龍五色珠、靈光照徹盡閻浮、請師不借春風力、向上鉗鎚下得無、師曰、老將筋力不爲能、進云、四塞狼煙斷、九天鳳瑞新、師曰、時哉時哉、僧云、記得、僧問趙州、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、是什麼陳葛藤、師曰、一回拈出一回新、進云、此山近移柏樹於法堂前、不是乃祖惡茅蘗、師曰、移入宮墻別是春、進云、趙州道底且置、靈雲桃花著紅也未、師曰、待柏樹子成佛向汝道、進云、猶有梅花路未通、師曰、只待雪消去、僧云、參寥覺範合爲一人、師曰、莫慚吾侍者。

提綱、　天何言乎、四時行、地何言乎、百物生、鶯南燕北、柳暗花明、玄玄玄、分張林際骨髓、咄咄咄、換卻楊岐眼睛、重則重於九鼎重、輕則輕似一毫輕、也太奇、也太差、青山白雲開遮自在、不可量、不可說、淸風明月與奪縱橫、雖然恁麼、賀正那一句、如何施呈去、東夷降也西戎伏、野老農夫樂太平。

自序、宗休、暗桃李俗又來、前度劉郎、黃楊木禪、好去閏位王莽。

總謝、　上堂之次、共惟、山門東西班、丈室左右侍、滿堂一會龍象衆、適來問話禪客、諸位禪師、叢林禮樂一新、鳳啣花、鷄報曉、華藻文章三昧、犀翫月、象驚雷、嗚呼盛哉、各各道體、起居萬福。

拈提、　記得、松源師祖住香山日、歲旦上堂曰、歲去實不去、歲來實不來、山僧都不會、露柱笑哈哈、山僧亦作偈擊節去、春風露柱笑哈哈、咄、箇岳翁聲似梅、木上座呼新長老、山門八字向南開。

除夜小參垂語、　臘月扇子、除夜納涼、若有寒毛卓竪底漢、盡此一杯杏薑湯、參、有僧出衆云、春入舊年、德山小參不答話、月印衆水、斷際全機繼後蹤、幸臨法筵、願聞家教、師云、今日早暮矣、僧云、記得、息耕老師歲夜小參、僧問、門前爆竹通消息、何必重新擧話頭、師云、刺腦入膠盆、端的也無、師云、冷灰豆爆、進云、燈籠合掌露柱點頭、師云、諾諾、進云、法山今夜小參、不墮息耕圈繢、天到梅邊有別春麼、師云、有、進云、來年更有新條在、伏惟珍重、師云、勿謂今年不學而有來年、僧禮拜。

提綱、　臘雪連天、烹露地牛、消得恁麼、春風逼戶、唱村田樂、熱殺闍梨、闍梨即雲水、雲水即闍梨、學北禪家教、董百丈叢規、只是尋常茶飯、衲僧底未爲奇、舌走雷霆、林濟金剛喝、神號鬼哭、氣吞佛祖、松源黑豆法、斗轉星移、冷冰冰地喪盡生涯、去年貧有錐無地、今年貧無地無錐、法山今宵分歲、以何與大衆來、龍肝鳳髓、暫待別時、卓杖一下、莫嫌冷淡無滋味、一飽能消萬劫飢。

自序、宗休、擊柝抱關、三更五更、自禦黃巾賊、打齋持鉢、一箇半箇、誰愛紫衣僧、依舊可憐生、元來沒巴鼻、慙愧慙愧。

謝語、　小參之次、共惟山門兩序東顧、一夜雨滂澎、打倒蒲萄棚、知事普請行者人力、拄底拄、樓底樓、樓樓拄拄到天明、子細看來、吾山都寺禪師、打雪商量、日日論盧陵米價、了花因果、夜夜分石窓燈聚。

悅衆禪師、擧宗因喩、論說陳那因明、分序正流、剖判華嚴提唱。

西顧、鳳林堂中座元禪師、張雲門樂於洞庭、丹霄鳳舞、現瑞應花於濁世、緇林響臻。

後版禪師、小釋迦說夢、推木枕於牽陁宮中、大禪佛出頭、靠藤杖於集雲峯下。

記室禪師、僧中謫仙、酒杯酌翰林月、林下懶殘、袈裟裏煨芋煙。

知藏禪師、揭示佛日、千年象教回春、振起儒風、四庫目錄稽古。

更惟、滿堂三千指、丈室左右侍、問話禪客、諸位禪師、一毛頭獅子、百億毛頭現、百億毛頭獅子、一毛頭現、若斷褒贊、恐減威光、各乞昭亮。

拈提、　記得、古德歲夜小參、因僧問、一切生死、以何爲舟航、德云、年盡不燒錢、那僧問端、敲氷求火、古德答處、門釘桃符、似不會、若有人致如上問於休上座、祇對他道、燒葉爐中無宿火、讀書窓中有殘燈。

元宵上堂、祝聖、　大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云、燈節令辰、虔爇寶香云云、今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、惟天聰明、惟聖時憲、惟臣欽若、惟民風從。

垂語、少室一燈、發龜作鼈、試出頭天外看、珊瑚枝枝撐着月、有麼。

提綱、十五日以前、金烏急玉兎速、十五日以後、泥牛吼木馬嘶、禪厄閏年、宣州杲風子、參得黄楊木、機運閃電、首山念法華、喚作竹篦、胡打亂打、全提半提、張三飽喫酒、李四醉如泥、口吧吧地、問東答西、拈杖、來也來也、杖兮杖兮、向上宗乘事、未夢見在、遠法師因甚不過虎谿、呵呵呵、天共白雲曉、莫待五更鷄。

自序、宗休、脩吭矮身、載方朔於滑稽傳、巧唇薄舌、嘲子雲於太玄經、慙愧慙愧。

總謝、　上堂之次、共惟、山門東西班、丈室左右侍、耆宿單寮蒙堂、前資辨事、一會海衆、諸位禪師、多寶塔中二如來、開迹顯本、楞嚴會上四菩薩、屈尊就卑、不堪感戴、各乞允容。

拈提、　記得、臨濟栽松次、黄蘗問曰、深山裡栽松許多爲甚麼、濟曰、一爲山門作境致、二爲後人作標榜、黄蘗問端、移花兼蝶到、臨濟答處、買石得雲饒、有人若致如上問、只對他道、能爲萬象主、不逐四時凋。

結夏上堂、祝香、　大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云、陛下恭願、飛龍在天、肅宗帝卽位於靈武、客星犯座、嚴先生應詔於炎劉、一絲九鼎、萬春千秋。

垂語、　劈破禁網、不守三期、要聞敎外旨麼、杜鵑啼在落花枝、有麼、有僧出衆云、兩箇黄鸝啼垂柳、臨濟賓主歷然、一雙胡蝶上葵花、達磨兄弟來也、祖師禪且置之、願聽祝聖一句、師云、王登寶殿、野老謳歌、進云、寒巖四月始知春、師云、律呂調陽、僧云、趙州古佛示僧曰、洗鉢盂去、其僧便悟、此意如何、師云、掬水月在手、弄花香滿衣、進云、學人未悟、請師慈悲、師云、三十棒、進云、

不到荊山、爭得璞歸、師云、侍者參得禪了也。
提綱、　十五日已前、翠巖眉毛、一莖兩莖落、十五日已後、黃蘗拄杖、七尺八尺餘、護生須是殺、殺盡始安居、是故能仁剋期於九旬、蜂房作獅子窟、濡首度夏於三處、龍光射斗牛墟、龍蛇凡聖、泥玉車書、崑崙核子、隨機吞吐、虛空布衫、信手卷舒、拈杖、黑面翁在側、出來軒渠云、西天臘人冰、守株待兎、東土鐵彈子、緣木求魚、不啻瞞頂佛性、況復儱侗眞如、雖然恁麼、這裏何以分親疎、卓一下、陶潛懶入東林社、在在青山可結廬。
自序、宗休、這雛道人、稱贒長老、有愧北岳移文、恐坐東坡詩案、汗顏泚顙、
謝語、　上堂之次、共惟養源東堂大和尙、古道顏色、宗門爪牙、克家的流、分禪源於末派、無邊眞照、揭佛日於中天、不任泰瞻斗仰、誰辨涇濁渭淸。
次惟、大心東堂大和尙、氣吞諸方、腳踏實地、千萬世之林際、後人有標、七八生之雲門、知識無種、吾莫閒然、自愛珍重。
又惟、山門兩序、滿堂四衆、諸位禪師、兩序鵠立雁行、四衆象旋獅擲、甚希有甚希有、登摩利山、片片皆栴檀、也太奇也太奇、入金剛窟、寸寸是藥草、集而大成、豈曰小補、各乞道照。
拈提、　記得、偃溪聞禪師、結夏上堂曰、十字街頭、大圓覺海、逐色隨聲、家風落賴、討甚西天樣子、一任東倒西擂、偃溪提唱、絕勝古今、言端語端、尋常未免臭氣、頭正尾正、只是不逢知音、和我窓前月、彈君石上琴、拂一拂、唵齒臨唵部臨、下座。
冬節上堂、祝聖、　大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云、陛下恭願、有道四夷守、無

征萬邦安。

垂語、　冬日添線、作一釣竿、有麼、要知向上事、莫話子陵灘、有僧出衆云、眞照無邊、漢女宮中一線日長、太平有象、魯侯臺上五色雲興、振起宗風、祝延叡算、師云、早朝不審、晚後珍重、進云、枯木開花、虛空迸裂、師云、果然、僧云、記得、松源祖冬至上堂曰、晷運推移、日南長至、是什麼祥瑞、師云、日日是好日、進云、不涉陰陽底一句、可得聽麼、師、以拂擊禪牀、聞麼、進云、和尙道底與松源道底、還有親疎麼、師云、親者不問、問者不親、進云、南山打鼓北山舞、師云、迦葉門前風凜凜、進云、諸佛智慧難解難入、謹謝答話、師云、孤負少年僧。

提綱、　元亨利貞、始乎一氣、常樂我淨、本乎一心、一心卽一氣、一氣卽一心、是故暖律輕輕飛灰、則雲物洶湧、凍雨霏霏作雪、則山嶽平沈、小人道消斡回玄造、君子道長剗盡群陰、淨躶躶露堂堂、東西得自在、明歷歷白的的、南北分商參、石女空中拍手、木人石上彈琴、如雲韶掩爽棘、只是不逢知音、牀角拄杖子、聞得忍俊不禁、攪長河成酥酪、變大地作黃金、罵慈明臭老婆、傍提橫按、逼臨濟白拈賊、活捉生擒、𠰒耐蒙莊座主、說劍誇周宋鐔、雖然如此、一陽未萌底時節、諸人向何處參尋、卓一下、暗穿玉線、密度金鍼。

自序、宗休、全俗全眞、坐青油幕下、作謝宣面、至愚至陋、臨明鏡臺前、迷演若頭、憐察、

總謝、　上堂之次、共惟山門兩序、雲堂萬衲、問話禪客、諸位禪師、領百萬衆於舍衞、步步獅擲象旋、列七十子於孔門、箇箇龍蟠鳳逸、蓋支大廈者非一木、況感六瑞而散四花、嗚乎盛哉。

拈提、　記得、古德冬節上堂曰、有物先天地、仰之彌高、無形本寂寥、鑽之彌堅、能成萬象主、瞻

之、在前遂四時不凋、忽焉在後、古德拈語、可入佛不可入魔、山僧也一一代他去、有物先天地、紫金光聚照河沙、無形本寂寥、天上人間意氣多、能成萬象主、曾敎文殊領徒衆、逐四時不凋、毘耶城裏問維摩。

歲旦示衆云、古道、元正啓祚、萬物咸新、元正啓祚時、諸人如何下一轉語、山僧有一偈、供養大衆去、千仭銜書玉鳳翔、元正啓祚祝吾皇、春風吹起關山笛、打鼓梅花叫上堂。

歲旦上堂、　珍重同行木上座、今朝隨例打商量、新年佛法無多子、三尺龜毛添箇長。

謝酸典座夏齋上堂、　吾肥典座叫鍋兒蒸五臺雲作飯時、大地都盧無底鉢、盛黃梅七百僧來。

駿州大龍山臨濟禪寺語錄

侍者　某　編

山門、指云、超長沙七步、透臨濟三關、更有那一關在、富士雪鐵壁銀山、喝一喝。
佛殿、殿裏底何物、飛花舞晚風、看看、天開二十五圓通、禮拜。
土地、張大帝鬼神爺、四百年護漢家、以詩贈汝、思無邪、思無邪。
祖師、三蘆東渡、餘波未收、今日捉敗了也、袁達李磨賊頭。
據室、維摩室以月爲明、山僧室以雪爲明、別別、打云、三尺竹篦子、打破毘耶城。
府帖、拈帖云、塞外將軍令、舊邦其命新、補袞調羹手、撥轉正法輪。
山門疏、孫文章波瀾濶、呑陸海吸潘江、花簇簇錦簇簇、異代同名夢窓。
拈衣、黃梅夜半傳盧公、一絲九鼎、金輪峯下付華延、大法千鈞、搭起云、無縫鐵崑崙、兩肩擔不起。
登座、起於奮迅三昧、活獅子作馬騎、燈王佛燈王佛、還我一座須彌。
祝聖、大日本國駿州路大龍山臨濟禪寺、新住持傳法沙門宗休、謹焚寶香、端爲祝延今上
皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、國家安萬國、玉燭調四時、多君苞桑計、百世其本支。
檀那、這香爇向寶爐、爲源府君、奉資倍祿算、囊扶桑之弓、則東盡齊四履、匣青萍之劍、則西

連魏三河、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌。
嗣法、　這香爇向寶爐、酬虛堂十世、前住大德後住妙心特芳老漢法乳之恩。
垂語、　聖諦第一義、早是落便宜、要知諸佛出身處麼、薰風自南來、參、有僧出衆云、綿蕝束茅、百丈規矩曾拜紫詔、布金挿草、三代禮樂、今在緇衣、賴値佛法東漸時、願示祖宗南頓旨、師云、三門依舊向南開、進云、允哉、河出圖洛出書、師云、劃前有易、删後無詩、僧云、記得、虛堂老祖、丁九九數再住徑山、有敕祈雪、可謂奇外之奇也、師云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、進云、寒巖四月始知春、師云、鷓鴣啼處百花香、進云、老和尚應九九數、賜敕許初住吾山、況有雪頌乎、僉曰、老虛堂再出世、師云、家醜莫向外揚、進云、溪山雖異、雲月是同、師云、別別、和風搭在玉欄干、進云、金春玉應謹謝答話、便禮拜、師云、此是選佛場、心空及第歸。
提綱、　乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、秘在龍山、因府主請而開堂、提住山鈯斧、拜天子詔而入寺、鳴下瀨玦環、吾祖昔住徑山、此郎今領百蠻、東海兒孫、八十一黃塵烏帽、西湖長老、五十三白髮蒼顏、圓覺場中列聖、象旋獅擲、通明殿上侍臣、鵠立鵷班、黑漆拄杖子打魔佛、寶劍金剛王斬癡頑、拈杖、正與麼時、不待彌勒下生、夜摩瑠璃、兜率瑪瑙、不印香嚴本寂、錢塘鸚鵡、吳岫鷓班、明月珠光燦爛、流水經響潺湲、萬年松抽萬年枝、以規以祝、炎天梅吐炎天蘂、難望難攀、濟珍開無盡藏、良策定太平寰、卓一下云、疎籬見雪捲、深戶映花關。
自序、宗休、欲居九夷、魯叟匏瓜不食、將歸三徑、晉人松菊猶存、玆逼英檀命、拒辭不允、强陞猊座、作野干鳴、慚汗慚汗。

白槌謝、開堂之次、共惟、龍泰堂頭大和尙、瑞龍興大智雲、非池中物、睡虎典多羅藏、立教外宗、衆所歸也、誰不仰乎、玆辱降尊就卑、鳴槌證法、無堪激切屏營之至、下座必趨十笏室、展一炊巾。

總謝、又惟、四來耆宿、一會名緇、諸位禪師、獅子產狻、出無量釋迦於賢劫、雞卵生鳳、接河沙妙德於心源、不啻仰四天下獨尊、況復稱十地上大士、各各道體、起居萬福。

拈提、記得、僧問松源曰、只如大師那王於一毫端不勞彈指、成就如是淸淨寶刹、與昔賢于是同是別、師云、動容揚古路、不墮悄然機、此僧問端、掬水月在手、松源答處、弄花香滿衣、休上座亦代讚翁、聊表微去、乳峯聳碧、錦鏡流輝、

尾州青龍山瑞泉禪寺語錄

侍者　某編

山門、指云、瑞泉一滴、激揚松源、顧視左右云、駕與青龍者、來入箇門、喝一喝

據室、扣玄室中、佛魔交接、打案云、打草驚蛇、移花兼蝶。

拈衣、依俙曹溪直裰、彷彿靈山金襴、別別、搭起云、一把柳枝收不得、和風搭在玉欄干。

祝聖、大日本國尾州路丹羽縣青龍山瑞泉禪寺新住持傳法沙門宗休、謹焚寶香、端爲祝延今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、仁德回春、四三王、六五伯、喜氣消雪、右白虎、左青龍、仰彌樓山爲壽山、湛香水海作福海。

開山、拈香、攀折梅花雪一枝、住山薄福報恩來、無端穿卻崑崙鼻、四海香風從是吹。

退院、自代乃翁稱住山、三年光景鬢斑斑、一聲杜宇袈裟角、割取蓬萊左股還。

偈頌

佛涅槃　八首

鳥啼花落涅槃臺、竺土山河冷似灰、割取須彌千百億、瓣香喚醒臥如來、

西方有美背花歸、生死涅槃皆昨非、無色界中多少涙、洒爲細雨溼春衣。

是正法耶邪法耶、多羅八萬撒塵沙、番番諸佛出於世、先始梅花終楝花。

紫金光聚照河沙、不識生耶是滅耶、欲向東風問斯意、和鶯吹折一枝花。

業風吹起二千年、大地山河佛骨羶、今日一鎚鎚碎了、鳥啼花落又蒼天。

西有美人無賴査、袈裟一別隔天涯、愁腸斷盡崑崙鐵、猶是春閨夢裏花。

說玄說妙作麼生、一字全無借筆耕、此老元來太平賊、果然陷卻鐵圍城。

大小瞿曇叫度生、看來奪食又驅耕、簾前細雨濺花涙、五百由旬一化城。

佛生日　十首

他是西方一美人、銀盤浴出曉粧新、袈裟錯被毒花觸、腸斷毘藍園裡春

東海鯉魚薄伽尊、韶陽棒下雨傾盆、塵勞八萬洗何盡、滿架薔薇露一痕。

竺土山河襁褓中、不祥兒坐梵王宮、滿身泥水狗何喫、一棒還他跛脚翁。

咄哉丫角黑崑崙、坐斷華堂稱獨尊、猶結寃讎二千歲、打花風雨老雲門。

韶陽棒下不能平、藥嶠杓頭弄化生、別潑吾家蠱毒水、全身陷卻鐵圍城。
未出母胎三十棒、西天東土禍殃生、薔薇誤被微風觸、露碎水晶簾外聲。
元是如來淨法身、周行七步曳泥塵、藥山杓柄長多少、葉底殘紅雨洗春。
露柱懷胎也太奇、果然生這不祥兒、餘殃未了二千歲、洗出薔薇雨一枝。
韶老棒頭天下疼、等閑敲出紫金容、若無雪恥薔薇雨、也是闍梨飯後鐘。
西天老沙門、報冤卻以恩、獻花春在手、洒水月無痕。

佛成道　八首

昨夜面南見北辰、眼中八萬四千塵、瞿曇老也虛堂老、今古識羞無一人。
棒頭有眼火星飛、逼活瞿曇陷鐵圍、坐到驢年不成道、滿山風雨急歸來。
六年嶺北雪生涯、錯認星兒老釋迦、成道任他空劫外、工夫猶未到梅花。
還我瞿曇活眼睛、六年閒坐鈍遲生、依然未出舊窠窟、西有長庚東啓明。
苦哉天竺古先生、雪北六年功不成、錯墮無量秤子上、三千佛國一毫輕。
雪嶺聞時九鼎重、明星見後一毫輕、今朝縱是叫成道、猶有梅花老師兄。
貪看天上一枚星、錯作多羅八萬經、今日欲重宣此義、黃鶯出谷又叮嚀。
六年雪北不毛地、一卷兵書打妄談、星落營中死諸葛、臥龍奮迅活瞿曇。

智門蓮華話

透得智門公案中、荷花雨過一枝紅、大唐國裏無人會、吹起香風日本東。

蟄龍

泥蟠豈久屈二池中一、不レ待二桃花三月風一、別有二衲僧霹靂手一、拈來拄杖蘸二虛空一。

須彌枕子

山形枕子任二逍遙一、大仰當レ機推不レ搖、忽破二秋風吹レ夢破一、須彌百億小芭蕉。

仲秋頌二破沙盆話一

七花八裂太虛空、正法元來在二汝躬一、跨跳密庵舊窠窟、秋天明月一盆紅。

臨濟半夏上二黃檗山一　二首

風顛破レ夏等閑還、驀地踢二飜黃檗山一、若不三為レ他行二一棒一、尋常黑豆老癡頑。

黃檗山頭滅二正宗一、喝雷棒雨活機鋒、尋常擺レ尾搖レ頭去、濟水那邊化二大龍一。

鐵狗

銅頭鐵額黑崑崙、活二喫紫金光聚尊一、不レ入二趙州皮袋裏一、一聲吠レ月落花村。

雲門箚之一字

雲覆二千峯一天未レ晴、那僧問處大遲生、箚之一字雷霆舌、吹散檐間積雨聲。

佛法如二一隻船一

駕二起慈明一隻舟一、垂絲千尺截二凡流一、罵レ風喝レ月浪花底、不レ釣二金鱗一誓不レ休。

鷲山値レ雪　二首

店上未眠僧一枚、今朝成道六花堆、當時若是巖頭老、和二卻鷲山一踏倒來。

三八一隊野狐精、何事連聲叫老兄、箇箇看來白拈賊、鰲山成道假銀城。

靈雲見桃花

呵呵大笑豁然時、觸發春風桃一枝、打失孃生本來眼、靈雲亦唔證禪師。

鐵拄杖

一條拄杖棄虛空、鐵樹形成全絕功、若使南泉行正令、普賢妙德落花風。

須彌筆

東海涵松蘇利傾、須彌百億一毫輕、分明紙上燈王佛、跳入西來五字城。

成就四法

妙之一字佛難宣、元是非蓮非普賢、待四法成遲八刻、花開天地未分先。

大江和尚住百丈之日、有拜祖塔偈、依其韻

百丈山高向上禪、眞丹國也扶桑邊、縱然野鴨飛過去、只在大江春水前。

追悼

次不二和尚悼西源翁之韻

翁負吾耶吾負翁、猶添寃苦哭蒼穹、他家親得白雲子、天外青山有父風。

悼鄧林和尚

久響龍潭多少風、平生四海一禪翁、雷霆意氣皿盆口、吹滅紙燈霜葉紅。

悼玉衡座元

玉衡座元、吾衡梅祖翁之徒也、守大愚祖塔、而晨香夕燈無怠焉、一日觸造化兒、溘然逝矣、寔享祿四年春二月五蓂也、吁吾門不幸、莫大焉、聞訃者、靡弗嘆息、予亦作偈、以助諸徒一哀云。

璇璣北轉玉衡南、五十年前二十三、吾豈酬知無一瓣、鼻端先向晩梅參。

悼景堂和尚

大心衲子活機鋒、三尺龍泉滅正宗、□舌猶在雷聲□、雨點□□□長松。

悼天龍寺眞乘院視英座元

龍門十日折殘花、不見其人感慨加、無色界中多少涙、作西山雨洒袈裟。

悼宗順杜多

三十才名可惜哉、胸中書傳變寒灰、家山一片好風月、春在梅窓歸去來。

悼大藏西江軒雪窓首座

大藏五千文字、禪、西江一滴錯流傳、先花吾首座行脚、春雪殘吹窓半邊、

悼謙仲讓首座

空記同名南嶽碑、閻浮五十七年移、薰風不解吾徒慍、吹折炎天梅一枝、

悼宗慶庵主和瑞應和尙韻

瑞應堂上老師、追悼家兄宗慶庵主、余攀高韻助一哀。

不識家兄何日來、疎鐘落月決然離、老松閱世臥雲壑、定有裴公東指枝。

次韻悼譽禪尼

龍女寶珠認一漚、輝騰今古價何休、荷花紅碎新池雨、疑是芭蕉不耐秋、

悼某禪尼

返魂一炷鐵崑崙、欲報元來不是恩、大義渡頭千古恨、落花流水遶江村、

悼天慶祐公禪尼

卒賦一偈、寄玉何藏主、悼天慶祐公禪尼、以償不赴朞年齋筵之罪云。

去年今日別風光、斷盡梅花鐵作腸、小玉聲中人不見、枕屛殘夢覺猶香、

次韻悼先天居士

橘家跨竈又跳樓、昨日慈恩今作讎、劍樹刀山芭蕉雨、不風流處也風流。

悼㆓光翁亘公大禪定門㆒　細川六郎殿

遠者吞㆑聲近者悲、回㆑頭冬日影西移、牡丹一閏春如㆑夢、王老庭前召㆑陸時。

次㆑韻悼㆓德勝居士㆒

八十年非今日知、虛空消殞轉㆑身時、欲㆑藏㆓無去無來處㆒、叫㆑月梅花孤雁枝。

悼㆓宗鼎・宗斑二禪門㆒

龍吟㆓金鼎㆒虎藏㆑山、脫㆓卻凡鱗㆒露㆓一斑㆒、父子不傳眞消息、依然花帶舊紅顏。

天澤和尚十三回忌

恭以、吾大法兄、前住龍峯天澤大和尚、大梅梅子、而龍雲鼻祖也、外示㆓朴直㆒、內懷㆓溫雅㆒、癯然不㆑勝㆑衣、頗有㆓古衲子之風㆒焉、潛行密用、誰窺㆓其彷彿㆒、熱喝痛棒、誰觸㆓其機鋒㆒、可㆑謂百世臨濟也、愚昔志㆓于遊方㆒、發㆓一步㆒之初、扣㆓老兄於妙法精舍㆒、三到九登、喫㆓霜辛㆒殆數歲也、夙緣所㆑感、恩讎難㆑酬矣、老兄一日受㆓師命㆒、而遂董㆓瑞泉之法席㆒、緇素歡呼、遐邇欣伏、祖道光輝莫㆑盛㆑焉、瘴雨之攸㆑濡、蠻煙之所㆑染、俄爾微恙、溘然戢㆑化矣、一門不幸可㆑惜哉、其徒瘞㆓履乎尾之犬山㆒、圖㆓像乎攝之龍雲㆒、爾來烏積兎久、僂㆑指今茲永五戊辰、孟春二十有五蓂者、乃十三白辰也、其高弟妙法和尚、設㆓齋筵於先廬㆒、齊供㆓龍象之衆㆒、至矣、愚亦不㆑獲㆓默止㆒、叨唱㆓村偈㆒以共㆓厥丹悃㆒、蓋將㆓深心奉㆓塵剎㆒而已、伏乞昭亮。

元是吾家老大龜、嗣㆓先師㆒不㆑肎㆓先師㆒、金襴傳外無㆓人會㆒、開卻春風花一枝。

景川和尚三十三回忌依㆓松岳和尚香語韻㆒

塔號大龜多少年、雷遷電繞斗牛躔、胸中五逆藏不得、熱鐵花開阿鼻煙。

景堂和尚七回忌依韻

德爵齒尊蔑以加、吾禪鷃鵡叫搴茶、岐山雪白象王袴、銀色普賢來獻花。

普門寺某三回忌香語

再現普門南海涯、栴檀沈水佛陀耶、拈來物物非他物、小鐵圍山太白華。

普門寺明巖座元三十三回忌

普門示現老師翁、曆數卅三在汝躬、不待春王正月朔、一爐沈水木犀風。

寶泰寺大器座元七年忌

吾首座曾行脚來、爐香未冷七年移、崑崙鼻孔無功德、聽取炎天梅蘂詩。

不孤軒德首座十三年忌

百億須彌小博山、八萬閻浮一沈水、十有三年德不孤、菊餘秋香梅吐蘂。

以心傳公小祥忌

大永六年季春十有一日、迺以心傳公小祥忌辰也、聊唱伽陀一篇、以充非薄之奠。

記得去年今日事、鳥啼花落一回新、當陽拈作小香瓣、喚醒春閨夢裡人。

大玄宗濟上座三七日忌　勢州人

臨濟三關打破了、吹毛磨盡急提撕、滿林霜隕秋光冷、一曲伊州殘月西。

汝雲妙慶大姉五七忌

梅湖藏主、爲祖妣汝雲妙慶大姉五七忌、預設齋、手謄寫六喩經、唱貫華一章、以酬撫育之厚恩、愚也聊攀其韻。

生死海中無一漚、涅槃岸畔絕同流、半籬殘菊眞沈水、信手拈來專爲秋。

　鷹淵了正源信士卒哭忌

丹州人事、一色幕下忠臣、遠山氏淵了正源公、丁今茲永正丁卯夏五下八之日、輕命重義、陣前戰死矣、所謂重賞之下必有勇夫者乎、蓋忠臣出乎孝門者也、傍觀難忍、況復父母兄弟之情乎哉、遂作野偈一章、以當百日之奠云。

都盧大地法身香、薰徹心源透十方、一色明邊君自看、秋天依舊遠山長。

　遠山氏某七年忌

七年一枕黑甜餘、慕父風兮讀父書、烏鉢遠山無限好、先廬脩竹影蕭疎。

　月溪常圓三十三年忌

刹那三十有三秋、劍樹刀山解脫樓、不信回光返照看、一天明月入江流。

　聖泉居士三十三回忌

透霄漢也徹黃泉、這箇一香三十年、不掃自家門外雪、只看春在早梅邊。

　先考十七年忌

酬佛恩耶報父恩、露之一字老雲門、劈開十七年前面、屋後青山笑不言。

　柴屋居士十七年忌

先入東關爲看山、主人去十七年間、松門柴屋依然在、只恨聽名不對顏。

某三十三回忌

武閣曾從失此郎、幾乎三十有三霜、無端拈出酬恩去、秋後滿山楓葉香。

先妣三十三年忌

眞箇娘生舊面皮、元來子母不相知、一恩三十三年後、雪重梅花臘月枝。

宗歡宗喜父子五七日忌

君臣父子整三綱、殞命戰場忠孝彰、劍樹刀山百雜碎、當陽拈作本來香。

宗室禪門十七年忌

熱喝嗔拳五逆兒、掀飜阿鼻火坑來、報恩是也酬讎是、吹雪炎天梅一枝。

古月妙圓禪定尼七周忌

一千佛母老摩耶、百萬人師老釋迦、今日酬恩消底物、臘天風雪七梅花。

華屋宗榮百年忌

曾從華屋落泉臺、荏苒光陰一百回、我有江南寶薰在、秋風吹入月中梅。

爲駿陽僧薦其慈母追室妙淸禪定尼

報恩一瓣鵓鴣斑、深似海深高似山、山是士峯天下白、相逢不識對慈顏。

旭芳宗泉禪定門三十三回忌

蝸牛角上一英雄、留取功名麟閣中、碧眼黃頭休說夢、天堂地獄大槐宮。

玉叟玄繼居士一周忌

忠臣元出孝門中、近代麒麟第一功、五月牡丹花若夢、午簾雨過起微風。

宗琳居士七年忌

今日相逢一笑新、分明記得七年春、簷頭滴滴薔薇雨、洗出阿爺淨法身。

春陽宗照信女十三回忌

春陽秋露十三回、杜宇聲中喚不來、別有聖胎長養處、一枝結子綠苔梅。

瑞雲開基玉峯大師十三年忌

秋風葉落十三年、老淚濕衣何夙緣、劈破崑崙作香片、瑞雲吹起玉峰前。

明叟宗鑑禪定門七周忌

天文八祀八月二十九日、乃明叟宗鑑禪定門七周忌之辰也、孝子預於仲春二十九蓂、供佛齋僧之次、命蕊蒭衆頓寫一乘妙典、仍倩小比丘宗休手、焚這松子膜以酬罔極之恩云、其偈曰。

這香佛祖不傳傳、秘在懷中已七年、今日看來松子膜、銜開碧落徹黃泉。

春溪智雲大姉七周忌

今茲文丑孟春二十六蓂、廼宜春軒主翁之萱堂、春溪智雲大姉七回忌也、休也七年之前、夜雨燒香、七年之後、春風燒香、蓋夙緣所感耶、作偈以助孝子之一哀。

七年春夢老婆婆、爲勸一杯紅杏霞、誰也前身戒和尚、香煙散作百東坡。

詩

大雲山龍安寺歲旦　四首

龍安龍寶一龍孫、當處豁開甘露門、不レ借二春風多少力一、大雲吹起盡乾坤。(擧二龍寶國師上堂一。)
大雲山裏孟春寒、敢不レ受二諸方熱瞞一、臘雪吹添新白髮、逢レ花猶作二舊時看一。
佛法年頭無卻有、祖師鼻孔舊耶新、乾元一氣從レ䰟始、花亦黃金臺上春。
大王萬福春來也、花滿扶桑六十州、若問二眉毛長幾尺一、報言西嶺雪千秋。

次二德林和尙歲旦韻一

新年舊歲事如何、昨日今朝也任他、翁德輝レ春吾鬢雪、菱花半掩獨高歌。

歲旦

年年何用問二新舊一、佛法南方絕二古今一、屋後梅花無盡藏、門前柳色萬黃金。

尾州青龍山瑞泉寺歲旦　二首

托出青龍頷下珠、春光爛熳接二天衢一、滿堂花醉三千指、佛法新年一點無。
鴻鈞一氣轉二天關一、楊柳舒レ眉花解レ顏、萬古瑞泉流不レ盡、七珍八寶湧如レ山。

河州東吳庵歲旦　三首

新年佛法有耶無、拄杖慇懃來問レ吾、解レ纜春風舟一隻、載二千秋雪一到二東吳一。

新年拄杖舊同參、今日相逢無俗談、建法幢兮立宗旨、一莖春草活伽藍。
斡回地軸轉天輪、造化功成一氣新、侍者報言花萬福、太平春屬太平人。

　和儒士某少年試毫

結髮從師伊洛涯、縹囊緗帙色交加、天工欲試春風手、先開六經三史花。

　和童子試毫韻　五首

硯池波暖浴梅辰、月是毛錐字字新、無復長繩繫烏日、讀書終日惜餘春。
梅花標格雪精神、一歲新時詩亦新、持贈渠儂寸陰璧、從今可惜少年春。
春風呼筆賀新正、竹報平安花太平、誰把蒙求中一句、教雛鶯得學詩聲。
廿四番風從此吹、鯉庭桃李競開時、小童若是鄒人子、學禮如何不學詩。
內苑花開胡蝶風、新詩入穠墨痕濃、讀書莫道來年在、春再不回顏不紅。

　和希周髫年試毫

仁氣一陶花木濃、春城無處不恩風、奇才何事朱崖外、合在玉堂雲霧中。

　題高野山

高野山高絕點塵、松杉夾路古碑泯、花熏雲霧煙霞底、自是龍華三會春。

　題藤代

山水尤奇天下多、花香月影看如何、瀟湘八景又添二、吹上沙和歌浦波。

　題鴉山

北苑風煙君可須、吳僧煮茗說鴉山、鴉山雖好誰商略、待我前丁後蔡問。

題富士山

何年鼇背負山來、百億須彌絕點埃、四十由旬士峯雪、眼高看不到天台。

依人題士峯韻

坡仙聞昔到斯間、獨愛全身雲水閒、白盡乾坤士峯雪、眼高宋地似無山。

松風石

出盡扶餘萬里程、松陰六月以風鳴、老來無力推殘暑、嗽石枕流聽此聲。

繼鹿尾見花　尾州

移鹿野春斯地看、千年象敎一枝殘、幽人指點花耶雪、片片和風上玉欄。

茅野看花

雲擁山櫻千萬里、多年天外望金峯、出花還又入花去、春夜朦朧古寺鐘。

贈小僧

古寺歸來閒記曾、十年前事谷成陵、山禽不語無人問、一榻秋風白髮僧。

寄播陽太守赤松兵部大夫

風流太守久聞名、水遠山長情更情、拍手呵呵相見了、老僧門外送松聲。

次韻洞下僧

不遠鯨波萬里長、袈裟角裹草鞋香、青鷹入室果何徵、記否浮山殘夢牀。

次韻寄夢庵老人

湘山如黛洞庭鬟、月色朦朧雨氣濡、中有畫師難寫處、詩僧閒倚石屏孤。

宗藝喝食落髮　丹州人、俗姓井上

丹山產此鳳凰兒、六藝文章好羽儀、井上碧梧風不動、栖巢高聳萬年枝。

讀歐陽修秋聲賦　二首

醉翁亭畔響颼飀、聲在西南定可秋、今夜暗中摸索識、梧桐一葉亦曹劉。

聲在西南迷醉翁、暗知秋意屬梧桐、宋家四百年天下、吹醒山川黃落風。

題盆石　京南宗珠請

奇石持來天與翁、九華何必在壺中、青螺如涌平沙上、無復江山出日東。

和某來韻

月話秋兮花話春、問天何幸伴吟身、詩歌自有風流種、白髮三千雪滿巾。

和松岳和尚茶話韻

欲原潙嶠夢、侍者點茶來、茶罷夢醒後、鐘聲被月催。

松岳和尚茶話詩云、茶兼禪味可、能避俗塵來、且欲停車話、楓林暮色催。

送策彥西堂赴大明國

此老禪機截衆流、南遊何日大刀頭、海門風定鯨波穩、一葉舟中四百州。

送策彥西堂再赴大明

千里鶯啼遠送人、白頭何日又逢春、歸舟早載西湖月、呈我梅花面目眞。

餞仁澤老禪歸岐陽

詩家第一碧瞳胡、歸去黃花有若無、九月岐陽定微雪、關山梅樹醬盧都。

餞津首座歸東關

榔標擔來士峯雪、袈裟帶去御園花、寃家何事添寃苦、杜宇一聲天一涯。

送希庵老禪赴越

誤作杜鵑君莫聞、淵明去後晉無文、先花歸雁知何事、飛入越山深處雲。

送梅江藏主歸關西

欲話山雲海月情、春風奉使出京城、君聽三疊陽關曲、鶯向花邊不惜聲。

送三省先生

卜匪龜兮筮匪蓍、斯心四聖未曾知、機前劃破與君看、六月梅花太極枝。

送明山藏主東歸

再會無期奈老顏、東遊萬里白河關、殘紅新綠滿山雨、杜宇等閒呼得還。

送晢上人歸肥陽古寺

渠儂何事憶高城、話盡三年海月情、西出陽關能記取、落花啼送杜鵑聲。

餞天得首座歸岐陽

海東得得來和尙、傳祖師心宗大興、萬里鄉關猶未忘、逐雲飛去老烏藤。

送僧歸九州

甘棠茇舍慕先宗、秋入客衣歸意濃、再會無期吾老矣、海西月落五更鐘。

送功岳座元歸駿陽

松連三保挂衣藤、天女獻花龍點燈、來亦無心歸亦好、孤雲倦鳥一閑僧。

重陽前日送十洲歸鄉

茅鞋椶笠草袈裟、曉出長安殘月家、可怪斯行先節去、淵明終不負黃花。

送眞安藏主歸藝陽

誤認他鄉作故鄉、巾瓶相侍五年强、拂衣好去家山路、秋海棠西欲夕陽。

送宗擴藏局歸舊梓省母

那處春山不故鄉、孃生面目露堂堂、歸來呈示老僧看、秋在信州紅海棠。

楓林殘照　遊高雄山賦　二首

楓橋何事等閒過、山到晚秋勝槩多、欲把一塵回落日、烏藤亦是魯陽戈。

秋在花耶春在楓、夕陽斜挂滿林紅、紅園綠擁寒山路、吟入牧之詩句中。

侍杜鵑

彷彿去年聽杜鵑、暮雲深擁蜀山邊、一聲定可曉天雨、窓掩長松獨不眠。

藤繞庵

卜地江南南更南、藤蘿深處鬢毿毿、垂花挂蔓三千尺、縛住春風作一庵。

待花

最怪東君馬不前、爲詩誰著祖生鞭、三千一念待花意、白髮閑僧倚柱眠。

葉底殘紅

細雨浥香新綠深、過牆黃蝶繞枝尋、滿城春色永嘉末、一片殘紅正始音。

春池梅影

池亭只爲愛橫斜、會自難波移此花、道者家風若相似、晴瀾吹月上袈裟。

蟄鶯

嫩鶯蟄戶未曾開、幽谷寒深似待雷、溫願若通氷雪底、春風先起臥龍梅。

五月菊

在夏黃花勝在秋、山房五月小包秋、一枝臥雨羲皇上、不待元嘉以後秋。

秋後觀山

斜風黃落雨斑斑、一鳥不啼秋後閒、司馬灰寒數峯色、元嘉時節獨觀山。

紅雨

朝埋遊履跡凝雪、暮洒疎簾影訝花、可是巫山神女夢、爲紅爲雨到君家。

涼螢度竹　三首

秦皇竹帛積成堆、螢火煙消冷似灰、小碧窓前無月夜、乘涼空照寂寥來。

腐草化螢涼意微、雨時添影月時希、分光不照書窓夜、脩竹叢西緩緩飛。

新竹綠濃花不如、微涼吹暑入郊墟、夜來螢亦般人鑑、莫照昔時非聖書。

寒雁

旅雁聲寒蘆葦涯、江風徹曉不堪吹、霜辛雪苦翅翎短、歸意待花花較遲。

竹窓聽雪

喚醒十年塵夢迷、半窓雪竹響高低、斯聲不到畫堂上、何事荊公獨噬臍。

松寺聽鵑　三首

耶溪古寺月斜明、留箇長松杜宇鳴、何事問君歸意切、一聲卻彷彿千聲。

耶溪新綠勝花不、日暮杜鵑啼出幽、雲隔東關未歸客、松聲雖好卻添愁。

箇長松樹換新銘、無復詩人著意聽、啼落若耶溪上月、從今挂榜杜鵑亭。

寒雲欲雪

凍雲欲雪擁層巒、半捲疎簾倚玉欄、不向陽臺爲暮雨、梅花被底夢應寒。

東川無杜鵑

南人雪與北人梅、此地如尋杜宇來、未免疑團無亦好、旅窓殘雨客腸摧。

水邊梅花

梅在江南野水涯、驚人春色兩三枝、橫斜影落黃昏後、添月鷗邊也一奇。

寺近聞鐘

般般疎鐘聞不迷、海山近接古招提、春來更有出花色、一朵紅雲斜日西。

中華書言日本凝露臺戯題

日出處東移漢家、瑤臺凝露洛陽涯、合蘇四海蒼生渴、養得芙蓉八月花。

旅宿曉　題咏

異郷爲客別先生、月落江村欲五更、白集歸舟士峯雪、袈裟不裹杜鵑聲。

花錦　和歌之題

剪取遊絲百尺長、春風織出錦衣裳、花前莫怪無家客、欲帶一枝還故郷。

花前見月　和歌之題

清水巖前愛白櫻、有花有月二難幷、玆遊奇絕慰衰老、鬪色爭光不夜城。

梅關　和歌之題

鎖斷東風不漏香、春遊佳客惱詩腸、鷄聲啼破函關月、誰識花中有孟嘗。

扇面八景　二首各四景

雁落平沙月上時、洞庭七十二峯奇、湘南湘北雨耶雪、水遠山長歸去來。　落雁・秋月・夜雨・暮雪。

帆腹含風歸艇輕、市人爭利不爭名、半江日落漁村外、寺隔數峯鐘一聲。　歸帆・晴嵐・夕照・晩鐘。

題山水圖　二首

人倚柴門期月不、斜陽欲落釣魚舟、西湖十景瀟湘八、紅樹蘆花一色秋、

青箬綠簑張志和、斜風細雨十年過、山中雖好可無月、莫較江湖詩景多。

題竹間兩雀圖

竹間兩雀呂耶劉、爲借商山羽翄不、四海英雄鴻鵠志、大謀豈在稻粱秋。

扇面圖　三首

先天有物謂之梅、憑仗畫師資始開、橋上杜鵑枝上雀、一編心易百花魁。

花到趙昌雖逼眞、華光墨亦不精神、珍禽枝上向吾語、今古知梅只一人。

海外遠移安石榴、開花結實夏還秋、辛酸甘苦備嘗得、眼在神農一舌頭。

題墨芙蓉

芙蓉寂寞水之濱、淡掃蛾眉冷太眞、在地連枝總虛語、秋風紅脆馬嵬塵。

題東坡畫竹

一竿也足此風枝、翠袖佳人瀟洒姿、坡老胸中三斗墨、作湘江雨不禁吹。

題畫梅

顏色馨香誰寫眞、世無相馬九方甄、詩僧若問花來處、太極光陰不記春。

雞冠花圖

頭帶絳羅頭戴冠、木雞鬪倚玉欄干、花中縱有孟嘗客、透白雲關千古難。

海棠雙禽圖

鬪妍唐室幾千紅、寵在海棠春睡中、李杜相雙如二鳥、爲君翄弊落花風。

黄蓮青雀圖

漢苑春風王母遲、卻疑青雀偶歸來、蟠桃未實三千歲、暫倚黃花借一枝。

扇面　不畫

好箇畫師到此休、不塗紅粉自風流、分明紙上西來意、雪裏芭蕉笑點頭。

圓滿本光國師見桃錄卷之一　終

圓滿本光國師見桃錄卷之二

遠孫比丘衆等重編

像　賛

出山釋迦像賛　二首

西竺老沙門、報寃卻以恩、獻花春在手、洒水月無痕。

香南雪北、失卻路頭、相隨來也、箇老比丘。

文殊賛

把獅子窟、作活伽藍、問多少衆、前三後三。

達磨賛

流蓬直指、落葉單傳、大唐國裏、將謂無禪、徒費柴米、面壁九年、咦、吾祖來也、月在青天。

問訊梅耶又杏耶、九年面壁是拈華、一時趕出合行棒、魏主梁王非作家。

兀坐九年春、拈華聞達磨、昔日對梁王、驀面何不唾。

六宗叫受降、蹈倒葛藤椿、到處無人肎、空過龍慶江、足跨三國、眼貫五天、東走西走、衣破履穿。

面壁九年、墮圈繢裏、若道會禪、西天萬里。

同　半身

眼看東震、意在西乾、失卻了也、鼻孔半邊。

百丈贊

將謂奇特、坐大雄峯、小叢林漢、匡徒立衆。

臨濟贊

勢似沛公先入關、吹毛盡斬老癡頑、莫言佛法無多子、黃檗山頭喫棒還。

四睡贊

四睡一覺、人虎已分、無底籃兒、盛峨嵋雪、焦尾苕帚、掃五臺雲、豐干饒舌、非我同群、咦、寥寥大地知音少、唯有松風不耐聞。

布袋贊

二童笑裏似藏春、梅里分身總未眞、向布袋頭空打失、長汀風月自家珍。

神農贊

救民醫國世難逢、著鹿皮衣顯聖容、大地都盧禪本草、舌頭具眼只神農。

鍾馗贊

終南進士、闕北忠臣、雖不攀桂、可以薦蘋、三尺寶劍、四海風塵、輔李唐主、爲楊太眞、驅逐癘鬼、折伏邪神、于今于古、護法護人、移花衆蝶、誰家不春。

贊福祿壽　雪舟圖

曾降塵土、南極老人、向北斗裏、藏長法身、福海無底、壽山嶙峋、眉毛生也、珍重萬春。　德雲比丘大休叟。

靈照女

不塗紅粉面如花、有漏笊籬無賴査、龐老賺過兒女子、止啼黃葉滿貧家。

贊白居易

江南在野梅、空劫以前開、不擺卽心雪、自然春到來。

北野天神　二首

萬里飄然成逐臣、比來天地一詩人、三千風月不吟盡、松老梅飛北野春。　駿州長谷川越前守藤原輝貞請。

寬延聖代降菅原、現宰官身一普門、吟取三千好風月、梅花枝上定乾坤。

渡唐天神像　八首

詩語通禪歌感神、冠巾和尚假耶眞、梅香直透龍淵室、花向扶桑漏泄春。

北野君元北闕臣、徑雲深處現全身、三千風月一衣鉢、分付梅花總不眞。

棄擲寬延王佐才、鯨波萬里不舟來、徑山文武大爐鞴、煉得身形早到梅。

徑雲吼破一聲雷、禪熟來耶詩熟來、北野春寒舊廬雪、終身合作臥龍梅。

龍淵窟裏得龍鱗、北野君家別置春、萬古乾坤開闢後、梅花世界一詩人。

扣龍淵室叫東來、吹起爐中文武灰、攀折徑山三月桂、拈成北野一枝梅。
青衫白髮老袈裟、非夢眞參見作家、攀折徑山三月桂、等閑拈作小梅花。
四萬三千首錦囊、徑雲敲月一禪牀、是非合付梅花夢、惹得虛名滿大唐。

贊今宮大明神

扶桑六十六州中、神德昭昭仰此宮、護法護入威猛力、滿山松竹亦仁風。

鄧林法兄像賛

南浦末派、西源的傳、叢規井井、瓜瓞綿綿、店上阻雪則與吾有素、簾前賜紫則對御談玄、兎角跳起日月、龜毛呑卻坤乾、住新寶林、只欠虛堂八十、掌老黃檗、不屑臨濟百千、誰知正法眼藏、滅向這瞎驢邊、滅不滅、再把鸞膠續斷絃。

寶林諸徒、繪鄧林翁遺像、就予需賛、事非可拒、聊贊野語、充寶林常住供養。　大永三年林鐘吉辰、劣弟宗休燒香拜贊。

三綱見禪師壽像　洞家僧

大陽皮履裹袈裟、再使巽苗抽毒牙、寶鏡臺前本來面、依俙相似趙昌花。

前住光通仙裔鶴禪師肖像

眼中丁謂、紙上張公、毒氣未除、師蜀川烏頭子、文字不立、祖熊峰絳衣翁、鳴板敲牀、輝光法道、拈鎚豎拂、振起宗風、奪蘊老全機、則古帆挂後、黃河向北、劃犧皇艮卦、則雜華賁始、紅日昇東、咄、要看眞面目麼、猶有梅花路未通。

竹溪篤長老、圖先師像、就予需贊、信口亂道。　天文龍集癸卯林鐘日。

前住普門泰雲安禪師像贊

斯老慈顏醉似霞、蘭溪剩馥茁其芽、無端入得三摩地、宴坐春風小白花。　天文癸卯秋八月、靈雲庵衲宗休贊。

密傳座元贊

他是有鄰貽厥、自稱玉峯密傳、坐斷曲彔木上、問甲子答米年、記靈蹤盤龍窟、滅正宗瞎驢邊、眞箇滅耶不滅、夕陽長在我西。

小師等繪持德密傳繼禪師之壽像、以需贊信口亂道云。

前住長法春谷杲公藏主寫照贊

天源分流、太虛接響、洋嶼禪如蚌蛤、異代同名、虎丘機似菸菟、大藏在掌、萬嶽千峯、折拄杖頭十洲三島、曲彔木上佛法不會、嶺南盧能、徒拾墮樵、俗氣未除、巖中幼輿、空留遺像、咦、歲暮天寒、松柏綠長。　大永元年臘月日。

攝州西江開基雪窓最公首座像贊

龍護寶所、激揚大藏波瀾、狐首古丘、分張少林皮髓、彷彿三皇不同、依俙半月相似、首座行道也威音劫、初首座說法也率陀宮裏、英氣凜凜如生、玉音琅琅在耳、寶積之松作何色、不奪境不奪人、雪窓之蘭抽其芽、有是父有是子、眇視雙徑雲、吸盡西江水、還會麼、這箇犛、咄、衆角雖多、一麟足矣。

西江開基雪窓最公首座、有二神足、曰怡溪、曰温叔、命工繪師之像、寄予以需贊。 大永甲申臘月吉辰。

季友契公首座壽像

鐘谷遺響、百里震驚、龍津龍子、頭角崢嶸、五逆兒孫、電卷雷走、一喝賓主、雲起風生、咦、黑漫漫地、慧日永明。

大藏中興開基、華屋宗榮首座大師像贊

大藏金翅、直取獰龍、搏九萬里風、則接禪源派、動三千刹海、則探洋嶼宗、不費脚力、坐通玄峯、淨躶躶赤條條、寸絲不挂、脫尼總持皮肉、明皎皎白的的、一法所印、躡大愛道遺蹤、鐵壁通線路、須彌跳鍼鋒、要看眞相麽、花影月重重。

聖壽開基天慶祐大師壽像贊

混沌畫眉、春山青兮春水綠、燈籠合掌、江月照兮松風吹、相逢不識、借問是誰、取人頭取人腰、子湖之犬、喉劉鐵磨、得吾皮得吾肉、少林之狐、誑尼總持、生涯只有三事衲、聖壽以固萬年基、收。

天慶大師、頃命工繪壽像、需贊語於老拙、拙辭曰、汝德大而吾才短矣、何不投江湖名宿衒其名、遺其德乎哉、尼曰、不無大手筆、蓋直指之才、單傳之器、難哉、請叙一二以垂無窮足矣、一言銘肝、不及再辭、執觚贅其上云。 永正十四仲春上澣日。

明窓宗珠庵主像

四海九州唯一翁、傳茶經外得新功、前丁後蔡春宵夢、吹醒桃花扇底風。

前左金吾額田耕雲笑夫居士像贊

紙上張公子、袖中邵堯夫、輔弼于漢室、優游于洛都、蚤侍右京兆、晩除左金吾、衰衰源流、恭惟同出自草草居士、更有赤髯胡、握住林際之寶劍、劈破天澤之衣盂、笑雜道者、罵贋浮屠、綠蕪霜寒、或時獵兎、臂一棚鶻、烏帽塵暗、或時追犬、鞭十影駒、送夕陽迎素月、開瓊筵坐花衢、次孟津而密謀、八百人不期會、臨淀河而戰死、三千卒爲前驅、惜哉名父子、遺恨失呑呉、顏色猶依舊、莫作墨梅圖。　永正十三霜季秋上澣日。

前賀州太守仁翁舜法禪定門畫像贊

繪月者不繪光、精神可掬、種樹者如種德、靈壽深根、卜菟裘於江左、賞牡丹於洛園、喜讀兵書諳龍韜虎略術、勤知王庫、禦狗偸鼠竊寇、文武道未墜、典刑今尚存、竹椅蒲團坐禪、會師燦可之迹、蓮漏香火念佛、晩候遠持之門、積善家餘慶在、有厥子有厥孫。

右亡人氏前賀州太守仁翁舜法禪定門之肖像、孝子就老拙求贊、不及拒辭、信口亂道。

永正庚辰小春日。

德雲院前刑部通叟宗普大居士肖像贊

一王一姓、六十六州、高躡矢田前蹤、新賜劍履、故稱義家後裔、丕纘箕裘、誠哉千兵易得、眷夫一人拔尤、桃李園中宴群臣、而醉月、梧桐名上處刑官、以司秋、退靈鷲席、罵釋、登呼鷹臺、依劉、玉笛江樓、如今枕上無閒夢、錦繡閭里、少日才華接貴遊、其和也靄靄然如春之行大地、其量

也、浩浩乎似海之納細流、活處投機、將謂、丹霞居士別戶相見、元來德雲比丘、還參得麼、收。

右德雲院殿前刑部通叟宗普大居士者、乃遠州太守勝益第三骨、而叔父一雲叟之猶子也、壯歲遊藝、據仁、可謂亂代英雄也、春秋三十八上、不幸而逝矣、不克無山崩梁壞之歎、仍孝子國慶、命工圖像需贊、贊以祝遠大云。　大永第四三月二十有六日　前正法山大休叟書于龍安室。

牡丹花夢庵居士像

洛社耆英、恭惟本姓出久我也、天曆貴種、列亦中院爲先君乎、五濁現烏曇鉢、三昧笑浮圖、或時採藥草窺仙窟、或時拜芝詔朝帝都、諷古今一千首、而擬周詩、律合雅頌、講源氏六十卷、而配台教、味同醍醐、託餘情於花鳥、催歸興於蓴鱸、和歌連歌、感神感鬼、內典外典、學佛學儒、手裏團扇、千億放翁、飄飄風襟月臆、頭上長帽七世坡老、蕭蕭雪鬢霜鬚、行李不俗、隱梧忘吾、偉哉、如香孩兒屬豬、出其群、效其萃、栩然似漆園叟化蝶、在則人亡則書、淸也淸也、還要看眞形模麼、夢非庵、庵非夢、牡丹花春一株、咄。

花園主大休叟燒香贊、以梗等淸禪者之需。　大永龍集戊子孟夏四蓂。

一元院殿先天宗普居士像贊

溫公宋地之大醫王、仁德育民治國、眞卿唐朝之一元老、才名輝古騰今、將謂、麤桃俗李、由來甘草八參、父子與家、領攝刺史、旣逮累代、君臣重義、奉源京兆、屢惜寸陰、衆星韓斗、久旱傅霖、繼薛嵩業、而擅蹴鞠場、半梅半泥半雪、學雅經流、而達和歌道、一觴一咏一吟、雖華其詞語、不

芥于胸襟、平蕪霜寒、呼鷹登臺、雁影陣陣、長楸日落、追犬鳴鏑、馬跡駸駸、考政於禹謨舜典、試武於齊鍔周鐔、傳黃石一卷書、以冠苴履、參碧巖百則話、點鐵成金、活喫瞿曇、如鱸鱠炙、生吞彌勒、似鵝湯𤏲、言言也褒也貶、著著有縱有擒、當機倒毘耶居士之牀、默處雷走、信手拈鹽官國師之扇、意氣風凛、乾坤內稱獨步、宇宙間絕知音、堪笑化鵬蒙莊、扶搖萬里折垂天翼、合成臥龍諸葛、遺恨千載失吞吳心、流水東去、殘月西沈、咦。　將相王侯豈無種、枝枝葉葉皆檀林。

藥師寺國長公、畫先考一元院殿先天宗普居士之像、需贊、信筆記厥大略云。　享祿初元戊子菊月日、正法山主大休叟。

越州太守藤原朝臣松井雲江守慶居士壽像贊　此像贊、在丹波州桑田郡金剛山龍潭寺。

木公榮冬、斯郎能持晚節、藤氏譽日、其祖曾執朝權、名喧四海、德溢八埏、奉右典廐源家、則指麾幕下諸將、任前太守越國、則旁求野外遺賢、進退以禮、忠孝兼全、罹世之騷亂、而蹤迷淡路、遇時之嘉運、而生還太田、錦繡照閭里、旌旗領山川、加之、慕洋嶼風、衣盂三拜、入龍潭室、紙燈再然、百八摩尼、轉回佛祖、一條白棒、打定坤乾、杜遲飄然孤僧、早謝塵事、李源元來信士、未盡俗緣、葛洪井畔秋老、丹陽廓裏雲連、咦、續箕裘業、子孫萬年。　旹享祿三祀龍集庚寅夏五吉辰。　前妙心現居龍潭大休叟贊。

平氏松田古巖宗松居士像贊

葛原之王子王孫、引枝牽蔓、松田之難兄難弟、竝蒂同根、傳文武道、出忠孝門、裹五員於鴟皮、

浙潮八月發怒、投靈均於魚腹、湘水五日招魂、腰間劍照霜雪、手裏扇握乾坤、噫。　享祿辛卯臘月日。

雲岫昌慶禪定門肖像贊

前河州太守庄所重信公平氏、芥河之華族、累代之武閥也、去歳辛卯五月二十一日、觸造化小兒而逝矣、春秋四十七、齡未及知命、烏虖可惜哉、公存日、洞家僧諱之曰昌慶、沒後余字之曰雲岫焉、今玆也家嗣繪厥像、需贊辭於圖上、不克峻拒、卒賦村偈一章、以塞其請、寔享祿五祀壬辰夏五初吉也。

葛原奕葉正盛孫、曾出玉門列武門、積善餘慶猶不盡、一張弓挂搏桑暾。

石雲庵主太玄宗白居士壽像贊

後生有揚子雲、嘲玄尙白、本姓爲藤原氏、惡紫奪朱、烹雪敲冰、茶煙半榻、酌花醉月、松醪一壺、追慕蓮社十八賢、大念佛小念佛、坐破蒲團六七箇、死工夫活工夫、其右也拈日本扇、其左也轉水晶珠、俗而無髮、僧而有鬚、非僧非俗、是甚形模、吾道一以貫之、參乎參乎。

嗣子石黑詮尙、繪老父壽像、需贊、感厥孝志、不克拒、書以爲行實。

越州太守源朝臣額田西河宗昭居士像贊

額田某圖其父宗昭壽像、需贊詞于予、曰、某之祖父世家越之中、暨國之騷屑入洛、無幾僦屋鳩嶺之麓、而居有年矣、罹丙丁之災、家譜燒失矣、再入洛待右京兆勝元公、及公命藥師寺元長、領攝州刺史、令父宗昭輔佐之、自爾以來、被堅執銳、百戰百勝、其功亦大焉、

予亦與宗昭有方外交、聊摛小偈、塞其請云。

合在麒麟殿閣中、佐賢太守立忠功、化身千百億春色、何事梅花畫放翁。

土岐樽月道珊居士壽像贊

文王是仁義釋迦、岐下栖鳳、儒童彼菩薩孔子、周末獲麟、將謂第一聖諦、直得百億化身、竪洞山五位旗、則氣劘魔壘、拋般陀八正彗、則胸掃俗塵、藝兼文武、道合君臣、繡戶映花、或時講魯論、名光鄉黨、珠簾捲雪、或時詠和歌、德感鬼神、唐書載東夷之國、建茶試北焙之春、被夷吾於方袍、將錯就錯、畫放翁團扇、逼眞不眞、水尾濫觴、源流袞袞無竭、杞上進履、家聲日日維新、譬之留侯菊、祝以蒙莊椿、咦、補袞調羹手、撥轉正法輪。

右常陽信太莊江戶崎城主、姓源、世稱土岐治頼、字樽月、諱道珊庵主、自繪壽像、遠寄需贊於予、予耄矣、固辭不允、仍摛俚語、以爲公之實錄。

三友院殿前右京兆松岳桓公大居士贊

川黨領袖、源家棟梁、具文武才、藍冰于多田滿仲、傳騎射妙、權輿于八幡太郎、東西馳馬鳴鏑、左右追犬逼墻、宰相古得再溫公、雲山改觀、京兆今合十韓愈、星斗增光、或時會耆英於洛社、或時起義兵於晉陽、移本朝風、則詠歌學難波之什、餘上巳景、則賦詩飛曲水之觴、名喧四海、威振十方、照窻螢囊、研精覃思、窺藝術圃、翔空鳧舄、蹴鞠練腿、擅遊戲場、以松以竹以梅、牓之三友院、有蘭有蓮有菊、擬之四愛堂、加之在聖同聖、在凡同凡、脚下一條紅線、逢佛殺佛、逢祖殺祖、掌內三尺金剛、燕寢水枕森戟、龍安夜話連牀、八品高哉、光風霽月、意氣凜乎、烈日秋霜、

喫、繪花者不繪其香。

天文龍集癸卯林鐘八蓂。　前妙心大休叟宗休書。

西月慶照信女壽像

紫羅帳裏綮衣珠、百陋恰如逢一妹、濃抹淡粧無限意、丹青只合畫西湖。

坂井備前守香林宗遠像

此郎勳閥敢誰論、從古忠臣出孝門、只有安劉一周勃、秋霜三尺定乾坤。

是雲宗拂像

高屋氏諱宗拂、字是雲、世爲積德之門也、形雖處俗、頗塵表物也、天文庚子夏五初一日、觸造化小兒、溘然逝矣、孝子不堪追悼、命畫師寫照、滿面霜凜如生也、一日紹介于一僧、求贊於肖像、吁、予之所感者孝也、其志可嘉焉、叨題一偈云。

名高屋裏主人公、五十一年春一夢、打鼓看來都不會、雲雷吼裂太虛空。

蘭庭常秀像

山田氏蘭庭常秀道人、予入室參徒也、蓋如天衣下有秀鐵面、不幸而逝矣、嗣子彌太郎、命工圖其像、一日持來需贊語于余、展之凜乎似勇如生、不克無感、仍作偈塞請云。

弓挽強兮箭用長、護吾法社作金湯、曹溪鏡裏本來面、花有淸香月有光。

天文十三甲辰八月日。

自贊

百億須彌條拄杖、三千刹界小袈裟、將無法付大龜氏、梅里下生春在花。

賦山偈付愉龜年。　大永癸未林鐘初吉。　正法當住大休叟。

這無明禿、憨顯皤腹、脩吭矮身、拈達磨華、將錯就錯、畫靈山月、逼眞非眞、苕帚掃自家雪、袈裟帶御園春、瞎漆桶、笑闍闍、誰道、蠢苴勤巴子、從來蓬髮休上人、咄。

享祿庚寅林鐘吉辰、爲元從座元花園宗休贊。

畫蛇添足竹篦子、種電尋根木面翁、若是當機行正令、韶陽臨濟落花風。　右韶首座請。

我無定相、逐惡隨邪、著金伽梨、入佛界、入魔界、用黑豆法、作主家作賓家、瞎人天眼、暗撒塵沙、自逞威獰、當門一隻艾虎、誰觸毒氣、據室三尺筠蛇、續西源派脈、窮東海津涯、咦、扶起臨濟樹、春風又發花。

天文八稔龍集己亥三月初吉、松源十三世花園大休叟宗休、應玄津首座請、書于靈雲丈室。

三十年胡亂、元來掠虛頭、喚作馬則馬、喚作牛則牛、錯錯、要見靈雲麼、桃花逐水流。

太原座元繪予幻質求贊、信筆贊其上。　天文龍集乙巳夏五。　住花園大休叟書。

吾扶桑國、佛日再暾、捉敗白拈臨濟、罵倒黑豆松源、咦、唯餘一喝五逆雷奔。

因暾首座請大休叟自贊。　天文乙巳夏五念八。　此像贊、在參州渥美郡長松山太平寺。

龍而頭上無角、蛇而眼裏有筋、朝吸盡西源水、暮吐出南浦雲、聞其名不如見、見其面不如聞、重一髮輕千斤、囫、拈來天下與人看、拄杖開花春十分。

胸中五逆不能藏、坐我阿鼻熱鐵牀、臨濟兒孫普天下、唯餘一喝要商量。

祖台首座繪予幻質求贊、作偈以塞其請云。　天文丙午八月初吉。　前妙心大休叟宗休贊。

道號頌　上

石庵　韶首座

坐斷雲根老衲衣、半巖春雨掩禪扉、銀山鐵壁迸開了、百鳥銜花別處飛。

月航　津首座

江水涵秋玉兎輝、孤帆高挂截流機、廣寒八萬四千戶、一葉舟中穩載歸。

東庵　宗噉首座

吠瑠璃界一封疆、坐斷孤峯不下牀、佛日再噉明歷歷、眼頭高挂在扶桑。

天庵　祖台首座

月斧雲斤架法梁、把乾坤作一封疆、大機大用大人境、坐斷普賢三昧牀。

梅意　宗雲

萬里西來閒達磨、門前湖水起波瀾、暗香疎影黃昏後、月在天心君自看。

義岳　忠

高標卓爾直超宗、塊視華山千萬重、勢薄層雲何所似、秋天一朶玉芙蓉。

友室　益

知心自古世間無、卜此芳鄰德不孤、入得還他梅與月、鴛鴦未了繡工夫。

蘭谷　金

雖ㇾ同₂蘆弟罷參地₁、不ㇾ許梅兄入室春、元是曹溪那一滴、流芳千載果何人。

月堂　清

秋風撲ㇾ鼻桂花香、始到₂心空及第場₁、光境俱忘底時節、呵呵拍ㇾ手下₂禪牀₁。

花庵　春

熊峰鷲嶺一枝同、移入₂此門₁分外紅、只爲₂主人意安樂₁、太平無₂日不₁ㇾ東風。

春溪

太古乾坤一氣浮、非ㇾ冬非ㇾ夏又非ㇾ秋、綠楊芳草東西岸、牧得潙山老牸牛。

南芳　金

打₂破曹溪明鏡臺₁、梅花面目絕₂塵埃₁、重離六畫分開後、四海薰風從ㇾ此來。

天覺

得ㇾ一以淸得ㇾ一寧、世尊錯是認₂明星₁、了然不ㇾ動如如體、月在₂屋頭₁花在ㇾ瓶。

太虛

竪₂蓋乾坤₁橫十方、法身邊事露堂堂、誰知撒₂手長空外₁、塞雁影沈秋水茫。

天先　性

蒼蒼何色蓋₂坤維₁、直得純淸絕點時、不ㇾ待₂羲皇春一劃₁、梅開太極已前枝。

澤翁　濡

天地由來積德門、主人大坐直當軒、雲夢八九胸中芥、龐老西江何足呑。

桂峯

東土二三聯奕葉、西天四七發芬芳、孤危峭絕難攀處、熊耳叢高秋色長。

陽甫

一氣生時天靄然、別春何必在梅邊、金烏飛上扶桑樹、達磨元來不會禪。

一翁

元來天地是同根、四海之中獨稱尊、行道威音空劫外、强遭王老喚兒孫。

照嶺　眞

影杲杲時空寂寂、峭巍巍處坦蕩蕩、三千刹界光明藏、百億須彌日月長。

靈源　性

神龍豈是池中物、脫卻凡鱗登禹門、白浪滔天添意氣、由來水出自崑崙。

棨中　恩

少林毒種遍扶桑、天下一株之蔭涼、子葉孫枝繁茂處、秋風嫖桂久昌昌。

玄虛　聃

三要印開衆妙門、依然天地是同根、欲知佛老深談旨、黑漆昆侖空裏奔。

玉溪　音

蒼龍窟裡夜沈沈、波浪聲收萬壑深、明月淸風無價寶、高山流水沒絃琴。

劫外

行道威音王以前、虛空拍手叫同年、欲知少室別傳旨、枯木開花時節緣。

悅巖

破顏尊者叫同參、宴坐空生費講談、禪味忘時眞法喜、石屏雨花響毿毿。

見外　參

若見文字語言中、更向那邊立我宗、堪笑善財强尋覓、德雲不在妙高峰。

龜伯　哥

舞袖飜風老飲光、吹篪仲子絕宮商、饒行一句明朝吉、海上蓬萊日月長。

一是

萬法歸空絕點塵、知非四十九年春、當陽直指卽心佛、今日看來日下人。

鐵船　梵盈首座

打就渾鋼勢太頑、浪花捲雪倒銀山、古帆高挂後消息、載得海西風月還。

松屋　宗林監寺

棟梁材大幾經年、厨庫山門境致全、十里風聲聽愈好、三條椽下打安眠。

仰岳　祖泰尼

可望從來不可攀、一峯屹立插雲間、鍼鋒頭上踍跳去、塊視須彌百億山。

春窗　祖椿尼

不借東皇第一功、豁開戸牖百花紅、無端促敗心猿了、喚醒南華化蝶翁。

古巖　秀桂尼

歷盡阿僧祇劫長、嶮崖萬仭絶瞻望、空生莫作舊時看、花落毿毿春雨香。

一宗　秀統尼

東震二三傳派脈、西乾四七叫同流、天龍佛法無多子、振起玄風豎指頭。

龍川　秀濟尼

四海五湖同一如、拏雲體霧上清虛、禹門激起桃花浪、回首諸方點額魚。

花屋　宗因尼

九衢車馬競芳塵、吾愛吾廬別置春、不借鳳樓修造手、桃紅李白美哉輪。

月溪　妙光尼

勝遊何必在南樓、綠淨春深氣似秋、獨許寒山開口笑、冰輪西落水東流。

江甫　秀清尼

流水濫觴波勢增、海東扶木日初昇、出門一笑無人會、達磨元來宋少陵。

梅窓　理清尼

有物先天名未安、誰穿戸牖被香瞞、犧皇一劃華嚴易、小碧紗前和月攤。

心溪　宗田尼

佛祖元來傳不傳、琮琤日夜響潺湲、意中消息耳中得、爲雨泉聲落檻前。

汝舟　祖川尼

運濟支那四百州、桅竿營索截凡流、般人去後無良駕、空載蘆花明月秋。

春庭　訓

神光立雪二三尺、達磨拈花八九年、別有東君傳信息、黃鳥話盡玉堦前。

湖隱　賀

雲歸南浦水西源、朝市山林皆有煩、高臥安眠何處好、白鷗門外鶴乾坤。

春學　篤

燕子日長花發初、少年叢中惜三餘、欲知西祖西來意、先讀東丘東魯書。

褒英　名讚、一華的子、雪村孫。

春秋筆力勢雄哉、千萬人中稱俊才、將謂少林消息斷、雪村深處一華開。

旭峯　東

金烏出海一飛輕、先照高山昇若英、撈到德雲相見處、黑昆侖放大光明。

直庵　順

捏聚乾坤豎毒拳、采椽不斲自天然、德山臨濟無門入、雪月風花一老禪。

梅室　春

不是西湖處士家、老禪方丈住南涯、猊牀三萬二千月、一夜工夫只爲花。

菊裔　勻

花持晚節不曾移、晉後風流隱逸委、檃栝三玄三要語、小笆猶在傲霜枝。

古帆　順

鐵船陸地起波來、空劫之前未挂時、把五須彌成一片、東西南北任風吹。

月浦　宗光

遠離海嶠出雲衢、推轉冰輪凜凜乎、影落波心般若體、蚌胎吐出夜明珠。

林叔　梵靖藏主、夢窻國師雲孫

恭以逋仙同自出、相逢靈徹記何曾、一衣一鉢西湖月、分付梅花樹下僧。

安芳　榴

寥寥心地自平均、珍重歸家穩坐人、四海香風吹不起、開花結實漢園春。

梅湖　鶴藏主

疎影暗香到家句、隨波逐浪截流機、有僧若問花來處、春在孤山雪後枝。

玉海　善琛藏主

元自圓成磨不磷、珠還合浦物咸新、夜來撐着珊瑚樹、月白風淸無價珍。

材庵　承國門下僧、諱曰輪

林無凡木一封疆、這裡可容獅子牀、不借作家宗匠手、百千日月挂離梁。

春芳

溫然一氣自東來、花發破顏微笑時、諸佛番番出於世、梅蘭蓮菊不同時。

怡庵

花滿門闌喜色加、夜垣何比馬箕家、主人安樂活三昧、拾暮山雲閒煮茶。

喜春

不耐歡悰積善家、韶光九十日相加、一枝佛法無多子、先付破顏微笑花。

芳園　菊

小牡丹花蔑以加、東籬秋色屬君家、少年叢裡回頭看、晉後風流猶在花。

柏庵　元梁

指示庭前那一株、九年面壁碧瞳胡、若論趙老雙華甲、太古莊椿在半途。

玉英　宗哲

晩成大器琢天球、千萬人中獨拔尤、色自粹溫何所似、黃花愛看晉風流。

喜雲　宗慶尼

曾經十地眞菩薩、終始無心出岫來、持以贈君怡悅否、風吹一朶落天涯。

菊溪　宗芳

金莖一滴壽無疆、籬落水邊猶傲霜、四海香風吹不盡、逢花問取幾重陽、

月岑　宗珠

指來不是話來非、鷲嶺曹溪共顯機、今夜出頭天外看、山河大地發光輝。

器伯

似玉名珪磨不磷、六瑚八簋得其人、祭神如在廟堂上、北野梅花南澗蘋。

柏翁　宗郝

庭前立雪歲寒姿、古佛趙州酬得奇、天地同根同甲子、蒼髯叟亦萬年枝。

春庵　正意首座

環屋皆山稱醉翁、蒲團紙帳坐春風、袈裟撩亂三杯酒、興在蒼花細雨中。

西柏　壽兌

竺土大仙傳以心、抽龜毛葉翠森森、無端轉作東來意、吾祖甘棠一樹陰。

檀溪　宗香首座

摩利山中無雜樹、枝枝葉葉起香風、流傳海外眞消息、從此曹源一滴通。

桃谷　周仁尼首座

洞中春色異人間、路自武陵溪上還、不爲秦皇洗塵垢、飛花逐水日潺湲。

覺林　妙等尼

佛之一字汚人口、只麼嗽來薝蔔風、公案現成猶未了、二株娭桂綠叢叢。

鈍翁　宗鋭

文武爐中百鍊來、看佗鐵漢鑄成時、太阿寶劍未爲利、龐老機關猶是癡。

稻屋　祖收

鐵牛耕破一心田、秋水連門八九椽、招拾法華遺穗去、民村戶戶樂豐年。

香室　巖

五葉聯芳春滿堂、證龜作鼈一燈光、毿毿花落半巖雨、撼動毘耶三萬牀。

澄江　清

今千年不待黃河、涇渭異流看若何、擧括元暉那一句、風飜素練湧清波。

蘭庭　秀

十蕙雖多輸一花、幽芳繞砌小籬笆、風流千古豈無種、子葉孫枝滿謝家。

玉淵　琳

衣裏寶珠輝大千、入波驚起臥龍眠、好和龐老西江水、吸盡來看明月泉。

大用　宗碩

劫外靈機忽現前、威風凜凜動坤乾、莫言佛法無多子、賺過裴休黃檗禪。

希道　宗弘

亡羊贓殺有多端、首鼠瞿聃無兩端、不識人人脚跟下、一條活路透長安。

松屋　名紹長、遠州人

深根固蔕萬年榮、一木支來大厦成、只有寒山較些子、近聽愈好遠江聲。

芳心　宗妙

一字元來佛不宣、龍兒八歲稱華鮮、月宮豈待三星繞、維德維馨當體蓮。

古峯　名勝雲

高從塵劫絶躋攀、塊視須彌百億山、不是今時那一色、秋天依舊碧孱顏。
龜溪　慧兆藏主
出空谷也入禪河、正眼流通迦葉波、雞足山中藏六後、一枝佛法不須多。
明室　珍
玉兎金烏不照臨、靈光輝古又騰今、從門入者非他物、僧寳元來滄海琛。
鳳嶺　榮儀首座、軒扁安巢
岐山有鳥絶同曹、得處安巢唰羽毛、不是丹楓碧梧上、孤嵐百尺一峯高。
一麟　瑞祥
衆角雖多獨出群、四靈呈瑞氣如雲、漢王殿閣留遺像、魯叟春秋修闕文。
聞庵　興健首座
香嚴擊竹豎拳機、鐵壁重重無路窺、和卻補陀巖畔月、偃溪流水入門來。
雲如　宗慧
隨風到處雖無蔕、觸石生時似有根、臨濟大龍纔奮迅、忽爲法雨洒乾坤。
玉岫　珍
祕在形山無價珍、非金非石絶緇磷、東峯西嶺雲閒處、托出天邊月一輪。
覺林
草木山河淨法身、頭頭物物現全眞、心花開發底時節、冷笑華嚴會上春。

瑞嶽

試問龜哥吉兆多、頽波砥柱立禪河、千年烏跋現何色、其面如花娑竭羅。

希溪　善灌尼

不慕少林尼總持、庶幾當日老閑師、無端截斷衆流去、劈箭猶遲閃電機。

繼芳　性胤

甘蔗拈華春授手、黃梅和月曉傳衣、門門從是香風起、露浥路紅吹不飛。

無參　宗參

善財從此絕遊方、初發心登正覺場、不往西天與東土、玄沙元是謝三郎。

希雲

觸石無根出岫飛、浮空不蔕逐風歸、放開線路與他看、輕似道人身上衣。

逸峯

五嶽雖高吾可攀、飛來一朶出雲間、當軒獨坐底時節、塊視須彌百億山。

悅林

破顏微笑老頭陀、拈華宗旨不須多、給孤園裡好春色、留作千年烏鉢羅。

覺翁

高叫心空吸盡江、角巾毳衲鬢雙雙、大疑團破底時節、拍手呵呵笑老龐。

月巢　初首座、丹州人

丹山有鳳現僧中、不接碧梧秋識風、占得桂花枝第一、搏霄高入廣寒宮。

南陽　長成律師傳南山律宗、稱泉涌門下碩德云。

傳道宣宗律藏開、把戈佛日再麾回、嶺頭春色屬梅後、四海薰風從此來。

雪庭　宗可

吾這裏無心可安、黑漫漫地白漫漫、神光縱得少林髓、輸卻梅花徹骨寒。

安岳　隆泰

得一淸兮得一寧、嵩呼萬歲兩三聲、而今天下泰山上、不動干戈致太平。

密傳　宗殷

祖師心印付將來、何待南天鐵塔開、會得眞言成佛旨、眼頭高不到黃梅。

玉岫　宗琳

磨盡塵勞光自生、人人具足本圓成、形山一寶可無價、莫換秦王十五城。

雲屋　宗澤

鄧林一木得君支、將謂衝樓跨竈兒、爲瑞爲祥雨天下、須臾蓋覆四坤維。

瑞巖　宗祥

祥雲乍起覆乾坤、輕似天衣拂石根、亂墜空華休試我、銀山鐵壁入無門。

華仲　淨金

趙州母子未爲多、問路臺山勘破婆、鳥奏塤篪百花裏、木人笑唱太平歌。

以清　維泉

大地元來淨法身、不知何處立纖塵、曇華現瑞底時節、河水千年一度新。

寶岳　法珍

衣珠一顆不磨圓、祕在形山歷幾年、端的出頭雲外看、夜光明月照青天。

大川　宗三

激起曹源那一滴、玄玄玄處立宗猷、銀河倒蘸須彌筆、白浪滔天學字流。

高節　壽筠

多福一叢凌歲寒、霜前雪後報平安、衝天意氣層雲上、渭子湘孫千萬竿。

虎林　正隆

典藏雲窻霧閣間、風生八極出南山、爪牙備羽猶成矣、臨濟兒孫露一斑。

補拙　勸

垢面蓬頭老懶禪、鳴鳩呼醒一春眠、垂頤寒涕無心拭、手熟山中煨芋煙。

悅叟　玄怡

天開壽域八荒安、卻算堦蓂幾若干、試聽西風一橫笛、新翻唱起萬年歡。

永年　玄甫

黃竹墟西青雀回、龜臺金母宴瑤池、春風坐了九千歲、海上蟠桃結實遲。

柏心　梵茂

看他華甲趙州翁、錯認西來雙碧瞳、休與龜蛇圖其歯、三星夜夜繞蟾宮。

聖倫　慧昻

化彼眞丹上大人、儒童菩薩是前身、不居仁里得名否、衆角雖多唯一麟。

壽岳　宗仙

龜齡鶴算白頭翁、不屑三呼萬歲嵩、遠看近聽聲愈好、長松脩竹祝無窮。

月桂　宗光

雲斤削玉輾冰輪、美譽芳聲載得新、折取廣寒枝第一、作詩遠寄與佳人。

大宗　昌乘藏主、龍淵派

龍淵深處老龍蹲、日本支那多少孫、一口平吞還吐出、烏頭毒氣溢乾坤。

松庵　宗藤藏主

山門境致入標榜、得棟梁材宗再興、近聽微風聲愈好、三間茅屋半間僧。

橘洲　宗金藏主

千江印月光明藏、古佛傳心一箇無、塔樣機前若相問、南村梅白北村蘆。

續芳　宗繼

誰把鸞膠理斷絃、九年弓自少林傳、寒梅破甲六花陣、看箭威音空劫前。

維馨　宗馡

東君春信到君家、從是群芳次第加、傳得逋仙香影句、暗中摸索識梅花。

有節　理忠尼、醫王門下

摠持尼效少林禪、分得九年皮髓親、若論宗門功第一、峻標淸節上麒麟。

壽峯　宗丘

巍然突出衆山中、比老彭依俙不同、鶴算龜齡休鬪齒、常春藤挂萬年松。

傳巖　永霖

義薄層雲大丈夫、聖朝雨落物皆濡、至今天下安磐石、在野遺賢入畫圖。

春芳　名桂、建仁寺沙彌

花發東皇第一機、根從蟾窟遠移來、少年能記狀元日、挽取凌霄三月枝。

雪庭　名瑞、建仁寺沙彌

普通年後宋丁卯、巽二先驅滕六多、松柏歲寒猶可忍、梅花太瘦又如何。

鐵牛

鎔二輪圍鑄一頭、胡僧心印有誰酬、當機拗折黃金角、少室山前高叫牟。

松雲　長

固蔕深根億萬年、春空鬉鬆翠連天、隨風若作夜來雨、留箇一枝啼杜鵑。

月岑　宗圓、淨土宗

昨夜秋風動廣寒、桂花影映數峯殘、雲斤不借郢人手、削出青山玉一團。

淸芳　淨土宗

帶水拕泥遠社蓮、昆侖鼻孔半邊穿、歸來莫認寥寥地、風送幽香落日前。

蘭畹　四十字藪殿、名宗芳

蕙草雖多蔑以加、托根林藪楚人家、從來合在朝廷上、香滿春畦只一花。

壽岳　宗延、明石則兼公

莫以尼丘比老彭、金華仙子授長生、嵩呼三十六峯外、四海波平萬歲聲。

龍雲　堀豐後守、名宗興

神物蜿蜒出石根、至今韓孟約猶存、一飛不借風雷力、浪激桃花登禹門。

悅叟　鶴原氏宗怡求

春滿門闌喜色多、老年花亦帶溫和、君家自有長生訣、鶴算龜齡不讓佗。

大業　宗繼

三千世界眼中穿、百二山河掌內收、若論此郎功第一、武門閥閱續箕裘。

大成　宗功、備之甲族廣澤

家業與時日轉新、美哉奐也美哉輪、纔邊燕雀休相賀、三百周詩賦碩人。

義江　光忠禪門

濯足機前落便宜、急流勇退運闍黎、丈夫意氣層雲上、開卻渡頭風月來。

松翁

根有茯苓經幾春、傳和扁術自頤神、蒼髯豈敢染秦垢、萬嶽千峯一老身。

松屋

蒼髯叟有棟梁姿、一木今支大厦來、十里風聲聽愈好、儒門知識戒禪師。

榮仲　泉隆

士林從古出英豪、雲擁新豐樹影高、三尺吹毛元不動、太平天下卯金刀。

太陽　宗旭、信州知久氏

衞足葵花向日傾、致君堯舜抱丹誠、鵝湖山下神如在、陰德至今人誦名

春芳

造化無私德有隣、東君雨露百花勻、春於梅與秋於菊、敢保張良似婦人。

芳室　宗葩尼

紅釋迦隨春雨過、紫彌勒待曉風吹、天華亂墜珠簾外、撼動獅牀三萬來、

喜雲　明怡大姉

十地初兮十地終、無心出岫又隨風、贈君一朶須怡悅、春色光明兜率宮、

希周　宗鼎

留得螽斯詩一篇、有文郁郁不曾遷、齊家治國似任似、能保蒼姫八百年

花屋　周林信女

輪奐美哉桃李中、珠簾甲帳坐春風、家家爭富瞿曇老、多卻一枝微笑紅

繼芳　祖胤大姉

鷲嶺一枝傳別春、燈花續燄瑞光新、二三四七相承後、更有尋芳逐臭人。
　梅隱　祐芳信女
一枝春色謝人間、贏得水邊林下閑、試看孃生眞面目、月移花影小孤山。
　桂室　宗昌信女
根是西天胡種族、少林門下二株抽、輸香遜白梅兼月、淸似姮娥宮裏秋。
　見室　妙心信女
佛眼難窺一丈方、藏機密密露堂堂、桃花亂落曼陀雨、撼動毘耶三萬牀。
　月岫　慈圓信女
宮裏姮娥獨倚欄、移春花影與人看、千山萬嶽雲收後、光照中峯玉一團。
　慧雲　宗智信女
頓超十地未爲奇、參佛日禪無著尼、攀折徑山三月桂、拈成黑漆竹篦來。
　渭川　宗淸信女
脩竹林深千畝秋、淸流何敢混涇流、釣竿風穩禁池影、魚畏龍顏不上鉤。
　天外　超
別傳向上禪、坐斷盡乾坤、出頭天外看、毘盧脚下邊。
　花溪
微笑尊者、廣長能仁、有水含月、誰家不春。

燈溪

四七續燈、二三同流、證龜作鼈、須彌點頭。

玉岫　梵圭

溫潤縝密、山色連城、藍田日暖、崑崗煙生。

潤屋　宗璣信女

恩光雨露新、晚節保其身、無盡藏開也、楊州家裏珍。

睡足　相國寺雲澤仁恕請

胸中物八九雲夢、眼底書三萬祿渠、雨過海棠春院靜、淸風一枕黑甜餘。

話月齋

拾暮山雲束作薪、煮茶對榻主兼賓、曹溪話月士峯雪、一語應無落俗塵。

萬休齋

白鷗似我未忘吾、迷悟聖凡無二途、瓦解冰消甚時節、心開朝市亦江湖。

半梅齋

梅因分色遜三白、雪爲不香輸一籌、劉項元來天下半、枝南枝北割鴻溝。

大笑齋　五峯請

躍渙斥鷃小鵬程、開口呵呵天地驚、到此寒山拱手立、柴門月色大江橫。

松鷗齋　江心

多汝書齋實合名、青松社裏白鷗盟、近聽愈好遠聽好、十里淸風撲鹿聲。

愈好齋

齋主老蒼顏、栽松愛境閑、微風聽得好、天地一寒山。

道號頌　下

希雲號

定光精舍、尾之古刹也、迺大覺門下一派也、其徒宗端藏局、扣予室、朝參暮究、孜孜不倦、志勤矣、一日來告云、某諱端、請和尙字之、以爲華衮、仍命以希雲焉、蓋古希顏者顏徒、今日希白雲者雲孫、予所取在茲耳、係一偈於厥上、祝遠大云。

非顏非驥是非龍、棒雨喝雷風亦從、金圈栗蓬鐵酸餡、甘棠故勿慕先宗。

明屋號

神高山龍寶禪寺、和之望刹也、其主宗朝典藏、入吾門挂錫有年、晨參暮請不怠、厥志可嘉尙也、一日侍側之次、前席云、某有諱無字、請和尙圖之、仍以明屋稱之、幷賦村偈一章、以祝遠大云。

心月孤圓大法輪、揚州不是自家珍、此中花竹有和氣、占斷風光作主人。

南華號

河陽一縣有雛僧、諱曰榮也、族逆卷氏也、自韶亂歲投宜春法兄室、執師資禮焉、染衣之後、不幾而主盛和墳寺之席、不忽繩墨、緇禮肅如、一日通華娙之好、就予徵字、以南華命之、予雖不敏、且說之夫南方離卦也、離言麗也、日月麗天、草木麗地、其德文明、而如華蟲

之有文也、華也草木欣欣向榮、春秋腓、咸是南訛長養之功也、蓋南華眞經、莊座主荒唐之説也、遽然化蝶、栩然入南華、然而不近梅、雖誇大椿八千之春秋、不奈朝菌一日之榮焉、予所不取也、因記曹溪能大師、唐龍朔中傳黄梅衣、而建法幢南華之地、斯時宗有南北、曰南能、曰北秀、彼一時、此一時、王侯之所仰慕也、宗門之榮莫大焉、加之吾臨濟大師、亦南華人也、於檗嶠棒下、拜徹骨髓者、臨濟一人耳、故檗囑曰、吾宗到汝大興、繇是觀之、或八十生知識、或百世師也、榮也爲二師華胄、稱南華、不亦宜乎哉、他日回梅嶺春於河內、布臨濟凉於天下、必矣、祝祝、偈曰。

日輪當午鈔芬陀、花果同時看若何、欲識曹溪別傳旨、一枝春色不須多。

一庵

有一僧、諱曰虔、從肥之前州來、迺永明門下徒也、不忘昔因、一日扣予室徵字、來意之所感、字之曰一庵、蓋有來由也、昔馬師住庵于虔上、鬼神爲築夜垣、果出八十四人於江西派下、不亦護法力乎、虔也他時異日、金鷄銜一粒、供養十方僧者、非公誰乎、勉之、書以祝遠大、其偈曰。

九州四海獨稱翁、山鬼難窺密室中、莫道夜垣非助我、江西從此振宗風。

汝雲號

神應主盟、祖泰藏主、迺龍淵之龍孫、白雲之雲仍也、姓新見氏、備之甲族也、一日扣予室徵字焉、予告曰、白雲汝祖也、泰汝諱也、以汝雲爲稱可乎、大凡雲之言運也、山川之氣觸

石而起、謂之雲、舒則彌綸覆四海、卷則消液入無形、卷舒自在、變化不可得而測也、按公羊傳曰、不崇朝而偏雨乎天下者、泰山之雲也、予所取在茲焉、若據敎家論之、吾佛說四種雲喩四比丘、一曰、雷而不雨、言其誦十二部經、而不爲人說也、二曰、雨而不雷、言其顏貌端正、好與善友相隨也、三曰、不雨不雷、言其不具威儀、不修諸善也、四曰、亦雨亦雷、言其學問修習、覺自覺他也、緣是三草二木沾恩、四生九類感德焉、四種之中亦雨亦雷、是龍淵之雲耶、雨而不雷、是泰山之雲耶、抑亦菩薩十地名法雲也、始覺之智歸入本覺之理、而始本不二也、是乃汝不二門也、智行運動、則起大智雲澍大法雨、不是甘露門乎、佛人也、闍梨卽雲水、不二卽甘露門也、德澤云乎哉、法霈云乎哉、他日不崇朝而雨天下者、非汝雲而誰也哉、勉旃、作偈以祝遠大云。

直起龍淵覆四坤、盡扶桑國是仍孫、忽爲霖雨蘇枯槁、不二廣開甘露門。

雲華號

巢林庵頭祥公藏局、俗藤氏也、洞家名宿、字之曰雲華、系以一偈、然而罹于世之騷亂、而亡飛鳥失驚蛇、以爲遺憾、更寄楮皮於老拙、求伽陀一章、書以塞其請云。

磐石託根膚寸新、天呈瑞氣地囘春、春空一朶眞烏鉢、不耐持來贈道人。

梅江號

對陽宗信藏主者、西源翁之小子也、侍余側殆一兩霜矣、然而升堂未入室、一日告歸于舊梓、蓋慈明省母之謂乎、餞之摘梅江二字、以爲道稱、夫梅之爲梅、占春於犧易劃先白

而不白、紅而不紅、分宗於龍朔年後、頓而不頓、漸而不漸、可謂百花魁也、嗚呼道實不道花、說命闕文乎、不道實不道花、楚辭遺恨耳、牡丹無實、荔子非花、豈同日語乎、抑又江之爲江、濫觴于江西、瀰漫乎湖南、月在水、猶春在花、淸香于花、爺婆于水、掬之月、弄之花、春湖白鷗、自然宜哉、他時異日、漏泄西來意、流傳雪月花者、不是梅江乎哉、仍作小偈以祝云。

西天四七水傳器、東土二三花滿衣、畢竟非花又非水、暗香疎影野薔薇。　永正六冬節後一日。

古磵號

昔有僧問大龍、如何是堅固法身、龍云、山花開似錦、磵水湛如藍、玆有一僧諱曰良堅、寄紙求號、雅稱之曰古磵、余所字、其在大龍舊話端耳、堅禪堅禪、二六時提撕看、古磵寒泉非他物、若是瞪目、爭得見底、偈云。

主人門外舊山河、風定湛然自不波、空劫以前今日事、落花流水早蹉過。

文仲號

竹隱軒主虎藏局、求道稱、稱之曰文仲、仍唱貫華一章、以證其義云。

大器成時載道行、管窺錯認老書生、一朝跳出南山裏、凜凜威風動八紘。

龍光號

攝之下郡有古禪刹、曰醫王、廼天龍門下之末派也、周珍首座、主其席也、自幼學醫、得盧

扁術、換骨方、顧神術、可謂今日醫王善逝也、近頃就予徵字、以龍光命之、昔宋司馬溫公天下宰相也、有僧避相公諱光字、唱瑠璃皎佛、古今笑具也、仍作偈以爲左證。

扶桑樹萬八千東、醫國養民唯一翁、不觸淨瑠璃皎諱、人參甘草再溫公。

春韶號

仝津首座洒水派下僧也、一日入室之次、就予徵字、字之曰春韶、仍摛俚語一篇、以塞其請云。

物遂陽和資始生、唐虞禮樂屬昇平、吾家一曲宮商外、洗盡聞塵流水聲。

藏龍號

魯史云、深山大澤者龍蛇之窟也、宗澤藏主、就予需道稱、字之曰藏龍、作偈以爲證云。

多年神物耐泥蟠、豈向池中獨屈尊、若遇春雷開蟄戶、鱗蟲三百總兒孫。

東明號

東山下小阿師、諱曰昇如、就予索字、雅稱之曰東明也、仍製貫華一章、以祝遠大。

先照高山日近耶、仰之仁義老奢迦、出頭天外須看取、八十華嚴春在花。

芳才號

禪佐藏主號芳才、吾鄧林師兄之攸命也、寄紙求偈。

攢花簇錦好文章、覺範參寥不可當、轉正法輪調羹手、僧中今視有斯郎。　大永五年孟春。

桃嶽號

智康藏主求道稱於予、命以桃嶽二字、蓋丹田之神認之桃康、義取于此耳、仍唱拙偈一章、以爲左證云。

古來度朔仰神荼、直入丹田摧衆邪、不羨洞中春色媄、金輪峯外有斯花。　旹享祿第四辛卯夷則吉辰、妙心住山大休老衲書。

直指號

吾山後版、鄧林一枝、諱曰諤也、俗甲族仁木也、就予需道稱、以直指命之、因摛偈一章、以證其義云。

心地平時繩墨正、法梁高架鄧林材、要成少室單傳器、先自斯門入得來。　天文龍集壬寅三月如意珠日。

蘭圃號

駿陽有沙彌、諱曰金、予字之曰蘭圃、賦禪詩一篇、以祝遠大云。

九畹移來深託茅、風流有種謝公家、春風競秀山林裏、十蕙一枝三四花。　天文十七祀戊申夏五十又二。

桂峯號

慶昌藏主需號、書桂峯二大字與之、偈云。

少林惡孽、忽發天香、出頭雲外、山色蒼蒼。

覺翁號

賢等老人、寄楮皮見求道稱、命之以覺翁焉、蓋敎中有等妙二覺、自十信位歷十地而至等覺、等覺一轉而入妙覺、謂之覺行圓滿也、佛者覺也、翁者老稱也、佛是西天老比丘也、覺云翁云字義炳然、若約吾宗、一棒一喝之下、頓成正覺者誰哉、四海一暮翁耳、其偈曰。

迷悟元來無二途、黃塵烏帽白頭顱、眼高三世十方外、呼老瞿曇作我奴。

業仲號

河陽有丹下氏、畠山源公幕下之臣也、世有忠功、而宗因信男者厥宗也、永正庚辰之春、爲源公致命於戰場、可謂亂世英雄也、其徒寄紙需因公之字、稱之曰業仲、仍賦山偈以爲左證。

道合君臣非小緣、名家父子一時權、能醫邦國功成後、日落葛洪丹井西。

雲江號

越太守藤氏松井宗信公者、源右典厩幕下三代之忠臣也、所謂武門干城、法社牆壍也、先師諱之曰守慶、老拙字之曰雲江、仍唱伽陀一章、以祝遠大云。

朝來出岫自無心、白鳥明邊春水深、到此老龐難下口、旱天爲雨又爲霖。

榮中號

多多良氏奈良元吉公者、源右京兆幕下之忠臣也、自弱冠奉主、而不廢晨夕、官暇之日、于雪于螢讀父書、而遂得射騎之妙也、一弛一張、文武之道未墜地者乎、加之公昔入吾鄧林法兄之室受衣、安名曰宗榮也、所謂俗而眞、眞而俗也、今玆大永乙酉夏、以瓜葛子

法門之故、扣予龍安室祝髮染衣、厥志勤矣、一日話之次、出楮皮需立字之、命不可拒、字曰榮中也、因記、漢朱翁子、衣錦歸鄉、是翁子一時之榮耀也、宋蘇內翰、賜燭歸院、是內翰一場之富貴也、蓋公榮中于源君之命、而賜祿拜官、位至匠作也、一門之榮莫大焉、內翰富、翁子榮、彼一時也此一時也、予稱榮中不亦宜乎哉、禪偈一章、唱以祝遠大云。

富貴耀前春一場、錦衣蓮燭帶恩光、若非太守朱翁子、內翰昔時蘇玉堂。　大永五夏五吉辰、

東明號

細川右京兆幕下有一老臣、曰秀綱也、姓者源也、氏者中澤也、世任越州刺史也、公丞嗽六藝之芳潤、而以繼箕裘之業焉、袞袞源流、藉藉家聲、不言而可知耳、先是公拜鄧林翁之衣盂、而自稱壽室先登、翁諱之曰宗晃、而後予字之曰東明也、夫公之爲人也、揭仲尼之日月於扶桑、而挹厥末光焉、與天地合其德、與日月合其明矣、晃晃焉就之如日、蓋明之爲明、以無私照爲明矣、然則誰不仰其德乎、誰不仰其明乎、予所命義在玆而已、公厥念之。

青帝司春居震方、道儒星月叵爭光、元來宇宙無雙日、赫赫威名照搏桑。　大永乙酉夏五吉辰。

大業號

寶泉寺殿前常州刺史全勳大居士、源家棟梁、細川砥柱也、居士曾扣龍安之室、受衣盂於義天師翁、翁諱之曰全勳、寔宗門之金湯也、居士已薨、而烏積兎久之、蓋源深則流遠、

有厥子也、有厥孫也、一日來告予云、吾全勳居士者、先龍安之所命也、然而記其諱而不記其字之、是遺憾耳、請爲之字焉、厥辭銘肝、弗克拒之、稱以大業也、因記、昔竺乾猛將、發人天百萬之兵、張三百餘陣、雜華爲先鋒、涅槃爲殿後、被堅執銳、攻魔壘殆乎四十九白、於玆魔軍大敗、波旬瓜潰矣、遂捨邪歸正者、二千歲于今、其功不亦大乎、望之如雲、其業不亦盛乎、就之如日、於戲誰不仰哉、夫居士者天竺氏之將種也、言家系則有源有本、論行迹則有忠有義、與秋天爭高也、倘然稱大業亦宜也、仍唱一祇夜以爲左證而已。

用得竺乾猛將謀、源流袞袞繼箕裘、昔年馬上定天下、一劍霜寒兩鬢秋。

桃溪號

藤氏伴野尾州太守、諱永勤、就予徵字、字之曰桃溪、蓋取靈雲見桃之義耳、仍賦貫華一篇以爲左證云。

武陵一自失源頭、千古花流水不流、敢保靈雲擔板漢、隨波逐浪幾時休。

安邦號

藥師寺國長公者、梅宮奕葉、橘家棟梁也、幼而孤、敏而學、研精于騎射、覃思于倭歌、幾乎有父風、世仕京兆幕下、竭股肱之力、持忠貞之節、寔遠大之器也、一日官暇、扣予龍安室而打話之次、近前曰、請師安名、予咄曰、歷劫無名、說甚安名、然而堅請不已、遂名之曰紹泰也、公信受而退矣、三四句之後、寄吳牋需字、字曰安邦、夫安者止也、凡人之處一世、置安處則安、是故人情莫不欲安、吁居累卵之危、而圖泰山之安、是復人世之常也、邦者古

謂、封諸侯爲邦、禮曰、大曰邦、小曰國、二義既明矣、蓋予所謂安邦不然、昔漢時、賈誼上治安策、治安者何也、乃治國安民之策也、上古聖人、以爲設敎施政之大本、竊以、公之祖及子孫、三代領津陽刺史、爰用治安策而起蒼生、保社稷者有年矣、因記、洛社耆英司馬光、偶與藥師瑠璃光佛同諱、兒童走卒誦之、元祐中召作相、先是民苦王呂新法久之、光及執政柄、議以復舊、抑醫國活民之術、如救焚溺爾、程明道嘗曰、君實之言如人參甘草、厥無妄疾、勿藥有喜之謂乎、由此觀之、昔時溫藥師、相宋室而致君堯舜上、今日藥師寺、守津陽而置枕泰山安、彼賢宰相、此賢太守、支桑雖異易地然、件件且措、吾宗別有安心藥、公試嘗過看、必到大安樂地、祝祝。

爲劉偏袒左邊肩、國風昇平四百年、且喜商顏猶不老、橘中一局漢山川。　大永五祀季夏吉辰。

輝岳號

攝之入江氏、有一奇男兒、幼而抱棟梁之材、生而爲風流之種、詠萬葉千載、研精于雪、學六韜三略、覃思于螢、箕裘之業、將寒氷矣、一日就于老拙、見需法諱幷道稱焉、乃授禪杲爲之諱、輝岳爲之字焉、且告曰、拙聞、入江爲藤氏的裔、厥家聲也、輝騰古今、昭昭乎就之如日、巍巍乎仰之如山、曰輝曰岳、不亦宜乎哉、作偈以祝遠大云。

卓爾高標不可攀、日輪推出搏桑間、三千刹界光明藏、百億須彌福壽山。

槙堂號

有馬郡主赤松氏、有一賢女、適攝之刺史橘國長公之萱堂也、諱曰淸範、字曰模堂、老拙爲之作偈、以代字說云。

百丈叢規今尙存、三千禮樂一乾坤、魯般到此絕繩墨、月斧雲斤不見痕。　天文龍集癸巳仲春日、大休老衲書于花園見桃軒。

心源號

菅家左金吾宗徹居士、就予徵字、不克固辭、以心源命之、蓋聞、居士參瑞龍門下諸老宿、烏積兎久矣、可謂欒嶠下裴休、藥嶠下李翺也、人中烏蔑、希世之才也、仍摛祇夜一篇、以祝遠大云。

龍淵派脈屬菅原、聞說他東海的孫、莫謂祖師無意旨、黃河九曲出崑崙。

秀峯號

駿州刺史源府君、入室參玄之次、求法諱、名之曰宗哲、字之曰秀峯、按倒上秀者峯、蓋義取于玆耳、仍作偈以祝遠大云。

富士蓬萊日本東、山顏不老壽無窮、虛空背上擡頭看、百億須彌立下風。

芥舟號

尾之賢太守武衞源公幕下、有禿居士、曰宗余、姓藤氏織田、累代武門勳閥也、或人表其德而號芥舟焉、近頃介乎椿先生、求一偈於予、予聞之、芥千金屣萬乘、而若雲夢者八九澤、不芥蔕其胸焉、寔光風霽月洒落之士也、蓋所以號芥舟何也、取之於莊子逍遙篇耶、

且夫水之積也、不厚則負大舟也無力、覆杯水坳堂之上、則芥爲之舟、置杯則膠、水淺而舟大也、郭象曰、夫質小者所資不待大、則質大者所用不得小矣、故理有至分、物有定極、各足稱事、其濟一也、繇是觀之、一塵翳天、一芥覆地、居士生其兩間、仰瞻俯察、天地如杯水之浮芥、身爲之舟也、然而爲識浪不溺、淺深高低、適情逍遙矣、飄飄乎縱一葦之所如、樂至矣、厥德昭昭乎天地之間、如莊之日月、予言掩其明、豈不異郭霧乎、嗚呼濟川之材、舍諸用汝作舟、勉旃。

芥舟平地起波時、空裡遊絲欲繋之、一夜風吹何處去、蟭螟負海入蚊眉。

春澤號

備之後州有甲族、姓藤氏廣澤也、因食邑號安田、安田光忠雖予未見其面、遠寄書信需諱號、諱曰宗光、字曰春澤矣、蓋取之淵明春水滿四澤之句耳、祇夜一篇以祝遠大云。

氷解雪消風不波、雲夢八九未爲多、天浮野水眼俱碧、一箇白鷗黃達磨。

月虎號

尾之甲族、織田又六郎信張、介于冷香軒主、求諱號於予、予竊聞、此郎爲人威而不猛、如虎挾乙、爪牙具兮頭角全、匪狐假其威、羊象其皮之屬焉、諱之曰宗乙、字之曰月虎、可乎軒主領之、抑虎之爲虎也、按大戴禮云、西有毛蟲三百六十、虎爲之長、生而三日、不食伏肉、有食牛之機、始入南山、隱霧七日、厥文炳然、蓋入虎穴捋虎鬚履尾者、非乙居士而誰也、昔長沙岑禪師翫月次、仰山指月云、人人盡有這箇、只是用不得、沙云、恰是便倩儞用

那、仰云、儞試用看、沙一踣踣倒、仰山起云、師叔一似箇大蟲、後來人號爲岑大蟲、繇是觀之、曰月曰虎、不亦宜乎哉、氣類相感、則吼千峯之月、嘯萬嶽之風、凜乎餘勇至今斑斑、在兒孫乙居士之謂乎、作偈以祝遠大云。

毛群三百六十長、兎子懷胎產大蟲、跳出南山雲霧裏、一聲吼破廣寒宮。

玉雲號

宗珪信女寄紙求號、雅之曰玉雲、因唱貫華一章、以證其義云。

崑山片片覆崔嵬、帝網重重鎖殿陔、朝逐風雖出荆岫、暮爲雨不到陽臺。

雲外號

和之山中有甲族、稱山田氏、武門閥閱、法社金湯、不忘靈山遺囑者乎、是故兒卒誦之、草木識其名矣、宋之再溫公耶、齊之諸田氏耶、可嘉尙也、復慕教外宗、日課碧巖集、手之口之不輟、近頃寄紙於予徵字、或人諱之曰宗公、蓋公之爲義、天下無大小稱之曰公、不宜諱也、余改公作興之次、字之曰雲外也、按大戴禮云、東有鱗蟲三百六十、龍爲之長、然則公亦爲鱗蟲之長、而興雲降雨、非人中龍何也、其變化難得而識、孔云休云、不亦誣乎、仍作偈以祝遠大云。

和國山河瑞氣濃、出風塵表露靈蹤、由來不是池中物、且待春雷起臥龍。　天文十三龍集甲辰菊月中澣日。

汝宗說

大雲山中有一侍史、諱曰派也、乃吾西源翁之含飴也、一日扣予室求字焉、命之以汝宗二字也、侍史曰、其說可得聞乎、予曰、居吾語汝、夫建法幢立宗旨者、四七倡于西乾、二三傳于東震、而曹溪一滴自此分矣、波波浪浪、淼瀰乎江西湖南之間、或五家或七宗、天下滔滔者皆是也、誰不歸吾宗、譬如無水不朝宗海也、雖然天下稱本色白拈者、臨濟一人而已、因記、臨濟一日栽松次、黃檗問云、深山裏栽許多作甚麼、濟云、一與山門作境致、一與後人作標榜、道了將钁頭打地三下、檗云、雖然如是、子已喫吾三十棒了也、濟又以钁頭打地三下、作噓噓聲、檗云、吾宗到汝大興於世、一問一答、師資道合矣、侍史今爲厥孫定厥宗、夫予所字不在玆乎、他日若囘南浦之春於花園、激西源之流於桑海、吾以汝爲臨濟正宗、勉旃。

圓滿本光國師見桃錄卷之二終

圓滿本光國師見桃錄卷之三

遠孫比丘衆等重編

立地

釋迦如來文殊普賢二大士安座開光

本是天然老釋迦、金剛正眼絕塵沙、象旋獅擲大人境、一會靈山春在花、筆點左眼云、錯、點右眼云、錯、點頂門一隻云、果然果然。

三島江眞光寺本尊彌陀如來開光

青山綠水無量壽、玉兎金烏雙眼睛、當處豁開安養界、傲霜黃菊一場榮、夫以、末劫濁亂願海澄清、含枳里俱三字之義、分上中下九品之名、枯木形段淵默雷聲、利濟四倒八邪、空盡諸有、不捨十惡五逆、接取衆生、右脇大勢至、左邊正法明、作主作伴、如弟如兄、凡聖同居、縮西方於十萬億、神仙靈境、移三島於咫尺程、人人入如來地去、箇箇踏毘盧頂行、也奇怪也奇怪、白鼻崑崙賀太平、山僧別點出眞光、看看、寶樹寶臺七重影、檀門成日寺門成、收。

觀音點眼

梵釋照天雙眼睛、作湯池也作金城、普門八字打開了、永護吾山正法明。

心安淨源居士誦法華千部供養語

薩訶世界南贍部洲、扶桑國攝津州居住、奉三寶弟子藤原朝臣親吉、形雖處俗、心如浮圖氏、從卯歲日課法華、寸陰分陰、手之不釋、口之不輟、始乎一部、終乎千部、可謂在家菩薩也、其功大哉、其德至哉、以那由他舌說到塵劫、豈可盡乎、夫法華者、諸佛出世之本懷、衆生成佛之直路、是故諸經中最爲第一、以五時配之、則日午打三更、以五味分之、則酥酪變醍醐、妙之一字、三世佛說不盡、歷代祖提不起、展則拄天拄地、收則絕毫絕釐、妙之妙玄之玄、不可說不可說、不思議不思議、蓮之爲華、內虛而外直、出五濁水、心華開發、淸之不濁、澄之不淸、其色也黃絹幼婦、其香也八百鼻功德、當體蓮譬喩蓮、色卽空空卽色、然則離妙無蓮、離蓮無妙、開權顯實之花、本迹二門一時豁開、伏冀、心安淨源居士、憑這經王讀誦之功、不駕羊鹿牛、頓出火宅、叱起象兎馬、直超三乘、加之、致華封於三祝、盛藤氏於萬世、梵釋龍天爲之證明、鬼主鬼官爲之合掌、雖然如是、山僧別有撥轉七軸底活手段、居士高著看經眼、豁轉八邪輗、作一乘大車、欲到眞寶處、風流屬當家。

建石塔語

元來無縫鐵崑崙、塔樣分明誰敢論、石火光中高著眼、風飜荷葉露團團。

拈香

鼻祖忌

説禪説道是爭端、分肉分皮猶未寒、梁魏山河野狐窟、令人多少著疑團。
廓然一箭已離絃、面壁挂弓八九年、天下今無落鵰手、等閒飛過竺乾西。
野狐跳入太平州、破卻六宗誑俗流、熊耳峰高一痕月、空埋隻履不埋愁。
眇視梁魏小山河、風捲浪花蘆葉過、大藏五千餘卷外、片岡別有一篇歌。
梁魏山河亂若麻、果然賊不打貧家、有何面目西歸去、冷笑江湖鷗一沙。
神光三拜不相當、五逆兒孫錯擧揚、若道西來無意旨、直須東海變成桑。
隻履西歸隻履東、九年面壁楚人弓、今朝拾得爲香片、落葉吹殘昨夜風。
從這野狐精首丘、叢林千古失宗猷、自家頻掃單傳葉、莫管梁王臺上秋。
石上油麻生惡芽、西來萬里褁袈裟、眞丹雖闊無餘地、移入扶桑開毒花。

達磨大師千年忌

千年滯貨祖師禪、賣弄何曾直半錢、觸著衲僧辛辣手、野狐涎亦作龍涎。

妙心開山忌拈香

擧香云、關山梅向臘天開、和雪一枝拈出來、只爲兒孫消五逆、臥龍奮迅起雲雷、大日本國山

城州平安城西京正法山妙心禪寺、大永元年臘月十二日、山門伏値開山師祖關山大和尚遷履之辰、鳴鐘峚衆、就于微笑塔下、嚴備香華燈燭菲薄禮奠、同音諷演大佛頂萬行首楞嚴神咒、次、住持比丘宗休、割這崑崙耳、聊作小香材、上奉慈蔭、以充涓埃、餘薫必亘三際遍九垓、共惟、大和尚活機電轉、微笑春回、凌滅正法眼藏、賣弄本分鉗鎚、嗣國師而謁兩朝帝王、捲輪冠無憂履、愛風顛而罵四海英衲、單傳器直指才、御爐煙裹袈裟角、方丈雨洒錦繡堆、全依他力、長養聖胎、異代同名、屈百千林際於七步、透關具眼、空大小雲門於半杯、坐來星彩收月華散、喝下地軸折天柱摧、信州海棠花遲、故園有憶、吳宮野草綠老、徑路無媒、郊麟逃兮藪鳳竄、夜鶴怨兮曉猿哀、再來何時、且待祖塔變紅瑪瑙、示寂斯日未見吾山露碧崔嵬、蓋祖左者爲呂、而趨風底從隗、酬讎則頭綱八餅、報恩則熱鐵數枚、報恩是酬讎是、更道更道、快哉快哉、以香挿爐云、猶有傲霜一莖菊、向牀脚下手栽培、囫

鄧林和尚入牌祖堂　大永二年十一月二十五日

拈牌云、列聖叢無贋本碑、諸方莫教海螺兒、潙山一夜同參話、雪在梅花說向誰、共惟、前住當山第十七世鄧林法兄大禪師、通方作者、見處過師、蚤辭京兆幕府、晚董百丈叢規、塵塵剎剎、熾然說法、巍巍堂堂、肅如威儀、祖月禪風、效達磨氏學倭歌體、怪巖奇石、擬寒山子題梵語詩、每評百則公案、痛罵八教闍梨、望鸞鳳於雲間、泰華峯仰彌高矣、辨龍蛇於格外、淄澠水嘗而知之、接上根中根下根群衲、稱正法像法末法住持、賓主互換、棒喝交馳、御園春回艸色染成、藍樣翠先廬秋晚、盧橘花開楓葉衰、瞎拄杖正好著力、爛枯柴檢束酬知、若不入驢胎馬腹內、

何其了鵲噪鴉鳴時、錯錯、且道、世尊傳金襴外、別將甚付大龜、顧視云、侍者點平胃散一盞來。

興宗和尚入牌祖堂　天文四年乙未五月二十一日

這瞎驢堆容瞎漢、百千臨濟一叢林、後人標榜山門境、卽是吾家大寶箴、共惟、前住當山第二十三世興宗松公大禪師、仰之佛日逢彼傳霖、辛苦十年、收汗馬於心地、震驚百里、起瑞龍於蹄涔際、吾宗大興之日、感由來積德之陰、上有蘇下有荅、諸子抱密付之志、始于梅終于棟、斯翁回已墜之風時現烏鉢、地變黃金、眞淨宗教類大珠、橫說竪說、虛堂兒孫在東海、以心傳心、明月夜光、多逢按劍、高山流水、只貴知音、者裏還有祖師麼、不道井底栽林檎、咦。

花園法皇二百年忌香語

曇華再現百花園稽首。法皇無上尊、是報恩耶是酬德、龍涎吐出鐵崑崙。

龍泉景川和尚七年忌

扶桑國裏一禪翁、舌振龍泉氣吐虹、滿肚無明七年雨、三千條罪落花風。

特芳和尚十七年忌

知恩今日報恩易、中毒當時用毒難、將謂先師肉猶暖、疎籬殘菊帶霜寒。

特芳和尚三十三回忌香語　天文六年

滅吾正法瞎驢漢、項上鐵枷三百斤、一炷爐香阿鼻種、業風吹作北山雲。

寶甫宗喆首座七周忌拈香師時在河州

昔時何事結冤家、驀地掀飜奈落迦、我有本來香一瓣、和風吹送七梅花、今茲永正第九仲春二十日、伏値賢甫宗喆首座七周忌之辰、厥徒外記愉乎、告山僧曰、就洛之北桂陰舊廬、某兄某弟、春色隨分、或拈花供佛、或折柳齋僧、嗚呼以何爲涓埃報乎、願請師一偈、往以隨例也、山野咄曰、一棒一喝、不是外記之報乎、無言無說、不是山野之偈乎、無垢稱曰、施汝者不名福田、供養汝者墮三惡道、外記外記、報恩耶報讎耶、蔑以加焉、雖然乞不輟、遂唱香語酬請者也、夫惟、某名古道顏色、宗門爪牙、參洋嶼黃楊禪、則二十年喫辛苦、用松源黑豆法、則三千里見諸訛、志凌鴻鵠、眼定龍蛇、蓋首座說法如何、晝閣浮夜兜率、而先師公案未了、水黃河山太華餘波、雖及左右、殘夢難裹袈裟、春風樓下愛生前酒、水晶簾中煎睡後茶、加之、罵倒七步臨濟、驚起一宿永嘉、歸去來歸去來、天共白雲曉、沒交涉沒交涉、泉衝石徑斜、此是賢甫首座無盡藏陀羅尼三昧、別要覆蔭後昆底句、諸人試看、嫩桂長新芽、以香指眞云、幸字腳邏沙石上種油麻、哪哪。 江南釋宗休和南。

前住普門月心照公座元三十三年忌香語

按雜華人間有香、名曰象藏、因龍鬪生、若燒一丸、卽起大香雲、彌覆王都、於七日中、雨細香雨、擧香、山僧亦有那一香、生鐵鑄成底鶻崙、得之未兆先、卽今鎚碎將來、輒於兜羅綿起大慈雲于白花巖、則退猗蘭四十里之臭氣、濟小曼陀于金粟室、則奪蟾桂五百丈之芳鮮、上穿碧落下徹黃泉、鶻崙卽象藏、象藏卽鶻崙、一回觸這香氣者、從三摩地入得普門、諸人還入得麼、別別、綠楊晝暗鷓鴣烟、大日本國攝州路慈雲山普門禪寺守塔比丘聖安、維時享祿三年龍集

庚寅孟陬二十七日、山門玆迎前住當山月心照公座元禪師三十三白遠忌之辰、先庚七日就函丈修諸般善利、彫刻當忌佛尊像者一軀、讀書經王妙典者如干部、修禮水月懺摩者一場、施設水陸淨供者一會、今當散筵、營辦香花・燈燭・茶果・珍饈之儀、供佛嚫僧、仍集現前苾芻衆、異口同音、諷演白傘蓋無上神咒之次、借手於洛下退藏野衲宗休、焚這一瓣、奉供養本師釋迦牟尼善逝、濡首・徧吉二菩薩、今日教主香集世界菊光佛・現座道場正法明如來、六道能化舅舅和尚、三世十方諸佛薩埵、乃祖大覺禪師三國傳燈列祖師、天主・地神・水族・山靈・一切含識等、伏冀覺靈、沐這薰染、無黨無偏、寃親平等證行同圓、夫惟、月心座元禪師、蚤遊講肆、晚賦歸田、知識如優曇華、本朝始賜大覺之徽號、首座爲僧中月、季運幸得無明之正傳、其出興也世尊滅後、其行道也威音已前、鬧市厭喧、黃塵・烏帽・伽黎・物窣・開房投老、靑山・素髮・孤榻・蕭然、每日日課經坐、長夜夜抱佛眠、仰秀鐵面於圓通、戒乘俱急、推照白眉於方廣、名實兼全、或時著短蓑衣、而探早梅前村雪裏、或時拈生苕帚、而掃落葉夕陽溪邊、南方佛法如何、桃紅李白薔薇紫、西來祖意會麼、芒鞵・竹杖・布行纏・分身・散影、塵塵爾刹刹爾、放光動地、煒煒焉煌煌焉、休休休、馬鳴龍樹千論未盡、錯錯錯、鹿野鶴林一字不宣、初發心成正覺、眞如性絕變遷、蚯蚓抹過東海、蟭螟呑卻坤乾、雖然滔麼、要見向上牙爪、聽取祇夜一篇、山中無角老烏犍、高臥安眠三十年、忽化金毛活獅子、一聲吼裂牽陀天、喝一喝。

大藏開基華屋宗榮尼首座三十三年忌香語

這老婆於我太賒、多年香瓣裹袈裟、舉香、不如揷向寶爐去、供養芙蓉八月花、大日本國河州

路茨田郡多福山大藏禪寺住持茲芴尼宗玖、維時享祿二載八月十蓂、伏値當寺中興華屋宗榮尼首座三十三白遠諱之辰、迺就于函丈修飾梵筵、菊光佛彫刻者一軀、僧叡筆授經王印書者若干、西湖遵式所製圓通妙懺修者一座、三摩耶形造立者一基、作善件件品目、維那寫讀之、不勞重擧、虔備香華燈燭茶果珍饈之化儀、設供佛嚫僧大會、仍拜屈現前清淨衆清淨尼、諷演大佛頂光聚悉怛多般怛羅無上神咒之次、借手於花園休上座、兜樓一瓣、爇向寶爐、奉供養本師釋迦牟尼善逝、濡首・徧吉左輔右弼、當來補處慈氏尊、西方無量壽佛、世音・勢至二脇士、六道能化願王佛、當忌至尊香集、世界能滿虛空藏菩薩、三世歷代乃佛乃祖、或天或鬼、一切含識等、郁郁乎徹黃泉、則清於沈水、藹藹然穿碧落、則濃似紅霞、伏願、覺靈憑斯薰力、不歷五百由旬險道、至一乘寶所、頓出四倒八苦火宅、駕三種寶車、娑婆卽是華藏寂光、豈離伽耶、則箇、夫惟華屋宗榮尼首座、榮輝閭里、富潤屋家、逆行順行、入鍼鋒世界、翹足佛境魔境、坐蒲團庵內結跏、其德也燕金有價、其名也趙璧無瑕、雲北嶺、梅南枝、再興曹溪宗、而嗣八十生大鑑祖、朝西天、暮東土、重續兜率夢、而稱第二位小釋迦、截斷脚下紅線、脱卻項上鐵枷、清風起兮、忽然忽然、投韓送葉、殘暑去兮、端的端的、捲箔煎茶、萬機休罷、爽盡生涯、三十年前、轉凡成聖、轉聖成凡、證涅槃於雙樹、示五蘊漏質、三十年後、離敎無禪、離禪無敎、開大藏於少林、傳四卷楞伽、踏飜解脱毒海、淘汰無明塵沙、時節因緣廣寒之桂、半輪圓半輪缺、當陽直指多福之竹、一莖曲一莖斜、黑漫漫地强納些些、以香指云、老牸牛汝來也、爲甚麼沒鼻巴、不犯他苗稼、不受他木叉、左旋右轉、牽犂拽把、叱、今日臺山大齋會、香嚴童子叫無遮。

大藏住持明室宗玖尼首座三十三回忌預修供養語

刹那三十有三霜、始不動尊終菊光、欲識老婆心切處、炎天梅蘂一爐香、薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州路茨田郡大藏禪寺住持明室宗玖尼首座、預修三十三回忌之冥福、仍彫刻當忌尊虛空藏菩薩像一軀、修禮圓通妙懺一座、供佛齋僧、盡善矣、天文五年丙申六月初吉、命宗休小比丘、唱香語以供養始終焉、其功德不可說、三寶證明、諸天洞鑑、願乘此香雲、永歸本有故鄉、夫惟、某名、輭頑手段、鐵作心腸、預知世壽有限、頓了諸行無常、菩薩作誓言、我代衆生墮地獄、諸佛不妄語、汝使九族生天堂、五濁曇華現瑞、二株嫩桂聯芳、度大愛道於靈山會中、戒乘俱急、接尼總持於少林門下、皮髓分張、打八九年面壁、開三百餘會場、借水獻花、昨日供養、今日供養、淘沙去米、佛法商量、世法商量、無著放開線路、普化踏倒飯牀、施者受者、瞎漢不免、因齋讚揚、拈香云、人皆苦炎熱、吾愛夏日長。

駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香語

無明爲父大哉乾、檢束酬恩四十年、業債重重士峯雪、拈成沈水一爐烟、手茲有駿州僧宗孚者、天文甲辰仲春二十四日、伏値先考庵原氏世順良朝庵主四十年遠忌、得得來西京花園、就于衡梅禪院、設齋筵、蓋報椿府罔極恩也、仍集六和衆、諷經一上之次、借手於休上座、焚這決願香、奉供養三世佛・六代祖・乃至日域大小神祇、一切含識等、所冀頓脫凡骨、特地登仙去、夫惟、庵主闔國好駿、江湖橫鱣、剃髮染衣、僧非僧、俗非俗、出群拔萃、聖續聖、賢續賢、將謂川黨輭語魯直、元來丘徒、短命顏淵、長歌短歌、擬唐詩則香象渡河、金翅劈海、大篆小篆、臨晉帖則

怒猊抉石渴驥奔泉、春樹暮雲、千里繾綣、風花雪月、萬古流傳、或時客路西遊問津、老生涯得漫稱、或時故國東歸掩室、順現業感夙緣、乃翁與騷屑而失本貫、此郎營菟裘而卜終焉、加之、清淨法身、堅固法身、螺甲劃崑崙之耳、分段生死、變易生死、龍光射斗牛之躔、理窟勃窣、意氣凜然、時其至哉、烏鉢曇華、偶值一佛出世、道尙存矣、燈籠露柱高、叫九族生天、入涅槃兮奢迦後、成正覺兮威音前、桃李不言、待三會春於率陀宮裏、芭蕉無耳、聞五逆雷於濟水那邊、力囮希、咄咄咄、妙難思、玄玄玄、要識端的麼、不可以言宣、擧香、看看、歸來坐虛室、夕陽在我西。

無礙妙心禪尼香語

擧香、妙妙妙兮非思量、心心心也不可得、此是孃生本來香、十月勝花丹楓色、夫以、無礙妙心禪尼、內懷慈仁、外少緣飾、忽爾示雙趺於棺槨側、竺土仙、日日涅槃、依然證三昧於寶鏡前、曹家女、時時拂拭、何處不風流、大地絕消息、雖然恁麼、到向上圓極龍門、別有公案一則、代他兒孫、報恩酬德去、閻浮樹下笑呵呵、舜若多神面皮黑、挿香、露。

文苑理總大姉香語

永正第四三月侍史、某啓老拙云、正當三十日者、祖母文苑理總大姉小祥之辰、於戲、吾無卓錐之地、以何報老婆心切之恩乎、老拙云、淨名居士不道乎、其施汝者不名福田、供養汝者墮三惡道、其義如何、汝只將這箇、如法報恩去、縱有從來習氣五無間業、盡成解脫大海、豈不快乎哉、侍史不覺點頭一笑、仍作祇夜一篇、以代香語云。

八十婆婆養子緣、莫聽鶯語作啼鵑、此中無限傷春意、錦上添花又一年。

松巖大姉一周忌香語

雲山南源首座告、休云、臘且者吾先妣松巖大姉小祥忌、然而炷無香奠無茶、以何酬恩乳乎、休咄云、無香無茶、已酬了也、首座揖云、謝供養、休云、蒼天蒼天、若非南源不子子、非松巖不母母、慈明銀盆睦州蒲鞵、不可當焉、別有香語、一回拈出去。

端的酬恩有甚難、黃金義也鐵心肝、黑崑崙畫蛾眉出、雪裏芭蕉冬牡丹。

德雲院殿前刑部通叟普公大禪定門盡七日香語

擧香、本來香屬本來人、鼻孔依然挂上唇、七七光陰消底物、薔薇露重一枝春。薩訶世界南贍部洲、大日本國山城州平安城居住、奉三寶弟子孝男土佐法師、大永三年孟夏十有五日、家門伏值先考德雲院殿前刑部通叟普公大禪定門盡七之辰、每忌就私第莊嚴道場、延請緇倫、經乎晝禪乎夜、燈乎夕香乎晨、勤修諸般白業、白業何乎、大乘妙典、頓寫漸寫印寫各若干部、水陸妙供、兩會圓通懺儀二座、夫法華者有當體蓮華、有譬喩蓮華、異而不異、均而不均、在此方則纔是七軸、在西方則布一由旬、長者門外駕三種之車、信樂衣裏繫無價之珍、寶處在近、維德有隣、夫水陸勝會者、過去靑提濫觴於岷、滅四倒八苦業火、救三有九界沈淪、梁武設金山會、以愍塗炭之民、今日施主亦復如是、上報先考罔極之恩義、下資群生無量之苦辛、其餘波及普天之下率土之濱、夫圓通懺儀者、慈雲懺主所修撰也、抑觀大士之應化、無刹不臻、小白花大白花、亂墜紛繽、借柳枝獻水、鋪草座爲茵、弘誓海好問津、特彫刻當忌尊醫王善逝聖像一軀、夫藥師者、乃是東方滿月世界敎主、廣嚴城中醫王也、昔發十二大願、而示不死還

年妙藥、是故寶號一經耳、則衆病悉除、身心安樂、作麼生是安樂處、請放下身心看、無佛病之可蘇、無祖病之可療、更不假一粒還丹、轉凡成聖、轉聖成凡、千年桃核、討甚舊時仁、預於今月今日、散筵營辦伊蒲淨膳、以擬采蘋、仍命現前苾蒭衆、同音諷演白傘蓋無上神呪之次、借手龍安小比丘宗休、焚此爛枯薪、供養三世十方薄伽世尊、當忌醫王善逝。現座道場無量壽佛。微塵刹土諸賢聖等、所萃殊勳、奉爲神儀資嚴報土、願憑此閒薰力、頓出解脫毒海、速乘無上法輪、共惟、大禪定門、運籌帷幄、列位縉紳、學晉帖而縈蚰蚓、詠和歌而感鬼神、封弟剪桐、拜冕旒於淸和天子、賜姓食采、續箕裘於滿仲朝臣、源深流遠、其命維新、德雲相見別峰、驅雜華之春、試遊巒、達磨不來此土、和普通之雪賣假銀、鐵笛千古恨、燈花十年親、喚醒這野狐精、楊柳綠暗、參得他村獨猻、黃梅月新、恁麼不恁麼、全眞全俗、不恁麼恁麼、全俗全眞、飛花開二十五圓通、則直印香嚴本寂、餘薰證八百功德、則忽了金仙前因、正知見力入麤入細、大丈夫心不緇不磷、到這裏說什麼自受用他受用、論什麼理法身智法身、淨躶躶地無寸土、淸寥寥地絕纖塵、雖然與麼、獲蔭後昆底一句、即今如何指陳、草木山河增瑞氣、虛空產出玉麒麟。

東漸寺殿光翁亘公大禪定門七年忌拈香語

擧香、這七梅花、始太極長無根、得之於心、則忽作栴檀樹、失之於旨、則便變蒺藜園、前釋迦不前、日日成道、後彌勒不後、處處稱尊、龜毛抽葉、而布三千世界、兎角開花、而魁二十四番、花光老畫不成、孤芳皎潔、林逋仙吟未了、暗香黃昏、昨夜三更、和卻邯鄲道上夢、今朝九日、拾得羅浮山中村、去卻一拈得七、以作返魂、我欲供養佛祖、佛祖與我生冤、不若挿向寶爐下、供養光

翁大禪定門、且道、寶爐下是什麼、元來一箇鐵崑崙、鐵崑崙蹲跳、上三十三天、築著帝釋鼻孔、山僧打一棒、百雜碎、雨傾盆、薩訶世界南瞻部洲、日東城州平安城居住、大功德主源朝臣虎壇、明年甲申春王正月初九、伏値先考東漸寺殿、贈從四位下前房州太守光翁亘公、大禪定門、七周忌之辰、預於今茲大永三天臘月今日、供佛齋僧、陳菓茗、愼終追遠、羞蘋蘩、先庚七日、設道場於本寺、晨夕香莊嚴・華莊嚴、晝夜經三昧禪三昧、其志敦矣、就中彫刻當忌東方無動佛尊像一軀、薩芸妙芬陀利・頓漸印讀如干、茲總管府君右京兆、特抽丹悃、本門壽量親書者一品、一品中該權大乘實大乘、淺深莫測、一毫端現本壽量跡壽量、短長難論、多少談玄說妙、十分酬德報恩、圓通懺儀一座、水陸妙供一會、諸經來由、諸佛事迹、不遑枚擧、住持事繁、今臨散筵、鳩六和苾蒭衆、諷演萬行楞嚴咒之次、借手龍安休上座、焚這小兜樓、奉供養三世覺皇・十方薩埵・西天東土列祖師・天界地界諸神仙・日域大小神祇・冥府十殿王等、伏冀、檀越憑這聞薫力、直踏毘盧頂上、行莫隨他脚跟、共惟、大禪定門、威雄霜冷、談笑春溫、聖續聖賢續賢、拜四位乎北闕、兄爲兄弟爲弟、接長老乎東軒、梧桐名上鸑翔鳳舞、藕絲竅裏鯤化鵬騫、胸中數萬甲兵、掃除熙寧・元豐餘黨、門下三千賓客、扶起文德清和末孫、蓋雖王侯將相無種、而如江河淮濟有源、畫堂晝閑、愛雲愛僧、青山下榻、朱欄日轉、酌花酌鳥、石坳爲樽、不趨金湯法社、矧復黼黻諫垣、觸其諱者、王老庭前、天地同根之陸大夫、空華何勞把捉、具其機者、馬祖庞畔、萬法不侶之龐居士、江水豈足平吞、將謂、小睡語大睡語、已是禪狀元儒狀元、玉鐙金鞭、跨臨濟之大龍不得、皮履直裰、夢投子之俊鷹以原、君臣道合、宇宙名噴、或時開知見戸牖、薰知見香、

記同參夜雨旬、或時入解脫國土、著解脫服、甘杜多風露殞、進退學前佛模範、殺活奪外道赤幡、聽曉鶯於武侯祠堂、出騎漢巴、長留八陣磧、詠群鵝於房公池館、致君堯舜、再回大雅轅、喜氣雪消冰解、號令電卷雷奔、何物恁麼來、雲在嶺頭閒不徹、何物恁麼去、月穿潭底水無痕、鑊湯爐炭、一吹吹滅、銀山鐵壁、一踢踢飜、洒洒地落落地、離窠臼絕籠樊、者僧時節、印甚香嚴本寂、管甚閻羅平反、雖然漝麼來年更有新條在、如何覆蔭後昆去、諸仁者試聽山僧重說偈言、

吹毛不動定乾坤、生氣凜然今尚存、眞照無邊大人相、扶桑樹上掛朝暾、喝一喝。

德雲院殿小祥忌香語

三月正當春一回、一回花落又花開、欲知鼻孔指南旨、拈卻門前下馬臺、薩訶世界南瞻部洲、豐葦原山城州平安城居住、大功德主源五郎、大永四年三月二十六日、家門伏値先考德雲院殿前刑部通叟普公大禪定門小祥忌辰、仍攀供佛齋僧之舊例、先期就私第、莊嚴梵筵、一香一燈、不廢晨夕、維誦維禪、不舍晝夜、勤修善因、資助冥福者七日、特當忌尊無邊光佛慈容彫刻者一軀、水陸無遮勝會施設者一場、今當散忌、營辨淨饍、延請緇侶、諷演首楞嚴神咒之次、命龍安小比丘宗休、炷這一瓣香、奉供養本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉二菩薩、現座道場無量壽佛、觀音勢至二脇士、三世十方諸大薩埵、西來東土諸大祖師、天仙地神日域諸神、冥府鬼主鬼官、三有九界之群生等、伏冀、神儀憑這知見力、脫無數劫來生死淪溺、昇四十九重摩尼殿陔、桃花色民、雖同傳翁之號、慈氏華嚴法界、何異德雲之接善財、共惟、大禪定門、荊岫美璞、鄧林奇材、致孝乎北堂萱草、動興乎東閣官梅、圯上傳書、進黃石一隻履、江南定策、付普

第兩三杯、典刑存矣、晩節難哉、兵衛畫戟、燕寢淸香、朱簾暮捲、歌臺暖響、舞殿冷袖、急管畫催、紅顏昨日、丹心寒灰、托道根於心地初、蘇端明慕香山居士、散天花於丈室內、維摩詰稱金粟如來、千載囘英靈之氣、四海仰王佐之才、日午打更、增上慢人、鷲嶺退席、上巳餘景、積行菩薩、龍門曝顋、認甚已說今說當說、管甚火灾水灾風灾、在聖同聖、在凡同凡、誰家無明月、逢佛殺佛、逢祖殺祖、何處有塵埃、休休休、乾坤窄星辰黑、莫莫莫、虛空消鐵山摧、與麼時節、金剛王氣凜凜、昆侖兒笑哈哈、此是通叟三十八年、橫拈倒用底䦨事、山僧別有一道咒、保祐後胤、長養聖胎去、唵蘇嚕唵蘇嚕、兎角龜毛眼裏栽。

珠溪宗輝禪定尼三十三年忌香語

一片孝心心字香、消來三十有餘霜、分明呈露孃生面、秋日花開紅海棠、大日本國山城州平安城居住、奉三寶弟子孝男源政眞、大永五年九月二十有三日、家門伏値先妣某三十三白遠忌之辰、先期就第、莊嚴梵筵、一華一香、供佛齋僧、七晝七夜、誦經習定、諸般良因、修之勤之、仍命工彫刻當忌尊虛空藏慈容一軀、七軸蓮經、頓寫漸寫印寫若干部、圓通懺儀、水陸妙供各一會、今當散忌、營辨淨饍、拜屈緇郎、諷演白傘蓋神咒之次、借手於龍安小比丘宗休、焚此小兜樓、奉供養本師釋迦牟尼善逝、當忌虛空藏菩薩、當來補處慈氏尊、西方無量壽佛、濡首徧吉二大士、觀音持地兩薩埵、三世十方諸賢聖、西天東土列祖師、天衆地神冥主冥官、一切含識等、伏希、淑靈遐這薰力、速登覺場、夫惟、珠溪宗輝禪定尼、雲路翡翠、丹山鳳凰、斷機曾學孟軻親、善隣維寶、截髮或効陶侃母、夙債難償、施仁澤於林野、寄生涯於洞房、追遠愼終、左花

右竹、昭穆列廟、出群拔萃、東蘭西蕙、兄弟聯芳、金屋粧成、門闌喜色、畫屏影冷、銀燭秋光、入室受衣、秦國太慕洋嶼、關空鎖夢、普賢女[illegible][illegible]郎、破微塵出經卷、假四大作禪牀、加之、論其密用、則法身五分、依俙竺土仙說香譜、按其家系、則正位一色、彷彿曹山祀打商量、精神可掬、文彩已彰、心卽是佛、佛卽是心、燒葉爐中無宿火、寂而常照、照而常寂、折枝鏡裏憶新粧、端的報恩報德、畢竟非存非亡、是故三十三年前、逆順縱橫、變天堂作地獄也得、三十三年後、隱顯自在、變地獄作天堂不妨、事事無礙、法界刹刹、本有故鄉、金雞啄破鐵卵、石虎吞卻木羊、正與麼時、淑靈從光耀土起、現八吉祥而唱甚深般若曰、昔有護國珠、名仁王、是乃覆蔭後昆底要訣、卽今如何承當去、大唐國裏打鼓、新羅人舞袖長。

見室妙性禪定尼二七日忌拈香

金香爐下鐵崑崙、擊碎將來直報恩、指點轉身那一路、淡烟翠竹繞江村、薩訶世界南贍部洲、大日本國河州茨田郡中振鄉、今月二十有九日、伏値見室妙性禪定尼二七日忌之辰、吾徒園也來告老拙云、見室平生有博愛之仁、而於某如一子、某也於見室如阿母、厥德難報、厥恩難忘、以故設菲薄之奠、仍供佛齋僧之次、借手於老拙、焚一片妙兜樓、以伸供養、伏希、禪尼憑這箇薰力、頓超九十億劫生死、速到無上正等覺園、夫惟、見室妙性禪定尼、標格雪潔、襟懷春溫藉藉家聲、梅是兄蘩是弟、昭昭淑德、蘭之子蕙之孫、項上三百鐵枷、脫卻人天果福、腳下一條紅線、截斷佛祖命根、赤洒洒沒窠臼、淨躶躶絕籠樊、到這裏、全無彌陀可念、更無能仁稱尊、雖然憑麼地、如上許多陳葛藤、猶是生死岸頭事、別有向上圓極法門、如何覆蔭後昆去、挿香、

暮樓鐘鼓月黃昏、喝一喝、

清泰院殿常春宗榮大禪定尼一周忌香語

擧香、這常春木不知朝菌之晦朔、何屬蓍草之陰陽、開華靈鳥巖前、則邪氣妖氛、穿破諸聖鼻孔、託根野狐窟裏、則毒芽惡孽、爛殺列祖肝腸、薰於螺甲沈水、毒似烏頭砒霜、得枝者貴枝、多羅八萬藏錯標月、得葉者貴葉、好堅四十圍猶帶霜、葱葱鬱鬱、久久昌昌、信手拈出聊酬小祥、看看、凝爲岐陽九月微雪、散作濟北一株蔭涼、咄、香嚴童子來也、聽對淑靈重唱祕章、女中堯舜仰萱堂、寵雨恩烟解脫香、捲起珠簾高著眼、青山不改舊時粧、大日本國云云、大功德主三寶受戒弟子源朝臣六郎、享祿二年太歲己丑九月二十九日、先妣淸泰院殿常春宗榮大禪定尼小祥忌之辰也、預就于般舟三昧道場、集十員緇侶、修諸般白業者七晝夜、彫造大勢至菩薩尊像一軀、醍醐味經王、頓漸印讀若干部、圓通妙懺一座、水陸淨供一會、茲有一件奇事、大孝男源府君、從經王二十八品內、抽提婆一品、手自膽寫焉、紅心心裏紅心、一乘無價珠繫以祕在、好手手中好手、五百塵點墨磨何消亡、妙義不可說、功德不可量、諸仁未信問取阿孃、自餘善利忌佛事迹、眞詮祕咒之功驗、不遑縷陳、還他央庠底座主、今日正當散忌、虔備須彌香華、海水燈燭、鬼搗粢佛跳牆、以伸廣大供養、仍延請赤鬚白足、圓頂方袍之輩、異口同音、諷演大佛頂光聚心佛所說無上神咒之次、命妙心小比丘宗休、焚此畢力迦、奉供養三世歷代乃佛乃祖、上界下地、或天或鬼、一切含識等、伏願、淑靈憑這箇薰力、不借慧海慈航、提誘諸趣苦類、同登心空場、共惟、淸泰院殿常春宗榮大禪定尼、天曆末裔、具平餘芳、芳聲美譽、坤軸式

載、淡粧濃抹、湖鏡不藏、創祠院號清泰都、譬如韋提希觀七重寶樹、賜溫泉爲湯沐邑、恰似太眞妃起一門諸楊、龍舒居士、記樂邦文類、龜臺金母、祝家運延長、山河始終、剪桐葉封小弟、風流蘊藉、愛蓮花稱六郎、蓋源深則流遠、好時至而理彰、今歸碧落之天、搗藥、失嫦娥於后羿、昔遊赤松之地、詠梅、比婦人於張良、群臣獻策決勝千里、二豎作祟戰化他方、長夜漫漫蓮帳猿鶴、且驚且怨、涼飇颯颯、金籠蟋蟀、堪悲堪傷、政德治國、雖同任姒、壽夭在天、弗異彭殤、其來也放開線路、其去也把定封疆、難難、出佛界入魔界難、冷笑摩登伽誑慶喜、易易、變女相成男相易、熱瞞妙德尊度勝光、不逢盤根錯節、爭辨鈍鐵利鋩、百億分身、菖蒲現釋師子、五逆消滅、芭蕉觸香象王、箇箇圓成、實性塵塵、本有家鄉、雖然如此、保祐後昆那一句、只麼舉揚去、臥龍纔奮迅、丹鳳亦翺翔、

逆卷前雲州太守春谷永源禪定門盡七日忌香語

吾有本來香一瓣、無陰陽地長無根、非烟非火又非木、將此深心報佛恩、大日本國河內州茨田郡居住、奉三寶戒弟子孝男源朝臣宗綱、天文五年六月初二日、伏値先考前雲州太守春谷永源禪定門盡七忌之辰、今月今日、預就于盛和精舍、莊嚴梵筵、營辦伊蒲淨饌、供佛齋僧、蓋酬椿府罔極之恩也、當忌醫王善逝尊像、彫刻者一軀、七軸妙蓮、漸寫者二部、孝男宗綱所自書之本門壽量一品、水陸妙供施設者一會、三摩耶形造立者一基、仍集六和苾蒭衆苾蒭尼、異口同音、諷演白傘蓋神呪之次、命靈雲小比丘宗休、焚斯小兜樓、以奉供養三世十方諸佛、西天東土列祖、天衆地神、冥主冥官、三有九界苦類、依草附木精魂等、伏願、尊靈憑這箇薰

力、頓超生死大海、永歸自性本源、共惟、某名、威烈霜冷、笑談春温、譬之於姚黃魏紫、則且富且貴、仰之於召棠萊柏、則如亡如存、建阿育塔、開給孤園、積善餘慶、必及兒孫、名翼搏空九萬里風、北溟鯤化、夢魂驚曉五十三年、南柯蟻屯、久苦青苗新法、每憂稼穡艱難、文王仁義釋迦、現卑小丈六相、維摩再生金粟、入眞俗不二門、瞬息星移斗轉、默處電卷雷奔、淨躶躶絕承當、合佛界魔宮、生擒活捉、赤洒洒沒窠臼、和鶴樓鵡洲、拳倒踢飜、直印香嚴本寂、豈待琰羅平反、故家喬木覆蔭後昆、擧香、看看、何料平生臂鷹手、黃金鑄出鐵崑崙。

芳室妙薰禪定尼七周忌香語

稱千佛母老摩耶、未足酬恩前釋迦、薰徹黃泉穿碧落、一爐沈水七梅花、大日本國河州路茨田郡高瀨村、富春院守塔宗仙、天文六年龍集丁酉三月十二日、伏值先妣芳室妙薰禪定尼七周忌之辰、就于靈雲禪院、虔備香華燈燭茶菓珍味、營辦伊蒲淨饍、以供佛齋僧之次、命小比丘宗休、焚斯爛枯柴、奉供養三世十方諸佛、西竺東震列祖、鬼畜人天、一切群迷等、伏願、淑靈憑這箇妙薰力、提誘諸趣苦類、俱到眞如海涯、夫惟、某名、蟠桃結實、紫蘭茁芽、雖感蘇內翰間富貴、不奈靈照女無賴查、超越群機、佛界魔界衆生界、誘引諸子、羊車鹿車大牛車、脚下斷紅線、項上脫鐵枷、休休休、修多羅教標月、咄咄咄、金剛眼睛撒沙、薰風徐來、珠簾半捲瑠璃滑、紅雨亂落、宮扇始開翡翠斜、法無二法、是正是邪、香嚴本寂、誰定譌訛、插香、看看、東海赤梢鯉、吞卻南山鼈鼻蛇。

壽陽宗祝信女誦法華千部供養拈香語

古來錯被法華轉、轉得文文句句新、大藏五千餘卷外、爲君拈出一枝春、散說不錄、夫以、誦經功德主、壽陽宗祝信女、昔退法席、今乘願輪、聽復講於十六王子、立化城於三百由旬、當體蓮譬喩蓮、天台一夏談妙、無憂樹菩提樹、瞿曇九劫超倫、向鍼鋒翹足、飮醍醐沾脣、至聖命脈、列祖大機、悟之者得解脫、諸佛本懷、衆生直道、迷之者受沈淪、鷲子受靈山記、龍兒獻滄海珠、正宗流通銀世界、普賢示長男相、方便濟度金沙灘、觀音現婦女身、誦經聲洋洋乎盈耳、耕鏡光熒熒然効鑾、出門三種寶車、蕙苡多讒、書空七軸文字、棘木不眞、或時踢倒寶所、或時把定要津、雪嶺草香、生蘇味熟蘇味、兜率花發、此岸人彼岸人、圓頓速疾、開迹顯本、漸次修行、結果收因、雖然與麼、言前的旨如何指陳、挿香、爇向爐中、果何物、白灰撥出玉麒麟。

壽陽宗祝信女逆修三十三白忌香語

咄箇幻人修幻緣、從初七到三十三年、爐香鑄出崑崙鐵、散作江南白鳥烟、薩訶世界、南贍部洲、大日本國河州路茨田郡功德主、奉三寶戒弟子宗祝、天文八祀龍集己亥歲、早懼當來苦報、逆修現在善因、始于初七忌、終三十三白忌、捨淨財、借手靈雲小比丘宗休、供佛齋僧之次、拈小兜樓一片、以奉供養三世十方諸如來諸薩埵、西天東土歷代諸祖師、天衆地神、日域六十六州大小神祇、鬼主鬼官、六趣四生、一切群類等、伏冀、憑這妙薰力、上透靑霄、下徹黃泉、加之、現得安寧、後生覩史天、記旃、夫惟、預修功德主、壽陽宗祝信女、捨邪歸正、顯實開權、其與留功名於身後、不如修冥福於生前、百陋一姝、學壽陽公主之梅花糚、而呈含章面、三從五障、償秦國夫人之竹篦債、而慕洋嶼禪、藥爐・經卷・活計・荊釵・布裙・家傳、戒香・定香・解脫香、莊嚴報土、

見濁・命濁・煩惱濁、汚染心田、眞如・自性・清淨・本然、晝降閻浮、夜歸率陀、廣寒宮裏攀桂、朝入伽藍暮成正覺、無垢世界坐蓮、奴呼龜臺金母、婢視龍女華鮮、畫不成描不就、妙又妙、玄又玄、雖然恁麼、吾家別有長壽曲、把鸞膠續斷絃去、以香插爐云、欲見法身無相相、門前不改舊山川。

義峰宗卓禪定門十三回忌香語

曾從華屋落泉臺、露結爲霜秋幾回、回斡春風天八月、返魂香屬一枝梅、大日本國攝津路三島江村居住、奉三寶戒弟子功德主大江長能、天文十二年八月十有九日、家門伏值前左金吾義峰宗卓禪定門十三回忌辰、先甲三日、就于私第、莊嚴梵筵、一花一燈、一香一茶、供佛齋僧、修諸般白業、就中、當忌尊大日覺王像彫刻者一軀、山頂經漸寫者一部、圓通妙懺修禮者一座、此外作善品目、載在僧官舉唱之中、今臨散筵、營辦伊蒲塞淨膳、南僧諷經之次、命靈雲休上座、焚這決願香、奉供養當忌尊大日覺王、三世十方諸佛、西天東土列祖師、天界地界水界大小明靈、日域大小神祇、冥府鬼主鬼官、三界二十五有苦衆生等、伏希、憑這聞薰力、超五百由旬嶮難惡道、登四十二重摩尼殿陛、共惟、禪定門道根熟矣、晩節難哉、任右京兆尹、則爭百八珠於大顚、露柱歌燈籠舞、任左衞門尉、則奪一條棒於德嶠、虛空消鐵山摧、雖有大乘之器、罕逢直指之才、淵明風流、黃菊猶存、今作故物、田眞兄弟、紫荊復茂、昔用賢材、蝴蝶空續殘夢、蟋蟀暗助餘哀、十劫波前、坐智勝佛道場、盡是時人窠窟、一炷煙中、印香嚴童本寂、寧受世俗塵埃、須彌穿鼻孔去、舜若劈面皮來、社燕秋鴻雲淡兮、渭北春樹暮、甲鷗乙鷺天碧兮、江南野水隈、圓通境漸入、解脫門頓開、千佛廣額抛下屠刀、豈待涅槃拈拾、五逆達多、授與記莂、莫

貪、法華付財、擧香、這箇磨而不磷、涅而不緇、潤之以雨、鼓之以雷、全依他力、長養聖胎、看看、摩訶般若波羅蜜、兎角龜毛眼裏栽、咄。

心源宗淸禪定門二十五年忌香語

地獄天堂夢蝶牀、覺來二十五年光、香消金鴨何飛去、扭住鐵崑崙鼻梁、大日本國山城州洛陽居住、功德主孝女妙泉、天文甲辰二月十有五日、伏値先考心源宗淸禪定門二十五遠忌之辰、就于靈雲精舍、資嚴法筵、備香華燈燭茶菓珍饈、以伸供養、大乘妙典頓寫一部、圓通懺摩一座、水陸供一會、仍集苾蒭衆、諷演首楞嚴神咒之次、命休上座、焚這妙兜樓、奉供養當忌尊虛空藏菩薩、三世十方諸佛、西天東土諸祖、日域大小諸神、六趣四生一切群類等、仰冀、憑者箇薰力、速乘解脫航、夫惟、禪定門器之瑚璉材也、豫樟起於南陽廬者、孔明臥龍奮迅、吸以西江水底、龎老丹鳳翺翔、不翅進出師表、直得登選佛場、高義薄層雲、如松下見陶介、聲價動寰宇、似花中有孟嘗、將謂、魯多君子、元來晉無文章、踢倒五陰山、則定策於涅槃後陣、打破三界獄、則掃迹於本覺故鄉、恁麼不恁麼、活鱍鱍沒拘束、不恁麼恁麼、淨躶躶絕承當、雖然如是、保祐後昆一句、若何商量、擧香、海國乾坤潤、蓬萊日月長。

月江宗光禪定門小祥忌香語

擧香、晩梅二月折殘枝、信手今朝拈出來、風笛一聲花落盡、三千世界暗香吹、扶桑國山城州洛陽居住、功德主宗淸信女、天文甲辰初秋十三日、伏値月江宗光禪定門小祥忌辰、預於今月今日、飾梵筵、集淸衆、諷演白傘蓋之次、借手於休上座、焚這小柴片、奉供養諸佛諸祖諸衆

生等、所希、頓超苦海、速到彼岸、夫惟、某名、一棚俊鶻、千里烏騅、宋先生曾作日本歌、今尙存矣、融大臣始賜源氏姓、民具瞻之、不翅斥鹵桑田變、矧復夕陽花塢遲、降生死魔、則指麾竺乾猛將、殺煩惱賊、則鼻笑棘門戲兒、家業學書學劍、虛名如斗如箕、槁木死灰、或時呵莊座主稱羅漢、聞桂悟道、或時逼黃詩祖陷泥犂、吾無隱汝、君說向誰、南海沈檀、爇卻一爐、其功德不可說不可說、西方法華頓寫七軸、其妙理、也太奇也太奇、山露此郎面目、天感阿母慈悲、若認聲色、有甚了期、這裏無面目、又無慈悲、擧香、看看、金烏飛出暘谷、鐵馬跳上須彌。

宗璘禪定門一周忌香語

落葉兩三片、拈作本來香、八百鼻功德、遍界不曾藏。

臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三回忌陞座、　於駿州大龍山臨濟寺修之

大龍再現大人身、擧香、乘這香雲忽脫鱗、呑卻十三華藏海、吐成臨濟百花春。

垂語、　祖師因甚西來、蕉葉聽雷展、佛法因甚東漸、葵花向日傾、小玉小玉、只要檀郎認得聲、參、有僧(梅室座元、)出衆問云、正法輪轉、隨芳草逐落花、大施門開、入檀林出荆棘、更示密旨、願應來機、師云、天鑑無私、進云、洛陽牡丹新吐蘂、師云、大似春意、進云、大功德主源府君、今月十七日、伏値臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三回忌景、拜屈大和尙陞座說法、未審說什麼法、師云、今日好晴、僧云、記得、鎭州府主王常侍、請臨濟慧照禪師陞座卽云、此日以常侍堅請、那隱綱宗、如何是不隱底綱宗、師云、吾宗無語句、又無一法與人、進云、大和尙今日受吾源府君請、爲臨濟寺殿陞座、謂之賓主互換乎、師云、戲海猛龍、摩霄俊鶻、進云、與麼則覲彼久遠猶如

今日、師云、日月垂秦樹、乾坤繞漢宮、進云、三尺吹毛定寰宇、師云、阿刺刺、進云、四叢圍繞、間世優曇、謹謝答話、師云、月從雪後皆奇夜、天到梅邊有別春。

提綱、　元亨利貞始於一氣、常樂我淨本乎一心、心法無形、蕩蕩乎充塞宇宙、面前有物、昭昭爾輝騰古今、乾馬坤牛猶不覆載、坎烏離兎、何敢照臨、綠是毘盧先天、善財後天、空裏結紐、靈山指月、曹溪話月、海底摸鍼、六白冷坐勞佇思、百城煙水費參尋、爾來効少林驟、石女吹無孔笛、識靖節趣、木人奏沒絃琴、露柱歌燈籠舞、山花笑野鳥吟、未逢妙旨、全絕知音、正與麼時、拈秋、牀角有拄杖子、不入他保社、忍俊不禁、驀路出來、吧吧地道、能殺能活、能縱能擒、遠法師因甚不過虎溪、被山僧拶著、目瞪口呿、雨打池蓮、十緇八素、無繩自縛、風吹岸柳、六凡四生、點鐵成金、畢竟非空非色、元來無陽無陰、正好打破葛藤窟、剗除荆棘林、卓一下、若不登樓望、爭知滄海深。

散說、　大日本國駿州路居住、大功德主源朝臣義元、天文十七年三月十七日、伏値先君臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三白遠忌之辰、就于本寺莊嚴道場、先甲七日、命十員緇侶、晨香夕燈、晝經夜禪、修諸般白業、以伸供養、當忌尊大日如來像彫刻者一軀、圓通懺摩修禮者一座、水陸妙供施設者一會、法華經王頓漸書寫者如干、大功德主本門壽量自書者一品、今當散筵、營辦伊蒲塞淨膳、謹集清淨衆、諷演白傘蓋無上神咒之次、拜請雲居天上之三秀堂頭和尚、燒鴣斑、發鯨吼、副命野桃花下之靈雲比丘宗休、秉塵拂作驢嘶、因檀命也、共以、大禪定門、人中杞梓、名上梧桐、水尾之流、賜源姓承多田滿仲、淺間之雪、詠和歌獻普廣相公、此郎

武門閥閱、其先亂世英雄、褰仁義裳、升吾堂兮入吾室、續箕裘業、讀父書兮有父風、領取駿州太守、割據鴻溝以東、魯直鬖䰐碧瞳、現烏跋千年之瑞、馬溫瑠璃皎佛、比牡丹一日之紅、屈膝王侯貴介、誦名走卒兒童、貧不諂、富不奢、一揚二益、三京四汴、近者來遠者服、南蠻北狄、東夷西戎、坐宣幕下、遊羿彀中、滕王蛺蝶穿花、依俙相似、張顛驚虵入草、彷彿不同、心正則筆正、畫工者詩工、春陰十萬營、透細柳圈、雲夢八九澤、呑栗棘蓬、胸襟洒洒落落、佳氣鬱鬱葱葱、加之、連聲叫兄、鼇山昔時成道、他方戢化、雄峯同日示終、隻履瘞地、雙劍飛空、活鱍鱍沒拘束、淨躶躶絕羅籠、此是大禪定門從前閒絡索、玆有四事筆供養、一一揚擧去、其第一云、卽身大日法中王、朝照扶桑暮落棠、不信出頭天外看、人人脚下一靈光、是謂阿字之筆供養乎、其第二云、過去如來正法明、耳根清淨眼根清、楊枝洒水兩三點、饒舌黃鶯懺悔聲、是謂音聲之筆供養乎、其第三云、大地廣開甘露門、和風供上插黃旛、寃親平等曲終後、倒十恒河一口呑、是謂大盆小盆之筆供養乎、其第四云、虛空是紙月毛錐、無字經王錯寫來、可笑秀能分頓漸、南枝春早北枝遲、是謂頓書漸書之筆供養乎、更有那一事之筆供養、供養三世佛、三世佛敢不受、供養六代祖、六代祖敢不受、供養三十三天衆仙、衆仙亦不受、供養六十六州諸神、諸神亦不受、未審大禪定門御受麼、別別金剛眼睛、在源公筆頭上、收拂叉手、謹謝供養。

自序、宗休、樗櫟遺韻、蒲柳衰容、取笑傍人、凌千里蠅附驥、越位流輩、登三級魚化龍、豈合大士講經之內證、叨攀世尊陞座之前蹤、枉賜恕宥、莫罪忩惷、忸怩忸怩。

檀謝、 陞座之次、共惟、大功德主、海壖馬子、砥柱鳳雛、薔薇古洞留春、蚤慕謝傳、梅花門戶掩

雪、晚訪林逋、奈彼蒼生黔首、拜他白足赤髭、一卷兵書、盡美矣盡美矣、半部論語、執御乎執射乎、必稱八州都督、況秉三世相樞、法門英檀、如匿王受佛敕、在家菩薩、似大帝護吾徒、願保華甲、仰祝蘿圖。

總謝、又惟、四來高賓、一會海衆、諸位禪師、文經武緯諸尊官、得得來也貫休、三千指醉花、堂堂去也雙徑、五百衆繞樹、仰之高於御前山、譬之清於僧中月、若磬褒讚、恐瀆尊聽、各乞昭亮、

拈提、　記得、僧問雲門、不起一念時、卻有過也否、門云、須彌山子細點檢、兩箇胡孫探水月、休上座亦管中窺豹、得其一斑、百億迷盧一念間、等間踢倒入東關、呵呵拍手初相見、富士彌高吾用山、久立珍重。

斑秀才一周忌香語

命一庵衆、爲斑秀才諷經、山僧擧一香云、這箇是人人具足本來圓成底、喚作什麼、衆下語、

山僧咄云、不是、遂偈而充小祥之供云、

風前柳惹去年恨、雨後花摧今日腸、非柳非花果何恨、本來鼻孔本來香。

秉炬

月巢初公座元下火

龜哥報道八月吉、吾首座行脚了畢、可惜一朶玉芙蓉、秋風吹作紅爐雪、夫惟、新圓寂月巢座元、籌室先登、風塵表物、折臂學醫、願神得術、二株嫫桂、卜地則覆蔭後昆、一杯紅杏、酌春則追墓前葫、弗翅發德香發道香、矧復保初節保晚節、或時繫眞珠於衣裏、在凡同凡、或時按寶劍於眉間、逢佛殺佛、顚頂儱侗、眼睛烏律、加之、挂鉢囊拗拄杖、鑽之彌堅、仰之彌高、透金圈呑栗蓬、涅言不生、槃言不滅、咄咄咄、籠絡馬面夜叉、玄玄玄、鞭笞牛頭獄卒、畢竟如何、萬法歸一、一亦莫守、首座還委悉麼、拋火把、摩訶般若波羅蜜、甚深般若波羅蜜、喝一喝。

季友契公首座下火　二月六日

涅槃活路瞎驢邊、先老瞿曇著一鞭、七十六年牽陀夢、春禽聲裏夕陽遷、夫惟、某名、胸呑雲澤、姓出芥川、全機不覆藏、或時繇案石頭參同契、內外無瑕翳、或時覰破圓鑑九帶禪、這箇消息從那裏傳、加之、在聖同聖、在凡同凡、秋菊春蘭、爭其易地、逢佛殺佛、逢祖殺祖、淸風明月、元是同天、步步蹈斷毘盧頂、明明透脫威音前、色卽是空、說什麼鑊湯爐炭、空卽是色、論甚麼淸淨本然、契首座契首座、行脚事且置、如何是汝生緣、倘復未會、試聽山僧敷宣、拋火把、舜若多神叫希有、火虵吐出盡三千。

玉照寶公首座下火

形山一寶鐵圍關、鑿直回光返照看、鍊出千秋西嶺雪、丙丁童子面門寒、夫惟、某名、林間薝蔔、夜裏栴檀、開文武爐、爆徑山一粒烏喙、破生死窟、拈佛日三尺黑蚖、過與禪板、倒卻剎竿、淨躶躶絕承當、破戒比丘不墮地獄、赤洒洒沒拘束、清淨行者不入涅槃、向上轉去、莫涉多端、會麼、拋火把、妙處欲言言不及、月移花影上欄干、喝一喝、

潛龍看公首座下火

咋夜潛龍起窟蟠、青天霹靂惡波瀾、無端吞卻乾坤去、吐作十三紅牡丹、

慧曇都寺下火

雙林樹下老瞿曇、生死無根胡亂談、八十餘年春一夢、巖花落地雨毿毿、

松壽茂公藏主秉炬

扶起吾臨濟正宗、清陰繁茂一株松、夜來不借風雷力、吞卻乾坤化大龍、夫惟、某名、輭頑手段、廓落心胸、急管晝催、賞花於宜春苑下、珠簾暮捲、翫月於大雲山中、一生消何物、自由任渠儂、加之、四十一年、溫而厲、恭而安、鍵鑰掌大藏小藏、三祇百劫、呼不回留不住、榔標入千峯萬峯、且道、藏主畢竟落在何處、拋火把、生死涅槃猶昨夢、城樓殘角寺樓鐘、

娛岳歡公藏主下火

蹈翻歡喜地、打破涅槃城、轉身那一句、月白又風清、夫惟、某名、峻機電卷、淵默雷轟、知見即無明、看過安楞嚴句讀、世間相常住、惹得言法華虛名、流水廣長舌、大地活眼睛、父母未生已前、

只恁麼、落花三片兩片、百年壽盡已後、只恁麼、脩竹一莖兩莖、藏主藏主、會便會、莫涉多程、雖然如是、別有向上關棙子、且待山僧施呈去、拋火把、勝熱婆羅門拍手、驚倒烏有老先生。

雲峯宗潘藏主秉炬

古今天地一遽廬、生死涅槃總是虛、劈破華山千萬朶、任他潘閬倒騎驢、藏主藏主、歸歟歸歟、若未知眞歸處、枯腸盡底說向渠去、莫認殘鶯成杜宇、江城五月月昇初。

不昧宗光藏主下火　少林派

萬里無雲三十棒、千江印月一靈光、少林別有春消息、火裏梅花遍界香、夫惟、不昧宗光藏主、釋門釋種、法社法梁、四十七年前、在僧房逢著菽冬花發、四十七年後、入禪林扶起蔭涼樹偃、或時伽耶寂光穩坐地、或時兜率閻浮遊戲場、鑽之堅仰之高、金剛眼睛烏律律、描不成畫不就、本來面目露堂堂、踢飜生死海、打破菩提坊、雖然恁麼、這裏非停住處、且向那邊商量、拋火把、演若何曾認影、善財不行南方、喝一喝。

宗柔上座下火　大永壬午仲冬十四日

剛勝柔兮柔勝剛、剛柔總不屬陰陽、一場富貴一場夢、覺後牡丹冬日香、宗柔宗柔、一切善惡、都莫思量、汝若涉思量、有天堂有地獄、非思量處、無地獄無天堂、何物恁麼來、何物恁麼去、畢竟是非存、畢竟是非亡、木馬斷雪、華鯨吼霜、還會麼、擲炬、安禪未必須山水、滅卻心頭火自涼、喝一喝。

無性能聖淨人下火

夫以、眞如法界無性爲性、實際理地不來而來、是故三世了達能仁鶴樹示滅、七地積行菩薩龍門曝顋、或時鐘樓上念讚、或時僧堂前挂牌、一夢一場、電轉星飛、究明己事、六十六年霜辛雪苦、長養聖胎、蕭寺秋風曳弊皮履而步月、林丘斜日擊塗毒鼓而轟雷、火首金剛怒發、陪燈籠笑哈哈、正與麽時、能聖淨人燒作一堆灰、灰身滅已、何處安排、倘復未委悉、山僧爲渠擧哀抛火把、捩轉廓然無聖位、山河大地絕纖埃、卽今若要冷相看、打破曹溪明鏡臺、喝一喝。

能久淨人下火　永明院

久遠劫來只這是、金烏玉兎不曾移、如今枕上無閒夢、大小梅花一任吹、夫以、某名、護惜常住、天鑑無私、密付傳衣、瞞卻嶺南村獦獠、禮拜卷席、曳回百丈野鴨兒、機輪轉處魔外難窺、不風流處也風流、銀山鐵壁百雜碎、有意氣時添意氣、鑊湯爐炭淸凉池、臘月三十日、眼光落地時、還會麽、說什麽會不會、還知麽、論什麽知不知、雖然恁麽、更有餞行一句、如何指麾、抛炬、永明門前湖水漫、慧日峯頭夕陽遲、咄咄。

月窻玄淸庵主秉炬

淸寥寥地絕纖塵、活路通時急轉身、七十餘年吟未了、風花雪月本來人、夫惟、月窻玄淸庵主、幻生幻滅、全假全眞、續歌於山邊赤人、則風流有種、賜姓於水尾天子、則意氣絕倫、有時松下麈、喝道、有時梅邊置別春、加之、庵主毒拳、趙州强辨深淺、宗師玄妙、洞山誤分君臣、窮而堅老而壯、涅不緇磨不磷、與麽時節、諸人試看、月窻庵主、向火焰裏轉大法輪、擲火把、白灰撥出紅麒麟、喝一喝。

觀禪人下火

夢幻空華如是觀、轉身活路太無端、山僧別有送行句、十日黃花不折殘、

道空禪人下火

倒飜筋斗太虛空、生死涅槃路不通、別有送行那一句、梅花依舊笑春風。

大藏寺主宗玖尼首座下火

大藏五千餘卷經、涅槃生死說叮嚀、南方佛法無多子、火自紅兮柴自青、夫惟、大藏寺主宗玖尼、竹持晚節、菊制頹齡、雙放雙收、具劉鐵磨手段、三歸三聚、存大愛道典刑、咄法身、喝正覺、罵雨師、叱雷霆、蝶舞海棠風、佛界魔宮半醉裏、雞聲茅店月、地獄天堂一旅亭、了了了時、不慕諸聖、玄玄玄處。不重己靈、石女打破業鏡、木人踢倒淨瓶、大姊若要知向上事、截斷耳根、諦聽諦聽拋火把築著帝釋鼻孔去、輕羅小扇撲流螢、喝一喝。

密中祥堅禪尼下火

大地都盧堅密身、本然清淨絕緇磷、紅爐一點寒巖雪、熱鐵花開四月春、夫惟、某名、袈裟勃窣、標格精神、愛牡丹於吉祥寺前、如夢相似、期法華於兜率天上、厥命維新、生死涅槃、放開線路、迷悟凡聖、把定要津、加之、婆子勘破、恁麼便去、倩女離魂、那箇是眞、長天兮疎雨濛濛、漆桶光歷歷、大野兮涼颷颯颯、燈籠笑閭閭、快活自在撥轉機輪、此是祥堅禪尼六十二年、受用不盡底閒絡索、別有向上圓極法門、聽山僧指陳、拋炬、鴛鴦繡出任君看、莫把金鍼度與人。

妙意禪尼下火

都盧大地涅槃門、線路通時絕意根、繡出鴛鴦君自看、元來無縫鐵崑崙、夫惟、妙意禪尼、出生入死、顧子思孫、南天台北五臺、驀直轉去、婆子勘破、畫閣浮夜兜率、那箇眞底、倩女離魂、彌陀佛乾屎橛、正法眼破沙盆、洒洒落落地、何處不稱尊、拋火把喝一喝、欲知諸佛出身處、月穿潭底水無痕。

古帆性順禪尼下火

不涉順緣兼逆緣、春閨夢裏百年遷、說生說死都來錯、依舊斜陽在我西、夫惟、古帆性順禪尼、性地平等、心月孤圓、默處藏雷、毘耶杜口、退散花天女、智海無底、文殊說法、度獻珠華鮮、涅而不緇、鑽之彌堅、清淨法身、漱奇石枕流水、成等正覺、喝白雲棒青天、與麼時節、論什麼七凹八凸、說甚麼五蓋十纒、淨躶躶赤洒洒、妙又妙、玄又玄、莫認着箇、轉過那邊、向上有事、爲汝敷宣去、擲火把、臨濟命根元不斷、一條紅線手中牽。

芳心禪尼下火

芳心芳心、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得、祇箇不可得心、不可得中、只麼得去去、本來無東西、何處有南北、若欲識眞歸處、看取山僧一句、移花兼蝶到、達磨道不識、咄一咄。

了善禪尼下火

了善了善、諸惡莫作、衆善奉行、鋮鋒頭上飜筋斗、衆善莫作、諸惡奉行、吹毛匣裏發冷光、畢竟說什麼諸惡、論什麼衆善、正與麼時、變成男子、卽往南方、以何爲驗、拋火把、火裏蓮華遍界香、喝一喝。

妙善禪尼下火

妙善妙善、呼喚不回、燈籠昨夜跳上天台、快活快活、奇哉奇哉、出生入死、放去收來、月白風清、鑊湯爐炭吹教滅、電卷雷走、劍樹刀山喝便摧、大地無寸土、何處惹塵埃、拋火把喝一喝。

芳溪宗荃禪尼下火

芳荃和露碎秋風、我說因緣諸法空、無所從來無所去、透天活路爲君通。

石雲庵主太玄宗白居士下火

不住洞然明白境、太虛空外轉機輪、天堂地獄鐵爐步、火裏梅花陶鑄春、夫惟、石雲庵主、晉後徵士、周餘黎民、一杯兩杯春風、消桃暗李明巍俗、二升三升野水、愛草頭木脚底人、遊目於閒雲幽石、混跡於紫陌紅塵、或時登麗憩亭、酬笊籬價、或時入遠公社、修香火因、念西方界、合掌、向北斗裏藏身、截鐵斬釘、昔非生、今非滅、鍊金鍛玉、涅不緇、磨不磷、玄玄玄、罵佛呵祖、咄咄咄、絕比超倫、金剛王光燦爛、昆侖奴黑鱗皴、雖然恁麼、保就後昆那一句、休上座爲爾指陳、拋火把、提不起兮拈不出、山風溪月自家珍。

玉浦宗琳居士下火

湘中曾產這琳琅、烈焰堆頭忽現光、今日一鎚鎚碎看、薔薇雨過送微涼、夫惟、玉浦宗琳居士、心如金石、材得棟梁、全機難藏三尺劍、淸四海孤帆未挂、一葉舟載大唐、南其貧北其富、昔不生今不亡、五十四年前、逆行順行、以天堂作地獄、五十四年後、左轉右轉、以地獄作天堂、加之、扣洋嶼祖翁禪、觸著杌蛇毒、示維摩居士病、掀倒獅子牀、默雷破柱、威風掬霜、活觸觸無拘束、

淨躶躶絕承當、此是宗琳居士、尋常受用底、別有新調、何落宮商、擧火把、聞麼、木人高奏還鄉曲、百億須彌舞袖長、喝一喝。

前越州太守西河梵照居士下火

吹毛照雪勢凜然、生死元來絕兩邊、倒跨西河獅子子、一聲吼破梵天、共惟、前越州太守、稱名下士、參教外禪、兄弟興田眞家、紫荊花發、父子侍源君府、碧梧枝連、三玄戈甲、齊行照用、五位槍旗、回互正偏、錯錯錯、猶就錯、玄玄玄、莫認玄、端的底會耶不會、這箇事傳耶不傳、向上那一句、聽山僧敷宣、抛火把、鐵蛇鑽不入、木馬走如煙。

壽岳宗永信男下火

百年三萬六千日、空合空時空不空、無所從來無所去、擧頭西畔夕陽紅、夫惟、壽岳宗永信男、見桃花參靈雲勤老、入蓮社慕廬山遠公、生也寒雲抱幽石、死也明月拂清風、轉身一路、吾爲他通、抛火把、上無攀仰、下絕己躬。

義峯宗卓禪定門下火

卓然忠義薄層雲、一掃魔宮百萬軍、無所從來無所去、擧頭西嶺又斜曛、夫惟、新物故義峯宗卓禪定門、武門閥閱、蓋代功勳、靑苗法新、厭熙豐末爭黨、丹心灰冷、願唐虞上致君、付百年榮於蟻垤、失千里材於馬群、加之、意氣堂堂、殺佛殺祖、趙王好劍、威風凜凜、轉凡轉聖、郢匠運斤、匪啻滅濟北宗旨、翻復靜江南楚氛、如幻卽空、芭蕉樹無堅實、當位卽妙、薝蔔林絕餘勳、和卻龐老江水吸盡、葬倒摩詰雨華繽紛、眞俗不二、邪正不分、雖然恁麼、要到大休歇田地、塞斷耳

根、汝試聞、拋火把、夜來何處火、燒出古人墳、喝一喝。

月心安生禪定門下火

生死涅槃大脫空、踢翻佛界與魔宮、歸歟臘月三十日、火裏蓮華帶雪紅、共惟、月心安生禪定門、風流太守、亂代英雄、因法社金湯、弗忘鷲嶺付屬、受正傳衣鉢、久慕龍安祖風、其父資始、是子愼終、自性本源、淸之不澂、涸之不濁、平生事業、入則有孝、出則有忠、黃巢過後、還收得劍、扶桑那畔高挂弓、到這裏說什麼眞諦俗諦、論什麼有功無功、羅籠不住、電光罔通、雖然與麼、有頑石未點頭、以前那一著、卽今呈示生公去、拋炬、看看、夜來金烏出海東。

德雲院殿通叟宗普大禪定門下火

功名四海一英雄、今日看來春夢中、末後牢關留不住、馬蹄去逐落花風、共惟、德雲院殿、襟胸洒落、機智玲瓏、參得南昌禪兄、倒拈無孔笛、追討西岡凶賊、高挂一張弓、克文克武、有孝有忠、煩惱菩提、笑黃庭墜泥犂獄、眞如解脫、欺白居易歸兜率宮、忽離邪正途轍、頓出生死羅籠、心觀通鼻觀通、蟾桂吹三月雪、佛見盡法見盡、牡丹著閏年紅、了了了、無可了、空空空、不屬空、雖然恁麼、向上宗乘事、作麼生硏窮、拋火把、崑崙夜裏走、驚起丙丁童。

春谷永源禪定門秉炬　逆卷氏

了、卻無生一大緣、本源自性不曾遷、臘人鍊出安居雪、熱鐵花開火裏蓮、夫惟、某名、常光寂爾、和氣溫然、文經武緯、以才名稱、詞華言葉、使和歌連、綿燕吹霜、或時臂鷹牽犬而愛原野、靑萍漂水、或時撈蝦攤蜆而臨深淵、觀世間相、參教外禪、截生死流、寶劍出匣、破群魔境、聖箭離弦、

有餘涅槃、無餘涅槃、起波瀾於平地、棒下正覺、喝下正覺、轟霹靂於旱天、成佛豈待靈運後、行道已在威音前、呼喚不回、泥牛戰入海、羅籠不住、木馬走如煙、逆順縱横、卷舒自在、仰之彌高、鑽之彌堅、雖然恁麼、保祐後昆底一道神咒、丙丁童如何敷宣去、抛火把、揭諦波羅僧揭諦、夕陽長在海棠西、喝一喝。

清源院殿了然廓公大禪定門秉炬　大永乙酉仲冬九日

少年四海稱英雄、今代麒麟第一功、不待太虛空落地、倒鞭鐵馬月明中、共惟、新捐館清源院殿了然廓公大禪定門、疾蹄未試、名猶高冲、其源也濫觴乎水尾、其府也惣管乎日東、張無盡決末後事於龍安、連牀夜話機機相合、鄭了然呈本來面於洋嶼、入室暮請毒毒以攻、丈夫出處雖異、大人境界維同、去年探梅定策江南、身染黃瘴、今歲折柳惜別洛北、聲哭蒼穹、騎象脫鶻崙袴、追犬抨兎角弓、煩惱菩提、掃花坐涼、汲井消醉、眞如實相、尋根種電、求影栽風、此錯彼錯、錯錯錯、是空非空、空空空、白拈金剛王意氣冷、青林丙丁童面門紅、從前閒絡索、還佗廓公、卽今清源那一滴、如何爲君通、抛火把、色色元來只仍舊、曉霜染出滿山楓、喝一喝。

龜策宗壽禪定門下火

幻生幻滅本來空、二十餘年春夢中、鐵馬等閒著鞭去、須彌百億落花風、夫惟、龜策宗壽禪定門、摩霄俊鶻、亂世英雄、續入江家業、奉細川源公、殺盡佛魔、淬青萍三尺、及學得文武、挂扶桑一張弓、淨躶躶絕承當、玄沙破阿鼻獄、赤洒洒沒窠臼、自傳歸兜率宮、塵塵解脫、法法圓融、雖然恁麼、向上那一句、端的如何通、抛火把、尺二眉毛燒卻了、丙丁童子面通紅、喝一喝。

濫室淨球禪定門下火

天球不琢本來圓、一段靈光輝大千、七十二年間受用、和風吹落火中蓮、夫以、某名、功名已遂、德齒兼全、忠孝狀元、父爲父、子爲子、騎射要術、妙之妙、玄之玄、僉曰、稼穡民種、足稱箕裘家傳、倒提三尺吹毛、眼空四海、高唱六字密號、舌拄梵天、蓋雖淵明辭遠公社、遂得韓愈參大顚禪、是故在聖不增、小樹小皮裹、在凡不減、大樹大皮纏、突出威音外、何墮法身邊、與麼時節、生死涅槃、芭蕉葉上無愁雨、菩提煩惱夜合花前日又西、燈籠跳入露柱、虛空走駕鐵船、快活自在意氣凜然、這箇是淨球禪門、眞履實踐之處、別有向上一竅、山僧急著霹靂鞭、火把打地、叱、泥牛耕破瑠璃地、木馬飮乾明月泉。

妙法寺殿前豐州太守義海超公大禪定門秉炬

一超直入涅槃城、鐵馬金鞭致太平、滴盡袈裟無限涙、感花鶯鳥兩三聲、夫惟、新捐館妙法寺殿葛原枝蔓芥河茂英、某祖昔軍東關、名下無虛士、此郎今屯西塞、胸中有甲兵、將謂、化蝶莊子、何事臥龍孔明、丹心一寸灰、葵花影隨日轉、吹毛三尺劍、珊瑚枝和月橕、塵塵解脫、箇箇圓成、畢竟如何、非空非假、元來只寧、無滅無生、青泥沌穿鼻孔、火金剛怒眼睛、前件是妙法寺殿、三十七年眞履實踐處、枯腸盡底傾、欲重說祕密神咒、保護香孩兒營、拋火把、力囫希、咄咄咄、虎逢山色長威獰。

宗得禪定門下火

生也不可得、何物恁麼來、死也不可得、何物恁麼去、宗得宗得、四大分離向何處去、若復未會、

且聽山僧恁麼擧、月落元來不離天、花外敲殘鐘數杵、喝一喝。

柏堂常盛禪定門下火

打破涅槃明鏡臺、淸寥寥地絶纖埃、無消息處有消息、佛法南方一點梅、夫惟、常盛禪定門、進退以禮、短長掄材、在國家全盛日、了人間殘夢幾、是故扣栖雲禪號柏堂、雪消山骨露、慕惠遠師修蓮社、池成月自來、情泯識盡、形枯心灰、朝三千暮三千、喝轟棒打、春六十秋六十、葉飛花開、忽當眼光落地、直得意氣走雷、常盛常盛、恁麼去、恁麼去、呼不回、呼不回、何不回麼、喝、更聽山僧擧哀、拋火把、臘月扇子打跨跳、燈籠沿壁上天台。

德叟全勝禪定門下火

百勝百戰一英雄、收得從前汗馬功、汗馬功成追不及、涅槃城破落花風、夫以、全勝禪定門、胸次礧磈、心內玲瓏、受衣安名、蚤參見相國王和尙、秉炬說法、晩逢著松源岳職翁、罵芭蕉窻外雨、指牡丹庭前紅、呑三世諸佛、不屑龐居士吸江、口尙乳臭、降百萬魔軍、會輕馬伏波破虜、代異名同、不怕地獄、何愛天宮、揑目生花、生也錯、死也錯、將錯就錯、都來錯、吹毛照雪、人已空、法已空、以空遣空、畢竟空、燈籠跳入露柱、石女仰哭蒼穹、雖然恁麼、保祐後昆底活句、如何爲他通、拋火把、丙丁童子來求火、夜半金烏出海東。

天屋淨幸禪定門下火

不幸顏淵、三十四年、轉身一路、臘雪連天、夫以、某名、天下奇士、區中良賢、三十四年前、以不生爲生義、寒雲抱幽石、三十四年後、以不死爲死義、火裏汲淸泉、快活自在、頓離塵緣、鐵雞追不

及、木馬奔如煙、淨幸淨幸、末後一句、錯果然、抛炬、呈露梅花眞面目、夜來月在屋頭邊。

南叟宗參禪定門下火

佛法元來無可參、善財何事强尋南、知非四十餘年後、錦是山花水是藍、夫以、某名、久參禪旨、不打俗談、四十餘年前、罵佛呵祖、四十餘年後、育女生男、破生死陣、試周宋鐔、依稀雪裏芭蕉樹、彷彿火中優鉢曇、到這裏、說什無明煩惱、論什澗愧林慙、劍樹刀山喝則碎、鑊湯爐炭吹則堪、黑漫漫、白漫漫、前三三、後三三、更有眞歸處、卽今甘不甘、抛炬、當頭霜夜月、任運落澄潭。

禪寶禪定門下火

這箇一寶祕形山、乾坤大地載不起、百雜碎矣、咸陽[illegible]火裏牡丹新吐蘂、禪寶禪門、還識這箇一寶麼、吾無隱爾、本來圓成、豈假直指、是故在凡不減、涅槃會上廣額兒、抛屠刀、在聖不增、普通年中赤鬚胡、失隻履、大藏小藏、逼塞虛空、有利無利、不離行市、木人唱歌、石女側耳、快哉快哉、已矣已矣、禪寶禪寶、從生到死只是是、抛炬、不是不是、露春風桃李、一以貫之、曾子曰、唯唯。

蘭庭常秀禪定門下火

苗而不秀一庭蘭、初節易移晩節難、生鐵崑崙空裏走、青天白日黑漫漫、夫惟、蘭庭常秀禪定門、黃金出鑛、白玉點盤、霹靂當空、學兎角弓於石鞏、淸風拂月、還犀牛扇於鹽官、超眞俗諦、絕佛祖瞞、覿面提持、梨花溶溶、柳絮淡淡、皆證圓覺、菱角尖尖、荷葉團團、蘸山頻叫成道、鶴林假示涅槃、轉身一路、莫涉多端、抛火把、五月紅爐落梅雪、丙丁童子面門寒、喝一喝。

金溪久玉居士下火

黃金擊碎玉團團、鎚末拈先著隻看、看看歸來無一事、遠山雨過夕陽殘、

　蘭谷宗秀禪門下火

春蘭秋菊秀聯芳、長惡芽根七十霜、今日爲他添意氣、掀飜地獄與天堂。

　趙千禪門下火

大千世界壞成空、從此泥洹一路通、花落花開是常事、杜鵑誤恨五更風。

　月江宗光禪定門下火

一刀兩段太虛空、閃電光中絕己躬、到得歸來無別事、荷花照水夕陽紅。

　悟岳宗徹禪門下火

本來自性本來無、大徹還他大丈夫、三尺吹毛不曾動、月明挂在碧珊瑚。

　宗祐禪門下火

潙山靈祐一頭牛、脫卻鼻繩高叫牟、石火電光追不及、乾坤無處覓蹤由。

　某甲下火

百年壽盡底時節、卽是金剛不壞身、蹈倒丙丁童子看、野花啼鳥一般春。

　禪珍下火　　拍鼓藝士

須彌槌擊虛空鼓、白日青天吼若雷、飜作無生那一曲、木人火裏舞三臺。

　高仲宗功禪門下火

用盡從前汗馬功、平來佛界與魔宮、凱歌一曲還鄉路、雨過芙蓉朶朶紅。

宗玉禪定門下火

一顆白玉、價直三千、不磨不琢、元自天然。

古雲慈心大姉下火

刹那三萬六千日、放下身心君自看、觸著紅爐雪一點、丙丁童子面門寒、夫以、古雲慈心大姉、不來相而來、鐵壁迸開雲片片、不見相而見、黑山輥出月團團、地獄天堂閒家具、生死涅槃不相干、向上轉去、莫涉多端、正與麼時、畢竟如何、得平安去、拋火把、十洲春盡花凋殘。

梅屋理常大姉下火

堅固法身常住相、旋嵐倒嶽不曾遷、馨香遍界從斯起、紅白花開火裏蓮、夫惟、梅屋理常大姉、領旨言外、撒手那邊、活捉生擒、無著敲洋嶼室、戒皮定肉、總持參少林禪、脫千萬劫羈鎖、了一大事因緣、淨躶躶絕承當、泥牛耕破瑠璃地、赤洒洒沒拘束、木馬飲乾明月泉、向上一路佛祖不傳、雖然恁麼、別有眞歸處、試聽山僧敷宣、拋火把、露堂堂活鱍鱍、鍼眼魚跳上天。

春溪智雲大姉下火

六十九年忘世紛、珠簾玉案醉醺醺、轉身自在沒窠臼、喝散牽陀青色雲、夫惟、春溪智雲大姉、始終貞節、末後慇懃、則天萬乘之尊、大雲山中稱眞彌勒、摩耶千佛之母、毘藍園裏產老迦文、元來不干生死、歷劫何論功勳、處處眞處處眞、前臺花發後臺見、刹刹爾刹刹爾、上界鐘淸下界聞、聞麼、十方薄伽梵、一路涅槃門、露。

潙山理祐大姉下火

百歲一場春夢婆、聲前薦得竟如何、豁開諸佛出身路、生鐵崑崙雲外過、夫以、某名、身䂓烏有、口誦貝多、電光無根、透牢關句於末後、空華結實、滅阿鼻業於刹那、休休休、涅槃鏡不重照、咄咄咄、吹毛劍急須磨、正與麼時、大姉還聞麼、拋炬丙丁童子念摩訶露。

雲峯宗秀禪定尼下炬

孤峯高秀勢崔嵬、六月火雲吹雪來、若欲知無寒暑處、炎天不白一枝梅、夫惟、雲峯宗秀禪定尼、識得自性、長養聖胎、月白風清、有佛處留不住、山長水遠、無佛處喚不回、打破曹溪鏡、大地絕纖埃、別有還鄉那一曲、拋火把、崑崙騎象舞三臺、咄一咄。

桃岳慈緣禪定尼下火

一夢三生石上緣、風花二十有餘年、欲傾無限傷春意、小玉聲中月落西、夫惟、桃岳慈緣禪定尼、負丈夫氣、瞞新婦禪、摩耶產竺土仙、無風起波、鹽官接檀林后、隔山見煙、兎子懷胎望月、犀牛跨跳上天、生死卽涅槃、毛端呑巨海、涅槃卽生死、火裏汲清泉、與麼時節、龍女獻珠、鄉關萬里、閻老喫棒、朝打三千、混沌眉掃兩ノ、崑崙鼻失半邊、雖然恁地、覆蔭後昆底一句、試聽山僧敷宣、拋火把、楊柳絲絲收不盡、和煙染出玉欄前、喝一喝。

月溪妙光禪定尼下火

靈光不昧古來今、龍女寶珠滄海琛、照破南方無垢界、曉天殘月落西岑、夫惟、月溪妙光禪定尼、當臺明鏡、出鑛精金、有物先天、非男相非女相、尋根種電、傳佛心傳祖心、當陽直指、鉢水投鍼、加之、出三界火宅中、不駕羊鹿、徹三種滲漏底、何隔商參、洒洒地落落地、豁開自己胸襟、雖

然恁麽向上一著如何參尋、抛火把石女舞成長壽曲、三千里外絕知音、喝一喝。

桂巖宗林禪定尼下火

瞞卻少林尼總持、鍼鋒頭上轉身來、不塗紅粉孃生面、露白芙蓉八月枝、夫以、某名、秀而不實、逝者如斯、夢幻空花卅四歲、工夫綿密二六時、繡口錦心、嫌遠錄公著九帶集、禮郎玉女、笑勤藞苴參小豔詩、截斷生死不挂寸絲、甚希有甚希有、也太奇也太奇、自性圓成、荷葉團團似鏡、全機穎脫、菱角尖尖尖如錐、恁麽看取、莫涉多岐、別要知向上事麽、聽火把子重說之、抛炬、黑漆崑崙夜裏走、紅爐放出鐵烏龜。

月江永秋信女下火　懷孕而亡

露柱懷胎果何物、黃金鑄出鐵牛機、秋風吹入無生國、地獄天堂一葉飛、夫以、某名、結鴛鴦社、擁翡翠幃、不許晩參、老婆戴楊岐笠、已過夜半、石女裁黃梅衣、具大人相、逞丈夫威、菩提因菩提果、明明歷歷、法身用法身體、堂堂巍巍、江月照松風吹、標格瀟洒暮鐘聲、秋樹色彷彿依俙、把住則乾坤震裂、觸著則崑崙光輝、是故鬼官冥主、倒退三千里、加之、文殊普賢、貶向二鐵圍、到這裏說什麽幻生幻滅、論什麽眞是眞非、雖然恁麽地、高山流水知音者稀、永秋信女還會麽、若未會、試看山僧指揮、抛炬、江上晩來堪畫處、漁人披得一蓑歸、咄。

榮中常盛信女下火

人間盛事夢中花、白日青天莫眼花、無限春風吹不入、一枝混沌未開花、夫以、某名、心存貞節、富鬪雜華、汲洞水流、黑漆桶裏盛墨汁、奞林際境、瑠璃階上布赤沙、打無生話、欺靈照女、具活

手段、笑慈明婆、奇哉奇哉、圓覺梅一枝兩枝早、會麽會麽、眞如竹三莖四莖斜、這箇時節、丙丁童吐舌、虛空神咬牙、若動寸步、萬里天涯、拋炬、看看、一把骨頭挑去後、不知明月落誰家、咄一咄。

受溪理稟大姉下火

一氣生時所稟異、百年滅後本來空、空非空也色非色、磵水如藍花自紅、

朝光妙槿信女下火

萬事人間如槿花、朝榮暮辱本來空、無端拈出還鄕錦、七月靑楓半葉紅。

了一大姉下火

一了一切了、大地黑漫漫、滅卻心頭火、依舊孟春寒。

宗照童女下火

離涅槃生死、絕煩惱菩提、擧頭有殘照、元是住居西、咄咄。

掩壙

攝州普門住持明巖永公座元掩土　正月四日

花前拂袖別春風、行脚今年八十翁、撥轉趙州關棙子、涅槃路自普門通、夫惟、明巖永公座元、後學甘露、先宗巨叢、幽谷蘭芳、遙列金地派下、舊房松偃、閒愛慈雲山中、接客作漢、稱主人公、一段風光、說是日說非日、三應侍者、喚大空喚小空、依係相似、彷彿不同、加之、行亦禪、坐亦禪、胡孫入布袋、生也錯、死也錯、石馬出紗籠、到這裏、論什麼欲界色界、管什麼佛宮魔宮、倚天長劍、不勞磨礱、此是明巖座元活機雄、以钁子打地一下、山僧別架龜毛箭、抨兎角弓去、抛钁子、

钁頭邊事直看取、正月木犀吹雪濃。

宗泉大德掩土

七星光冷一龍泉、魔壘平來叫凱旋、末後牢關留不住、須彌跳上率陀天、夫惟、宗泉大德、常觀阿字、獨坐法筵、清淨行者、不入涅槃、翡翠蹈翻荷葉雨、破戒比丘、不墮地獄、鷺鶿衝破竹林煙、印心於金胎界、轉身於钁頭邊、如何是轉身處、生無生、滅不滅、是不是、然不然、有眞歸那一句、聽取山僧布宣、擧頭殘照在、元是住居西。

顯德院文伯祐豐法印掩土

十方一路涅槃門、擧足機前忽踢翻、試看龍圖龜易外、曉來欲雪早梅村、夫以、顯德院文伯祐

豐法印、古器壘洗、天球粹溫、禴祠烝嘗、賽鬼神、官設尸祝、高曾祖禰、排昭穆、德及兒孫、守百王百代廟、詠八雲八重垣、黃石授書、伏兵於莽草之野、青海傳箭、挂弓於扶桑之暾、弗翅漱六藝芳潤、況復窮萬物根源、加之、具龐老機關、則西江水、合四海禪流吸盡、出思大圓績、則南嶽峯、和三世諸佛平呑、來時無口、葉落歸根、雖然恁麼、更有向上一竅、山僧贈行以言、鍬子劃一劃、吽吽、黃金鑄出鐵崑崙。

紹歡上座掩土

掣電一歡五十年、本來眞相不曾遷、等閑歸去長空外、莫聽黃鶯作杜鵑、夫以、某名、全機穎脫、本體如然、不居菩薩初地、超越威音以前、恁麼不恁麼、展則充塞六合、不恁麼恁麼、收則揑聚大千、生死即涅槃、紅蕉敗雨、無明即佛性、綠竹含煙、了了了玄玄玄、試看崑崙駕鐵船、打棺、水流元入海、月落不離天。

太年妙椿掩土　般若房

毘嵐昨夜倒莊椿、一夢人生七十春、桃李若言吾即問、誰能北斗裏藏身。

見宗上座掩土

正宗滅向瞎驢邊、得意春風著鐵鞭、莫認涅槃眞妙相、梅梢月白屋頭天。

永高上座掩土

鐵山萬仞太高生、一脚機前踢倒行、別有眞歸條活路、綠陰月暗杜鵑聲。

雪巖瑞書記掩土

喚起瑞巖公主人、杜鵑枝上數聲頻、分明喚得歸那處、一閭花開四月春。

菊仙宗英藏主掩土

宗門騰茂富英聲、二十四年都旅程、本有家鄉好歸去、雲埋老樹杜鵑鳴。

前住繼孝高岫壽尊尼藏主掩土

元是吾宗妙摠持、少林皮髓忽分離、珠簾玉案綠陰雨、杜宇一聲歸去來、夫惟、前住繼孝高岫壽尊尼、慕蓮華色、作苾蒭尼、錦繡光照閭里、袈裟影映禁池、未忘先宗、蚤入西源室、而受戒屢修、隣好、曉扣東海門、而投機、具大丈夫志氣、罵新婦子禪師、瞿曇示般涅槃於雙林、薪盡火滅、文殊度夏安居於三處、舟行岸移、莖草上現梵刹、鍼鋒頭走須彌、夢幻空華、雪裏芭蕉摩詰畫、鑊湯爐炭、炎天梅蘂簡齋詩、不住玄玄玄處、莫認了了了時、咄、鍬子劃地、活埋了也、滿地蒺藜。

永昌開基寶聚榮珍大姉掩土

七十四年般涅槃、钁頭邊打冷相看、虛空骨碎夜來雪、埋沒梅花玉一團。

春庵妙榮禪定尼掩土

一榮春夢老婆心、六十五年同刹那、隻履前村西畔路、等閒踏碎雪花過、夫惟、春庵妙榮禪定尼、斷機孟母、泣竹湘娥、工夫密密綿綿、倒把金鍼繡佛、胸襟洒洒落落、高挂明鏡降魔、室內示病、杯中非蛇、或時入大雲山、而飜大雲經、如則天后稱慈氏、或時慕淨土宗、而學淨土教、似韋提希唱彌陀、塵塵解脫國、處處安樂窩、生死無根、梅瘦占春少、眞如不變、庭寬得月多、明白裏留不住、窮玄處也須呵、妙榮妙榮、钁頭邊事任君會、後昆興家端的如何、抛鍬、喬木依然今尙

在、風吹石臼念摩訶、喝一喝。

前武庫德叟宗澤禪定門掩土　淡路島田氏

澤廣藏山也太奇、大機大用現前時、擧鑁、鑁頭未擧活埋了、一片落梧爲雨吹、夫以、某名、胸開武庫、策定雄基、繼業於小笠原、則箭過新羅國、託迹於淡山巖、則弓挂扶桑枝、才名可惜、逝者如斯、菩提涅槃、是什麼繫驢橛、眞如解脫、更莫認亡羊岐、石火不及、閃電猶遲、鑁子打地一下、叱、倒騎鐵馬上須彌。

香林紹覺禪定門掩土

掀飜大覺涅槃場、凛凛威風不可當、和太虛空埋卻了、一犂雨過暑花香、夫惟、香林紹覺禪定門、脚踏實地、氣壓諸方、三十四年前好勇、則鴻門詆樊噲盾、三十四年後示病、則獅窟臥維摩牀、直截斷生死縛、倒提起金剛王、離教無禪、昨日拾法華遺穗、離禪無教、今朝傳嫖桂餘芳、密密密、不通凡聖、玄玄玄、把定封疆、木人叫屈、石女回腸、這箇且措、更有還鄉那一曲、來吾與汝商量去、鑁子打地一下、扶桑國擊大唐鼓、百億須彌舞袖長、咄一咄。

二品前亞相天覺雄公大禪定門掩土

高山流水沒絃琴、莫作宮商角徵音、試聽無生那一曲、秋風拂月落松陰、共惟、二品前亞相天覺雄公大禪定門、樂花禮葉、談藪詞林、書納諫言、五雲上仰堯天之日、才補袞職、九野外洒傅岩之霖、在家菩薩、無相現相、儒門知識、以心傳心、生死卽涅槃、攪長河而成酥酪、涅槃卽生死、變大地而作黃金、石虎頻哮吼、木馬走駸駸、會麼、喚不回兮留不住、萬岳千峰無處尋、喝一喝。

無住善住禪定門掩土

生死元來無住處、爍迦羅眼絕纖埃、一犂春雨吹晴過、滿地落花埋綠苔、夫惟、無住善住禪定門、掉文武鞅、負棟梁材、五十三年前、西京牡丹、惟富惟貴、五十三年後、南柯槐樹、且樂且哀、假合四大分散、涅槃四柱忽摧、靈山會上說圓頓速疾之法、少林門下用單傳直指之才、牢關破時留不住、機輪轉處喚不回、雖然恁麼、別有向上那一竅、百尺竿頭進步來、拋鍬子、水底木人吹鐵笛、雲中石女舞三臺、喝一喝。

輝岳杲公禪定門掩土

名高亂代一英雄、匹馬單槍立戰功、兜率泥犂春夢裏、等閑吹醒落花風、夫惟、輝岳杲公禪定門、精神矍鑠、機智玲瓏、病維摩臥毘耶、花散室內、死諸葛走仲達、星隕營中、埋骨雖朽黃壤、槌胸猶哭蒼穹、竺乾猛將說五千兵書、掃蕩佛界魔界、林際廝兒施三玄戈甲、逗到人空法空、不墮涅槃窠窟、忽出無明羅籠、與麼時節、江月照兮江風吹、塵塵解脫、春山青兮春水綠、法法圓融、亦條條透過金剛圈、浮躶躶、吞卻栗棘蓬、此是杲公禪定門、三十三年受用底閑事、保祐後昆那一句、卽今爲君通、鍬子打地、鍬子口吧吧地說、夕陽長在我西紅、喝一喝。

玉室道玖禪定門掩土

無滅無生眞涅槃、都盧大地黑漫漫、彌陀不在西方界、放下身心君自看、道玖道玖、恁麼會取莫受佗瞞、三界火宅不樂不安、是故接大乘根、達磨壙中遺下隻履、繇多羅藏、迦葉門前倒卻刹竿、燈籠跳入露柱、虛空裂走磨盤、機關脫落底時節、枯木龍吟消未乾、錯錯、山僧別有好消

息、萬古一江風月寒。

久芳宗椿禪定門掩土

大椿一萬六千秋、都付南華夢裏遊、野外鳥啼人不見、槿花半照夕陽收、夫惟、久芳宗椿禪定門、十手所指、一人拔尤、源公幕下、決勝運籌、眞門俗門、蓋如蠻觸爭蝸角、佛界魔界、而似漢楚割鴻溝、吹毛三尺定太平州、與麼時節、旋嵐倒嶽、夜壑藏舟、說生說死、錯錯錯、談玄談妙、休休休、活埋了也、抛鏤子、雖然如是、向上事如何、爲他酬、人從橋上過、橋流水不流、喝一喝。

基成宗立禪定門掩土

坐脫立亡得自由、虛空迸裂萬機休、迸行一句吹毛劍、朶朶芙蓉檮著秋、夫惟、基成宗立禪定門、洛陽年少、江左風流、金粟如來現毘耶城、丈室示病、白蓮道人卜眉山地、二子拔尤、繼箕裘業、而以寄末命、結香火社、而莫愧前修、釋迦富彌勒慳、花間作夢碧胡蝶、德山棒臨濟喝、柳下談禪黃栗留、笑呵小果於方等、瞞接大乘於神州、文武庫內八寶八珍、非金非玉、生死海中一出一入、不車不舟、已無煩惱之可斷、寧有菩提之可求、諸方尋常活下火、這裏祇還鈍钁頭、擲下鍬子、別別、還鄉古曲如何唱酬、吹少林無孔笛、驚走陝府鐵牛。

東昇宗旭禪定門掩土

曉旭出雲桑海東、佳城埋玉響玲瓏、轉身自在通霄路、步步蹈飜兜率宮、夫惟、東昇宗旭禪定門、吳牛喘月、燕馬追風、古世晉耶莘野伊尹、僉曰耕叟、今韓愈也、廬陵歐陽自號醉翁、四海收賢輔、九州先農功、六十餘年之先、淨躶躶、離涅槃窠窟、六十餘年之後、赤洒洒、脫生死羅籠、恁

麼不恁麼、靈雲老未徹在、不恁麼恁麼、龐居士叫心空、向上還有事、卽今爲君通一抛鋤、一口吸盡西江水、洛陽牡丹新吐紅。

桂雲昌公禪定門掩土　三宅氏

匹馬單槍矍鑠輕、當陽打破涅槃城、爲君指點轉身路、梅雨和風送晩晴。

椿翁棟久居士掩土

久遠劫來不亘生滅、五十九年只得一橛、椿翁椿翁、得底那箇一橛、世傳家聲、茲保晩節、示維摩居士病、移牀臥雲、慕能因法師風、捲簾哦雪、花落夢醒、春鐘響絕、只憑這一橛、心地收汗馬、論甚麼功無功、袖裏藏青蛇、管甚麼徹未徹、只憑箇一橛、箇一橛觸向上惡鉗鎚、點鐵成金、點金成鐵、百了千當、七凹八凸、這箇且置、甘蔗氏四十九年一字不說、久椿翁五十九年只得一橛、何優何劣、山僧今朝信手拗折、是同是別、抛鑁別別、珊瑚枝枝撐著月。

法雲宗護禪定門掩土

平生致命護官家、五十六年無賴查、色卽是空空卽色、活埋雪內牡丹花、夫以某名、勇以無撓、富而不奢、具閃電機、拜慈雲大禪佛、消甘露滅、拂瑞泉破袈裟、水底木人頻絕叫、溪邊石女唔驚嗟、生死涅槃、如鈍鳥栖蘆葦、鑊湯爐炭、似香象觸芭蕉、到這裏說甚麼三祇百劫、論甚麼萬別千差、更有末後好消息、試聽鍬子著些些、抛鍬、萬里長空一聲鴈、夜來和月落平沙。

清芳宗源禪定門掩土

一踢踢飜生死源、一拳拳倒涅槃門、虛空落地底時節、驚起西山雲外奔、夫惟、清芳宗源禪定

門、世緣終淺、晚節難存、富貴一場、會聚蚊於金谷、如幻三昧、迷胡蝶於漆園、無位眞人、是什麼乾屎橛、正法眼藏、較什麼破沙盆、淨裸裸赤洒洒、明皎皎暗昏昏、別有眞履實踐處、聽土掘子說偈言、抛鍬、扶過斷橋水、伴歸無月村、喝一喝。

常智禪定門掩土

智劍常磨三尺霜、佛魔何敢犯鋒鋩、涅槃城破後消息、松竹滿山送晚涼、夫以、某名、扣臥龍室、馳群馬場、久服鹽車、懸羊賣狗肉、親喫鐵棒、打鴨驚鴛鴦、不滅不生、芭蕉無愁雨、有忠有孝、葵花傾太陽、石女俄洒淚、木人頻斷腸、六十六歲殘夢猶香、直得脫卻萬劫鎖、掀飜四大牀、雖然如是、這裏別有轉身路、試聽鍬子舉揚、打地一下云、陰陽不到處、一片好風光。

虛岳宗空童子掩土

空元非色色非空、白玉樓成黃壤中、啼鳥一聲春夢斷、天堂地獄落花風、夫惟、虛岳宗空童子、學字有法、讀書無功、命也匪天、類顏子先尼父、苗而不秀、如童烏於楊雄、分甘念母、吐血驚翁、一十三年前、無生死處示生死、一十三年後、出圓通又入圓通、淨裸裸沒拘束、赤洒洒絕羅籠、宗空宗空、別有眞歸那一句、作麼生研窮去、抛鑁、昨夜金烏飛入海、曉天依舊一輪紅、喝一喝。

宗珠童子掩土

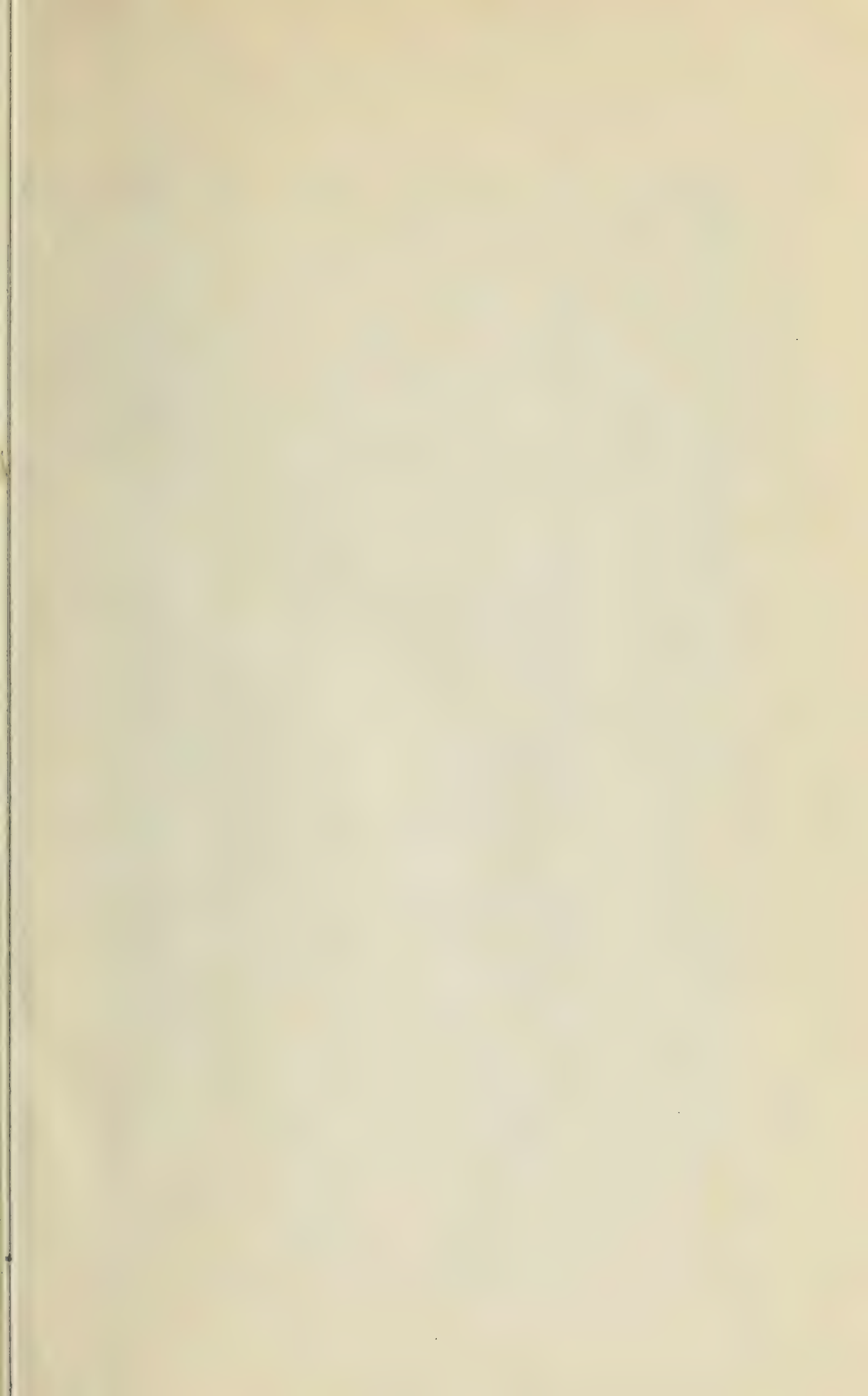
老蚌胎中產出珠、鐵鎚擊碎絕形模、寒衣不裹殘宵夢、小朶梅西落月孤、宗珠童子、驀地歸去、莫涉佗途、倘未然、善財何敢勞再見、佛法南方一點無、喝一喝。

宗田禪定門水葬

掀翻五無間、耕破一心田、泥牛走入海、木馬躍上天、正與麼時、宗田禪定門、還會麼、縱然一夜風吹去、只在蘆花淺水邊、

小鳥斃掩土

脫卻卵生與胎生、羅籠不住得飛行、和間佛祖活埋了、綠水青山噓一聲、

圓滿本光國師見桃錄卷之三終

昭和五年十一月十五日印刷
昭和五年十一月二十日發行

國譯禪學大成奥付

編者 國譯禪學大成編輯所
代表者 宮裡祖泰

發行者 宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者 藤本茂人
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

印刷所 藤本印刷所
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

發行所 二松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番